

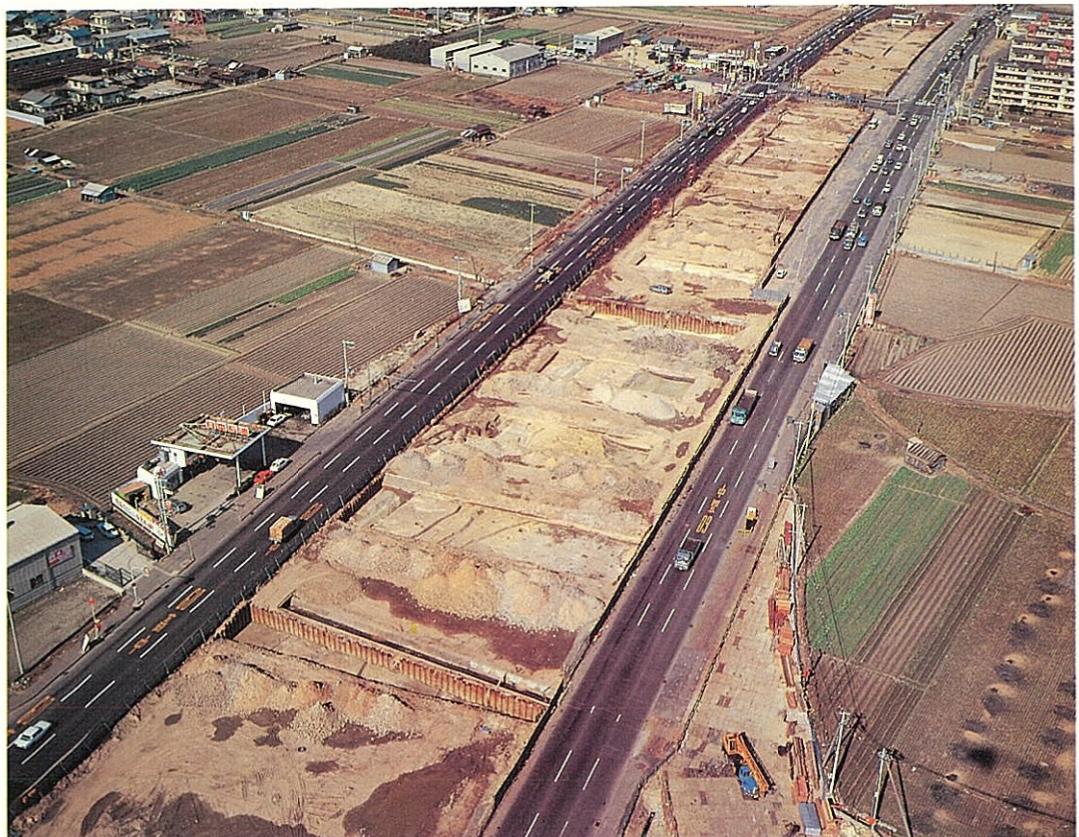
長原

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

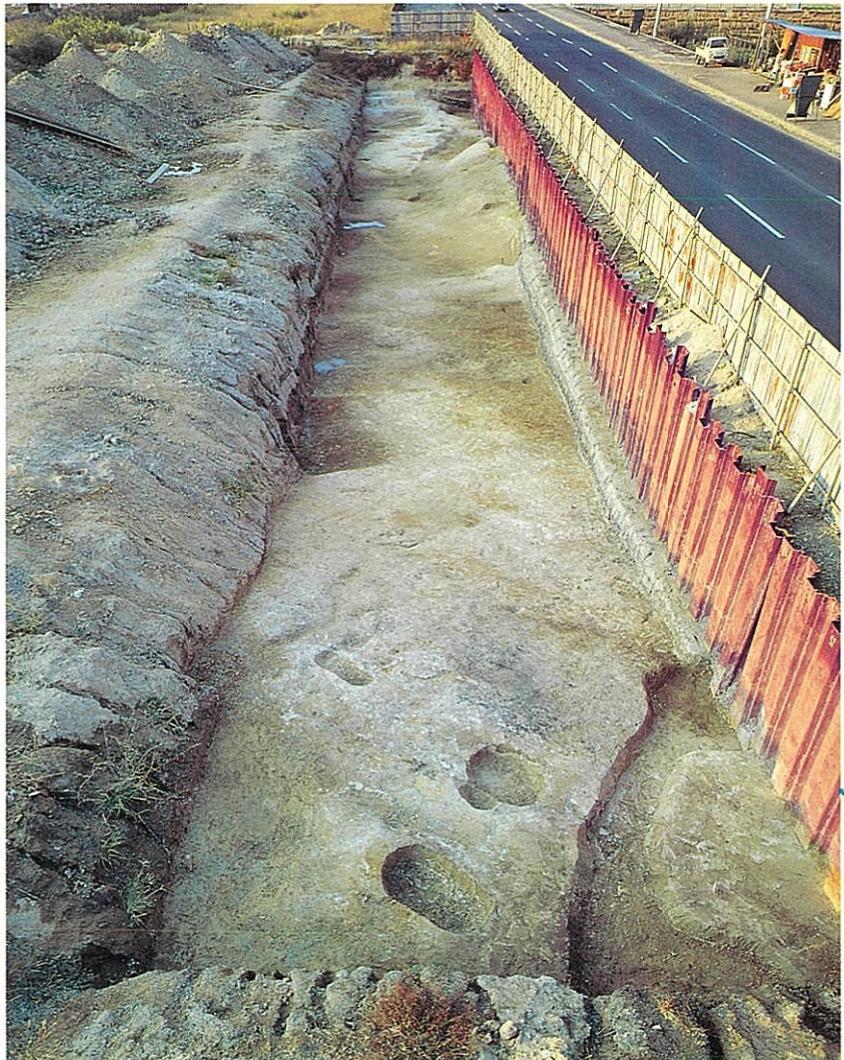
大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

長原

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう
埋蔵文化財発掘調査概要報告書



第1図 調査地全景



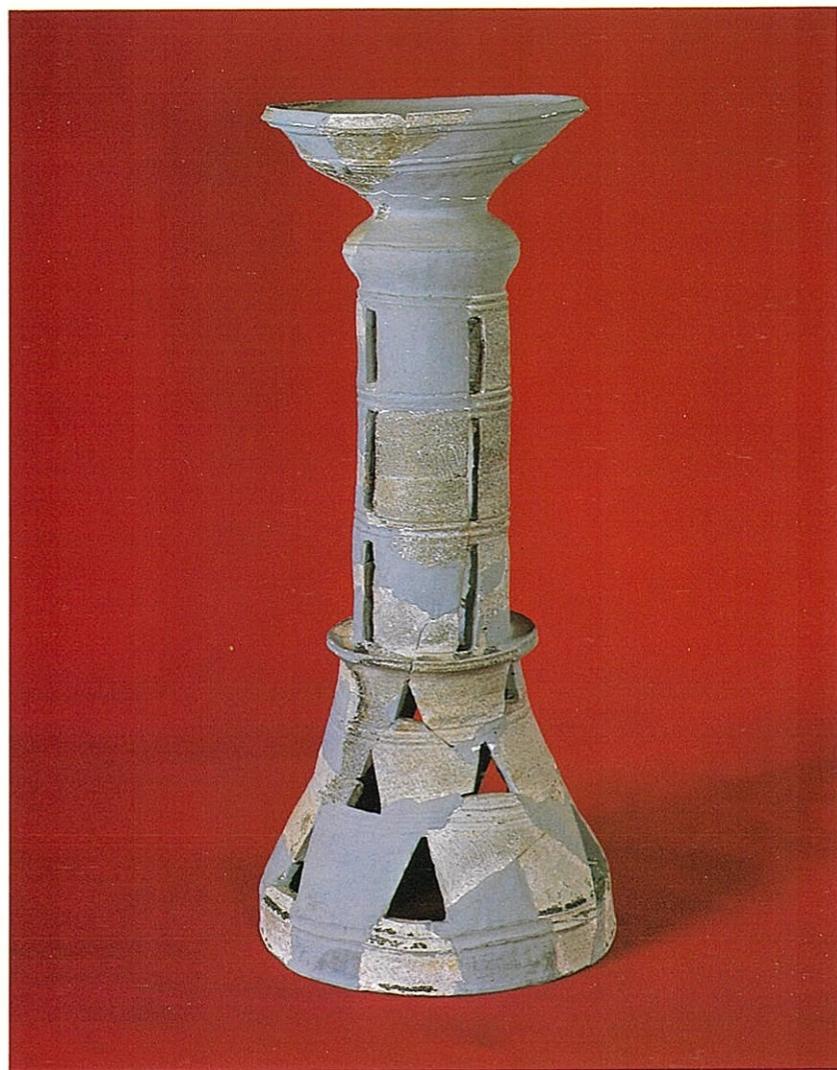
第2図 No17トレンチ・塚ノ本古墳



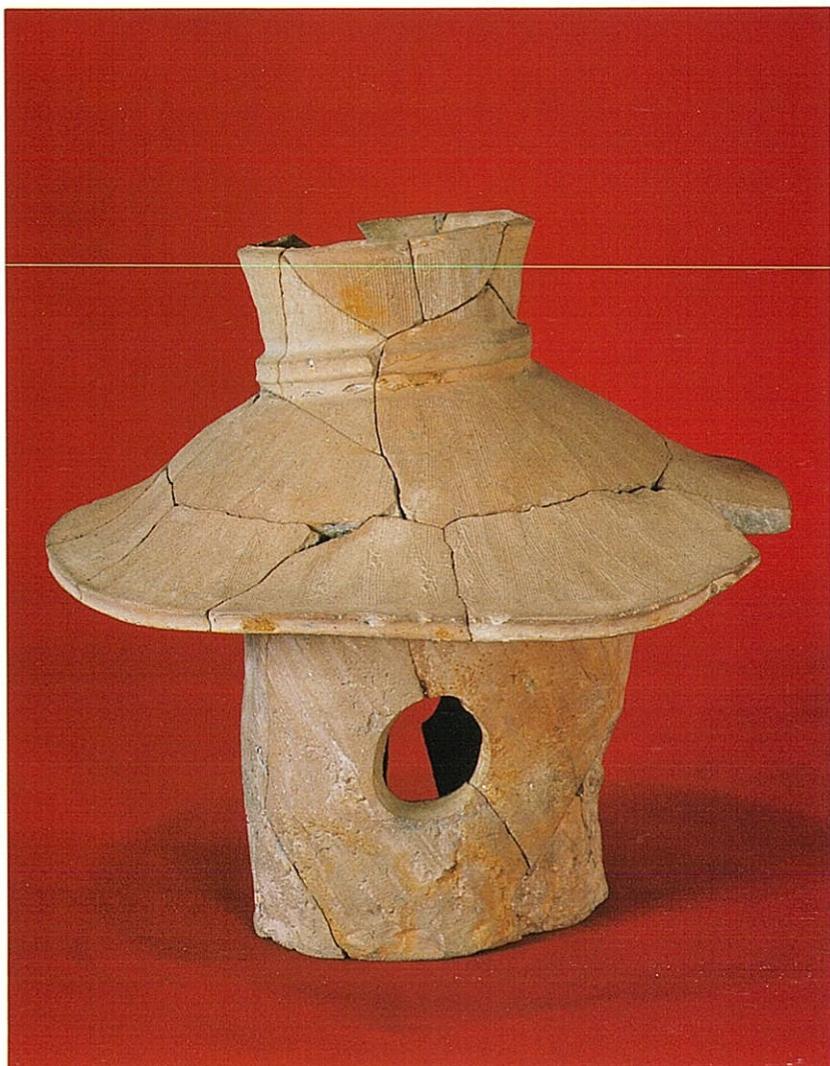
第3図 No20トレンチ・木蓋土壙墓



第4図 No26トレンチ・土器溜



第5図 No11トレンチ・2号墳出土筒形器台



第6図 No10トレンチ・3号墳出土蓋形埴輪



第7図 緑釉陶器



第8図 中国陶磁器

序 文

近畿自動車道天理吹田線建設予定地内、松原から東大阪に至る間には、現在までに13の遺跡の存在が明らかとなっている。

大阪府教育委員会では、これらの遺跡の取り扱いについて、日本道路公団と種々の協議を重ねてきたところであるが、河川改修工事や下水道工事等によって、いわば偶然の機会に発見されたこれらの遺跡については、現地表下3～5mもの深さに埋没しているものもあり、また、その範囲等についても明確でないものも多く、協議の過程において、昭和48、49年の2年度にわたり、財団法人大阪文化財センターによる範囲等を明確にするための調査が行われることがあった。

この調査結果をふまえ、遺跡を保存するための工法等について協議を重ねた結果、調査の成果によって個々にその都度協議することで合意に達し、まず南端の長原遺跡について財団法人大阪文化財センターの協力を得て、発掘調査を実施することとしたのである。

調査の結果は以下に記すとおりであるが、検出された多くの古墳や掘立柱建物等は、橋脚が日本道路公団による当初の計画位置に設定されるとすれば、それぞれ相当の影響を受けることとなるため協議した結果、古墳等重要な遺構については、橋脚位置を変更して保存をはかることとなったものである。

なお、残る遺跡についても、調査後の保存について十分協議を行う所存であり、今後とも多くの方々のご協力とご援助を得たいと願うものである。

大 阪 府 教 育 委 員 会

文化財保護課長 谷 川 秀 善

序 文

河内は、河内湾一河内湖一河内平野等の自然地形、環境変遷に対する圓いと調和を反復経験し、かつ、克服しながら、古来、大和とともに、政治、経済、文化の中心地として、その地盤を築き上げてきた。その足跡は、いろいろな意味を込めて石川、大和川の賜ものといえる。そして、埋もれてなお、当時の面影をわずかに残すばかりになった風土の下に、数多くの貴重な遺跡を遺している。

当センターは、昭和47年設立以来、文化財の保存、普及啓蒙事業に、貢献しながら、その基盤を一步、一步、確実なものとしてきた。

そして、近畿自動車道天理吹田線（松原～東大阪間）が府道中央環状線中央分離帯部分を縦走する計画が施行されるに及んで、当センターも、昭和48年から49年にわたり、大阪府教育委員会、日本道路公団の依頼を受けて、試掘調査に協力する等のことがあった。この試掘調査等の結果当該予定路線内に13ヶ所もの遺跡が確認されるに至った。

大阪府教育委員会は、この状況に対処するための計画的かつ継続的な調査と、その結果に基づく早急な保存対策の必要性を痛感せられ、当センターへ協力を求められるところとなった。

当センターは、理事会、評議委員会等の充分な協議、検討を経て、大阪府教育委員会、日本道路公団、当センターの3者による協定書を締結し、大阪府教育委員会の指導のもとに、発掘調査を引受けこととなった。

本書は、このような経緯を経て、実施する予定の13遺跡の概要報告書の第1冊で、昭和51年7月から昭和53年5月まで発掘調査を実施してきた大阪市所在、長原遺跡の調査概要を収録した。これにより、これまで不明だった河内平野部の古代～中世社会の解明に一步を進めたことを確信する。

本書の公刊が河内地域の重要性の認識を一層深めることに役立つことを心から願うとともに、今後とも当センターの事業に対し温かいご支援を賜わるよう

切望してやまない。

調査期間中、ご指導いただいた大阪府教育委員会と多大のご援助を賜わった日本道路公団大阪建設局、同大阪工事事務所の関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、調査事業に従事された調査関係諸氏に深く感謝の意を表する。

昭和53年5月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤三之雄

例　　言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう発掘調査のうち大阪市平野区長吉長原及び長吉川辺に所在する長原遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用、369,329,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、昭和51年7月26日から昭和53年5月31日までの間実施した。
5. 出土遺物の整理を主とする遺物整理業務も、発掘調査と平行して実施した。

また遺構図面や写真資料等の総括的な整理業務は、現地における発掘調査の合間と昭和53年4月1日から昭和53年5月31日までの2ヶ月間に実施した。

6. 本書の執筆は財団法人大阪文化財センターの井藤　徹、猪熊朝美、今村道雄、尾谷雅彦、酒井龍一、杉本二郎、寺川史郎、中西靖人、畠　暢子、藤沢真依、舟山良一、村上年生技師が当たり、今村、福岡澄男技師が校正した。写真図版の作製は中西和子、片山彰一、平井貞子技師が担当した。
7. 本書の遺構実測図の方位Nは、国土座標による座標北をさす。
8. 各遺物には出土した遺構別に個有の番号を与え、実測図と写真を対照できるようにした。
9. 本調査期間中には、出土古瓦について四天王寺女子大学教授藤沢一夫氏、花粉化石の分析について広島大学助手安田喜憲氏、出土埴輪類について川西宏幸氏に御教示を得た他、出土木製品の保存処理について元興寺文化財研究所、遺構、遺物については奈良国立文化財研究所、大阪市教育委員会、長原遺跡調査会の諸氏に多大の御協力、御指導を受けた。
10. 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラ

ースライドを多数作製したが、その全てを本書に掲載することが不可能であるため、本書記述以外の資料については財団法人大阪文化財センターが保管しているので広く利用されることを希望したい。

長原

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴なう
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目次

巻頭原色写真図版 第1図～第8図

序文

例言

第Ⅰ章 はじめに.....	1頁
第Ⅱ章 遺跡地周辺の環境.....	4
第Ⅲ章 調査の経過	6
第Ⅳ章 遺跡の概略	8
第1節 遺構の概要.....	8
第2節 遺物の概要.....	12
第Ⅴ章 調査の成果	21
第1節 トレンチの調査.....	21
1. 古墳時代Ⅰ	21
2. 古墳時代Ⅱ	57
3. 奈良時代・平安時代・鎌倉時代	83
第2節 遺構と遺物の検討.....	115
1. 古墳時代の遺構.....	115
(一) 古墳.....	115

(二) 塹輪円筒棺	140
(三) 土壙墓	156
(四) 水田跡	162
(五) 軌状遺構	167
(六) 流路・溝	168
2. 円筒埴輪について	173
3. 奈良時代・平安時代・鎌倉時代の遺構	177
(一) 古墓	177
(二) 井戸	178
(三) 掘立柱建物跡	224
(四) 土器溜	228
(五) 平安期末～鎌倉期初めの溝	233
4. 黒色土器から瓦器への移行過程について	246
5. 瓦類	256
あとがき	258

挿 図 目 次

第 1 図 調査地域位置図.....	2 頁
第 2 図 近畿自動車道松原 J C 以北東大阪北 I Cまでの区間における遺跡位置図.....	3
第 3 図 遺跡地周辺の地形.....	5
第 4 図 長原遺跡調査地区割及びトレンチ配置図.....	7
第 5 図 №41、13トレンチ遺構実測図.....	22
第 6 図 №42、12トレンチ遺構実測図.....	23
第 7 図 №43、11トレンチ遺構実測図.....	24
第 8 図 №10、44トレンチ遺構実測図.....	25
第 9 図 №9、45トレンチ遺構実測図.....	27
第 10 図 №46トレンチ遺構実測図.....	28
第 11 図 №7トレンチ遺構実測図.....	29
第 12 図 №47、6、56トレンチ遺構実測図.....	30
第 13 図 №48、5トレンチ遺構実測図.....	32
第 14 図 №49トレンチ遺構実測図.....	33
第 15 図 №4、17、18、57、58トレンチ遺構実測図.....	35
第 16 図 №53、59トレンチ遺構実測図.....	42
第 17 図 №19、60トレンチ遺構実測図.....	43
第 18 図 №54、20トレンチ遺構実測図.....	45
第 19 図 №21、61トレンチ遺構実測図.....	46
第 20 図 №22トレンチ遺構実測図.....	47
第 21 図 №23、62トレンチ遺構実測図.....	48
第 22 図 №24トレンチ遺構実測図.....	49
第 23 図 №25、55トレンチ遺構実測図.....	50
第 24 図 №27トレンチ遺構実測図.....	51
第 25 図 №28、29トレンチ遺構実測図.....	52
第 26 図 №30、31トレンチ遺構実測図.....	53
第 27 図 №32、33、34トレンチ遺構実測図.....	54
第 28 図 №36、37トレンチ遺構実測図.....	55
第 29 図 №38、39、40トレンチ遺構実測図.....	56
第 30 図 №16トレンチ遺構実測図.....	58
第 31 図 №15トレンチ遺構実測図.....	59
第 32 図 №14トレンチ遺構実測図.....	60

第 33 図	16.41トレンチ遺構実測図	61
第 34 図	16.42、12トレンチ遺構実測図	63
第 35 図	16.43、11トレンチ遺構実測図	64
第 36 図	16.10トレンチ遺構実測図	65
第 37 図	16.9、45トレンチ遺構実測図	66
第 38 図	16.8、46トレンチ遺構実測図	67
第 39 図	16.47、6トレンチ遺構実測図	68
第 40 図	16.48、5トレンチ遺構実測図	69
第 41 図	16.49、4トレンチ遺構実測図	70
第 42 図	16.17トレンチ遺構実測図	71
第 43 図	16.19、60トレンチ遺構実測図	72
第 44 図	16.54、20トレンチ遺構実測図	73
第 45 図	16.21トレンチ遺構実測図	74
第 46 図	16.22トレンチ遺構実測図	75
第 47 図	16.23トレンチ遺構実測図	76
第 48 図	16.24トレンチ遺構実測図	77
第 49 図	16.25、55トレンチ上層遺構実測図	78
第 50 図	16.25、55トレンチ下層遺構実測図	79
第 51 図	16.29トレンチ遺構実測図	80
第 52 図	16.30、31トレンチ遺構実測図	81
第 53 図	16.32、34トレンチ遺構実測図	82
第 54 図	16.45トレンチ遺構実測図	84
第 55 図	16.8、46トレンチ遺構実測図	85
第 56 図	16.7トレンチ遺構実測図	86
第 57 図	16.6、48トレンチ遺構実測図	87
第 58 図	16.53、59トレンチ遺構実測図	94
第 59 図	16.19、60トレンチ遺構実測図	95
第 60 図	16.54、20トレンチ遺構実測図	97
第 61 図	16.21、61トレンチ遺構実測図	98
第 62 図	16.22トレンチ遺構実測図	99
第 63 図	16.23、62トレンチ遺構実測図	100
第 64 図	16.24トレンチ遺構実測図	101
第 65 図	16.25、55トレンチ遺構実測図	102
第 66 図	16.26トレンチ遺構実測図	106
第 67 図	16.27トレンチ遺構実測図	108
第 68 図	16.28、29トレンチ遺構実測図	109
第 69 図	16.30、31トレンチ遺構実測図	110

第 70 図	16.32、33トレンチ遺構実測図	111
第 71 図	16.34、35トレンチ遺構実測図	112
第 72 図	16.36トレンチ遺構実測図	113
第 73 図	16.38、39、40トレンチ遺構実測図	114
第 74 図	塚ノ本古墳周濠断面図	118
第 75 図	塚ノ本古墳測量図（折り込み）	118・119
第 76 図	11号墳平面実測図	119
第 77 図	26号墳平面及び遺物出土状態実測図	120
第 78 図	19号墳平面及び墳丘断面実測図	121
第 79 図	18号墳平面実測図	122
第 80 図	12号墳平面及び遺物出土状態実測図	123
第 81 図	13号墳平面及び遺物出土状態実測図	124
第 82 図	25号墳平面・墳丘断面及び遺物出土状態実測図	125
第 83 図	古墳分布略図	130
第 84 図	古墳出土遺物実測図 1	132
第 85 図	古墳出土遺物実測図 2	133
第 86 図	古墳出土遺物実測図 3	134
第 87 図	古墳出土遺物実測図 4	135
第 88 図	古墳出土遺物実測図 5	136
第 89 図	古墳出土遺物実測図 6	137
第 90 図	古墳出土遺物実測図 7	138
第 91 図	古墳出土遺物実測図 8	139
第 92 図	1号埴輪円筒棺実測図	140
第 93 図	2号埴輪円筒棺実測図	141
第 94 図	1号棺埴輪実測図	142
第 95 図	2号棺埴輪実測図	142
第 96 図	3号埴輪円筒棺実測図	143
第 97 図	3号棺埴輪実測図	144
第 98 図	4号埴輪円筒棺実測図	145
第 99 図	4号棺埴輪実測図	146
第 100 図	5号棺埴輪実測図	147
第 101 図	5号埴輪円筒棺実測図	148
第 102 図	6号棺埴輪、土壙内須恵器実測図	149
第 103 図	6号埴輪円筒棺実測図	150
第 104 図	7号棺埴輪実測図	151
第 105 図	7号埴輪円筒棺実測図	152
第 106 図	8号棺埴輪実測図	153

第 107 図	8号埴輪円筒棺実測図	154
第 108 図	2号土壙墓断面実測図	156
第 109 図	1号土壙墓実測図	157
第 110 図	2号土壙墓実測図	158
第 111 図	2号土壙墓内出土遺物実測図	159
第 112 図	2号土壙墓に伴う溝内出土遺物実測図	160
第 113 図	3号土壙墓実測図及び出土遺物実測図	161
第 114 図	M16、15トレンチ水田跡遺構実測図	163
第 115 図	M21トレンチ 水田跡・溝・流路B位置図	164
第 116 図	畦畔・溝・堤遺構土層断面実測図(折り込み)	164・165
第 117 図	水田跡出土遺物実測図	166
第 118 図	流路A、B、C土層断面図(折り込み)	168・169
第 119 図	流路、溝内出土遺物実測図	172
第 120 図	M.9トレンチ溝出土遺物実測図	175
第 121 図	藏骨器実測図	177
第 122 図	曲物井戸実測図	188
第 123 図	曲物井戸実測図	189
第 124 図	曲物井戸実測図	190
第 125 図	曲物井戸実測図	191
第 126 図	曲物井戸出土遺物実測図	192
第 127 図	曲物井戸出土遺物実測図	193
第 128 図	曲物井戸出土遺物実測図	194
第 129 図	曲物井戸出土遺物実測図	195
第 130 図	曲物井戸出土遺物実測図	196
第 131 図	羽釜井戸実測図	202
第 132 図	羽釜井戸実測図	203
第 133 図	羽釜井戸出土遺物実測図	204
第 134 図	羽釜井戸出土遺物実測図(折り込み)	204・205
第 135 図	羽釜井戸出土遺物実測図(折り込み)	204・205
第 136 図	羽釜井戸出土遺物実測図(折り込み)	204・205
第 137 図	曲物羽釜井戸実測図	207
第 138 図	曲物羽釜井戸出土遺物実測図	208
第 139 図	曲物羽釜井戸出土遺物実測図	209
第 140 図	曲物羽釜井戸出土遺物実測図	210
第 141 図	特殊井戸実測図及び出土遺物実測図	212
第 142 図	素掘り井戸実測図及び出土遺物実測図	219
第 143 図	素掘り井戸出土遺物実測図	220

第 144 図	S B 001及び関連遺構出土遺物実測図	226
第 145 図	建物関連遺構出土遺物実測図	227
第 146 図	M.26 トレンチ 土器溜実測図	229
第 147 図	M.26 トレンチ 土器溜出土遺物実測図	230
第 148 図	S K 022出土遺物実測図	231
第 149 図	S K 023出土遺物実測図	232
第 150 図	S D 210断面図	233
第 151 図	S D 210出土遺物実測図	235
第 152 図	S D 211断面図	236
第 153 図	S D 211出土遺物実測図	237
第 154 図	S D 212断面図	238
第 155 図	S D 212出土遺物実測図	239
第 156 図	S D 210、S D 211、S D 212と周辺現地形図	241
第 157 図	M.26 トレンチ 現、近世の溝	242
第 158 図	瓦実測図	257

表 目 次

表 1	近畿自動車道松原 J C 以北東大阪北 I Cまでの区間における遺跡 一覧表	2 頁
表 2	遺構年表	10
表 3	長原遺跡出土遺物年表（折り込み）	20・21
表 4	古墳一覧表(1)・(2)	116, 117
表 5	古墳方位・規模関係表	127
表 6	各世代の規模別古墳表	128
表 7	水田跡面積一覧表	162
表 8	円筒埴輪分類表	173
表 9	井戸新登録番号一旧名称対照表	222
表 10	掘立柱建物跡出土地区一覧表	225
表 11	M.26 トレンチ 土器溜出土土器一覧表	247
表 12	M.27 トレンチ S K 023出土土器一覧表	249
表 13	M.27 トレンチ S K 022出土土器一覧表	250
表 14	土器の法量	252

図版目次

- 図版 1 航空写真 $\text{M}49\sim\text{M}53$ トレンチ
図版 2 航空写真 $\text{M}44\sim\text{M}48$ トレンチ
図版 3 遺構 古墳時代 I $\text{M}41$ 、13 トレンチ
図版 4 遺構 古墳時代 I $\text{M}42$ 、12 トレンチ 1号墳
図版 5 遺構 古墳時代 I $\text{M}43$ 、11 トレンチ 2号墳
図版 6 遺構 古墳時代 I $\text{M}10$ トレンチ 全景
図版 7 遺構 古墳時代 I $\text{M}9$ 、45 トレンチ 全景
図版 8 遺構 古墳時代 I $\text{M}46$ 、7 トレンチ 27号・4号墳
図版 9 遺構 古墳時代 I $\text{M}47$ 、49 トレンチ 7号墳
図版 10 遺構 古墳時代 I $\text{M}56$ 、57 トレンチ 6号・12号墳
図版 11 遺構 古墳時代 I $\text{M}58$ トレンチ 8号墳
図版 12 遺構 古墳時代 I $\text{M}3$ トレンチ 塚ノ本古墳周濠
図版 13 遺構 古墳時代 I $\text{M}2$ 、1 トレンチ 10号・11号墳
図版 14 遺構 古墳時代 I $\text{M}52$ 、51 トレンチ 11号墳
図版 15 遺構 古墳時代 I $\text{M}53$ トレンチ 25号墳
図版 16 遺構 古墳時代 I $\text{M}53$ 、59 トレンチ
図版 17 遺構 古墳時代 I $\text{M}17$ 、18 トレンチ 塚ノ本古墳・11号～13号墳
図版 18 遺構 古墳時代 I $\text{M}17$ 、18 トレンチ 12号墳
図版 19 遺構 古墳時代 I $\text{M}60$ 、61 トレンチ 24号・21号墳
図版 20 遺構 古墳時代 I $\text{M}19$ トレンチ
図版 21 遺構 古墳時代 I $\text{M}54$ トレンチ
図版 22 遺構 古墳時代 I $\text{M}20$ トレンチ
図版 23 遺構 古墳時代 I $\text{M}21$ トレンチ 21号墳
図版 24 遺構 古墳時代 I $\text{M}22$ トレンチ 18号・20号墳
図版 25 遺構 古墳時代 I $\text{M}62$ 、23 トレンチ 15号墳
図版 26 遺構 古墳時代 I $\text{M}24$ トレンチ 16号墳
図版 27 遺構 古墳時代 I $\text{M}25$ トレンチ
図版 28 遺構 古墳時代 I $\text{M}55$ トレンチ
図版 29 遺構 古墳時代 I $\text{M}27$ トレンチ 11号墳
図版 30 遺構 古墳時代 I $\text{M}28$ 、29 トレンチ 全景
図版 31 遺構 古墳時代 I $\text{M}30$ 、31 トレンチ 全景
図版 32 遺構 古墳時代 I $\text{M}32$ 、33 トレンチ 全景
図版 33 遺構 古墳時代 I $\text{M}34$ 、38 トレンチ 全景

- 図版 34 遺構 古墳時代 I A639、40トレンチ 全景
- 図版 35 遺構 古墳時代 II A616トレンチ 上層・下層全景
- 図版 36 遺構 古墳時代 II A615トレンチ 上層・下層全景
- 図版 37 遺構 古墳時代 II A641、14トレンチ 全景
- 図版 38 遺構 古墳時代 II A642、12トレンチ 全景
- 図版 39 遺構 古墳時代 II A643、11トレンチ 全景
- 図版 40 遺構 古墳時代 II A610、9トレンチ 全景
- 図版 41 遺構 古墳時代 II A645、8トレンチ 全景
- 図版 42 遺構 古墳時代 II A648、5トレンチ
- 図版 43 遺構 古墳時代 II A617、19トレンチ
- 図版 44 遺構 古墳時代 II A654トレンチ
- 図版 45 遺構 古墳時代 II A620トレンチ
- 図版 46 遺構 古墳時代 II A621トレンチ
- 図版 47 遺構 古墳時代 II A622トレンチ
- 図版 48 遺構 古墳時代 II A624トレンチ
- 図版 49 遺構 古墳時代 II A625トレンチ 上層
- 図版 50 遺構 古墳時代 II A625トレンチ 下層
- 図版 51 遺構 古墳時代 II A655トレンチ 上層
- 図版 52 遺構 古墳時代 II A655トレンチ 下層
- 図版 53 遺構 古墳時代 II A629トレンチ 上層・下層全景
- 図版 54 遺構 古墳時代 II A630、31トレンチ 全景
- 図版 55 遺構 古墳時代 II A632、34トレンチ 全景
- 図版 56 遺構 平安時代、鎌倉時代 A645、8トレンチ 全景
- 図版 57 遺構 平安時代、鎌倉時代 A646、7トレンチ 全景
- 図版 58 遺構 平安時代、鎌倉時代 A6.6、48トレンチ
- 図版 59 遺構 平安時代、鎌倉時代 A650、3トレンチ
- 図版 60 遺構 平安時代、鎌倉時代 A6.2トレンチ 全景
- 図版 61 遺構 平安時代、鎌倉時代 A6.2、1トレンチ
- 図版 62 遺構 平安時代、鎌倉時代 A651、52トレンチ 全景
- 図版 63 遺構 平安時代、鎌倉時代 A653トレンチ
- 図版 64 遺構 平安時代、鎌倉時代 A653、59トレンチ
- 図版 65 遺構 平安時代、鎌倉時代 A617トレンチ
- 図版 66 遺構 平安時代、鎌倉時代 A617トレンチ
- 図版 67 遺構 平安時代、鎌倉時代 A618、19トレンチ
- 図版 68 遺構 平安時代、鎌倉時代 A619トレンチ
- 図版 69 遺構 平安時代、鎌倉時代 A654トレンチ
- 図版 70 遺構 平安時代、鎌倉時代 A620トレンチ

- 図版 71 遺構 平安時代、鎌倉時代 A621トレンチ
- 図版 72 遺構 平安時代、鎌倉時代 A622トレンチ
- 図版 73 遺構 平安時代、鎌倉時代 A622、23トレンチ 全景
- 図版 74 遺構 平安時代、鎌倉時代 A624トレンチ 全景
- 図版 75 遺構 平安時代、鎌倉時代 A625トレンチ 全景
- 図版 76 遺構 平安時代、鎌倉時代 A655トレンチ
- 図版 77 遺構 平安時代、鎌倉時代 A626トレンチ
- 図版 78 遺構 平安時代、鎌倉時代 A627トレンチ
- 図版 79 遺構 平安時代、鎌倉時代 A627トレンチ S K022
- 図版 80 遺構 平安時代、鎌倉時代 A627トレンチ
- 図版 81 遺構 平安時代、鎌倉時代 A628、29トレンチ 全景
- 図版 82 遺構 平安時代、鎌倉時代 A630、31トレンチ 全景
- 図版 83 遺構 平安時代、鎌倉時代 A635トレンチ 全景
- 図版 84 遺構 4号墳、5号墳
- 図版 85 遺構 9号墳、周溝内遺物出土状態
- 図版 86 遺構 10号墳、11号墳
- 図版 87 遺構 12号墳、周溝内遺物出土状態
- 図版 88 遺構 13号墳、周溝内遺物出土状態
- 図版 89 遺構 19号墳、24号墳
- 図版 90 遺構 26号墳、遺物出土状態
- 図版 91 遺構 27号墳、東墳丘裾部遺物出土状態
- 図版 92 遺構 塚ノ本古墳墳丘
- 図版 93 遺構 塚ノ本古墳墳丘及び周濠、周濠内断面
- 図版 94 遺構 塚ノ本古墳周濠内木製品出土状態
- 図版 95 遺構 S L001出土状態
- 図版 96 遺構 S L002出土状態
- 図版 97 遺構 S L003出土状態
- 図版 98 遺構 S L004出土状態
- 図版 99 遺構 S L005出土状態
- 図版100 遺構 S L006及び須恵器甕出土状態
- 図版101 遺構 S L007出土状態
- 図版102 遺構 S L008出土状態
- 図版103 遺構 S X001人骨出土状態、S X002 2号土壙墓出土状態
- 図版104 遺構 軍状遺構 A646トレンチ
- 図版105 遺構 流路A、流路B堤状遺構、A622トレンチ
- 図版106 遺構 流路B A628トレンチ、流路C A639トレンチ
- 図版107 遺構 曲物井戸 S E002

図版108	遺構	曲物井戸	S E 003、S E 004
図版109	遺構	曲物井戸	S E 010、S E 014、S E 015
図版110	遺構	曲物井戸	S E 015、S E 016
図版111	遺構	曲物井戸	S E 042、S E 044
図版112	遺構	曲物井戸	S E 060、S E 081
図版113	遺構	曲物井戸	S E 086、S E 087
図版114	遺構	曲物井戸	S E 096、S E 097
図版115	遺構	曲物井戸	S E 101、S E 102
図版116	遺構	曲物井戸	S E 104、S E 107
図版117	遺構	曲物井戸	S E 113、S E 114
図版118	遺構	羽釜井戸	S E 005、S E 013
図版119	遺構	羽釜井戸	S E 022、S E 029
図版120	遺構	羽釜井戸	S E 032、S E 033
図版121	遺構	羽釜井戸	S E 035、S E 038
図版122	遺構	羽釜井戸	S E 038、S E 039
図版123	遺構	羽釜井戸	S E 043、S E 045
図版124	遺構	羽釜井戸	S E 051、S E 054
図版125	遺構	羽釜井戸	S E 065、S E 066
図版126	遺構	羽釜井戸	S E 072、S E 094
図版127	遺構	羽釜井戸	S E 095、S E 098
図版128	遺構	羽釜井戸	S E 103、S E 110
図版129	遺構	曲物・羽釜井戸	S E 026
図版130	遺構	曲物・羽釜井戸	S E 034
図版131	遺構	曲物・羽釜井戸	S E 034
図版132	遺構	曲物・羽釜井戸	S E 040
図版133	遺構	曲物・羽釜井戸	S E 041、S E 049
図版134	遺構	曲物・羽釜井戸	S E 100
図版135	遺構	曲物・羽釜井戸	S E 111
図版136	遺構	特殊井戸	S E 053、S E 056
図版137	遺構	特殊井戸	S E 085
図版138	遺構	素掘り井戸	S E 019、S E 020
図版139	遺構	素掘り井戸	S E 024、S E 106
図版140	遺構	S B 001	
図版141	遺構	S K 002、S B 001	
図版142	遺構	S B 001柱穴	
図版143	遺構	S B 012、建物群 A626 トレンチ	
図版144	遺構	S B 016柱根	

- 図版145 遺構 S B 020柱穴
- 図版146 遺構 土器溜 全景
- 図版147 遺構 S K 022、S K 023全景
- 図版148 遺構 S K 022、S K 023全景・遺物除去後
- 図版149 遺構 S D 210 №18トレンチ
- 図版150 遺構 S D 210 №2、19トレンチ
- 図版151 遺構 S D 210 №50、60トレンチ
- 図版152 遺構 S D 211、S D 212 №55、26トレンチ
- 図版153 遺物 塚ノ本古墳周濠出土遺物 SD 003、SD 004出土遺物
- 図版154 遺物 古墳出土円筒埴輪 2号～4号墳
- 図版155 遺物 3号墳出土家形埴輪
- 図版156 遺物 3号墳出土 家形埴輪
- 図版157 遺物 3号墳出土形象埴輪、蓋形埴輪、9号墳出土朝顔形埴輪
- 図版158 遺物 古墳出土円筒埴輪 5号、7号～9号墳
- 図版159 遺物 古墳出土埴輪 4号、15号、13号墳
- 図版160 遺物 10号墳出土 甲冑形埴輪 17号墳出土 円筒埴輪
- 図版161 遺物 古墳出土円筒埴輪 24号・25号・18号墳
- 図版162 遺物 27号墳出土円筒埴輪
- 図版163 遺物 古墳出土須恵器 1～3号墳
- 図版164 遺物 1～4号墳出土須恵器、製塩土器、土師器
- 図版165 遺物 4号墳出土須恵器
- 図版166 遺物 古墳出土 4、5、7、8、9号墳出土須恵器
- 図版167 遺物 9号墳出土須恵器
- 図版168 遺物 9～11号墳出土須恵器
- 図版169 遺物 古墳出土遺物 10号、12号、18号墳
- 図版170 遺物 26、27号墳出土、土師器、須恵器
- 図版171 遺物 円筒埴輪棺 SL 001、SL 002、SL 003
- 図版172 遺物 円筒埴輪棺 SL 004
- 図版173 遺物 円筒埴輪棺 SL 006、須恵器甕
- 図版174 遺物 円筒埴輪棺 SL 005、SL 007
- 図版175 遺物 円筒埴輪棺 SL 004、SL 008、SX 003
- 図版176 遺物 SX 002出土遺物
- 図版177 遺物 流路B、C出土遺物 №24、27、39トレンチ
- 図版178 遺物 流路A、B、C出土遺物 №21、24、38トレンチ
- 図版179 遺物 井戸出土遺物 SE 113、110
- 図版180 遺物 井戸出土遺物 SE 059、064、079、085、092、096、099
- 図版181 遺物 S B 001及び関連遺構出土遺物

- 図版182 遺物 土器溜出土遺物
図版183 遺物 S K 022出土遺物
図版184 遺物 S K 023出土遺物
図版185 遺物 土器溜、S K 023出土遺物
図版186 遺物 S D 210出土遺物
図版187 遺物 S D 211、S D 212出土遺物
図版188 遺物 蔵骨器、墨書き土器
図版189 遺物 瓦類
図版190 遺物 石帶、硯

付 図 目 次

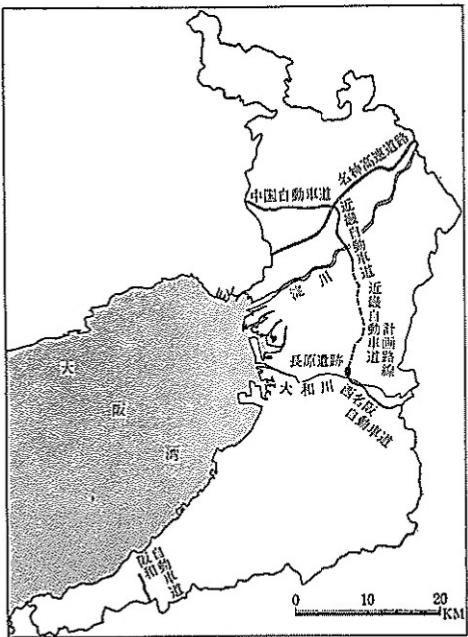
- 付図1 M17、18、50、3、51、2、52、1 トレンチ遺構実測図
付図2 M17、18、50、3、51、2、52、1 トレンチ遺構実測図
付図3 古墳時代I (古墳他)
付図4 古墳時代I (古墳他)
付図5 古墳時代I (古墳他)
付図6 古墳時代II (水田跡 溝他)
付図7 古墳時代II (水田跡 溝他)
付図8 古墳時代II (水田跡 溝他)
付図9 奈良時代以降 (建物跡、溝、井戸他)
付図10 奈良時代以降 (建物跡、溝、井戸他)
付図11 奈良時代以降 (建物跡、溝、井戸他)

第一章　はじめに

近畿自動車道天理吹田線建設予定地のうち、松原～東大阪間には瓜生堂遺跡をはじめとし多くの遺跡が存在するため、大阪府教育委員会では、昭和46年から日本道路公団とその取り扱いについて種々協議を重ねてきたところである。協議を開始した当初、その所在が知られていた遺跡は、北から新家、西岩田、瓜生堂、巨摩廃寺、若江北、友井東、久宝寺、龜井の各遺跡であり、これらの遺跡の大半は、河川改修や下水道工事によって発見されたものであって、その範囲等については不確定なものばかりであった。またこれらの遺跡は現地表面から3～5mもの位置に埋まっているものが多く、調査を実施する上でその範囲はもちろん、重複の有無、埋没深度等について確認を行っておく必要があると考えられたため、こうした資料を得るための第1次発掘調査を実施することについて協議を行い、昭和48、49の両年度にわたって、財団法人大阪文化財センターによって調査が行われた。調査は上記の遺跡の他に新たに発見された山賀及び佐堂遺跡が加えられた。一方昭和49年には大阪市によって計画されている地下鉄谷町線建設工事に伴って、城山及び長原の2遺跡が発見され、さらに後にはガス管理設工事に伴って美園遺跡が追加され、現在近畿自動車道建設予定地内の松原～東大阪間には13の遺跡の存在することが明らかとなった。

これらの調査結果をふまえ、大阪府教育委員会では、遺跡保存の見地から日本道路公団に対し、長大橋、トンネル、平面盛土等による工法上の検討を申し入れたが、用地の問題、地質の問題、その他すでに両側が府道中央環状線として使用されていること等からいずれも困難であり、調査の結果をみて、遺構の保存については個々にその都度協議することとし、基本的には橋脚による高架によって道路建設が行われることとなったのである。

これらの協議にもとづいて、日本道路公団からは、長原、城山、龜井の3遺跡について文化庁長官あて協議書が提出され、文化庁からは事前の発掘調査の実施と、遺構の保存について十分配慮することについて回答があった。この回



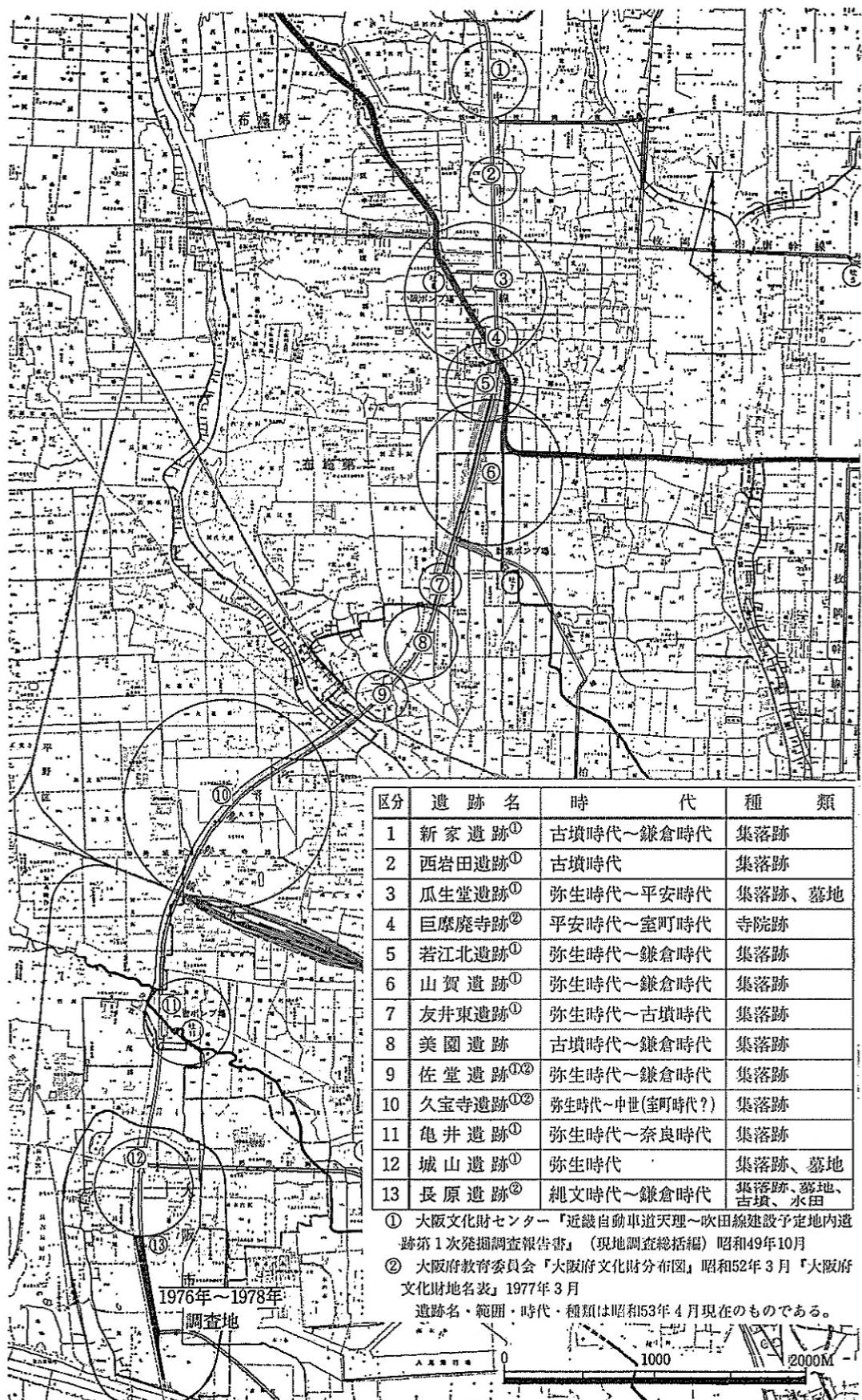
第1図 調査地域位置図

答にもとづき、大阪府教育委員会は、調査主体、調査方法、調査経費、調査期間等について検討した結果、現地調査は、財団法人大阪文化財センターの協力を求めて実施することとしたのである。

昭和51年4月、大阪府教育委員会、財団法人大阪文化財センター、日本道路公団の3者により上記3遺跡の調査について協定を締結し、51年7月には、長原遺跡の調査について契約を締結した。51年8月調査に着手し、53年3月31日現地における調査を終了した。（井藤）

表1 近畿自動車道松原J.C.以北東大阪北I.C.までの区間における遺跡一覧表

市域	遺跡名	遺跡の延長	遺跡の時期	遺構層	遺跡発見の動機・時期
大阪市	長原遺跡	500 ^m	古墳・中世	2	昭和49年 大阪市地下鉄工事
	城山遺跡	350	弥生・中世	2	昭和49年 大阪市地下鉄工事
	亀井遺跡	480	弥生・奈良	2	昭和48年 平野川改修工事
	友井東遺跡	240	古墳	1	昭和38年 金物団地の工事
八尾市	久宝寺遺跡	1,380	弥生～平安	3	昭和10年 道路工事で一部発見 昭和49年 大阪文化財センター試掘
	佐堂遺跡	360	古墳・奈良・平安	2	昭和49年 大阪文化財センター試掘
	美園遺跡	300	古墳・奈良・平安	2	昭和50年 大阪ガス埋管工事
	山賀遺跡	980	弥生～鎌倉	4	昭和46年 楠根川改修工事 昭和49年 大阪文化財センター試掘
東大阪市	若江北遺跡	350	弥生・平安・鎌倉	3	昭和46年 楠根川改修工事 昭和49年 大阪文化財センター試掘
	巨摩磨寺跡	230	弥生・平安・鎌倉	3	昭和39年 中央環状線工事
	瓜生堂遺跡	550	弥生～平安	3	昭和40年 府営工業用水管工事 昭和41～42年 寝屋川改修工事
	西岩田遺跡	300	古墳	2	昭和39年 中央環状線工事
	新家遺跡	500	古墳～鎌倉	3	昭和40年 中央環状線工事
計	13遺跡	6,520			



第2図 近畿自動車道松原J.C.以北東大阪北I.C.までの区間における遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡地周辺の環境

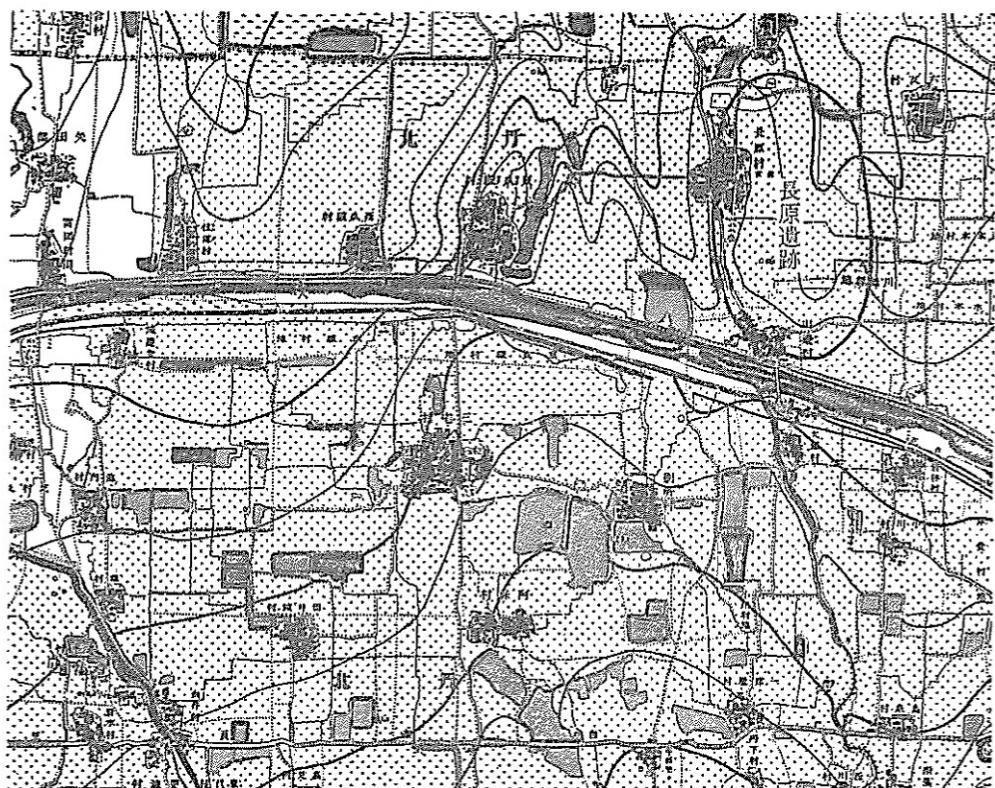
長原遺跡の所在する大阪市平野区長吉長原町及び長吉川辺町は、大阪市の東南端部に位置し、八尾市及び松原市に接する地域である。

当該地域は東を生駒・金剛山地、南側を羽曳野丘陵、西側を我孫子・上町台地に囲まれた河内平野の最南端部に当たる。

河内平野は、縄文時代中期以前その大部分に海水が入り込んだ河内湾を呈していたものが、それ以後の自然環境の変化により淡水の河内潟となり、さらに時間の経過とともに平野部が北へ北へと広がっていったものである。この平野部を前面に押し広げる作用をなしたのが、旧大和川もしくは古大和川と通称される長瀬川、玉串川の現存する2本の川と、それに付随する恩智川、楠根川、平野川及び東除川、西除川である。現在の大和川は大和盆地の水を集めて西流し、亀ノ瀬の峡谷を通った所で金剛山地の水を集めて北流してくる石川と合流し、築留付近（柏原市役所前）からまっすぐ西へ大阪湾へ向って流れている。しかし、この様な流れになったのは宝永元年（1704年）以降で、それ以前は上述の様な数本の河川として築留の地点よりそのまま北流していたのである。したがってその当時は、東除川も西除川も大和川以北まで流れていたのである。

ちなみに、当該長原遺跡に最も関係の深い川と考えられる東除川を見てみると、松原市内を北流してきた東除川は現在では旧明治橋の西で大和川と合流しているが、それから北側については川辺町の西側から長原町の西を通り出戸池の南でいくぶん東へ折れてさらに北流し、八尾市亀井町付近で平野川に合流していたことが、地形図の上から読みとれる。この流れが、いつごろから存在したのかは不明な点が多いが、長原遺跡は、この東除川の東側一帯に広がる一大集落であったことはまちがいない。

さらに当該遺跡地の立地上の問題であるが、上述の東除川について、等高線の検討をしてみることにしよう。明治18年の帝国陸軍陸地測量部の作製になる地形図で東除川付近の等高線をひろってみると、海拔17.5m以上の等高線はす



第3図 遺跡地周辺の地形

べて東除川部分で凹状を示しているのに対し、海拔15mの等高線は現大和川左岸付近を通るがほぼ直線的になり、海拔12.5m以下の等高線はすべて凸状を示すことがわかる。これは、河川が丘陵部を流れる場合は浸食作用をして凹状を示し、逆に平野部、特に沖積地に入ると堆積作用として凸状を示すと考えられることから、当該遺跡地は羽曳野丘陵の突出部というよりは、東除川が形成する沖積平野の一番高い位置に立地すると言える。

このような長原遺跡をとりまく遺跡の分布は、実に宏大で枚挙にいとまがない。時期的には旧石器時代から近代にいたるまで、すべての時代に著名な遺跡が存在する。(第2図参照) さらに当該地周辺には延喜式内社の志紀長吉神社が存在すること、また川辺町内の小字には小寺や道前(堂前)、小田ノ前(御堂ノ前)といった寺院の存在を示唆するものもあり、文献史学、歴史地理学的に多くの問題を包含している地と言っても過言ではない。(中西)

第Ⅲ章 調査の経過

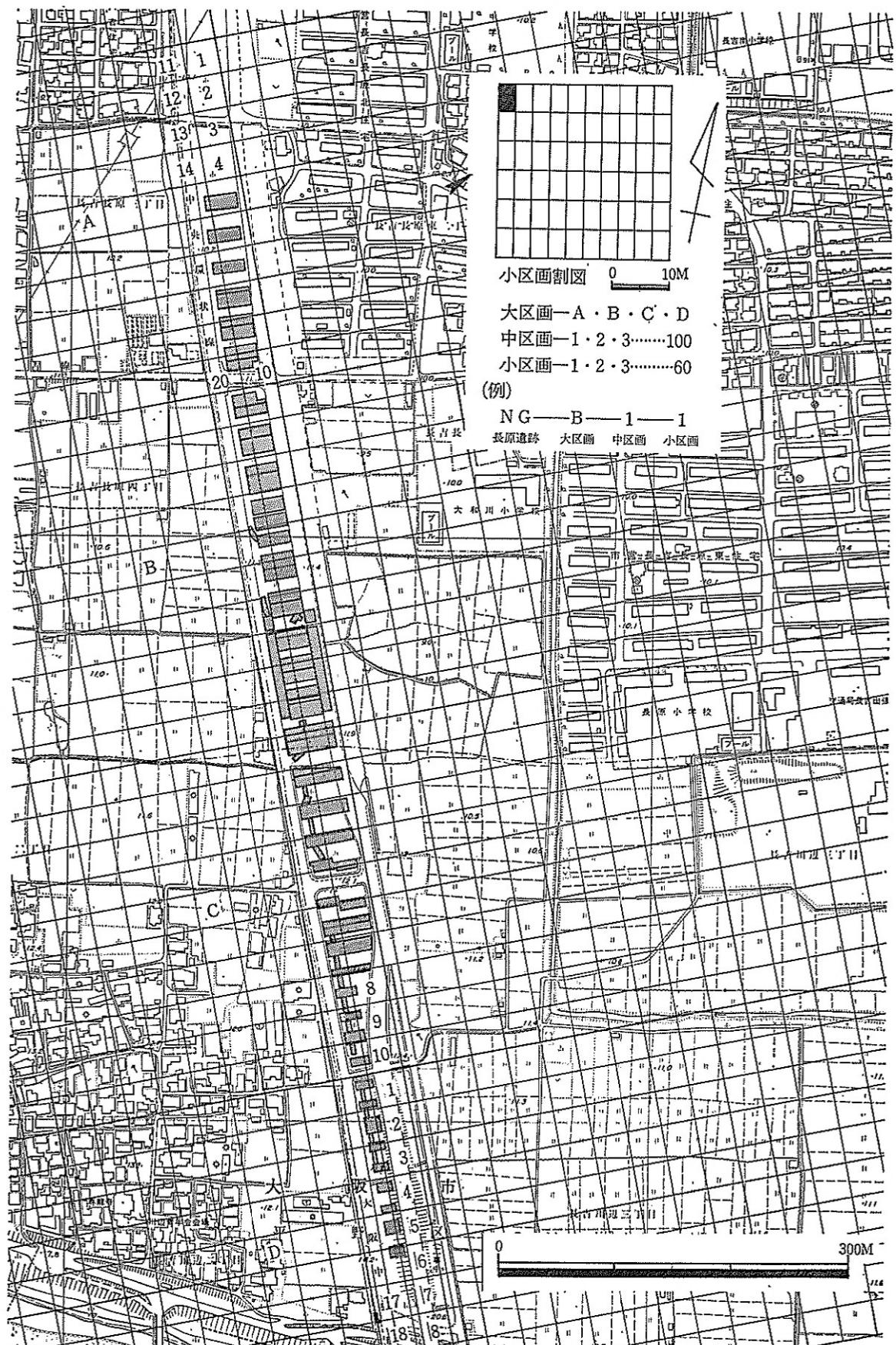
昭和51年7月、長原遺跡の調査に関して大阪府教育委員会、財団法人大阪文化財センター、日本道路公団の3者による契約を締結したのち、昭和51年8月には、機械掘削、人力掘削等の調査工事を発注し調査を開始した。

当初予定した調査地域、延長460mについては、昭和52年3月に一応の調査を終了したが、この調査を行う中で、遺跡がさらに南に拡がることが予想される結果となつたため、取り扱いについて協議し、南への拡がりについて幅3mの試掘溝による調査を行うこととなった。昭和51年10月から実施した調査の結果、遺跡はさらに南へ480m伸びることが明らかとなり、遺跡の総延長は合せて940mにも及ぶこととなつたのである。

昭和52年4月からは、南に伸びる480mの区間について調査を開始し、10月に一応の調査を終了した。

これらの調査の結果、塚ノ本古墳をはじめとして多くの古墳が検出され、また中世の掘立柱建物跡等も発見された。日本道路公団によって計画されている橋脚が、当初の計画位置にそのまま設置されることになると、検出された古墳等の多くに影響を与えることとなるため、橋脚の位置を変更しこれらの遺構を保存することについて協議を重ねた結果、52年12月に至って、古墳等の重要な遺構については橋脚の位置を変更して保存をはかることとなり双方が合意した。この変更された橋脚位置の追加調査は、昭和53年1月に開始し、3月末日終了した。これによって長原遺跡の現地における調査をすべて完了した。

調査地区については、第1次調査はM1～M16トレーナー、第2次調査はM17～M40トレーナー、第3次調査はM41～M55トレーナーと表し、地区割は第3図に示すように設定した。この地区割については、すでに長原遺跡調査会によって行われた地下鉄谷町線延長に伴う調査によって設定された基準線を使用した。地区割の基準は、30m×30mを大区画としてアルファベットによって表し、中区画は数字によって表した。例示すればNG—B—1となるわけである。（井藤）



第4図 長原遺跡地区割及びトレンチ配置図 (1/5,000)

第IV章 遺 跡 の 概 略

第1節 遺構の概要

長原遺跡は、大阪市平野区長吉～川辺付近一帯に所在し、縄文時代～室町時代にいたる非常に大規模な複合遺跡であることが確認されている。元来本遺跡が発見されたのは昭和49年大阪市営地下鉄谷町線延長工事に伴なう調査を契機としており、この調査によって長原遺跡の重要性が高まり、今回当センターが調査する一つのきっかけとなっている。そして、近畿自動車道建設予定地内においては遺跡の南限を知るため第1次調査で試掘トレンチを設定した。その結果遺跡が当初の範囲より大幅に南へ伸びていることが判明し、第2次・第3次調査の対象地区となり大きな調査成果をあげることができた。ここでは主に、今回の調査で検出した遺構にもとづき報告しておきたい。今回の調査地は幅員約40m、路線長約1000mに及ぶ中央環状線中央分離帯の中である。遺構は現地表面下約0.5～1.5mから数枚の遺構面を重層的に検出した。現地表面から旧耕土・床土間は大きく盛土がなされていた。この旧耕土・床土直下およびその下の土層からは中世以降と考えられる遺物が出土している。この遺構は幅数メートルの浅い溝状遺構や小杭跡等であり、半数のトレンチで確認されたが性格は不明である。このような旧表土・床土直下の遺構は現在にいたっても性格不明の点が多い。つぎに記す古墳時代～鎌倉時代の遺構はおおむね3つの土層を規準にして3枚の遺構面を調査することが可能であった。もちろん例外もあり、4・5・6トレンチのように一枚の遺構面に古墳時代～鎌倉時代の遺構が検出されるのもあれば、25・55トレンチのように水田跡だけで2層の遺構面が観察された地区もある。そこで、この報告では最も多くの遺構を検出した土層と塚ノ本古墳を中心とする古墳群や溝およびそれ以前の遺構がある地山上面を古墳時代Ⅰ、その後引き続いて水田跡、灌漑排水路の認められた面を古墳時代Ⅱとし、その上の遺構面を奈良時代～鎌倉時代の生活面として報告したい。それら

の関係を示すと表2のようになる。

古墳時代Ⅰ

粘土質の地山上に構築、掘削された遺構が大半であり、塚ノ本古墳の他26基の古墳、掘立柱建物、溝・流路が主要な遺構としてあげられる。これらの古墳や溝等の時期は出土遺物、土層観察から蛇行して流れる流路Bが最も古く、次に塚ノ本古墳があり、方形墳の築造、土壙墓・円筒棺の埋葬が遂時行われ、その後、一転して溝を掘ったと考えられる。古墳の築造時期や性格、出土遺物については（V章：古墳、円筒埴輪について）報告しているので重複を避けておきたい。塚ノ本古墳より古い遺構は出土遺物からして流路Bであるが、流路内の出土遺物は上流から押し流されてきたか否かの判断を下すには困難をきわめる。現状では出土遺物の磨滅の度合によらざるを得ず、一応、磨滅していない遺物が多いことから、原位置に近い状態であることが十分考えられる。

一方、古墳が築造された東緩斜面は、築造や埋葬が途絶えた後、大幅な土地利用の転換が計られ、墓地から水田へと変貌した様子がうかがわれる。その利用方法がどのようなものであったかはわずかに残された溝・畦畔痕跡からしかうかがい知れないが、南北にのびるSD105・112を基幹水路とし、それから分岐する数条の溝が知られる。しかも、分岐する溝は意図的に古墳の墳丘部分を避け、その周溝へ迂回している。そして、その中の幾条かの溝は塚ノ本古墳周濠へ流入するように計画され、その結果、周濠部分は必要に応じて水を湛えたことも考えられる。

古墳時代Ⅱ

当該遺構面は部分的に古墳時代Ⅰの遺構の影響を受けてはいるが、それよりなお一層広範囲に拡大した水田遺構が特色である。古墳盛土に繋がる多数の畦や、古墳を削平した流路および古墳の上に築いた堤等によって調査地域の大半が水田に変化したことが明らかになり、古墳の築造終焉後短期間になされたことと思われる。古墳出土遺物の下限が6世紀前半に求められるのにたいし、

表2 遺構年表

水田跡出土遺物の下限はこれよりやや遅れ、6世紀後半の年代のものである。ごく僅少の出土遺物から得られた年代と古墳の築造時期の終焉の間を埋めるものとして先の溝（SD105）の性格を考えれば、連綿として営まれた水田は当遺構面の時最大面積になったとみられる。

上にのべた水田の土壤は暗青灰色粘土層・黒色粘土層であり、これらの土壤は一般的なグライ土壤である。一方、この土壤の堆積していない地点にも灌漑排水路と者をられる溝を検出したがこの周囲には水田跡がみられない。

奈良時代・平安時代・鎌倉時代

奈良時代の遺物は数トレンチから出土しているがいずれも遺物包含層中から

のものが多い。遺構として確認できたものは13トレンチの数条の溝遺構と22トレンチの埋葬遺構であった。前者は『長原遺跡速報Ⅱ』のとおりであり、後者は本書第V章で報告している。平安時代・鎌倉時代の遺構は連續して営まれており、22トレンチの奈良時代の遺構もこの両時代の遺構面と同一面で検出したものである。しかし、この時代の遺構面は古墳時代Ⅰ・Ⅱの遺構面のような分層は不可能であった。

検出した遺構の中で最も特徴的なものは、溝ではS D211、212とS D210である。特に後者は、地表面から観察した条里制と方位、坪境等の復元結果と一致する点の多いことが指摘でき、条里制を踏襲した遺構であることが判明した。そして前者の2条の溝は内側の溝は古く、外側の溝が新しいという時期関係が遺物と遺構から知られる上に、先の溝と同様に、条里制の方向等と一致している点が注目される。そしてこれらの溝に囲繞された中の掘立柱建物も溝とほぼ同方位をさし、条里制地割にのっとった土地利用がうかがえる。45・8・46・7トレンチで検出した一群の掘立柱建物には南北に2条の溝があり、これらの溝も建物を取り囲むものとみられる。建物は南東に井戸を構え、南側にせりだす孫廂を付け、建物南側には別の一棟も確認されている。一方、数多く検出された井戸はほとんどが平安時代・鎌倉時代に属し、掘立柱建物、溝と同時代のものである。井戸は羽釜、曲物等を井戸枠に利用したものである。しかしこれらの井戸はほとんどが平安時代・鎌倉時代に属し、掘立柱建物、溝と同時代のものである。井戸は羽釜、曲物等を井戸枠に利用したものである。しかし残されていた枠は下半部の部分で、上半部は抜き取られたり、欠損したものが多かった。

以上のように今回の調査で検出した遺構は、古墳時代前半～鎌倉時代におよび、丘陵の東緩斜面から低地への変換点にあたる地に、古墳・水田・建物・溝・流路等の存在を知ることができたが弥生時代以前の遺構は明確に把握し得なかった。（今村）

第2節 遺物の概要

昭和51年8月～昭和53年3月に至る1年8ヶ月にわたって実施してきた長原遺跡の発掘調査においては、先土器時代から明治時代に至る多種多様な遺物の出土をみた。その数量は、ビニール袋あるいはバスケットにして約3000杯の多きにのぼる。それらについては各一括収納遺物毎に1個の登録番号を与えると共に、含まれる遺物の種類と数量を類別・集計し、それをパンチカードに記載することにより資料化を図っている。この他現場の発掘調査とほぼ平行して、洗滌・注記・接合復元の基礎作業に加えて、調査概要報告に最少限度必要な実測並びに写真撮影も実施してきた。

出土遺物を時代的にみると、古墳時代中期と、平安時代中期～鎌倉時代との、二時代のものが数量的には圧倒的に主体を占める。つまり、27基にのぼる古墳群と、建物・井戸・溝・土壙等で構成される広範囲な集落址遺構の検出状況と相対すると言える。対して、その他の時代の遺物は数的には少なく、遺構の検出数も少ない。おおくは平安時代中期～鎌倉時代の包含層に混在する。

主要な遺構出土遺物については、各遺構の説明と合わせて図示しているが、それらの中から代表的なものを選び出し、簡略ながら『長原遺跡出土遺物年表』を作成した。そこで、他地域での調査成果等を参考としながら、長原遺跡における遺物の概要とその移り変わりを簡単にとりまとめてみたい。

先土器時代

我が国の土器の出現は、最も古くみつもって今から10000年あるいは12000年前とも推定されているが、その年代観はまだ検討の余地があるとしても、土器出現以前の時代を一応「先土器時代」と称している。

この先土器時代の遺物が、当遺跡でも出土している。サヌカイト製尖頭器1点・石核2点・剝片数点があるが、いずれも後世の包含層中に混在しており、当時の純粹な堆積層中に原位置を保っていたのではない。

近畿地方での先土器時代の実態は現在究明されつつある。一応、国府型ナイフを標式遺物とする後期と、有舌尖頭器を標式遺物とする末期に大別され、後期以前の実態は全く確認されていない。そして、この末期には近畿地方以外の調査成果によれば最古の土器の出現をみると言う。最近特に検討が進められている国府型ナイフの製作技術や型態あるいは石器組成の組み合わせ等の変化により、後期は更に2～3期に細区分されつつある。

当遺跡出土遺物には、いわゆる舟底形石器と称される尖頭器や、やや小型の石核等、特徴的なものがみられ、典型的な国府型ナイフの文化組成と比較してもかなり後出する様相を呈している。例えば、ナイフ形石器編年試案を設定された辻本充彦氏によれば、ナイフ形石器の時代を国府文化・郡家文化・塚原文化の三区分を行なっており、それにあてはめると長原遺跡出土遺物はまさに郡家文化の組成に該当するものと理解される。

縄文時代

縄文時代は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に大別される。

当遺跡出土遺物は、凸帯上にキザミを施す晩期のいわゆる「船橋式」と称される土器細片1点である。同様の型式の遺物は、長原遺跡の北側に接在する城山遺跡で多数の出土をみており、現在長原遺跡調査会が整理中である。

なお、大阪府堺市・四ツ池遺跡で出土した「船橋式」土器片に粒痕が付着しており、また最近では福岡県・板付遺跡では北九州において晩期終末期に位置付けられる「夜臼式」の時代の水田遺構の発見が報じられる等、既にこの時代に稻作が開始されていた可能性が強くなっている。

弥生時代

弥生時代は、前期・中期・後期に大別されるが、近畿地方では土器によって第Ⅰ様式=前期、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式=中期、第Ⅴ様式=後期の5期に細分されている。

当遺跡では、必ずしもこの時代の遺物は多くなく、第Ⅳ様式及び第Ⅴ様式

の土器片が数点、サヌカイト製打製石鏃が3点出土しているにとどまる。そして明確な弥生時代の遺構は検出されていないが、北在する城山遺跡では、第V様式の竪穴住居址3軒の他、各種遺構の検出がなされている。

古墳時代

古墳時代は、大型の前方後円墳がさかんに造営される前半期と、いわゆる群集墳が多数造営される後半期に大別される。更に、前半期の後半と、後半期の前半の一部とを合わせて、別に中期として取り扱い、前期・中期・後期の三区分とすることがある。ここでは3期区分を利用したい。

長原遺跡について言えば、次の4期が区分される。第1期は、なおまだこの遺跡で古墳が出現していない時期。第2期は、前方後円墳の可能性が強い塚ノ本古墳並びにその周囲に埋置された多くの円筒棺の時期。第3期は、多数の方墳群が造営された時期。第4期は、古墳造営以降に広範囲な畦畔が設定された時期である。先程の3期区分に従えば、第1・2期は古墳時代前期、第3期は中期、第4期は後期に該当する。

第1期の遺物としては、数点の土器片がある。主なものとしては、二重口縁の土師器壺と、体部外面に叩き目が施こされた甕等がある。特に前者は、前期古墳ととりわけ密接に関係することが多いので注目される。しかし、当遺跡では南端の河川状遺構の肩部で複数個体（2～3個体）が集中採取されているのみである。

古墳は今回の調査で26基が確認されており、その内最も時代が先行するのは第2期の塚ノ本古墳とその周囲の円筒棺群である。古墳からは、円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪及び断片的とは言え豪壮な家形埴輪がある。なお長原遺跡調査会による調査では、円筒棺の副葬品として、滑石製紡錘車、碧玉製勾玉や管玉、土師器丸底壺が確認されている（長原2・3号棺）。今回の遺物整理においては、塚ノ本古墳出土の埴輪並びに周囲の円筒棺の技術的特徴や型態を基準として、この種の埴輪をA類と称している。最近では、埴輪の製作技法上の特徴や型態等により第I・II・III・IV期に区分されることがあるが、長原A類は、第

【あるいは】期に比定されよう。通称「黒斑を有する埴輪」である。

これに対して第3期の25基の方墳（1基は前方後円墳の可能性もある）は、出土遺物の確認されたいずれもが、各種埴輪類と共に須恵器の伴出がみられる。須恵器には、鋸歯文等その初期の特徴を持つものから、長脚二段透し高坏の出現前に至る、いわゆる須恵器第I期のもの各種がある。これら方墳から出土の埴輪を整理上B類と称している。このB類は、黒斑を有しない「須恵質」を主体とするもので、より先行して大型のものをBⅠ類、後出して小型のものをBⅡa・b類、そして小型でも最下段の凸帯に顕著な指頭圧痕を持つものをBⅡc類としている。BⅠ類とBⅡ類は、埴輪区分の第Ⅲ期に、BⅢ類は、第Ⅳ期にほぼ比定されよう。そしてBⅢ類には、TK10の特徴を持つ須恵器坏身の伴出が確認され、長原遺跡に於ける埴輪の下限が理解されることとなる。（なお長原遺跡の埴輪の分類については、第V章に報告している。）

方墳群の造営直後に、広範囲にわたる畦畔が設定されたことは、両者の層位関係をもって理解される。ただし遺構の性格と相まって畦畔区画直上からの出土遺物は極めて少い。その少ない遺物の中には、第Ⅱ期末～第Ⅲ期にかけての須恵器坏身あるいは同種の細片があり、その年代観の一端を示している。よって畦畔遺構を古墳時代後期のある時期と理解することには出土遺物の点からも妥当性がある。

奈良時代

奈良時代の遺物は、藤原京・平城京あるいは長岡京等の調査の進展により、その実年代観についても研究が進んできている。広義に言えば、奈良時代そのものを、大化改新～平城京遷都直前迄を前期、平城京遷都～長岡京迄を後期と、二大別することもある。やや狭義には、後期を第I期～第V期に細区分されている。

長原遺跡では、こうした意味からは、前期奈良時代の遺物は極く少なく、大多数が後期奈良時代のものである。それらを概観すると時期的にはかなりばらつきがあるが、更に前半期のものと、後半期のものにおおむね大別され得る。

前半期としては、内面に数段の放射状暗文が施された土師器壺をはじめとして、壇・甕・高壺・ミニチュア高壺や、須恵器広口壺等がある。こうした遺物の多くは、塚ノ本古墳周濠内上層をはじめとして主に砂利層に包含されていた。

後半期としては、先ず軒丸瓦や軒平瓦がある。現時点では、軒丸瓦は、複弁8弁蓮華文が2種と、複弁7弁蓮華文1種の、計3種類である。軒平瓦は、7弁蓮華文瓦とセットになる均正唐草文1種と、流雲文1種の、計2種類である。これら瓦類は、いずれも大きく時代がかけ離れるものではなかろう。なお瓦類を使用する建築物は全く確認されてはいない。

またこの時期のものとして、土師器の甕と皿を上下に組み合わせた骨壺(?)が2個体ある。皿内面には簡略なラセン状暗文が描かれている。

平安時代

平安時代は、おおむね前期(I)・中期(II)・後期(III)の3時期に大別される。前期あるいは中期迄は、なおまだ奈良時代の伝統が根強く遺存しており、対して後期になると、例えば、瓦文様の和様化、瓦器の出現・中世型羽釜の出現等、とりわけ中世としての様相が顕著となる。歴史学的には、古代と中世の境界を平安時代と鎌倉時代の接点で求めるに対して、生活遺物の上では、平安時代後期の中に基本的な変化が認められる。

前期としては、壺・皿・甕といった各種土師器を主体に、須恵器や内黒黒色土器等がある。黒色土器壺の内面には、また簡略な装飾暗文が施されており、ここにも奈良時代の伝統の一端が遺っている。注目すべきは、「今」あるいは「今」とも読める墨書が書かれた土器が5点以上も出土している。とはいえる多くが細片であることや、不明瞭であることから、解読は不十分であり検討を続けたい。

また石帶が2点出土している。奈良時代には金属製であったものが、平安時代になって石製のものが現われることが知られており、この2点も前期あるいは下っても中期のものと思われる。

中期になると、数量的には多くなる。掘立柱建物や土墳あるいは包含層中から、各種の土師器、黒色土器、須恵器、縁釉及び灰釉陶器、中国製磁器等の出土をみている。この時期になると、従来の高台を有する壺は、中世の瓦器碗に近い形状となり、むしろ碗と呼ぶのがふさわしくなる。また両黒の黒色土器も目につく。須恵器もこの頃には、胎土の色調が従来の灰黒色のものに代って、淡灰白色のものが増加する。これは、古墳時代中期以降盛期をきわめた泉州地方に代って、遠く狼狽地方の製品が搬入されるようになったのであろう。泉州地方の須恵器生産の衰退と関係しよう。数は少ないが、中国製の磁器には青磁と白磁がある。青磁の高台裏には目跡が、白磁の高台は蛇の目であることが特徴である、またこの頃迄の羽釜は、古代型とも称すべきもので、胎土に大量の雲母粒が混ぜられ黒褐色を呈している。奈良時代以来の伝統であったが、ほぼこの時期をもって消滅する。

皿・壺・碗の供給形態の口径も、この頃にはまだ3寸・4寸・5寸前後の三種がみられる、ただし次の時代には、3寸と5寸の二種に統一されることになる。

後期になると、従来の組み合わせに、新たに瓦器が加わる。器種としては、碗と皿の二種があり、数的には碗が主体をなす。著名な平安京SE-8においては「寛治五年」の須恵質鉢に伴出する瓦器碗は第Ⅰ段階3ないしは第Ⅱ段階4とされる。ただし長原遺跡ではようやく瓦器が出現する。現時点の資料による限りは、奈良・北河内・山城地方等と比較して、中河内地方に於ける瓦器の出現は遅れる。出現期の瓦器碗は、形態的にも技法的にもこの地の両黒黒色土器碗に近似し、瓦器小皿は、形態的に土師器小皿の特徴を持つことが注目される。（なお、瓦器出現に至る過程については、第V章に報告されている。）後期でも前半期には、それ迄の伝統が強く遺存しているが、後半期になると急変し、日常供給形態としては、瓦器碗と小皿、土師器皿と小皿の4種組み合わせが確立し、これに煮沸型態としての中世型羽釜が加わる。中国製磁器は、玉縁を持つ白磁が主体をなし、前半期の口縁部はやや細く、後半期のそれは太くなる。

平安時代後期～鎌倉時代

平安時代後期後半～鎌倉時代前半と鎌倉時代の後半に区分される。長原遺跡で瓦器第Ⅱ段階と称しているものが前者、第Ⅲ段階と称しているものが後者の標式遺物となる。

平安時代後期後半以降は急激に瓦器が一般化し、その全体の数も著しく増加する。長原遺跡に於ても最も遺物数量が多くなるのはこの時代である。古墳時代中期以降に盛行してきた須恵器は、数を減じてきたがここに至ってほぼ消滅する。須恵器の製作技術は、基本的には常滑をはじめとした陶器系統と、中世須恵質土器系統の二系統に分化、変質する。土師器は、皿二種・羽釜を除いてはなくなり、綠釉・灰釉陶器もみられない、また黒色土器、とりわけ最後迄遺る両黒黒色土器も消滅する。長原遺跡に一般的な瓦器は、製作技術的にはやや雑なものが多く、数の少ない精巧なものは他地方からの搬入品とみられる。後者は、口縁部の沈線、体部内面の平行篦磨き、外面の波状篦磨き等が特徴的である。中国製磁器は、当初白磁が主体を占めるが、瓦器の退化が始まる第Ⅱ段階の後半には青磁が加わる。青磁には、体部外面に蓮弁を彫り込まれる碗及び皿と、体部内面にいわゆるネコカキと称される櫛描文様が施される碗あるいは電光状の櫛描文様が施される皿等がみられる。この頃になると、一般的には常滑をはじめとした日本製陶器もかなり増加しうが、今回の調査においては極めて少数にとどまったことは、長原遺跡が海岸からやや離れた地に存することに理由があるのかも知れない。

鎌倉時代でも後半になると、遺物の組み合わせ等は前半のものと全く共通するが、とりわけ瓦器碗の器形は著しく退化してゆくことになる。体部は浅くなり、高台も簡略な粘土紐を貼り付けるにすぎないものになってくる。この頃から南北朝にかけて、木製椀おそらくとて代わられるようになる。

今回の調査では、平安時代後期後半～鎌倉時代にかけての井戸が約100基を検出されたことから、井戸枠として使用された曲物をはじめとして、櫛・球・板等の木製品や、竹等がその中に遺存出土した。また石製硯三点も出土したが、おそらくこの時代のものとみられる。

南北朝時代～室町時代

こうした状況を経ながら南北朝時代を迎える。だが遺物の数量は、この頃になると急激に少なくなり、長原遺跡そのものが大きく変化しようとしている。

瓦器碗は更に退化が進み、もはや高台すらとりつけられない。羽釜は、従来土師質のみであったのが、新たに瓦質のものが加わり、いわゆる鼎として三足がとりつくものも増加する。

室町時代及びそれ以降の遺物はほとんどなくなり、江戸時代迄の数百年間は空白の時代となる。

江戸時代

これ迄の調査では江戸時代の遺構は確認されていないが、現水田面下位の包含層中に広範囲に遺物は散布している。まとまったものではなく、いずれも細片である。主なものとして古伊万里系統の磁器がある。いずれも呉須による淡い藍色の染付が施された白磁で、小鉢・ぐい呑・銚子等の器種がある。文様として、梅・草・網・唐草他多種多様で、いわゆる濃技法が用いられている。文様は簡略で、下手物と称されるべき日常雑器が圧倒的に多く、例えば平安京の調査で出土しているような細やかな文様を施された比較的上物はほとんどみられない。この他美濃系の天目茶碗やぐい呑片がある。栗茶色の釉が特徴的である。

明治時代

明治時代の遺物は、数は少ないが、特徴的なものがいくつかある。例えば、印判染付の茶碗、16弁菊文の軒丸瓦、あるいは備前擂鉢があげられる。とりわけ紫味の強い濃紺のペロ藍を用いて施こされた印判染付の文様は、当時の軍国調の様子を顕著に現わしており、興味深い。また菊文軒丸瓦は、何か当時の皇室と関係をもって造られたと思われるが、この長原遺跡の西にある志紀長吉神社の近くには、大嘗祭に献上する陰蔓の生育地といわれる土地があり、両者の関係もあるいは暗示する資料として注目される。

遺物の整理にあたっては、藤沢一夫、石神怡、小笠原好彦、千田剛道、川西宏幸、永島暉臣慎、野上丈助、山本昭、その他諸先学には多くの御教示を受けた。本稿の記述にあたっても、それら諸先学の成果に依拠するところが大きい。ここに記して感謝の意を表わします。（酒井）

参考文献

- 辻本充彦 1977年 「三島地方採集の石器」『大阪文化誌』第3巻第2号（大阪文化財センター）
第2阪和国道内遺跡調査会 1971年 『池上・四ツ池遺跡』月報17
川西宏幸 1973年 「埴輪研究の課題」『史林』第56巻第4号
長原遺跡調査会 1976年 『長原遺跡発掘調査』（資料編）
田辺昭三 1966年 『陶邑古窯址群 I』（平安学園考古学クラブ）
奈良国立文化財研究所 1974年 『平城宮発掘調査報告 VI』（奈良国立文化財研究所学報第23冊）
平安京調査会 1975年 『平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊一』
白石太一郎 1975年 「いわゆる瓦器に関する二、三の問題」『古代学研究』第54号
〃 1977年 「越智氏居館跡出土の瓦器」『古代学研究』第85号
その他

表 3. 長原遺跡出土遺物年表

第V章 調査の成果

第1節 トレンチの調査

1. 古墳時代 I

調査前の段階で知り得た長原遺跡の概要は、当センターで発行した試掘調査報告書、長原遺跡調査会で発行した長原遺跡の中間報告書1・2と資料編によるものが主なものである。そしてこれらによって、塚ノ本古墳を中心とする4基の方形墳、溝、水田跡、円筒埴輪棺等の遺構の存在が知られていた。

塚ノ本古墳 幅15m、深さ約1～2mの濠をもち、後円部径約60m、全長100mをこえる西向きの前方後円墳と考えられていたが、今回古墳西側を調査した結果次のようなことを知ることができた。

幅約18m、深さ約1～2mの周濠と西墳丘裾部が確認された。この結果、一応、西向きの前方後円墳ではないことが判明した。

埴輪円筒棺 古墳の南濠の外堤には5基の埴輪円筒棺が検出されていたが今回の調査で新たに8基の埴輪円筒棺を加えることができた。これらのうちには塚ノ本古墳周濠の外堤から非常に遠くはなれた溝内から出土したものもある。

小型前方後円墳と方形墳 4基の方形墳が知られていたが、基数の点ではこれを大幅に上まわる26基の方形墳と東西方向の1基の小型前方後円墳が確認され、従前のものを加えると総計31基になった。これは大阪府下における5世紀代の古墳の良好な資料であろう。

土壙墓 これまで知られていなかったが、今回4基の土壙墓が知られその中の1基は木蓋土壙墓とも呼ぶべきものである。この土壙墓は多くの遺物を伴っていた。

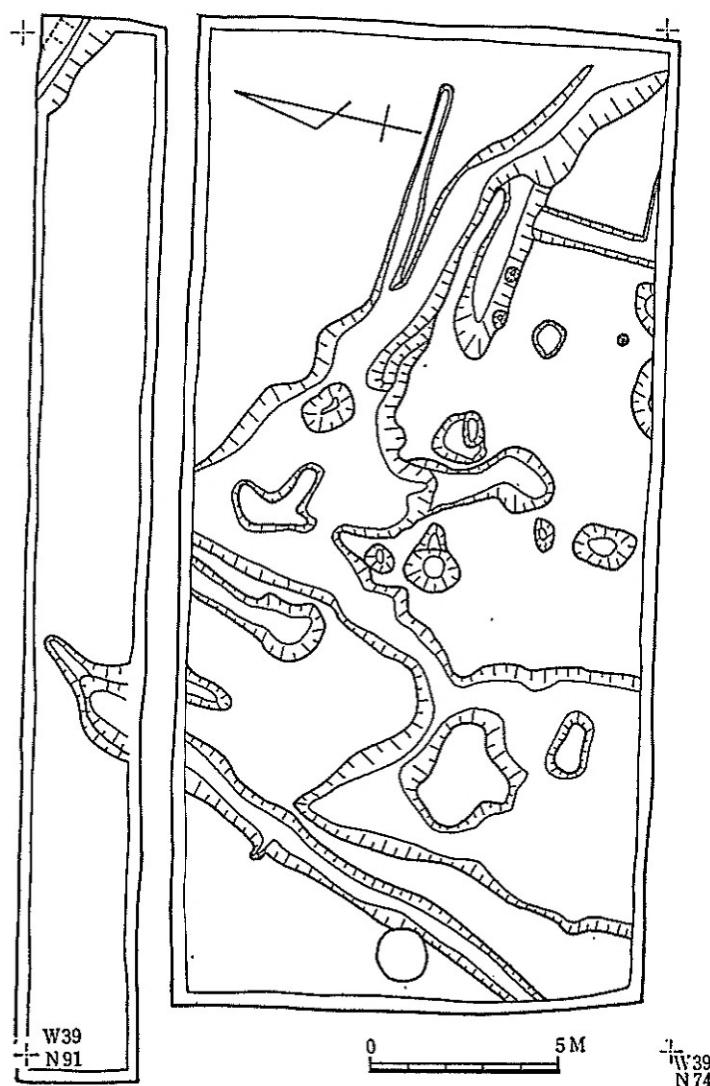
その他に多数の溝、轍状遺構等が検出された。（今村）

No.13・41トレンチ

最終面で、検出された遺構は、13トレンチでは、不定形の落ち込みのようなものがトレンチのほぼ全面にある。

その間に、径1m前後の残い土壙状のものが9ヶ所あり、他に遺構といえそうなものは、南西から北東へ走る幅0.9~1.4m、深さ0.23mの溝1条である。この溝も41トレンチでは切れてしまう。

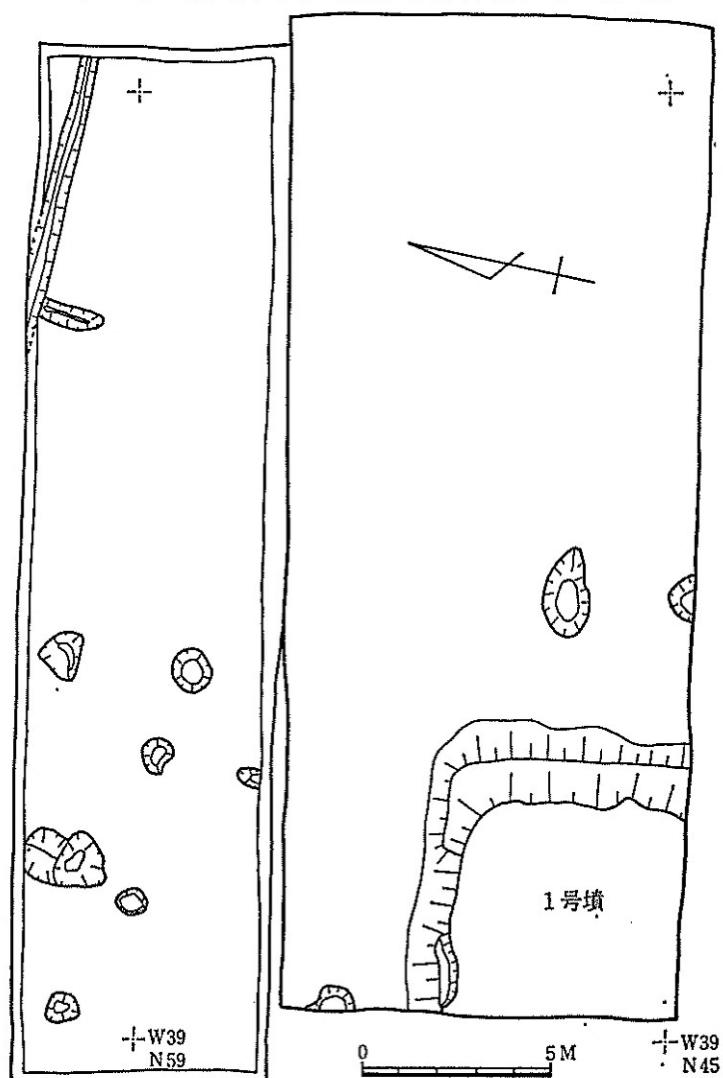
41トレンチでは、北東のすみに溝があるが規模等は不明である。（寺川）



第5図 A6.41(左)・13(右)トレンチ遺構実測図

No.42・12トレンチ

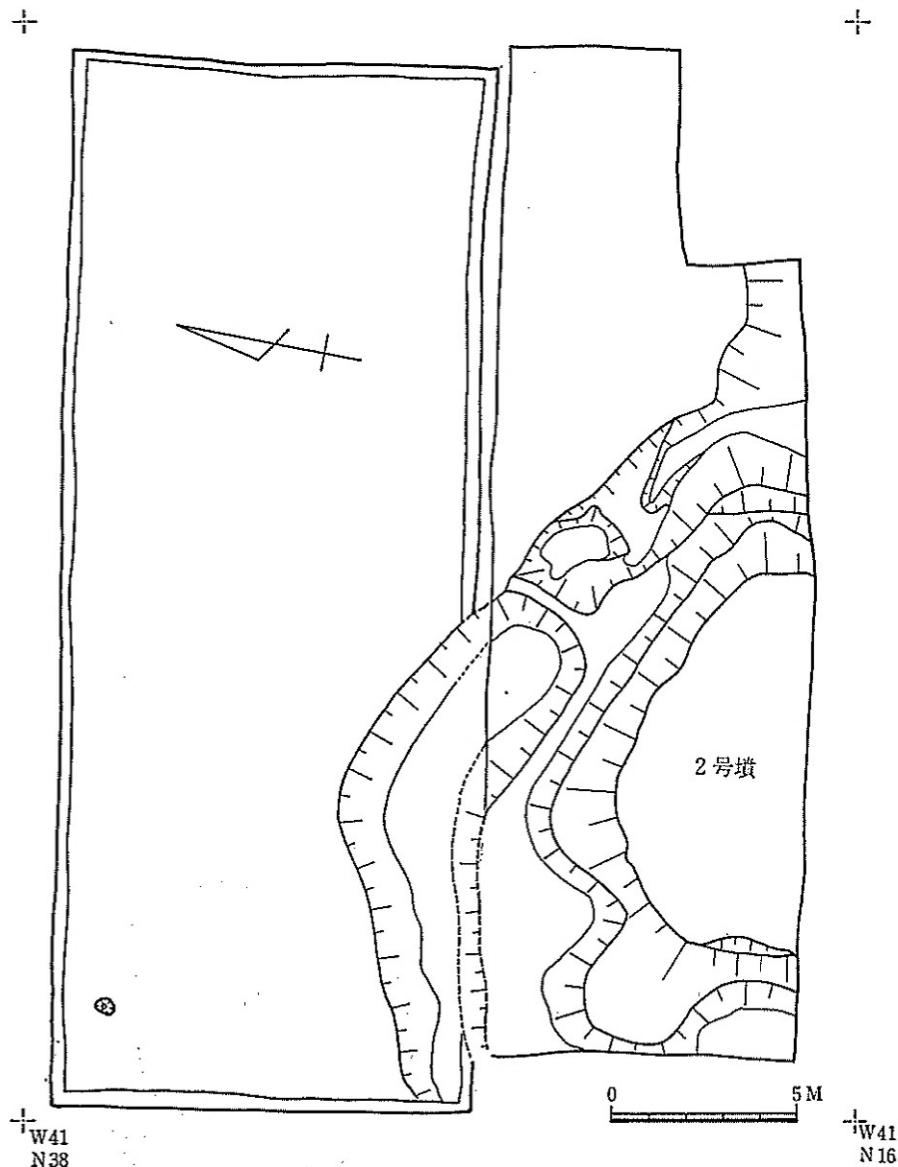
第1号墳は12トレンチで検出した。方墳の北東部を検出したにとどまり、全容は判明していない。マウンド上部はすでに削平されしており、残存高は約0.3mを計る。また方墳の周囲に、直径1mの土壙を3基検出したが、北の42トレンチまで広がっている。42トレンチでは、直径0.7m～1.5mの大小様々な土壙を7基検出した。10基の土壙から遺物は出土せず、性格については不明である。北東部に幅約0.5m、深さ約0.15m、ほぼ東西に走る小溝を検出した。両トレンチにわたり遺物は見当らず、時期は決定し難い。（杉本）



第6図 №42(左)・12(右)トレンチ遺構実測図

No.43・11トレンチ

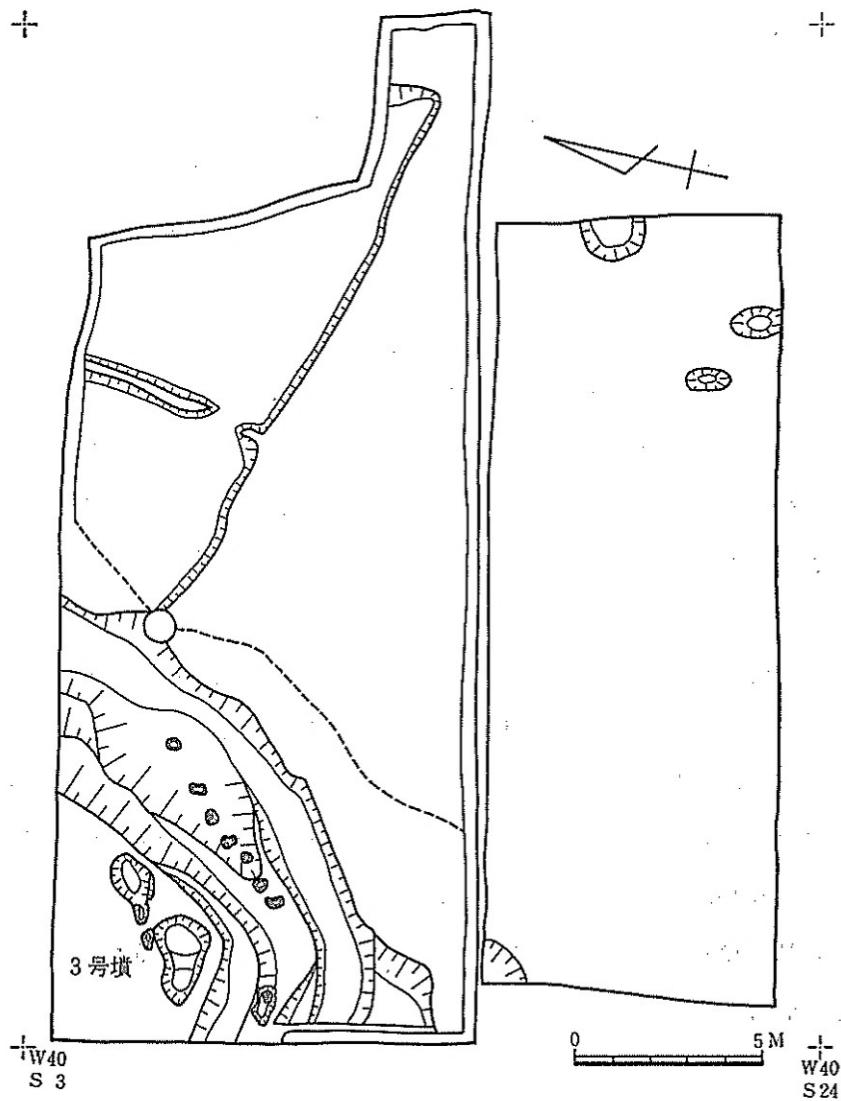
11トレンチで検出した第2号墳は、残存高約0.45mを計りマウンド上部はすでに削平されていた。主軸長約10mで、北西部に造り出しと考えられる突出部があり、それをも含むと約14mとなる。遺物は主にこの部分に集中し、多数の須恵器・埴輪が散在していた。特に筒形器台については注目される。ごく浅い周溝がめぐり、43トレンチではこの一部を検出した。(杉本)



第7図 No.43(左)・11(右)トレンチ遺構実測図

No.10・44トレンチ

10トレンチの西側部分で、上層から多くの埴輪片が出土し、古墳の存在が予想されていた。北西端で5層まで除去すると黄褐色の墳丘の盛土が検出された。それを追って下げてゆくと、周溝を伴う方墳の一部が検出された。3号墳は全体の規模は判明しないが、調査区内では南辺 2.4m、東辺10mまで検出できた。主軸方向はN—22°—Eを示す。墳丘の高さは0.6mを計り、周溝の最深



第8図 No.10(左)・44(右)トレンチ遺構実測図

部から 0.9m を計った。墳丘は著しく攢乱を受け、特に墳頂部近くは中世に攢乱を受けた土壙状の落ち込みが 2ヶ所検出された。北側の落ち込みは長軸 1.9 m × 短軸 1.0m、深さ 0.13m、南側の落ち込みは長軸 2.44m × 短軸 1.4m、深さ 0.13m を計った。墳頂部及びその周辺からは埋葬施設を確認できなかった。

周溝は幅 4.2m、深さ 0.1m を計った。周溝も上端は攢乱を受け浅くなり、やや丸味を呈してめぐっていた。

墳丘東辺の裾部から周溝近くに 7ヶ所のピットが検出された。南のピットから、径 0.36 × 0.18m、深さ 0.1m、径 0.4 × 0.3m、深さ 0.06m、径 0.28m、深さ 0.05m、径 0.25 × 0.34m、深さ 0.1m、径 0.3m、深さ 0.05m、径 0.4 × 0.25m、深さ 0.04m、径 0.35m、深さ 0.06m の各々を計った。いずれも内部から埴輪の細片が出土した。また、このピット周辺から多くの埴輪が出土しており、埴輪を設置する時の掘形の可能性も考えられる。

遺物は埴輪、須恵器、製塩土器、石鎚が出土し、埴輪の量が最も多かった。

埴輪は円筒、朝顔、形象埴輪が出土し、円筒、朝顔が包含層及び上層から多く出土したのに比べて、形象埴輪は墳丘裾から周溝内にかけて多く出土した。形象埴輪で確認されたのは、家形 2、人物（手）3、蓋形 3、屋根飾り 1、盾 1 であった。特に家形埴輪は大部分が南端のピット周辺に集中していた。

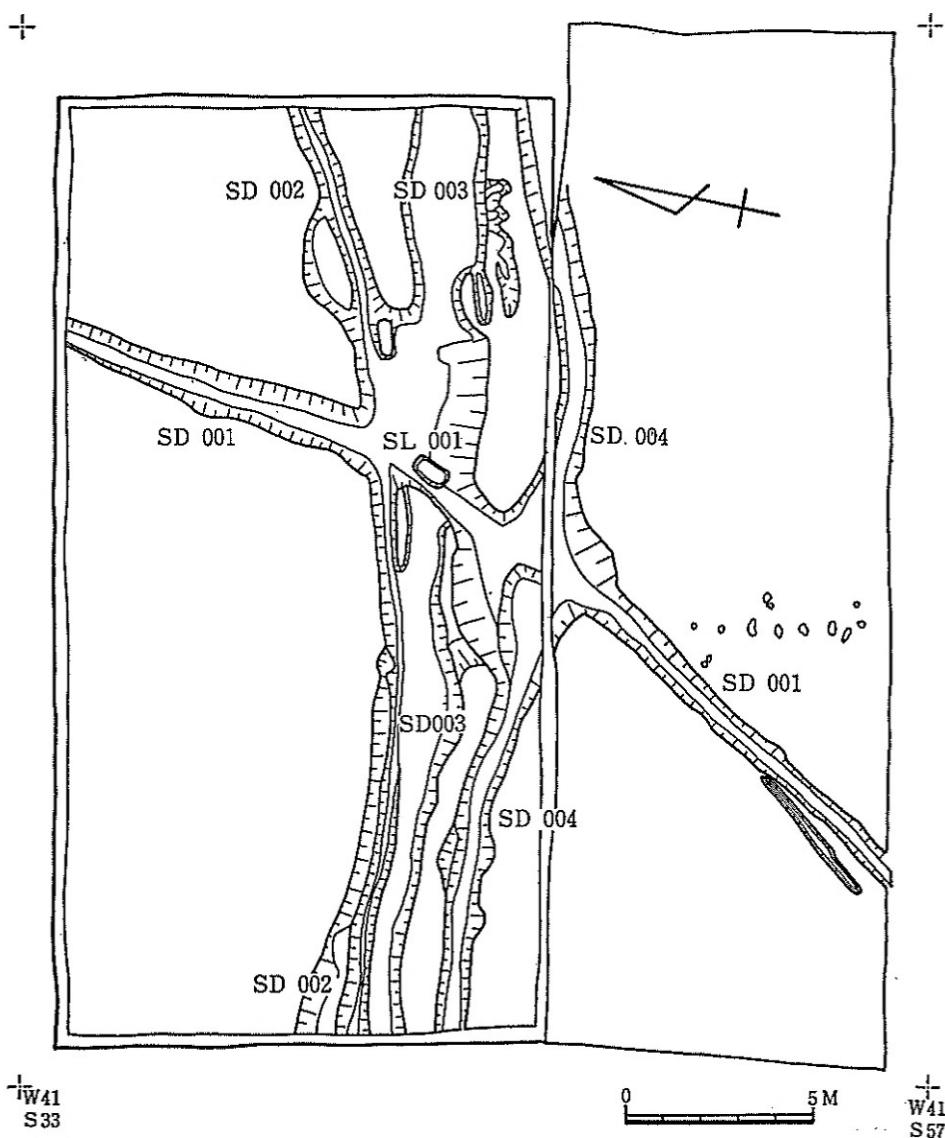
須恵器は、器台片が別個体で 11 片、高坏脚部、坏蓋、甕片等が出土している。

また、周溝内から当遺跡では出土していない製塩土器が 2 個体分破片で出土した。さらに墳丘斜面からサヌカイト製の打製石鎚も出土した。

44 トレンチは、茶褐色の粘土を除去すると、東側部分に 3、西側部分に 2ヶ所の土壙状の落ち込みが検出された。前者は、径が 0.6 × 0.9m、深さ 0.3m、径が 1m × 0.8m、深さ 0.2m、径が 1.2m、深さ 0.1m を各々計った。後者はいずれも北壁に接しており、全容は判明しないが方形をついするものと円形を呈するものがあった。（尾谷）

No. 9・45トレンチ

両トレンチにおいて古墳時代中期の溝を検出した。南へ行くにつれ西に曲がっていく南北方向のSD 001と、東西方向に流れるSD 002・003・004が交差している。SD 002は西側においてはSD 003の底部に認められた。埴輪円筒棺(SL 001)はSD 001・003の交点付近に埋置されていた。またSD 001の東側に南北方向に点々とつながる牛馬と考えられる足跡状の凹部を検出したがはっきりしない。(村上)



第9図 No.9(左)・45(右)トレンチ遺構実測図

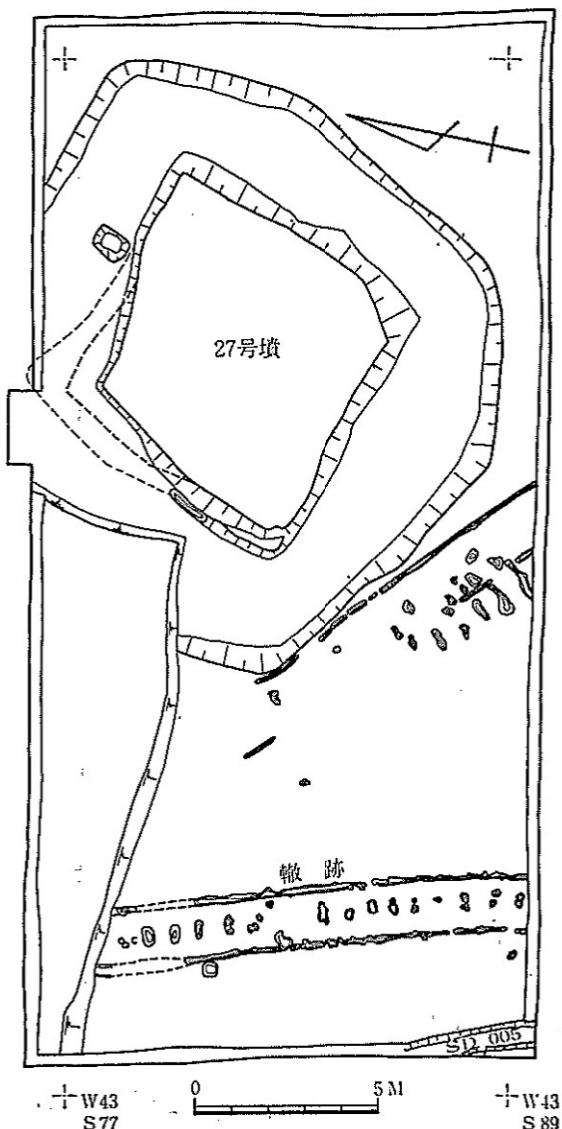
No.46トレンチ

トレンチ東半部において27号墳を検出した。27号墳は東西8.0m・南北7.6mの方墳である。古墳の墳丘は0.4mしか残存せず、盛土の上部は削平されていた。主体部は残存していない。墳丘の北西コーナーは平安時代の溝により削られている。古墳の南北軸はN—23°—Eである。この古墳は周溝を持ち、周溝の幅は3.0m、地山面からの深さ0.1mである。周溝内には10数個体の円筒埴輪が、一定の間隔を保ち点々と落ち込んでいた。北側の周溝内には方形の土壙があり、この内部から27号墳の時期と異なる塚ノ本古墳と同じタイプの朝顔形埴輪の破片が出土している。

南側周溝の横から、轍状の遺構を検出した。轍の幅は6cmから10cm、深さは約5cm、車輪の幅は1.5mで、北西—南東方向に走行している。同様な轍状遺構は、トレンチ西側でも検出できた。これは南北方向よりやや西に振った方向に走行している。中央には点々と足跡状のものが確認された。

南からびてきたSD005の一端がこのトレンチの西端から検出された。時期的には古墳築造以後のものと考えられさらに北へのびると考えられる。

(村上)



第10図 M.46トレンチ遺構実測図

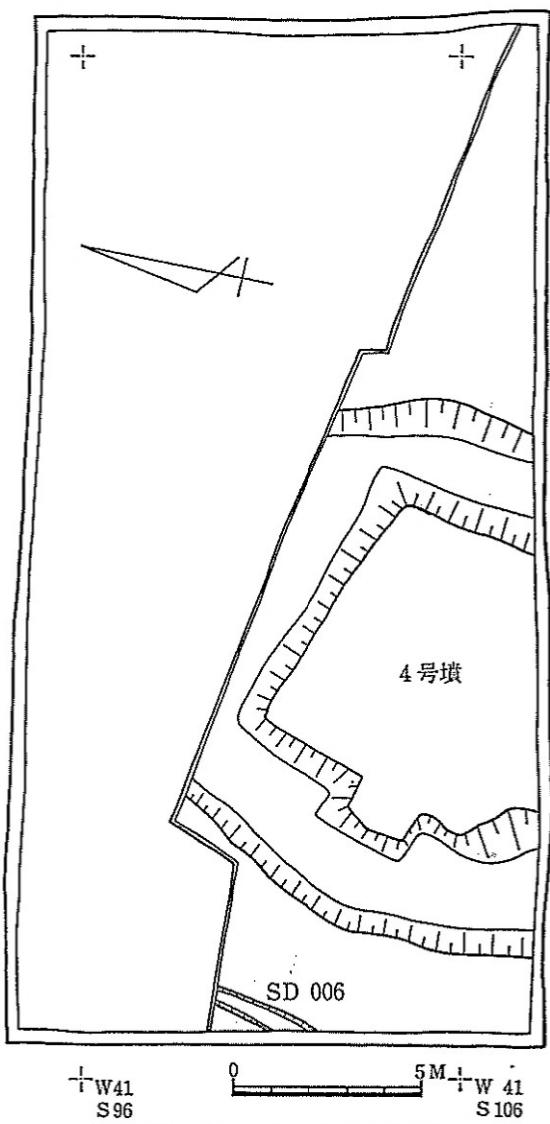
No. 7 トレンチ

平安時代の2条の溝を保存するため、南半部を掘り下げるに至った。その結果4号墳とその北西を走る1条の小溝、SD 006を検出した。

4号墳は7.3×7.6m、高さ0.15m、主軸方位N-17°-Eで西に1.1×1.1mの方形突出部がある。周溝は幅3m、深さ0.3mであり、この周溝中より多くの遺物が出土した。盛土はほとんど削平され、また主体部も認められなかつた。周溝内の埋土は、レンズ状に堆積していた。マウンドの形は方形を示し、若干南西隅が不明瞭になつてゐるもの、保存状態の良好な古墳であった。遺物は西周溝と突出部から、ほとんどの遺物が出土している。

出土遺物は須恵器蓋坏、土師器小型壺、および甕片、円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、鶏形埴輪片であった。

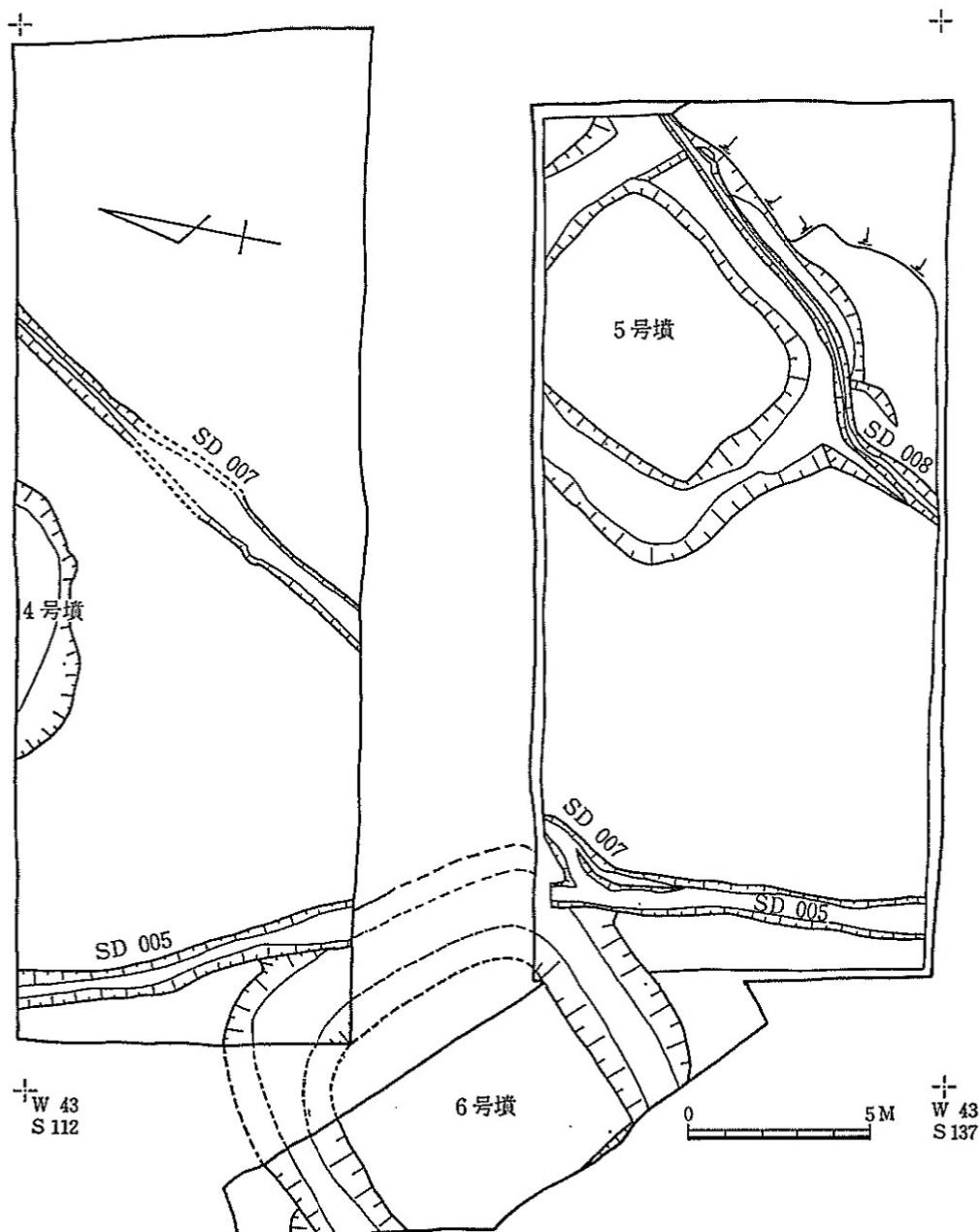
SD 006は幅約0.6m、深さ0.2mの小さい溝である。他のトレンチに見られるような灌漑排水路で、SD 007、008、011とともにSD 005から分岐する小さな水路であろう。これらの溝は、すべて南西から北東に流下している。（今村）



第11図 No. 7 トレンチ 遺構実測図

No.47・6・56トレンチ

3トレンチでそれぞれ黒色粘土層を除去すると、下図のように2基の方墳と1基の周溝の一部、3条の溝、8基分の轍状の遺構（第39図参照）が検出された。



第12図 No.47(左)・6(右)・56(下)トレンチ遺構実測図

まず5号墳は、6トレンチ東側において長軸7.8m、短軸6.1m、主軸方向N—36°—Eを計った。また、周溝を伴ないその幅2.0m、深さ0.2mを計った。墳丘高は0.3mしか残存していなかった。それは、墳丘上面に平安末期の包含層があり、その時期にはすでに削平されていたからである。このため埋葬施設も残存していなかった。遺物は須恵器の窯坏片と大型甕片、円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土した。

6号墳は、6トレンチの北西隅で一部検出され、その全容を調べる為に56トレンチが調査された。

当古墳の墳丘規模は長軸7.8m、短軸5.8m、墳丘高0.1m、主軸方向N—46°—Eを計った。また、幅2m、深さ0.1mの周溝がめぐっていた。当古墳も5号墳と同様に削平されており、埋葬施設もなくなっていた。削平された時期も5号墳と同時期位であろう。遺物は土師器片、須恵器片、埴輪片が出土したが、遺物の量は少なかった。

4号墳の周溝の一部が47トレンチから検出された。当トレンチでの周溝は、4号墳周溝の南辺にあたった。遺物は7トレンチから管玉などが出土しているが、当トレンチからは埴輪、須恵器片が出土した。

また、これらの古墳よりやや時期が降る溝が走っている。

S D 005は、調査地域南からのびてきており、6トレンチの北端でS D 007に分かれる。この溝は、そのままトレンチの西側を走り44トレンチへ入り、やや西に向きを変えて走っていた。最大幅1.2m、深さ0.5mを計った。遺物は検出されなかった。

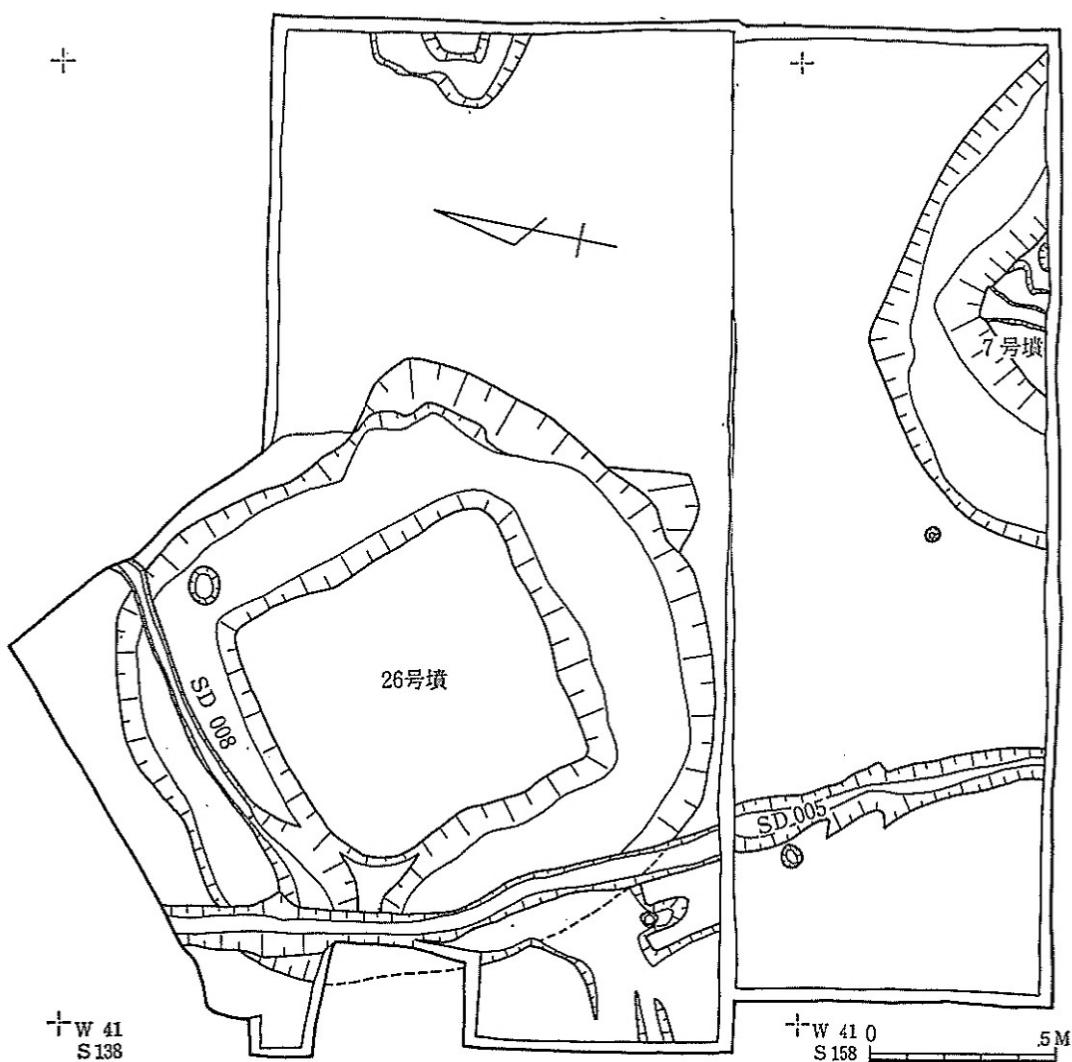
S D 007は、26トレンチ北端でS D 005から分かれて、N—29°—Eの方向で47トレンチをまっすぐ走っている。最大幅0.8m、深さ0.3mを計った。

S D 008は、48トレンチからのびてきて、5号墳周溝内に入り平行して走る。最大幅0.7、深さ0.12mを計った。轍状の遺構は8条分検出された。その間隔は1.5m、幅0.1m、深さ0.05mを計った。轍の方向は、大別してやや西に傾きをもつ4条と、やや東に傾きを持つ4条とに区分が可能であろう。（尾谷）

No.48・5 トレンチ

26号墳とその西北周溝内を掘り込んだ2条の溝（SD005・SD008）を検出した。26号墳は、一辺7.9m×7.1m、高さ0.3mで、主軸はN-55°-Eを示す。四周には幅3.5m、深さ0.2mの溝をめぐらす方形墳である。ただし、北西隅の周溝を掘り残しており陸橋部のような状態を呈している。南裾部と北裾部付近から須恵器等を多く出土したが、埴輪はきわめて少ない。

SD005は26号墳の西周溝部を北流する溝である。幅は1.5m、深0.6mを計るが、この溝から北東に分岐する1支流がある。SD008で幅0.5m、深さ0.2mの小さい溝である。埋土はSD005がブロック状の地山を含む青黒色粘土層が堆積し、SD008には黒色粘土層が堆積していた。（今村）



第13図 No.48(左)・5(右)トレンチ遺構実測図

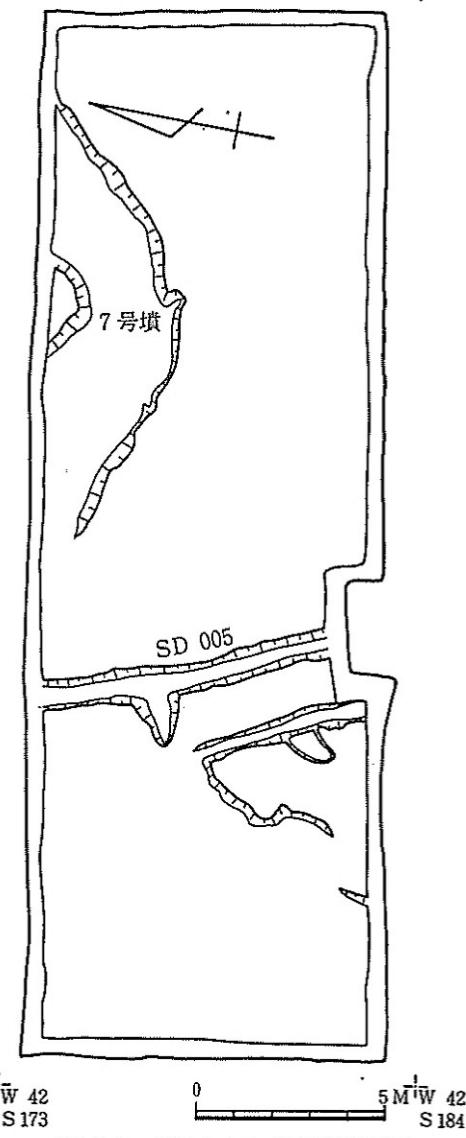
No.49 トレンチ

当トレンチで検出された遺構は、方墳（7号墳）と溝1条である。

5トレンチ調査の際に、トレンチ東南部で方墳のコーナーを検出し、7号墳としていたが、規模、主体部等については明らかにし得なかった。第3次調査では49トレンチを4・5トレンチの間に設定・調査することになり、掘り進めた結果トレンチ北東部で7号墳のもう一つのコーナーを検出することができた。この結果、7号墳の規模・主軸方向は、 $9.8m \times 9.0m$ 、N— 37° —Eであることが判明した。長原遺跡で調査された方墳の中では比較的大きい部類に入る。ただし、5トレンチ、当トレンチとともに一部分を検出したにとどまり、主体部については明らかにできなかった。しかし、墳丘の残存状態が悪く、墳丘中央部を調査しても、主体部の検出は期待できないように思われる。

遺物はあまりなく、円筒埴輪、須恵器壺蓋、同じく筒型器台片が少量出土したにすぎない。円筒埴輪はBⅠ、BⅡa型式（後述）に属する。出土遺物から5世紀後半代の年代が考えられる。

溝は南北方向に走り、南は4トレンチ、北は5・48・6・47トレンチへと続くものである。各トレンチで断面の形状は違うが、当トレンチではU字型である。遺物の出土はなかった。（舟山）



第14図 No.49 トレンチ遺構実測図

No.4・17・18・57・58トレンチ

8号墳は南北軸がN—19°—Eを指し、周溝を有する方墳である。墳丘は0.2～0.3mのこっており、墳丘上端で東西10.2m、南北8.75m、下端で東西11.7m、南北10.0mを計る。周溝は幅3.0m、深さ0.2mを計る。周溝内の西北隅に長さ2.0m、幅1.3m、深さ0.15mの落込みが認められる。埋葬主体は確認されなかった。遺物は円筒埴輪（第86図—40～42）と須恵器杯身（第89図—115）だけである。円筒埴輪は長原遺跡におけるBⅠ型式に当たるものであり、杯身は最古型式に当たるものである。

12号墳は南北軸がN—51°—Eを指す周溝を有する方墳である。墳丘は全く削平されており、周溝を検出したことによって古墳と確認されたものである。規模は東西6.6m・南北6.8m、周溝幅1.8～3.0m、深さ0.1～0.3mを計る。埋葬主体は確認されなかった。遺物は東周溝内から出土した須恵器壺と土師器甕（第90図—138・139）の2点のみである。

S L002は塚ノ本古墳周濠の外堤に位置する埴輪円筒棺で、長さ1.2m、深さ0.3mの墓壙に直径0.4m、長さ0.65mの円筒埴輪を使用している。円筒埴輪はA型式に当たるものである。S D023により約%を削り取られている。

S D023は幅1.0m、深さ0.3mを計り、17北トレンチを南から東に斜断する溝である。S L002を切っていることから、S L002よりも若干新らしい時期の溝である。

S D005は幅1.0～1.4m、深さ0.3mで南北に横断する溝である。

17北トレンチの西端で浅い落込みが検出されていたが、8号墳の周溝の一部であることが確認されたことにより、17北トレンチ東北隅の落込みも古墳の周溝である可能性もある。これは以前に大阪市の調査で検出された長原4号墳かとも考えられる。（藤沢）

表4 古墳一覧表(2)

古墳番号	墳丘形態	規 模	方 位	出 土 遺 物	備 考
17号墳	方墳 周溝なし		N45°E	Ⓐ 円筒	
18号墳	方墳 周溝あり	× 3.7	N14°E	Ⓐ 円筒 Ⓑ 瓢	中央に東西向 きの主体部?
19号墳	方墳 周溝あり	6.0 × 5.5	N23°E		
20号墳	方墳 周溝なし		N87°E		
21号墳	方墳 周溝あり	× 6.0	N19°E		
22号墳	方墳 周溝あり	6.0 × 6.0	N15°E		
23号墳	方墳 周溝あり	× 5.5	N31°E		
24号墳	方墳 周溝あり	5.0 × 4.5	N21°E	Ⓐ 円筒	
25号墳	方墳 周溝なし	× 5.5	N62°E	Ⓐ 円筒	墳丘のこり よく円筒埴輪 が立っていた。
26号墳	西北隅に陸橋部 を有する方墳、 周溝あり	7.8 × 7.2	N55°E	Ⓐ 朝顔、④ 杯 Ⓑ 杯、甕、高杯、壺	
27号墳	方墳 周溝あり	7.0 × 7.0	N23°E	Ⓐ 円筒 Ⓑ 杯、筒形器台、高杯形器台	
N— 1号墳	方墳 周溝あり	× 5.8			
N— 2号墳	方墳 周溝あり	×(12)	N15°E		
N— 3号墳	方墳 周溝あり	8.7 × 4.2	N34°E		
N— 4号墳	方墳 周溝あり	8.3 × 8.7	N35°E		
N— 6号墳	方墳 周溝あり	5.6 × 5.6	N22°E		

註 規模は東西×南北、() 数字は推測

方位は、南辺、北辺の中央を通る線を主軸と決め、これをN—○°—Eで表わした。

出土遺物のⒶは埴輪

Ⓐは須恵器

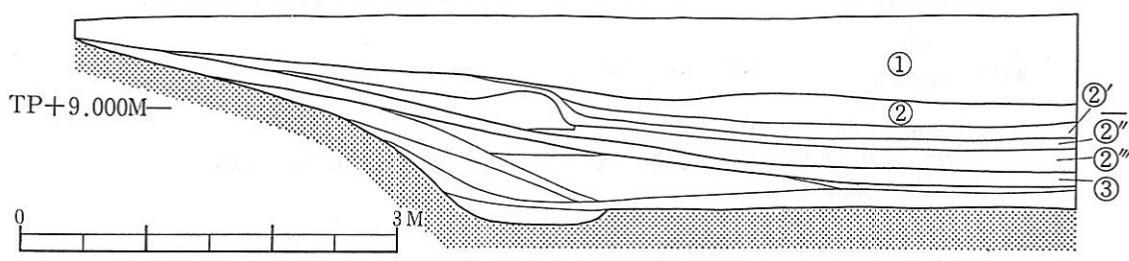
Ⓑは土師器

古墳番号N—○号墳は長原遺跡調査会の調査分

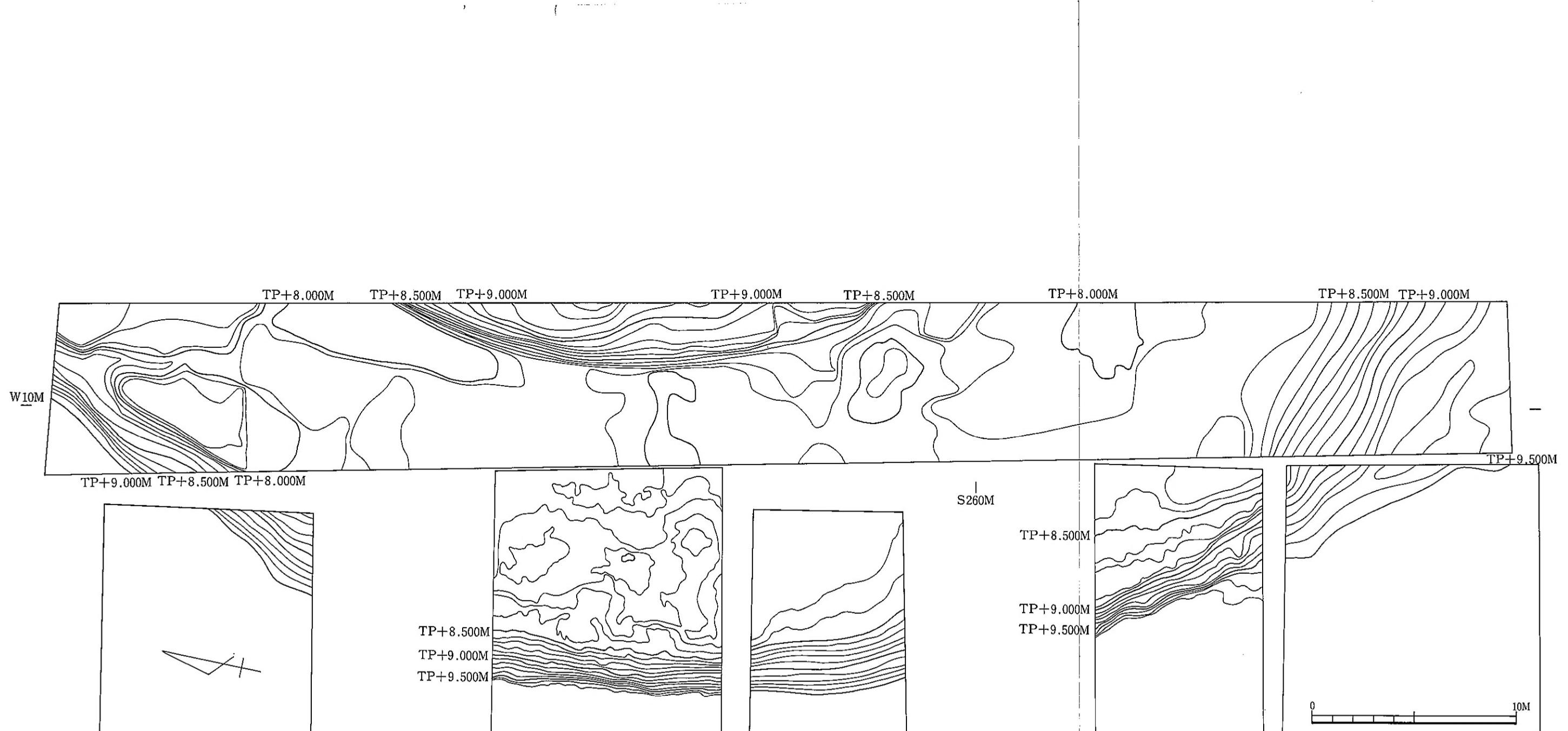
2. 古墳群の状況

長原遺跡の古墳については表4の通りであるが、若干の説明を加えておこう。塚ノ本古墳の調査はそのほとんどが周濠内であり、墳丘は裾の一部を確認しただけである。推定後円部径は約55m、周濠幅が16~23mを計り、全長は100mを越す大形の古墳である。前方部は東に向いているのは確かであるが、実際にどの程度の振りが有るのかは明らかにしえない。ただ周濠の幅に違いがあり、その違いから考えた場合、東向きよりもむしろ東南向きと考えられる。時期的にはA類の埴輪を持っており、5世紀の前半と考えられる。長原遺跡では、A類は他に円筒埴輪棺しかなく細分されていないのであるが、塚ノ本古墳の埴輪はA類でも割合新らしいと考えられる。周濠はその堆積状態から築造当初は空堀のまま使用されていたと考えられる。空堀状態の期間は明確にはしれないが、割合長期間であったのであろう。それは濠内に堆積している黒色粘土層下が大まかに7層に分けられるが、細かく分けると砂と粘土の薄層が交互に堆積していて、この薄層を砂と粘土を一単位として数えると65単位確認できた。この一単位の堆積が一雨降る毎に堆積したものとすると、65回以上の降雨により薄層が堆積していた期間は周濠が空堀であったと考えられる。その後に周濠が水を貯えるようになったのであろう。しかし、古墳の周濠が空堀のままで役目を果していたかどうかは明らかにしえない。

11号墳は塚ノ本古墳とは逆に前方部だけを検出した。前方部幅13.0m、周濠を含めると22.0m、検出した前方部長は15m、周濠を含めると16.5mを計る。全長は4.50mと考えられる。周濠は前方部横で幅4.8~6.0m、深さ0.8mを計るが正面では幅1.5m、深さ0.6mとやや貧弱になっている。遺物は非常に少ないが、埴輪の小破片を数点検出した。小破片ではBⅡb類と考えられる。

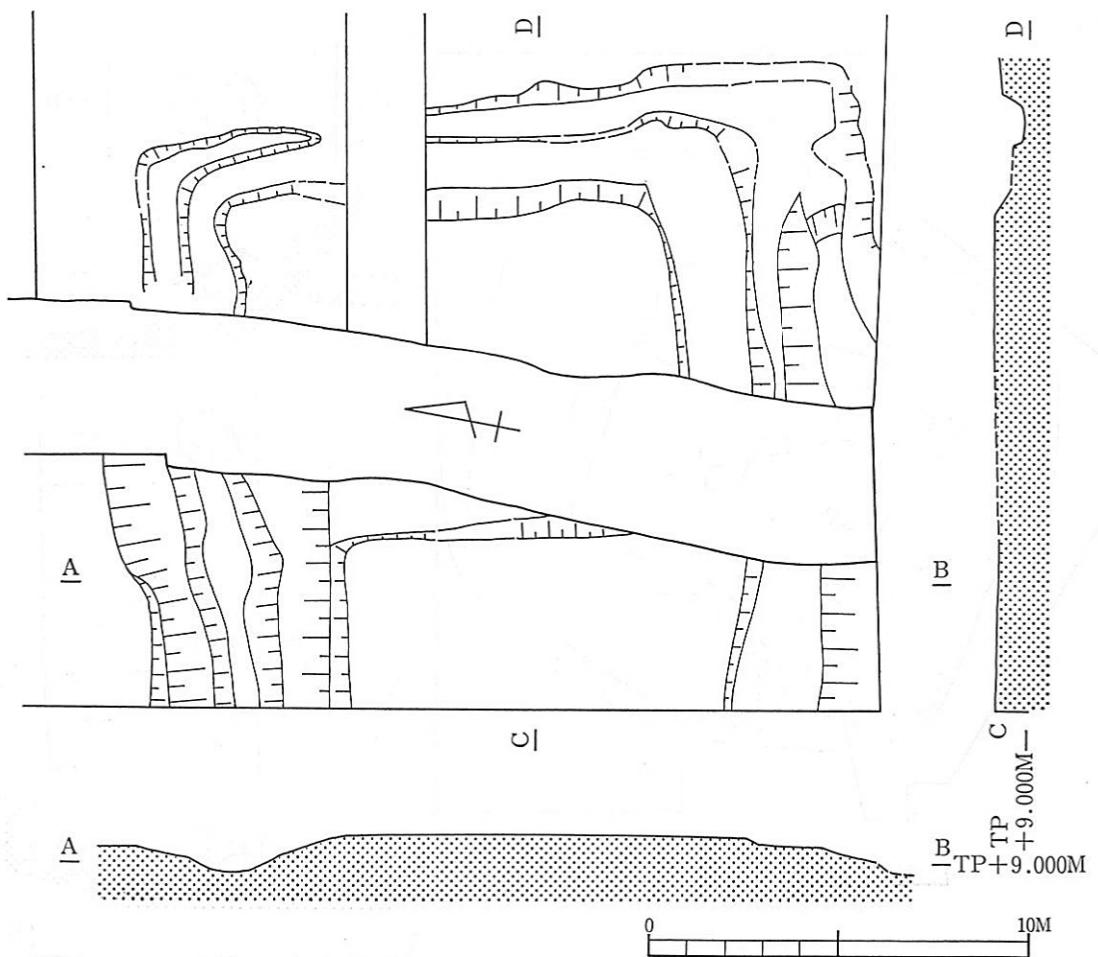


第74図 塚ノ本古墳周濠断面図



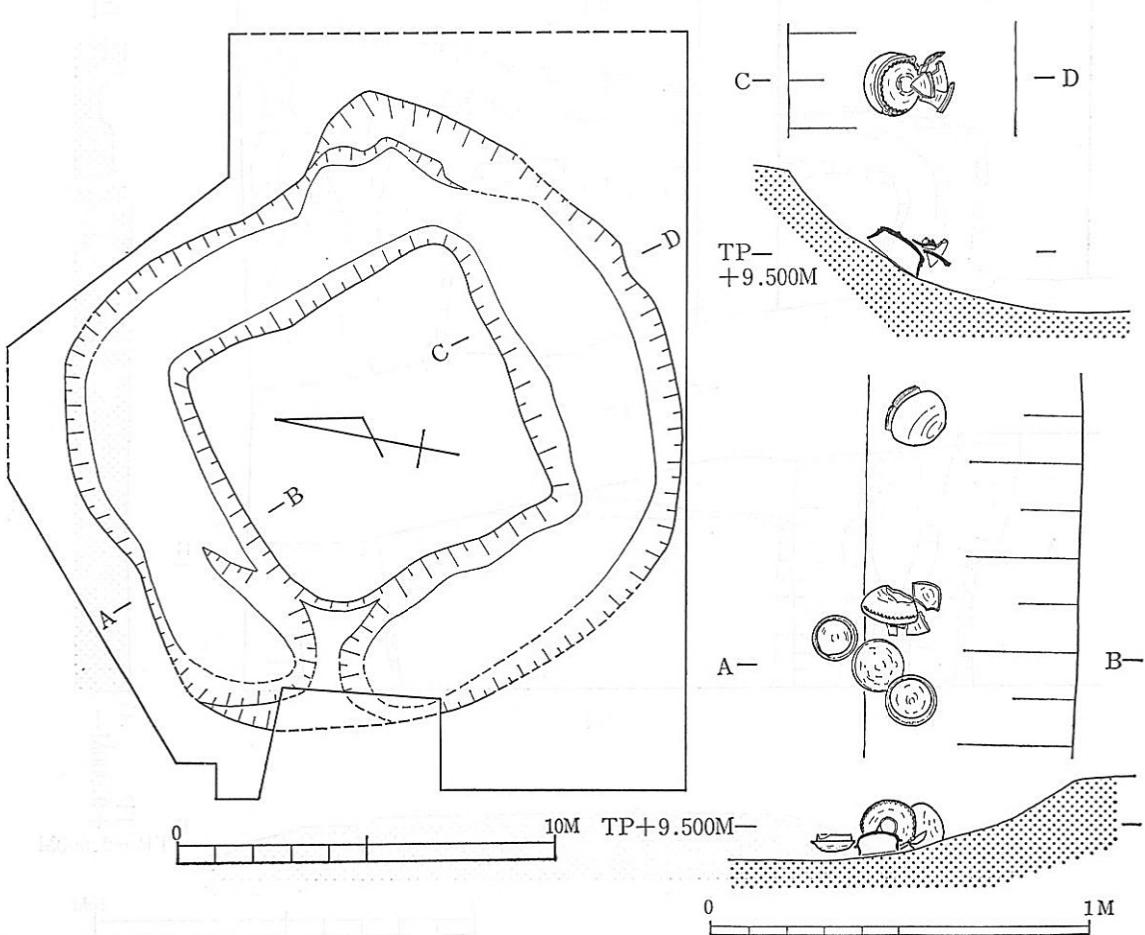
第75図 塚ノ本古墳測量図

埋葬主体については検出した古墳のほとんどが後世に削平を受けており、明確な埋葬主体の遺存していたものはなかった。ただ1基18号墳だけに墳丘中央で墳丘の東西軸と同方向の掘込みを認めた。これは長さ1.75m、幅0.75m、深さ0.25mを計る長楕円形を呈し、船底状に掘込まれている。中からは全く何も検出しなかったのであるが、位置、方向、大きさから埋葬主体と考えられる。この掘込みは木棺等を使用したとは考え難く、土壙墓と考えられる。このように古墳の主体部としての土壙墓と、21トレンチで検出した2号土壙墓との関係も古墳そのものの在り方を明らかにするためには不可欠の要素となってくる。18号墳は南北3.7m、東西は不明であり、水田使用時期にはすでに耕土下に埋ってしまうような古墳である。



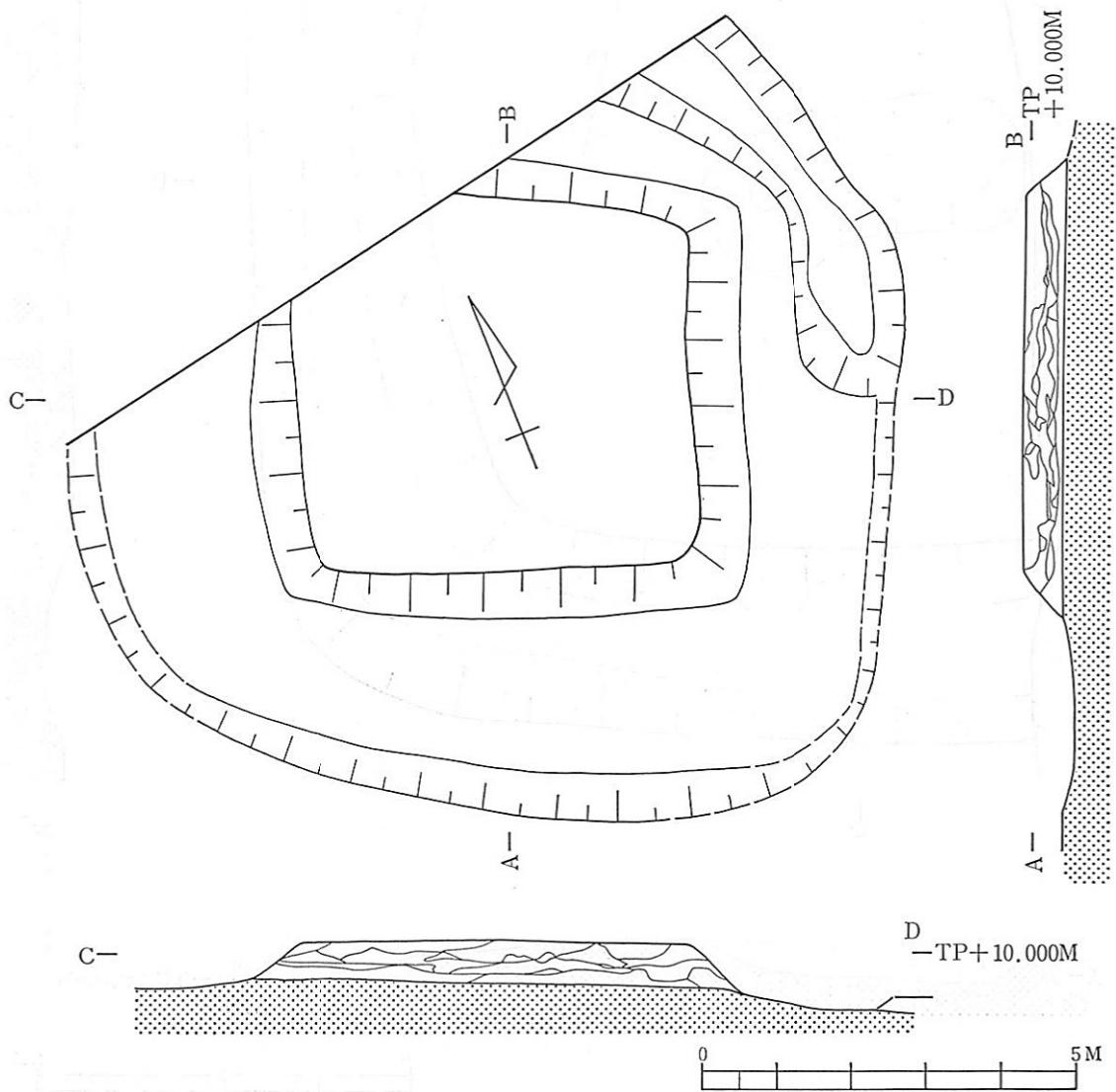
第76図 11号墳平面実測図

古墳の築造時期を決定するのは古墳に伴なう遺物であり、埴輪、須恵器、土師器等を検出した。埴輪は古墳から検出される遺物の中でも最も古墳の築造と密接な関係を有しており、築造順序を決める基本となる。しかし、墳丘上に元位置を保って検出されたのは25号墳だけであり、他はすべて周溝内から破片として取り上げられたものである。これは他の遺物も同じことで元位置を保っていたと考えられるものはほとんどない。ただ、12・13・26号墳等の数基ではある程度まとまった形で周溝内から検出された。10・11号墳では墳丘上で遺物を検出したが、元位置を保っていたとは考えがたい。遺物の検出状態はその古墳の遺存具合により、若干の違いがあるが、それは元位置を保つかどうかであり、遺物の器種や量にはそれ程大きな差ないと考えられる。

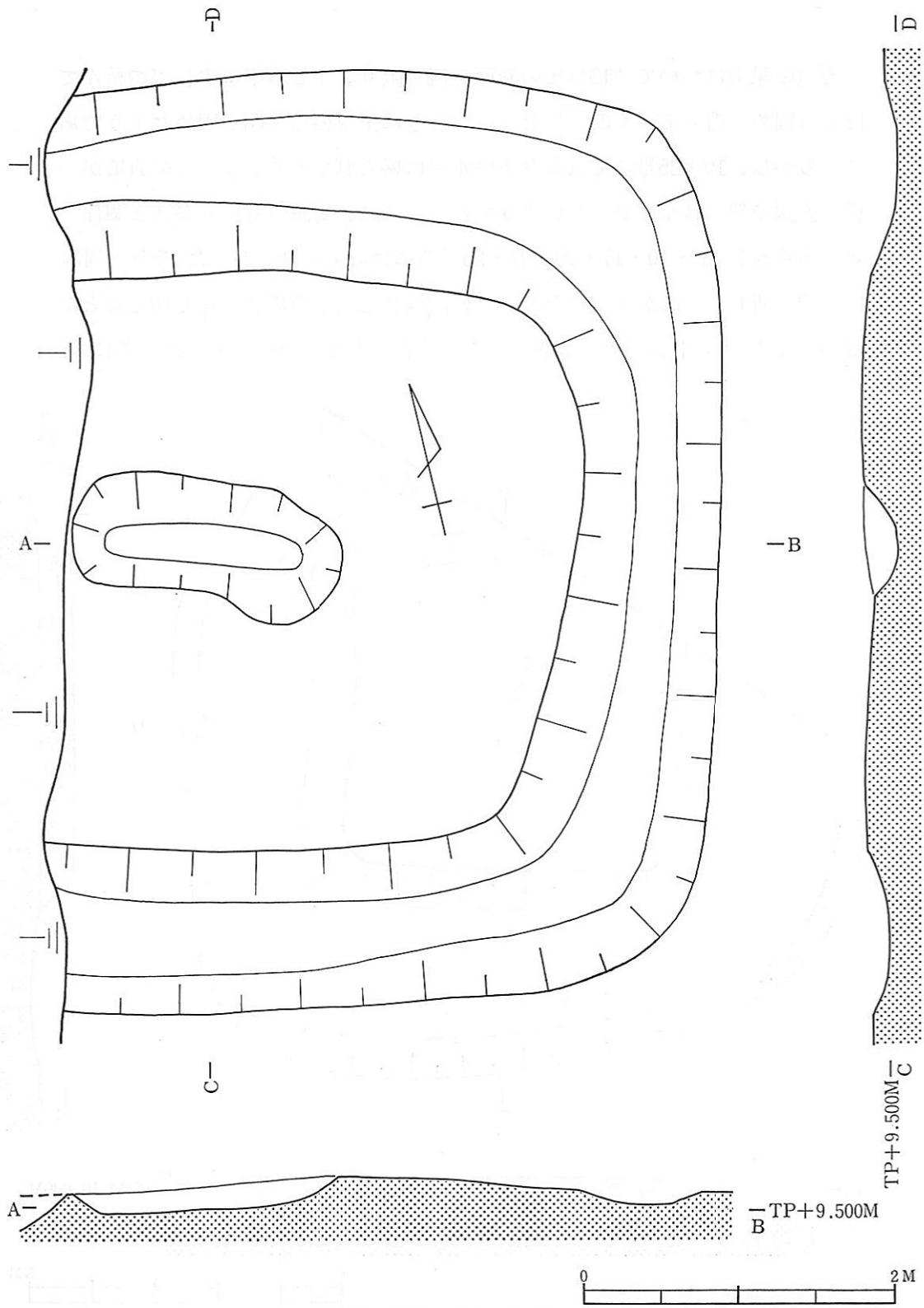


第77図 26号墳平面及び遺物出土状態実測図

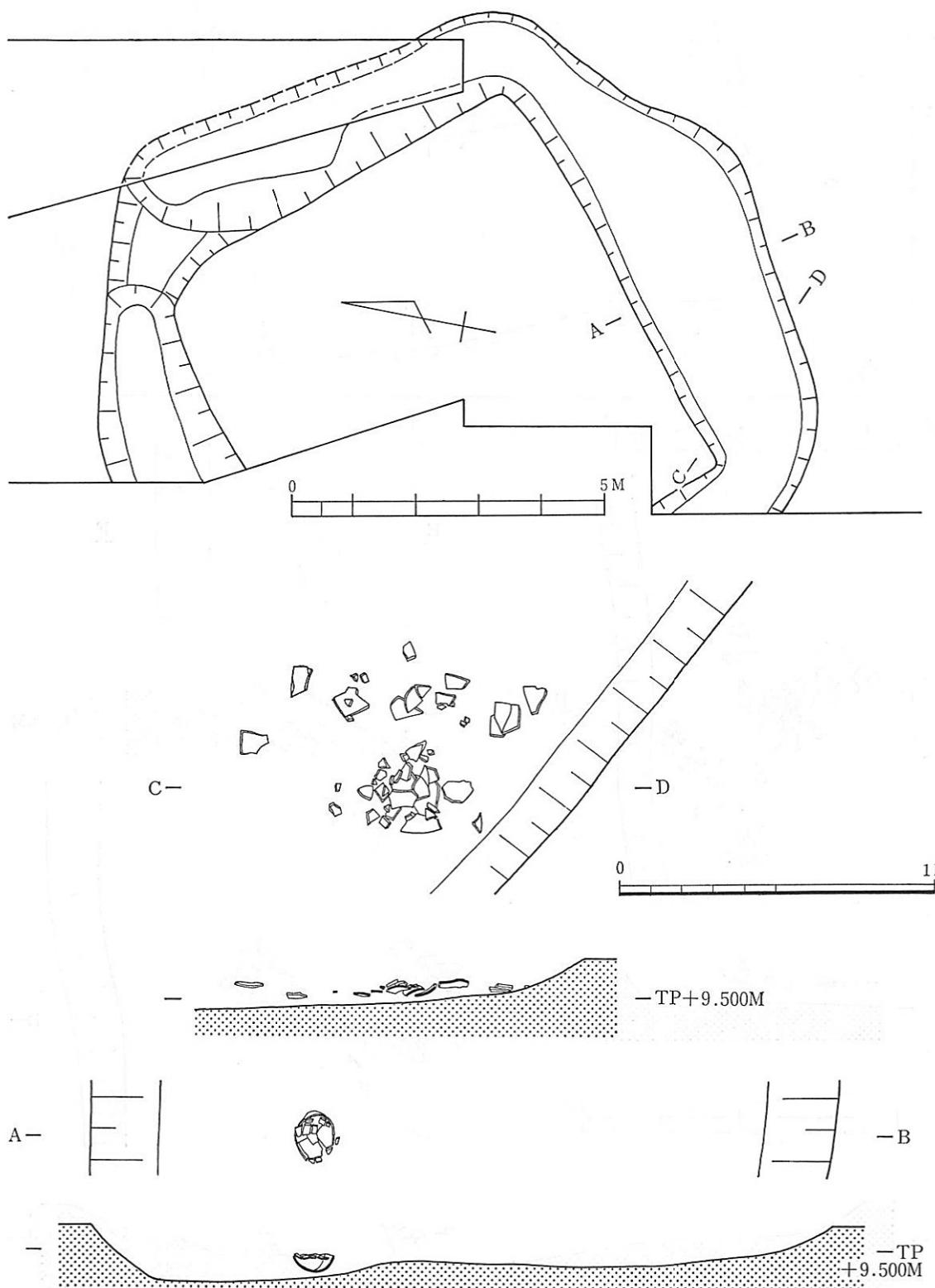
方墳の築造については19号墳の断面を観る限り、土を水平に少しづつ積んでは叩き固めて造っていくのではなく、いっきに土を盛って叩き固めたようである。しかし、10・25号墳ではわりあい水平に盛られており、すべての方墳が一様の方法で造られたのではないようである。また、周溝の有無も築造と関係するであろうが、1・10・17・20・21・25号墳には認められなかった。それと周溝内を若干新らしい溝が走っており、この溝はほとんどの場合墳丘を切ることはないのである。これは方墳の周溝があまり重視されていなかったためと考えられる。



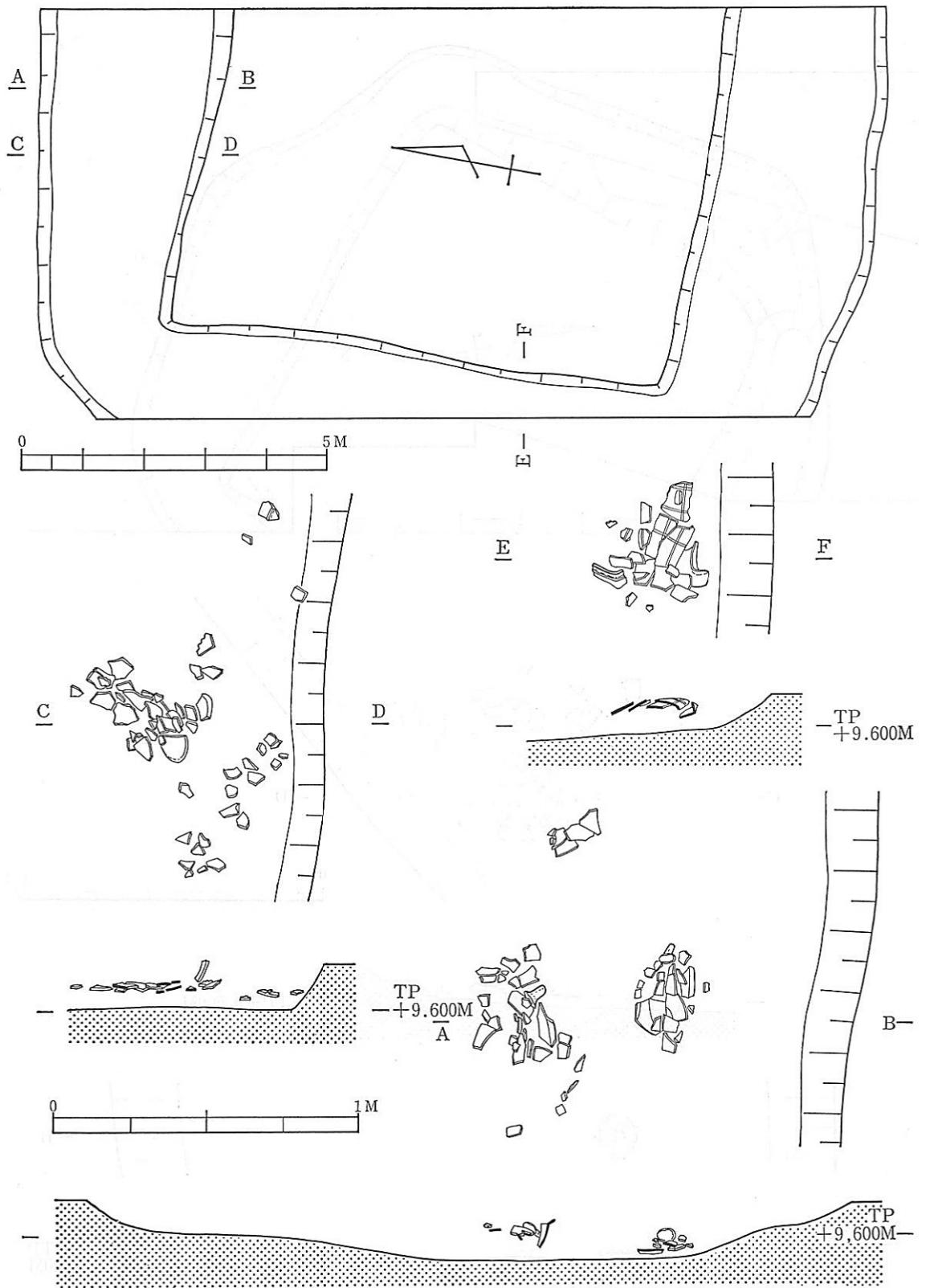
第78図 19号墳平面及び墳丘断面実測図



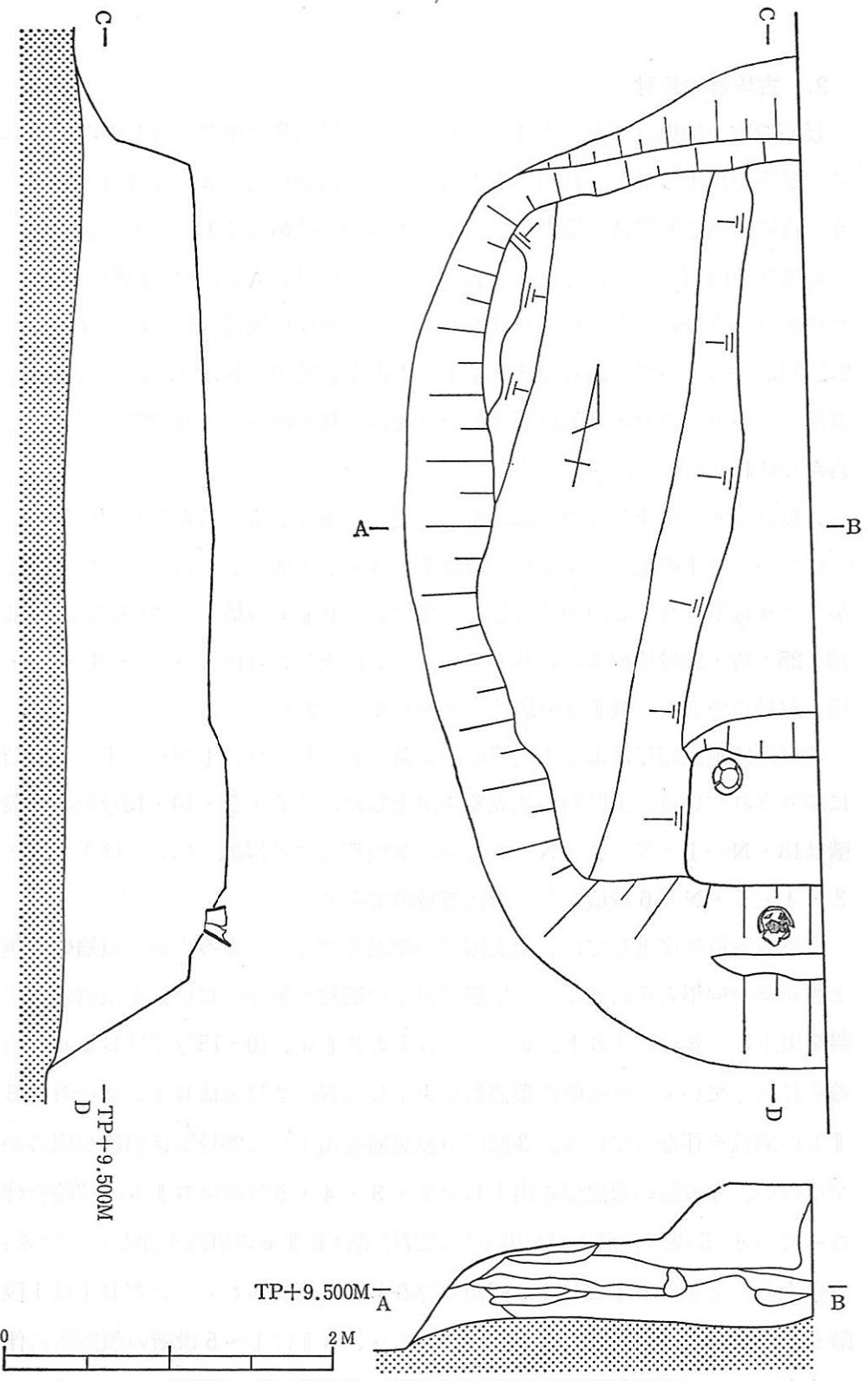
第79図 18号墳平面実測図



第80図 12号墳平面及び遺物出土状態実測図



第81図 13号墳平面及び遺物出土状態実測図



第82図 25号墳平面・墳丘断面及び遺物出土状態実測図

3. 古墳群の検討

長原遺跡で検出された古墳は出土遺物から5世紀代に築造されたと考えられる。遺物を出土しなかった古墳もあるが、築造時期には大きな差はないであろう。古墳の築造順序は埴輪と須恵器からある程度決めることができる。

埴輪は土師質、須恵質で大きくA、Bに分類され、A類は出土点数が少ないため細分は今後の調査を待たねばならないが、B類は細分されている（第V章2.円筒埴輪について）。A類はB類よりも古く、我国に於ける須恵器生産開始以前のものであるために須恵器は伴なわない。B類の細分は須恵器と対比して考えなければならないであろう。

A類の埴輪を出土したのは塚ノ本古墳だけであり、もちろん須恵器は伴なっていない。BⅠの埴輪を出土したのは7・8・9・N-2・N-4号墳であるが7・9号墳はBⅡaの埴輪も伴なっている。BⅡaの埴輪を出土したのは10・25・17・25号墳である。BⅡbの埴輪を出土したのは2・3・4・5・18・24号墳である。BⅡcの埴輪を出土したのは27号墳である。

須恵器は陶邑編年によるI型式の中に含まれてしまう。I型式は1～5段階に細分されている。1段階の須恵器を出土したのは8・9・10・15号墳、2段階は18・N-1・N-2・N-3号墳、3段階は26号墳、4段階は1・2・3・4・5・N-6号墳、5段階は27号墳である。

古墳の築造順序としては、須恵器の編年通りでよいであろうが、埴輪の分類と須恵器の編年とを対比して長原遺跡出土の埴輪を編年したい。1段階の須恵器を出土した8号墳はBⅠ、9号墳はBⅠとBⅡa、10・15号墳はBⅡaの埴輪を伴なっている。2段階の須恵器を出土したN-2号墳はBⅠ、18号墳はBⅡbの埴輪を伴なっている。3段階の須恵器を出土した26号墳は埴輪が明らかではない。4段階の須恵器を出土した2・3・4・5号墳はBⅡbの埴輪を伴なっている。5段階の須恵器を出土した27号墳はBⅡcの埴輪を伴なっている。

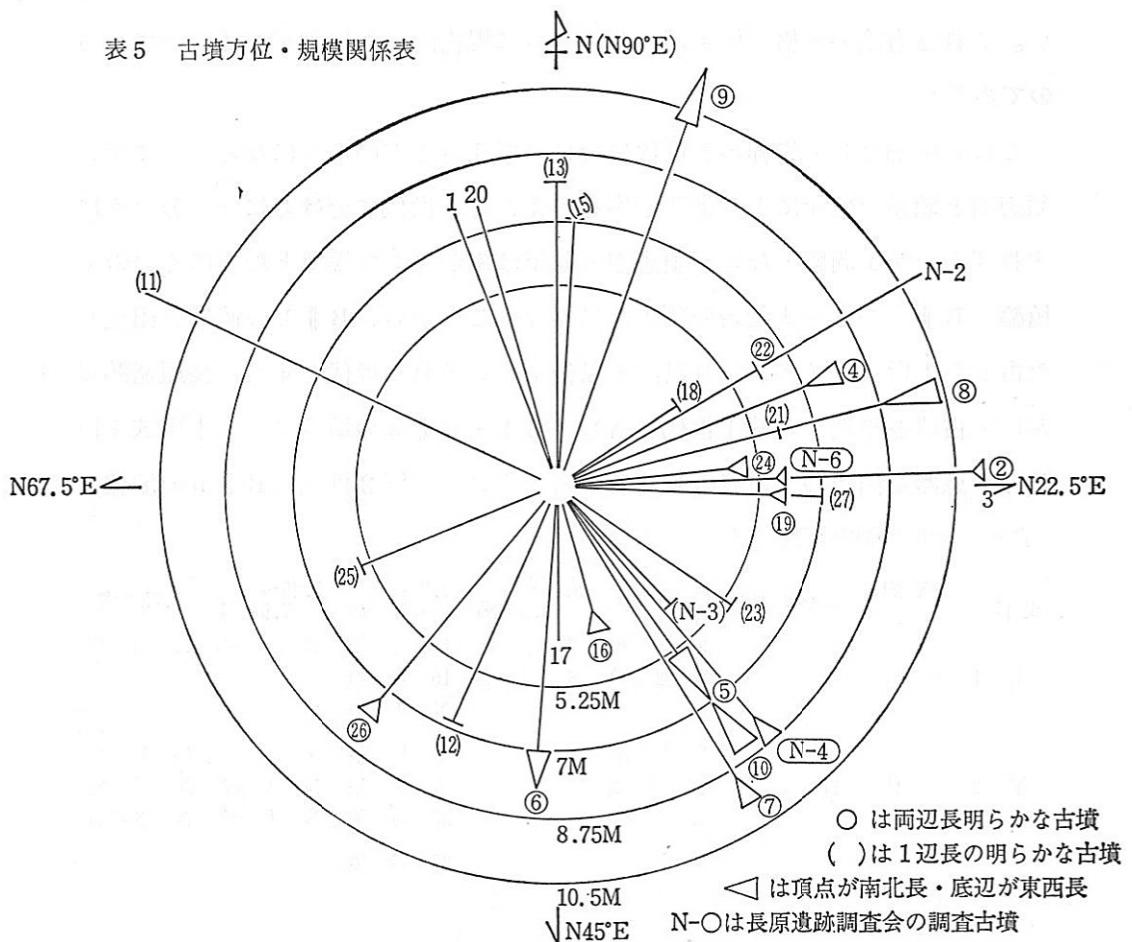
以上のことからBⅠとBⅡは同時に存在したと考えられる。ただBⅠは1段階と2段階初めの須恵器に伴なうものであり、BⅡは1～5段階の須恵器に伴なうものである。BⅡaが1段階の須恵器に、BⅡbが2～4段階の須恵器

に、B II c が 5 段階の須恵器に伴なう。

I 型式の須恵器は 5 世紀後半に当たられており、約半世紀間を有するのであるが、5 段階に分けられており平均 1 段階 10 年前後と考えられている。そのために従来の土器等の編年との間に大きな開きがあり、埴輪の分類とも 1 段階毎には明らかにしえない。しかし、約半世紀といえば 2 世代と若干その前後の世代を含む期間と考えられるであろう。

古墳の規模と方位を表にすると表 5 のようになる。方位では N—0°、N—20°—E、N—40°—E、N—50°—E を中心に分けられるが、N—40°—E と N—50°—E は明確には分けられない。大まかには 3 種類の方位に分けられるが規模や時期的な関係は全く見出されないようである。規模については 1 辺 5.25m

表 5 古墳方位・規模関係表



未満、5.25m～7.0m未満、7.0m～8.75m未満、8.75m～10.5m未満、10.5m以上の5種類に分けられる。ほとんどの古墳が正方形ではなくやや長方形であり、短辺5.4m・長辺6.9mの5号墳、短辺8.8m・長辺10.3mの8号墳、短辺7.0m・長辺8.5mの10号墳等それぞれの規模の最小と最大値の長方形の古墳があることからも5種類に分けられるのであろう。必らずしもこのようになっていいるわけではないが、短辺10.0m・長辺11.7mと推測される9号墳が2種類の大きさにかかっているだけである。9号墳の短辺10.0mはあくまでも推測であるため、ほとんどすべての古墳が5種類の規格内に収まとと考えられる。

また、形象埴輪を出土する方墳は、3・4・9・10・13号墳であるが、3・9号墳は10.5m以上、4・10・13号墳は7.0～8.75m未満の方墳である。それぞれの規模の規格内に必ず在るというわけでもなく、2種類の中にしかない。これは方墳の規格に優劣があり、さらに規格内でも優劣があることによるのであろう。

これらを総合して先程の2世代に分けて考えるとどのようになるか。まず、須恵器と埴輪の編年により築造順序を考えたが、世代に分けるにはどうにすればよいかが問題となる。須恵器の編年は細かすぎて規準となりにくいので埴輪のBⅡbが2～4段階の須恵器に伴なうことから、BⅡbの埴輪を出土した古墳を1世代と考え、それ以前と以後をそれぞれ1世代とする。長原遺跡において古墳を築造した第1世代はA類・BⅠ・BⅡaの埴輪またはI型式1段階の須恵器を出土した古墳の被葬者と考えられる。第2世代はBⅡbの埴輪まで

表6 各世代の規模別古墳表

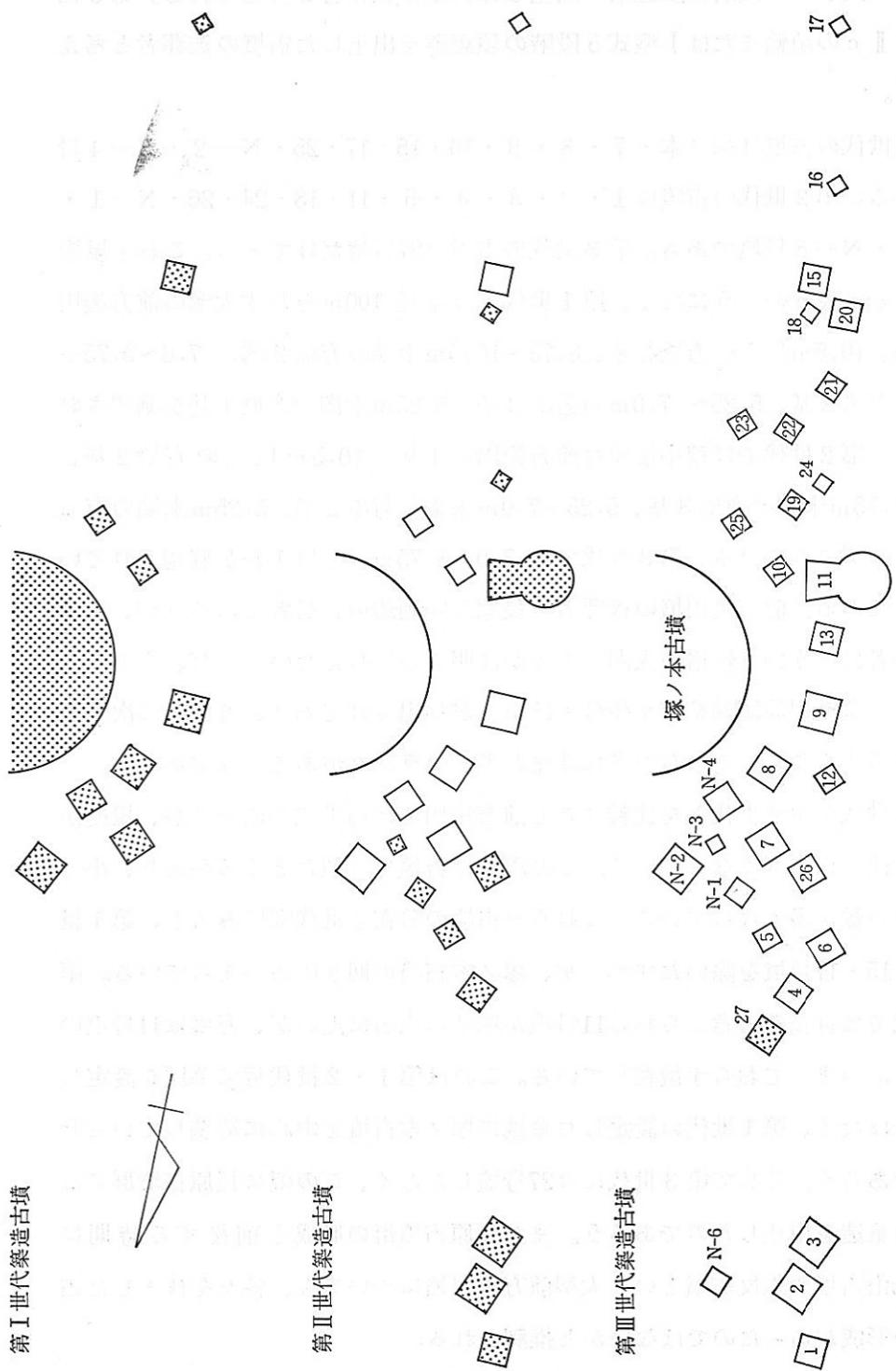
世代\古墳規模	前方後円墳	10.5m以上	8.74～10.5未満	7.0～8.75未満	5.25～7.0未満	5.25未満
第1世代	塚ノ本	9号墳 N-2号墳	7号墳 8号墳	10号墳 15号墳 N-4号墳	25号墳	17号墳
第2世代	11号墳	2号墳 3号墳		1号墳 4号墳 26号墳	5号墳 N-1号墳 N-6号墳	18号墳 24号墳 N-3号墳
第3世代				27号墳		

たはⅠ型式2～4段階の須恵器を出土した古墳の被葬者と考えられる。第3世代はBⅡcの埴輪またはⅠ型式5段階の須恵器を出土した古墳の被葬者と考えられる。

第1世代の古墳は塚ノ本・7・8・9・10・15・17・25・N-2・N-4号墳である。第2世代の古墳は1・2・3・4・5・11・18・24・26・N-1・N-3・N-6号墳である。第3世代の古墳は27号墳だけである。これを規模別にすると表6のようになる。第1世代では全長100mを越す大形の前方後円墳1基、10.5m以上の方墳2基、8.75～10.5m未満の方墳2基、7.0～8.75m未満の方墳2基、5.25～7.0mの方墳2基、5.25m未満の方墳1基が確認されている。第2世代では稍小規模な前方後円墳1基、10.5m以上の方墳2基、7.0～8.75m未満の方墳3基、5.25～7.0m未満の方墳2基、5.25m未満の方墳3基が確認されている。第3世代では7.0～8.75mの方墳1基が確認されているだけである。前方後円墳の被葬者は長原遺跡周辺の首長者であろうが、方墳の被葬者はどういう性格の人間であるかは明らかにしない。ただ、方墳以外にも土壙墓や円筒埴輪棺墓が少数ではあるが検出されており、首長者に次ぐ有力者と考えられる。この有力者にはまた多くのランクがあるようである。

第1世代と第2世代とを比較すると前方後円墳は両世代共にあるが、規模が第2世代では小さくなっている。この現象は方墳にも似たところがあり、小さな方墳の数が多くなっている。これらの古墳の分布を世代別にみると、第1世代では15・17号墳を除いたすべてが、塚ノ本古墳の回りにあつまっている。第2世代では首長墓と考えられる11号墳が塚ノ本古墳に近いが、方墳は11号墳の回りにあつまっておらず散在している。これは第1・2世代毎に墓域を設定したのではなく、第1世代の設定した墓域に塚ノ本古墳を中心に造墓していったためであろう。そして第3世代には27号墳しかなく、この頃に長原古墳群では古墳の築造を中止したのであろう。また長原古墳群の形成と前後する時期には、城山古墳や六反古墳という大型前方後円墳についても、各々を核とした古墳群の形成があったのではないかと推測される。

第一世代築造古墳



第83図 古 墓 分 布 図

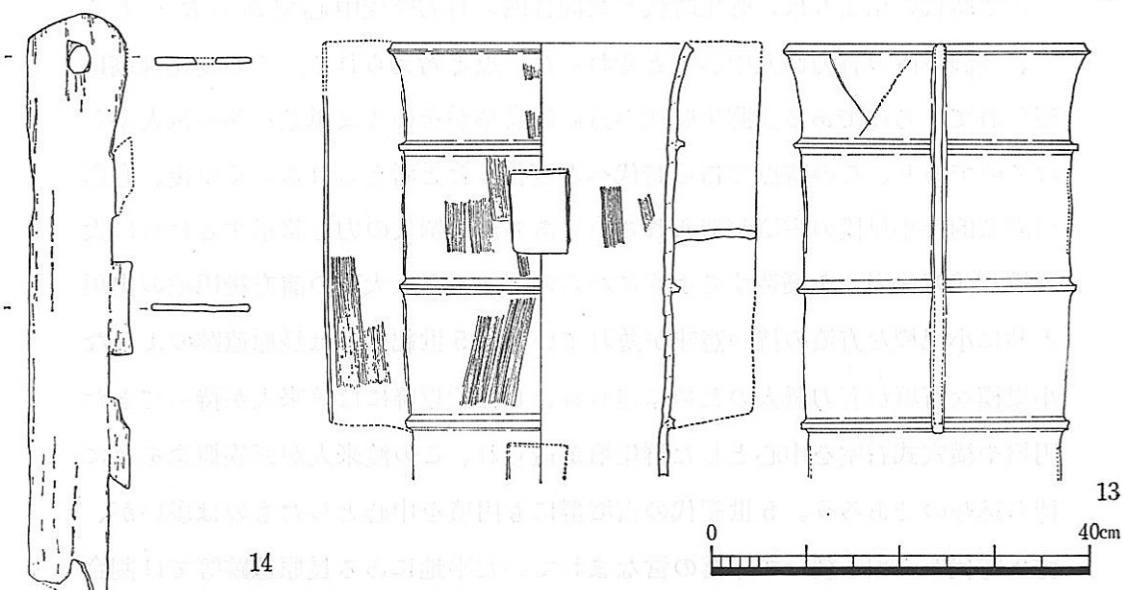
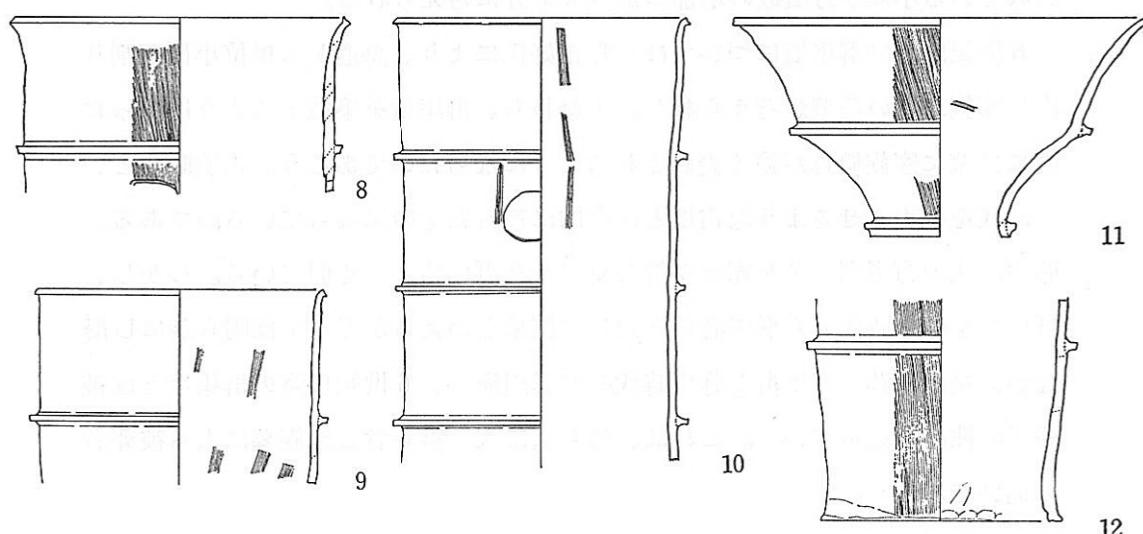
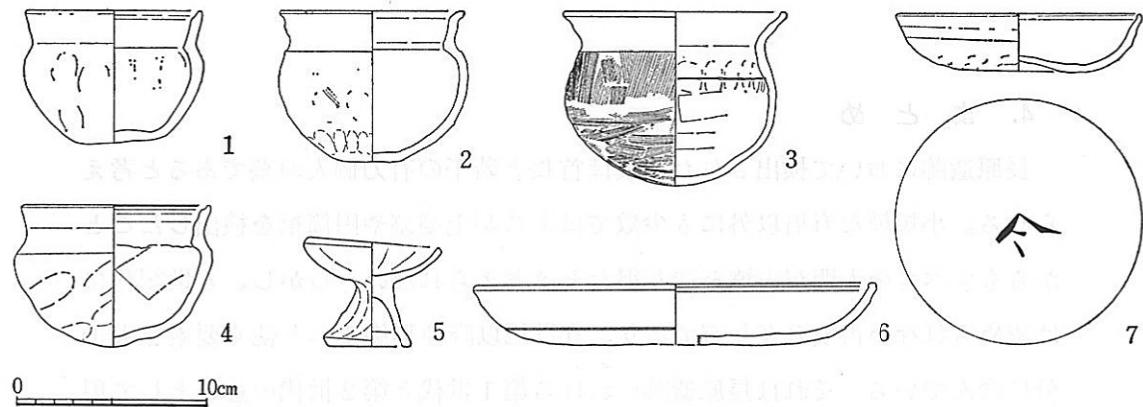
- 遺物の明らかな古墳のみを各世代ごとに分けた。
- 遺物の明らかな古墳は第III世代に全体の分布が明らかとなるように入った。
- N-1～N-6は長原遺跡調査会によって調査された古墳である。

4. まとめ

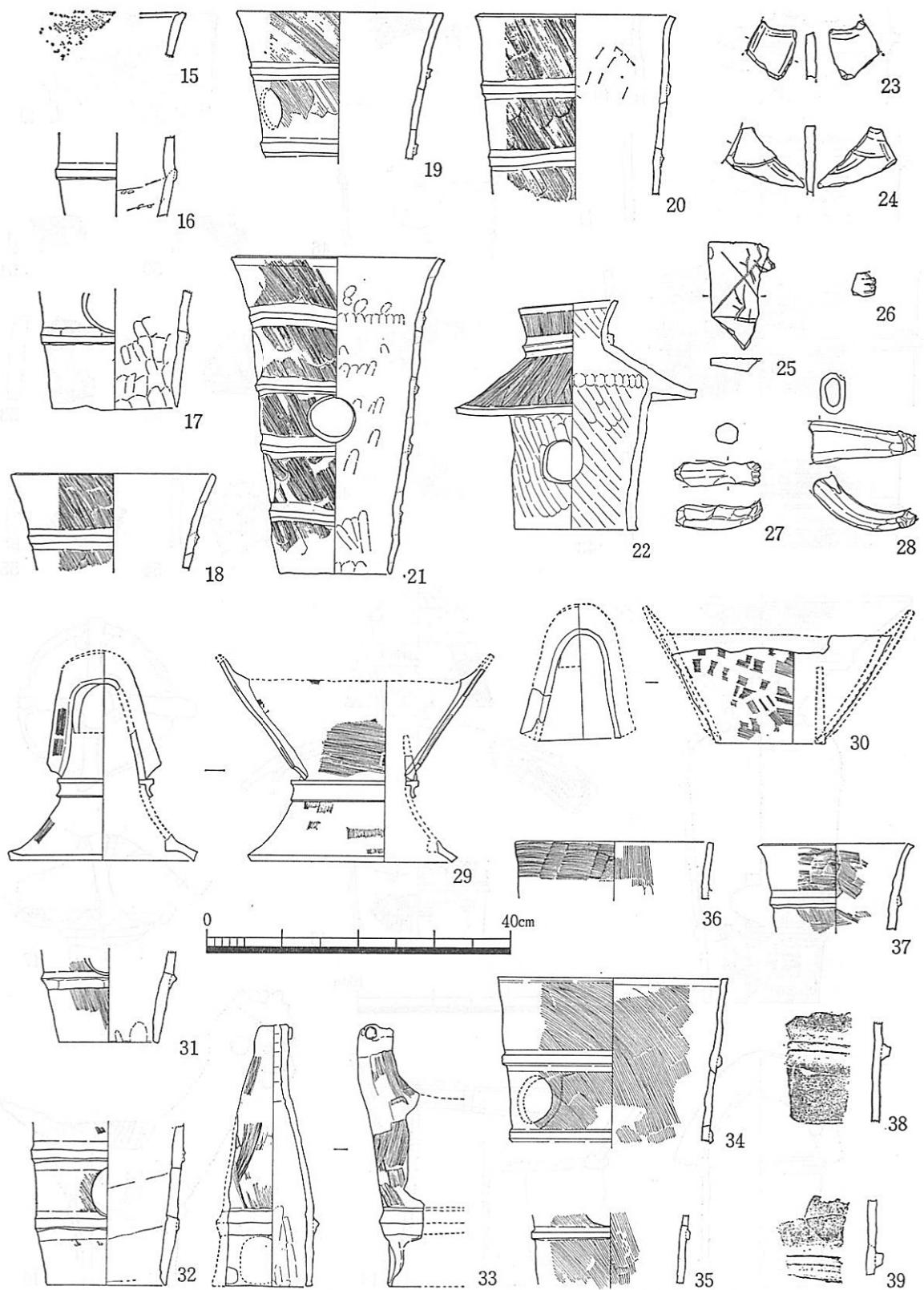
長原遺跡において検出された古墳は首長と若干の有力個人の墓であると考えられる。小規模な方墳以外にも少数ではあるが土壙墓や円筒棺を検出したことからもすべての人間が古墳を造り得たとは考えられない。しかし、4世紀代には認められない古墳の在り方であり、6世紀以降の群集墳へと続く要素をも十分に含んでいる。それは長原遺跡における第1世代と第2世代の違いとして現われている小規模方墳数の増加等からも十分に考えられる。

6世紀以降の群集墳については水野正好氏により、墓道から単位小群を割り出し家族単位の造墓が考えられた。すなわち、群集墳を築造するようになった頃には墓に家族概念が強く表わされるようになったのであろう。古墳時代という時代を代表させるような古墳とは質的に違ったものになっているのである。弥生時代の方形周溝墓が家族墓的な墓であり群集墳とよく似ている。しかし、群集墳を弥生時代の方形周溝墓と同じ家族墓といえるかどうかは明らかにし得ない。長原遺跡の方墳群と弥生時代の方形周溝墓、6世紀以降の群集墳とは被葬者の性格が違っている。これは、個人墓に入る被葬者と家族墓に入る被葬者の違いであろう。

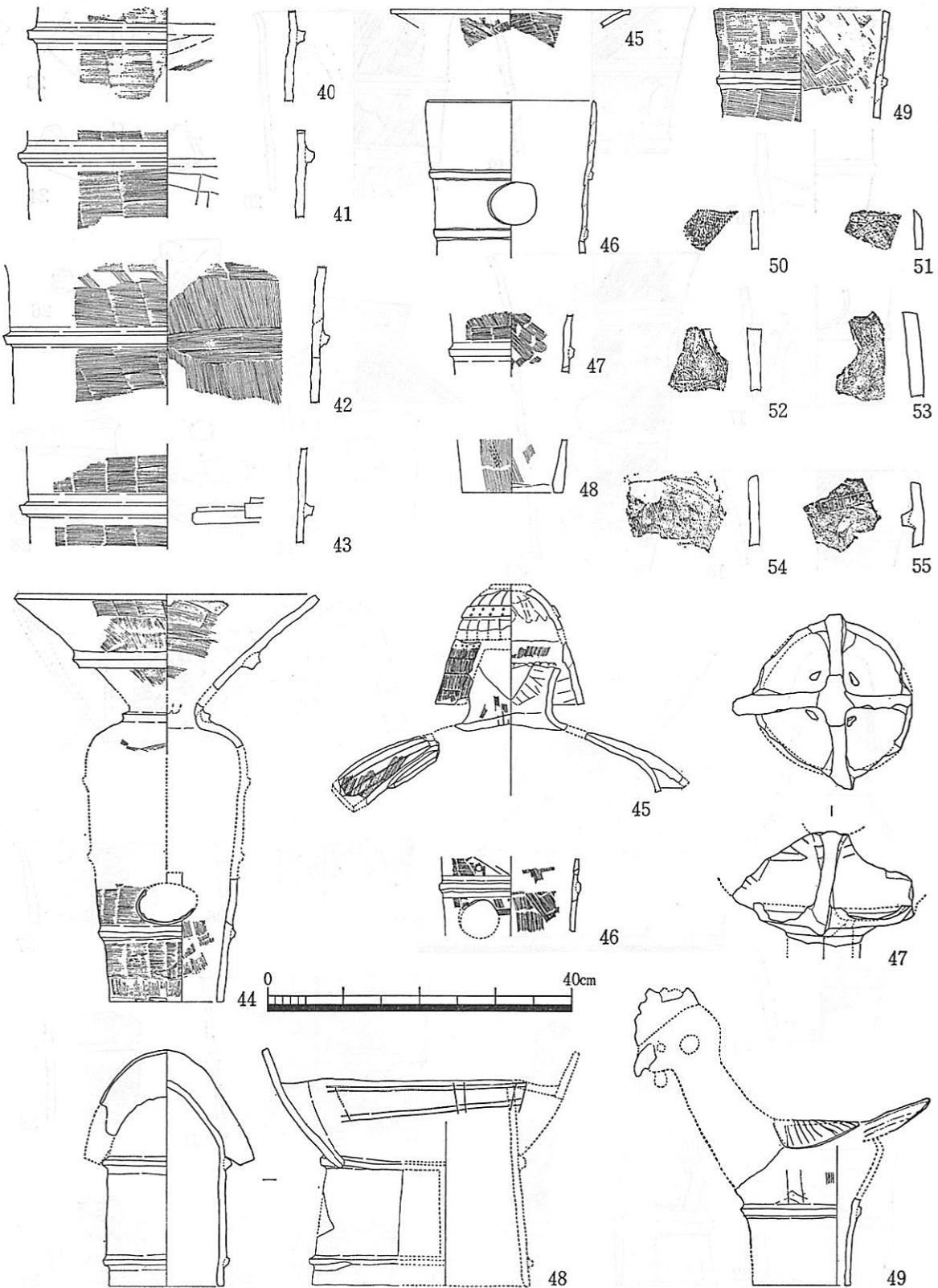
古墳時代の始まりは、弥生時代が共同体内の有力家族中心であったとする、共同体内の有力個人中心へと変わった時点と考えられる。その変化は墓に現われてくるのである。弥生時代の方形周溝墓がそのまま単数理葬の個人墓となるのであり、この時点で古墳時代へと変化したと考えられる。その後、方形周溝墓的な小規模の古墳が造られるのであるが、個人の力を誇示するために大規模な前方後円墳を築造するようになるのであろう。大形の前方後円墳の出現と共に小規模な方墳の持つ意味が薄れていき、5世紀代には長原遺跡のような小規模な方墳が有力個人のために造られ、6世紀以降には渡来人が持ってきた円墳や横穴式石室を中心とした群集墳が造られ、この渡来人が家族概念を墓に持ち込むのであろう。5世紀代の古墳群にも円墳を中心としたものは多いが、弥生時代から引き続いて集落の嘗なまっていた平地にある長原遺跡等では割合遅くまで小規模の方墳が残るのであろう。（藤沢）



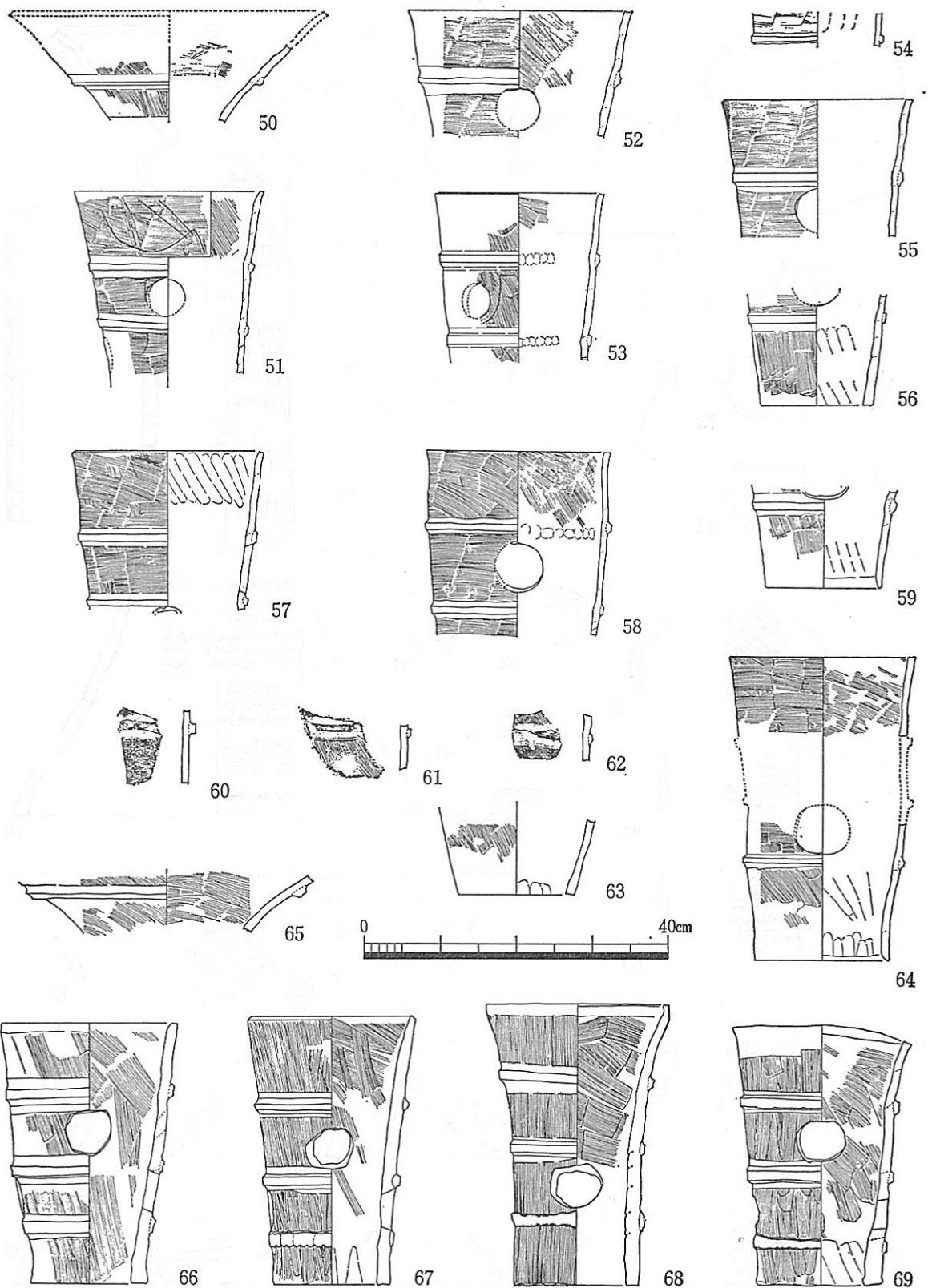
第84図 古墳出土遺物実測図 1 塚ノ本古墳周濠出土遺物 土師器（1～7）・円筒埴輪（8～13）・木製品（14）



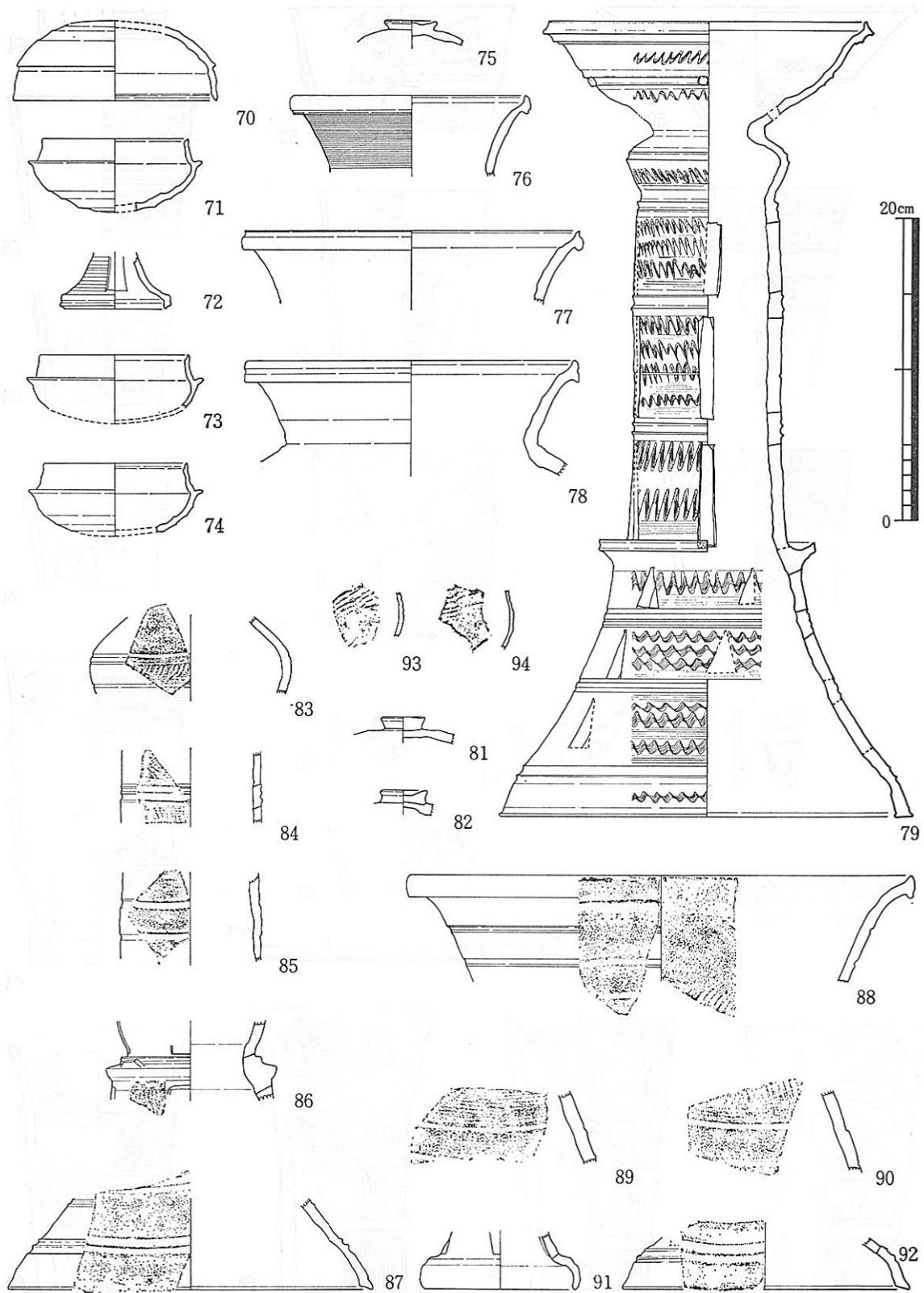
第85図 古墳出土遺物実測図 2 墳輪類 2号墳(15~17) 3号墳(18~30) 4号
墳(31~33) 5号墳(34、35) 7号墳(36~39)



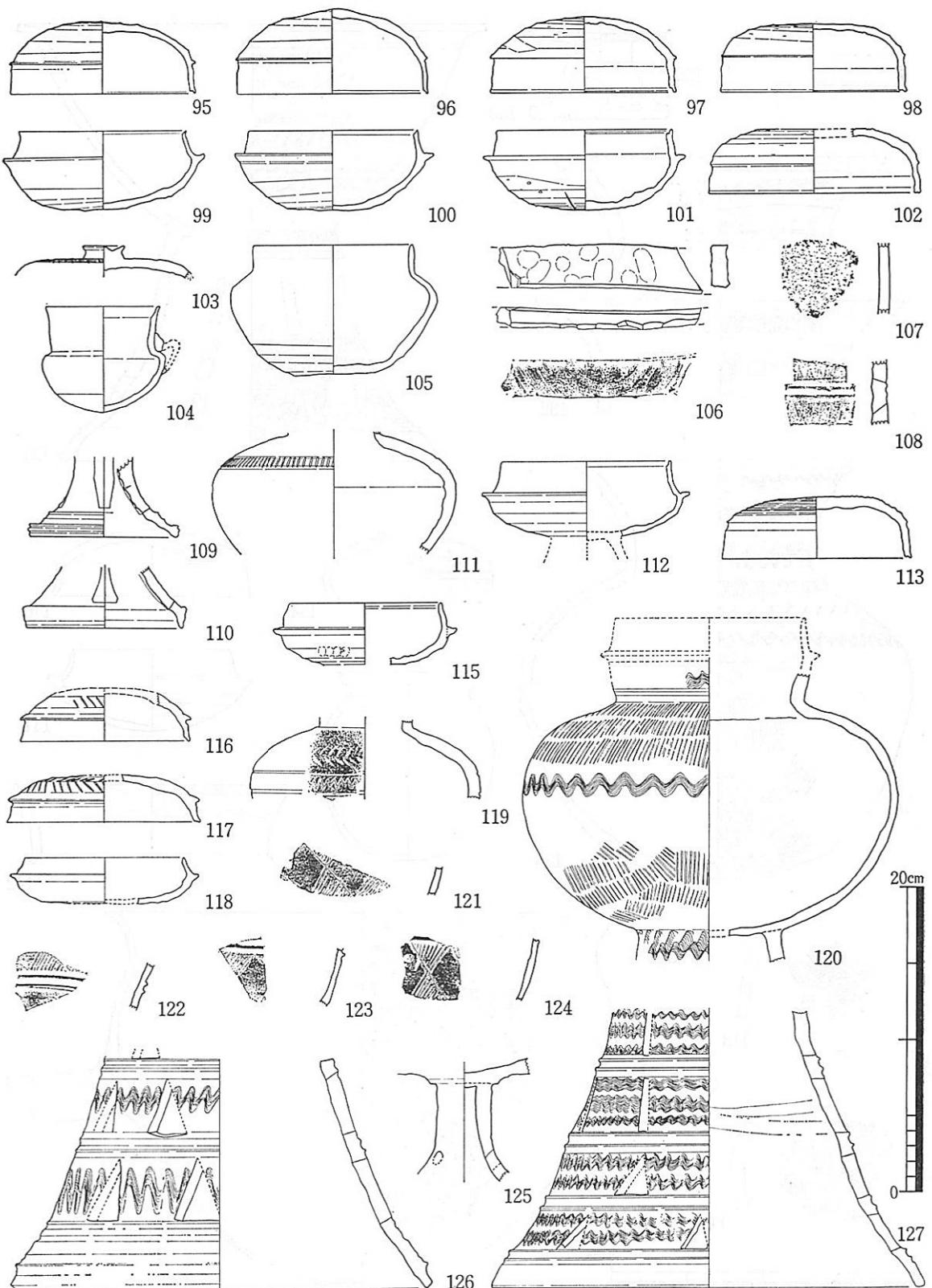
第86図 古墳出土遺物実測図3 増輪類 8号墳(40~42) 9号墳(43、44、50~55)
10号墳(45、46) 11号墳(47) 13号墳(48、49)



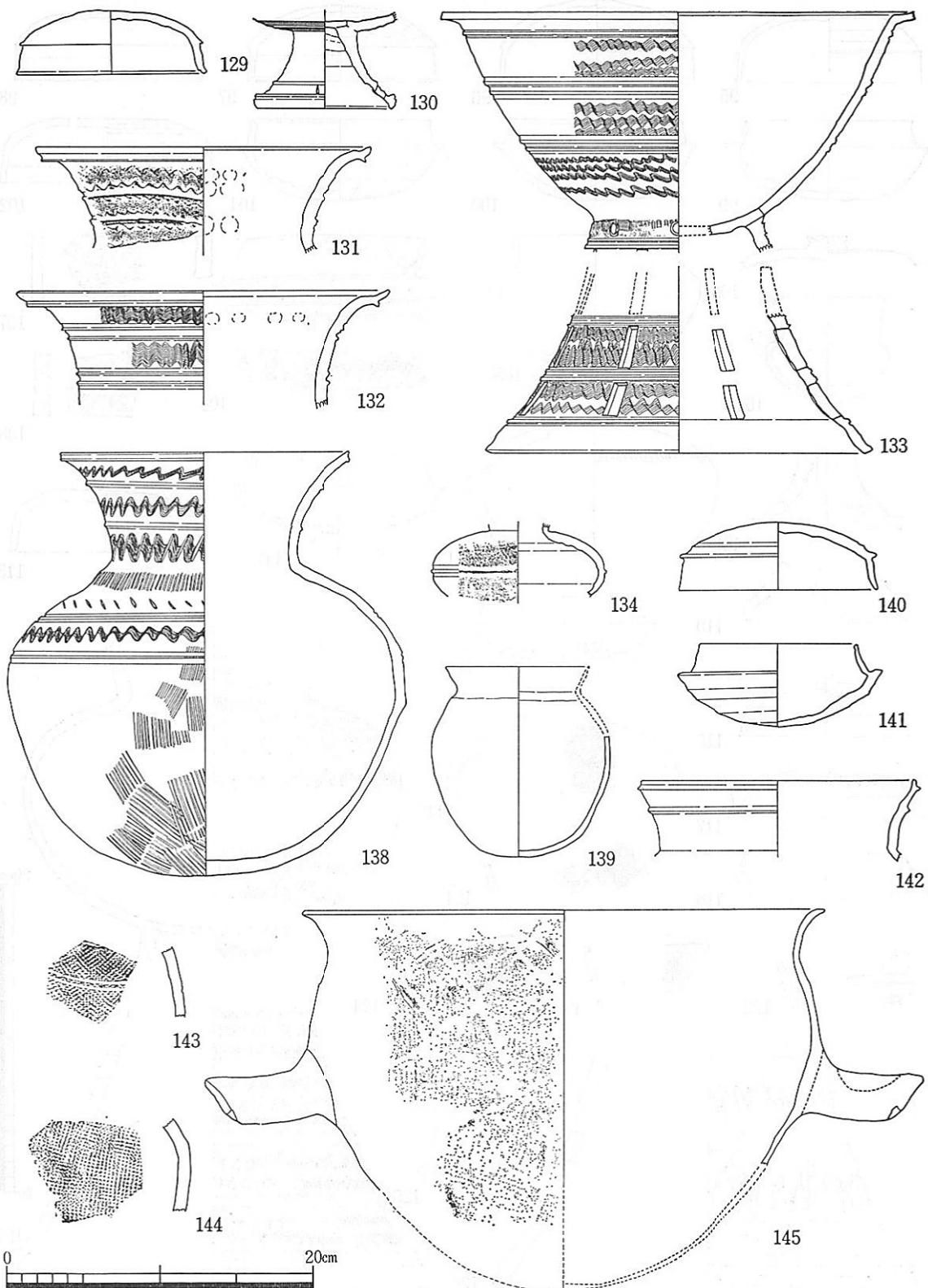
第87図 古墳出土遺物実測図 4 墓輪類 15号墳 (50~56) 17号墳 (57、58) 18号
墳 (59) 24号墳 (60~62) 25号墳 (63、64) 26
号墳 (65) 27号墳 (66~69)



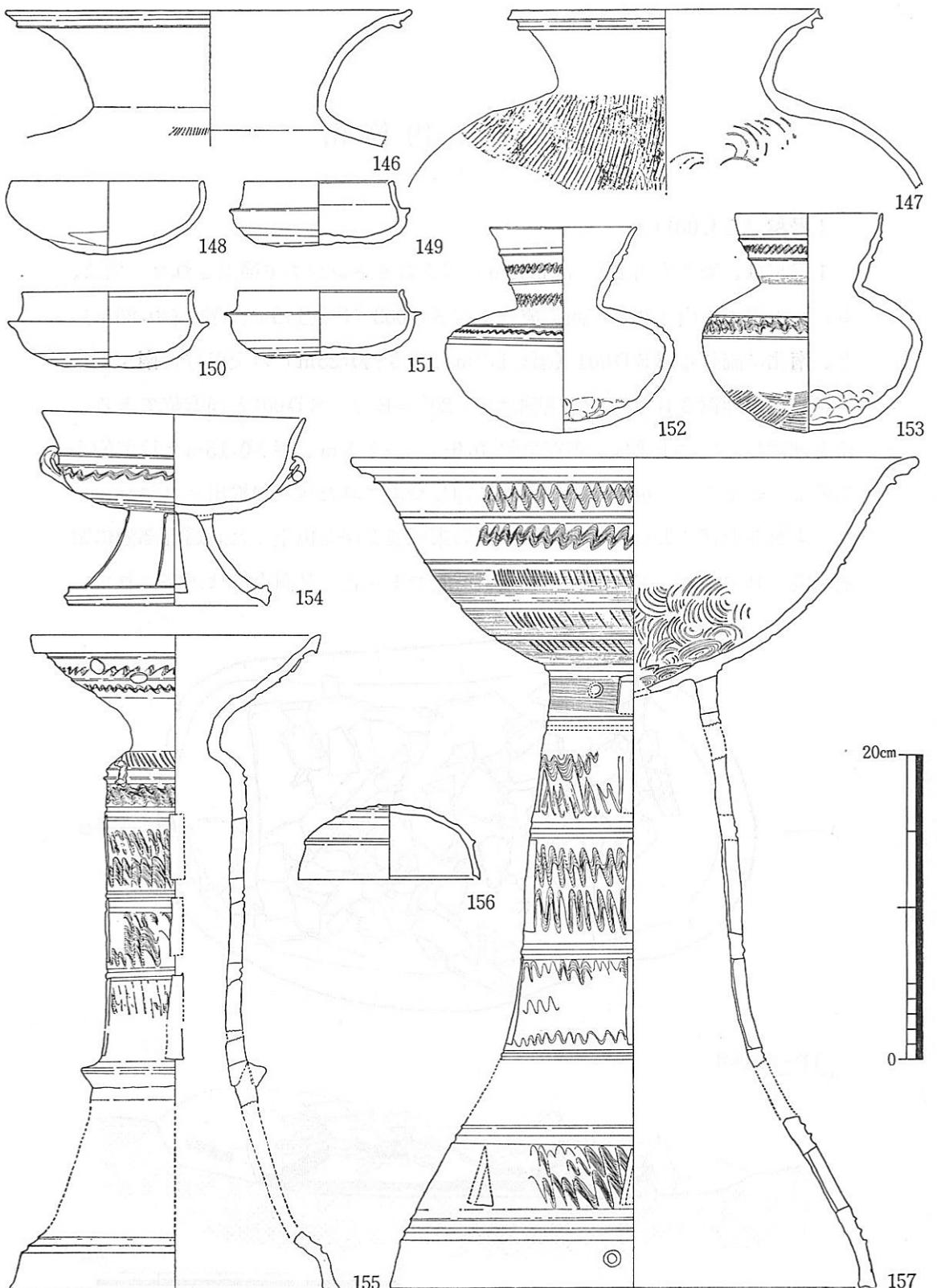
第88図 古墳出土遺物実測図5 須恵器 1号墳(70~72) 2号墳(73~79)
墳(81~92) 製塙土器 3号(93、94)



第89図 古墳出土遺物実測図 6 須恵器 4号墳 (95~108) 5号墳 (109~111) 6号墳 (112) 7号墳 (113) 8号墳 (115) 9号墳 (116~127) 土師器 14号墳 (107)



第90図 古墳出土遺物実測図 7 須恵器 10号墳 (129~133)
 (138) 15号墳 (140~144) 11号墳 (134) 土師器 12号墳
 (139) 13号墳 (145)

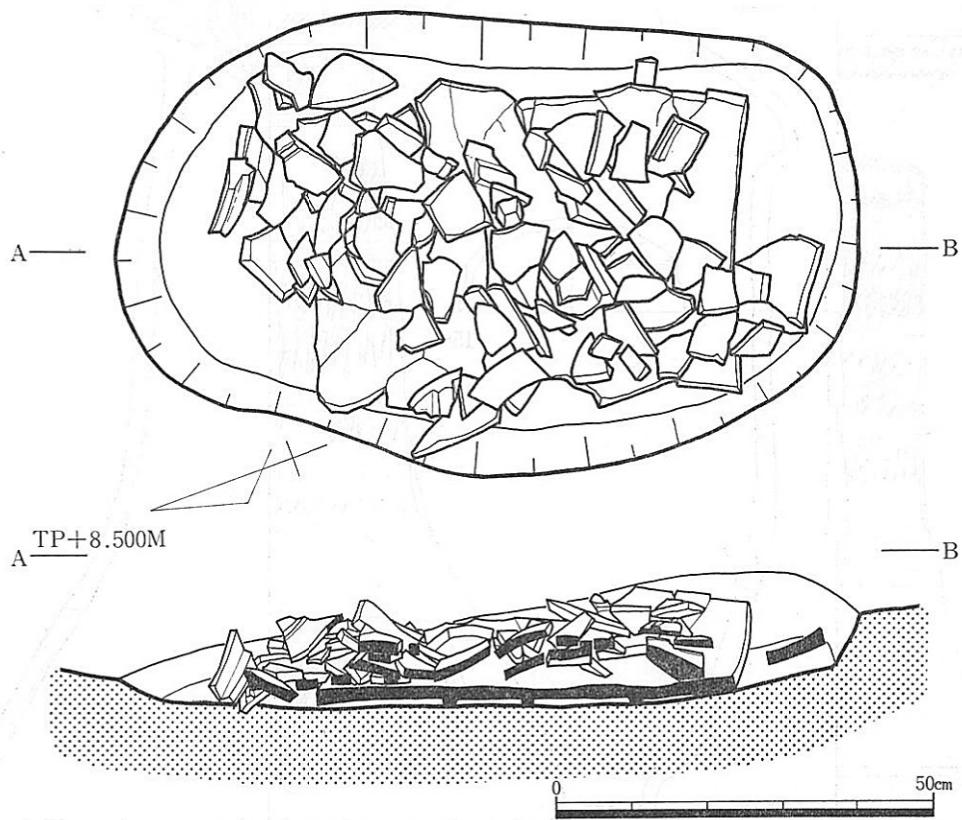


第91図 古墳出土遺物実測図 8 須恵器 18号墳(146) 26号墳(147~154) 27号墳
(155~157) 土師器 26号墳(148)

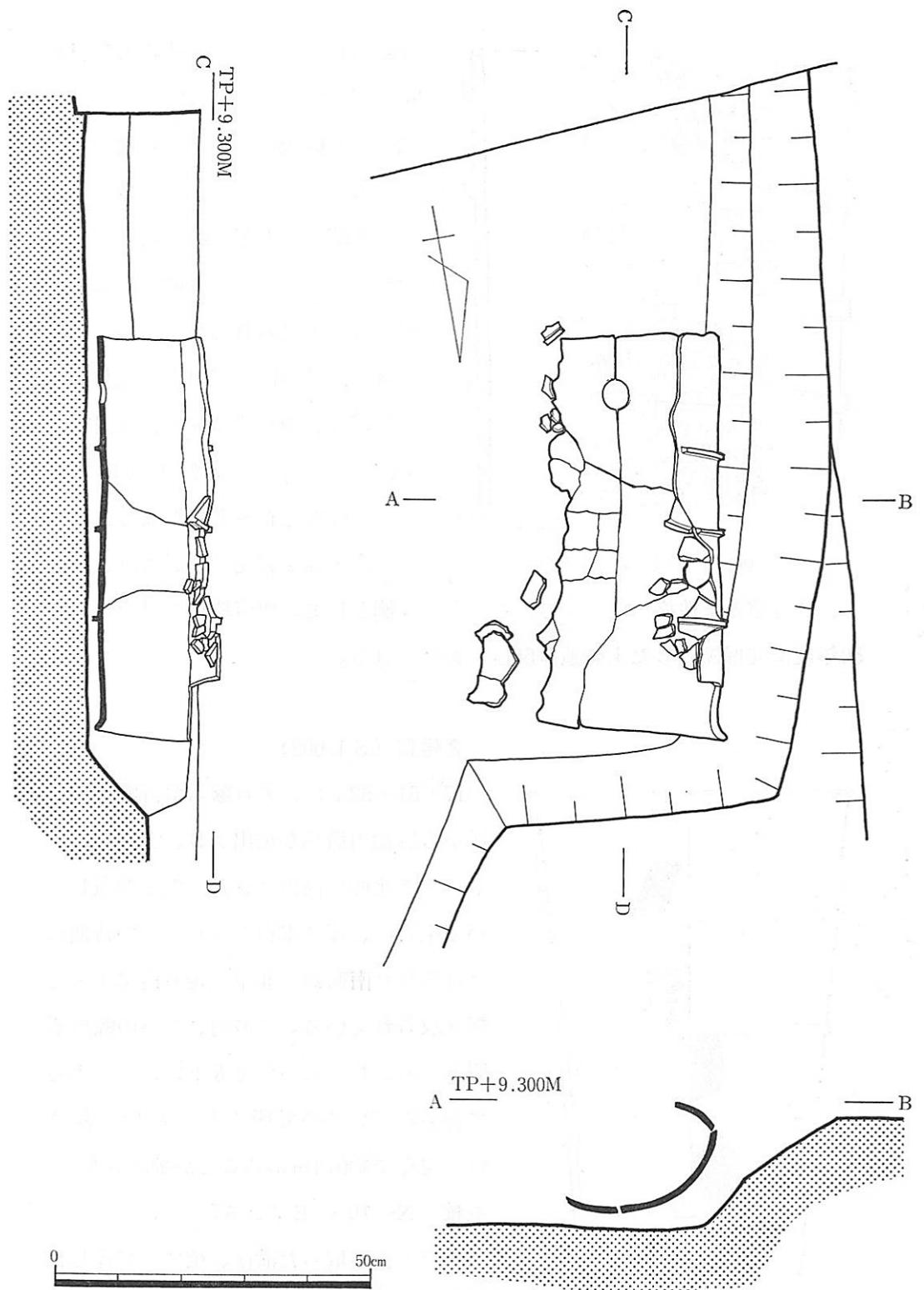
(二) 墳輪円筒棺

1号棺 (SL 001)

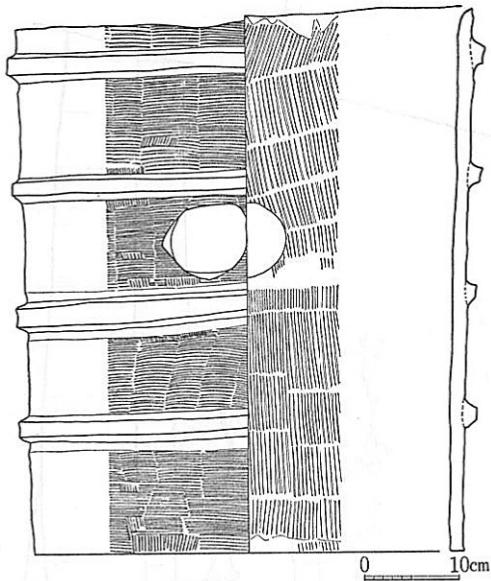
1号棺は、塚ノ本古墳から約200m北にある9トレンチで検出された。棺は、トレンチ内で検出された東西に流れる溝SD 003（幅約1.5m、深さ約0.25m）と、南北に流れる溝SD 001（幅約1.3m、深さ約0.25m）の交点付近南東隅に一基単独で埋置されていた。主軸はN—20°—Eで、SD 001と同方位である。棺を埋置していた土壙は、現存で幅0.6m、長さ1m、深さ0.15mと比較的小規模なものである。棺の上部は粉々に押しつぶされた状態で検出されたが、これらを取り上げると棺の底部が、ほぼ旧来の姿を保ち出土した。透孔部分に閉塞が為されていたかどうかは、観察不可能であった。又両小口は閉塞されてい



第92図 1号埴輪円筒棺実測図 (M. 9トレンチ)



第93図 2号埴輪円筒棺実測図 (M17トレンチ)



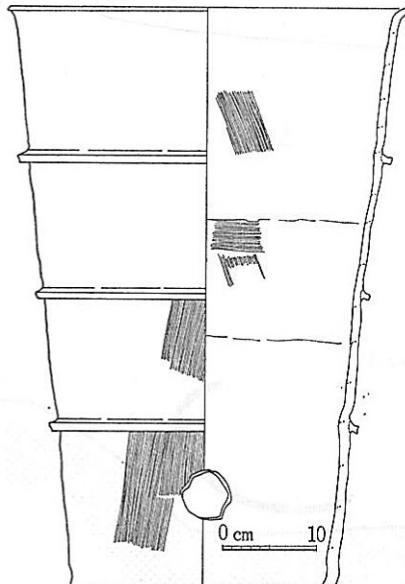
第94図 1号棺埴輪実測図

1、8号棺とは性格を異にする。このような例として、堺市教育委員会が昭和50年度に発掘調査した土師遺跡68区があげられる。

2号棺 (S L 002)

17・51・52トレンチの塚ノ本古墳周濠外堤から埴輪円筒棺が検出され、2号棺は17トレンチ北側で検出された。棺を埋置している土壙は、塚ノ本古墳より新しい時期に設けられた南西から北東へ走る溝によって削り取られている。その為、土壙の幅は不明であり、長さについてもトレンチによって切られているので明らかでない。深さは、現存で約0.4mあることが確認された。主軸はN-10°-Eである。

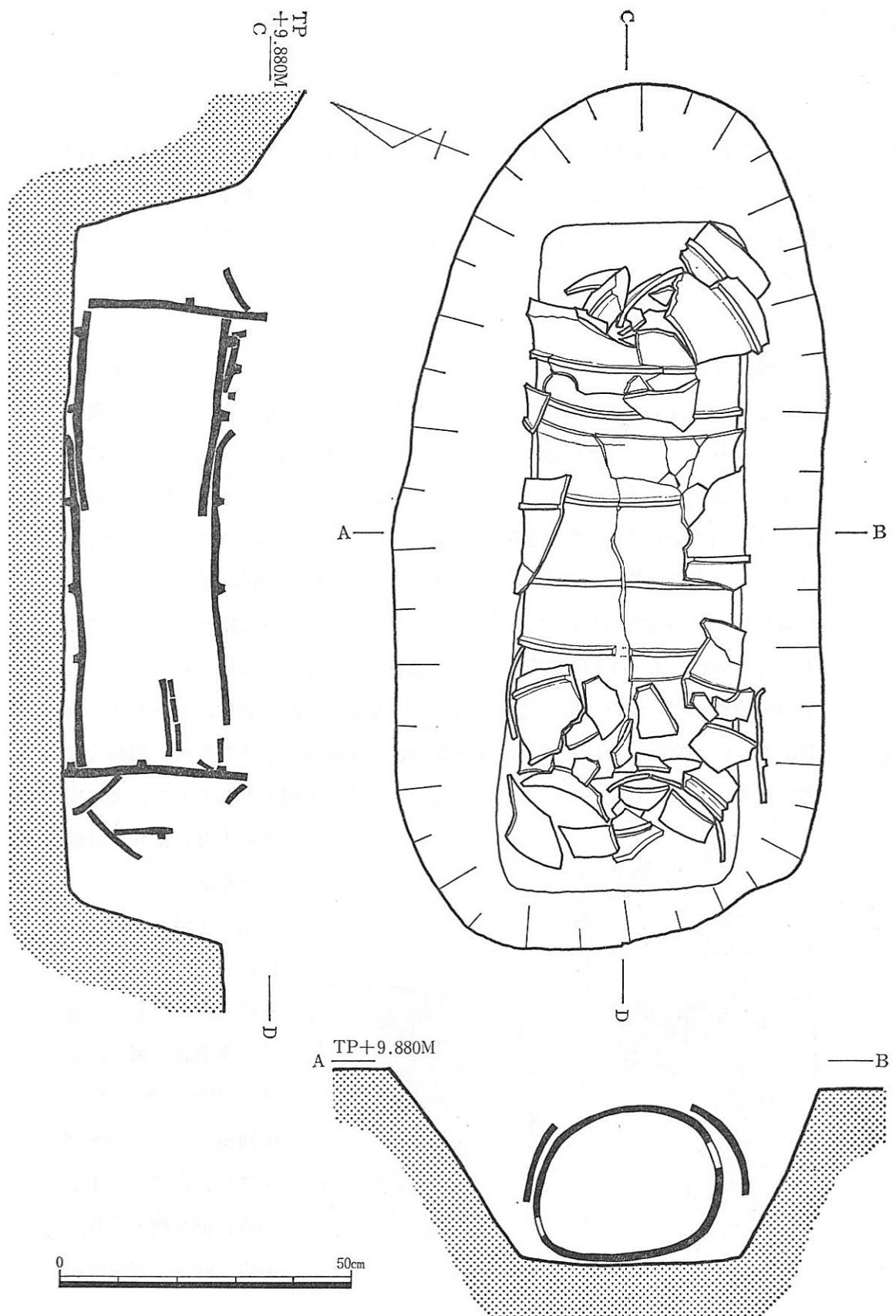
土壙を削り取った溝は、棺にまで達したため、棺はその半分を残すのみとなっていた。



第95図 2号棺埴輪実測図

なかった。棺には1個体の円筒埴輪を使用しているが、それについても、底部から0.56m以上は打ち欠いている。残存部に4条のタガがあり、底部より第2段と第3段の間に透孔がつけられている。その他棺内に副葬品、人骨等見られなかった。

8基の埴輪円筒棺の中で最北端の1号棺は、後述する8号棺と同様、溝内に埋置された埴輪円筒棺である。他の2号棺～7号棺までは、塚ノ本古墳周濠外堤に埋置され、上記



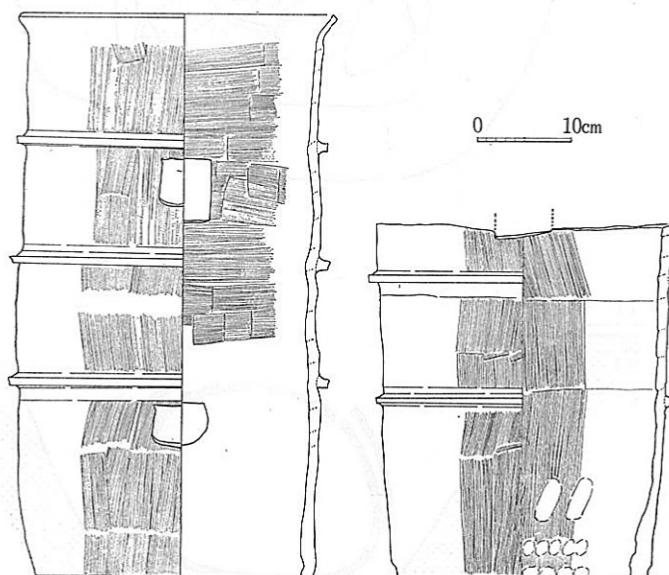
第96図 3号埴輪円筒棺実測図 (A651トレンチ)

る。棺の両小口、透孔を閉塞した形跡はない。

この棺に供された円筒埴輪は1個体である。下端直径0.28m、上端直径0.24mと下に狭く大に広がる型を持つ。タガは3段で、底部と第1段の間に透孔が見られる。棺内に副葬品、人骨等は見当らず、又溝によって削り取られた棺の半分についても一破片も見当らなかった。

3号棺（S L 003）

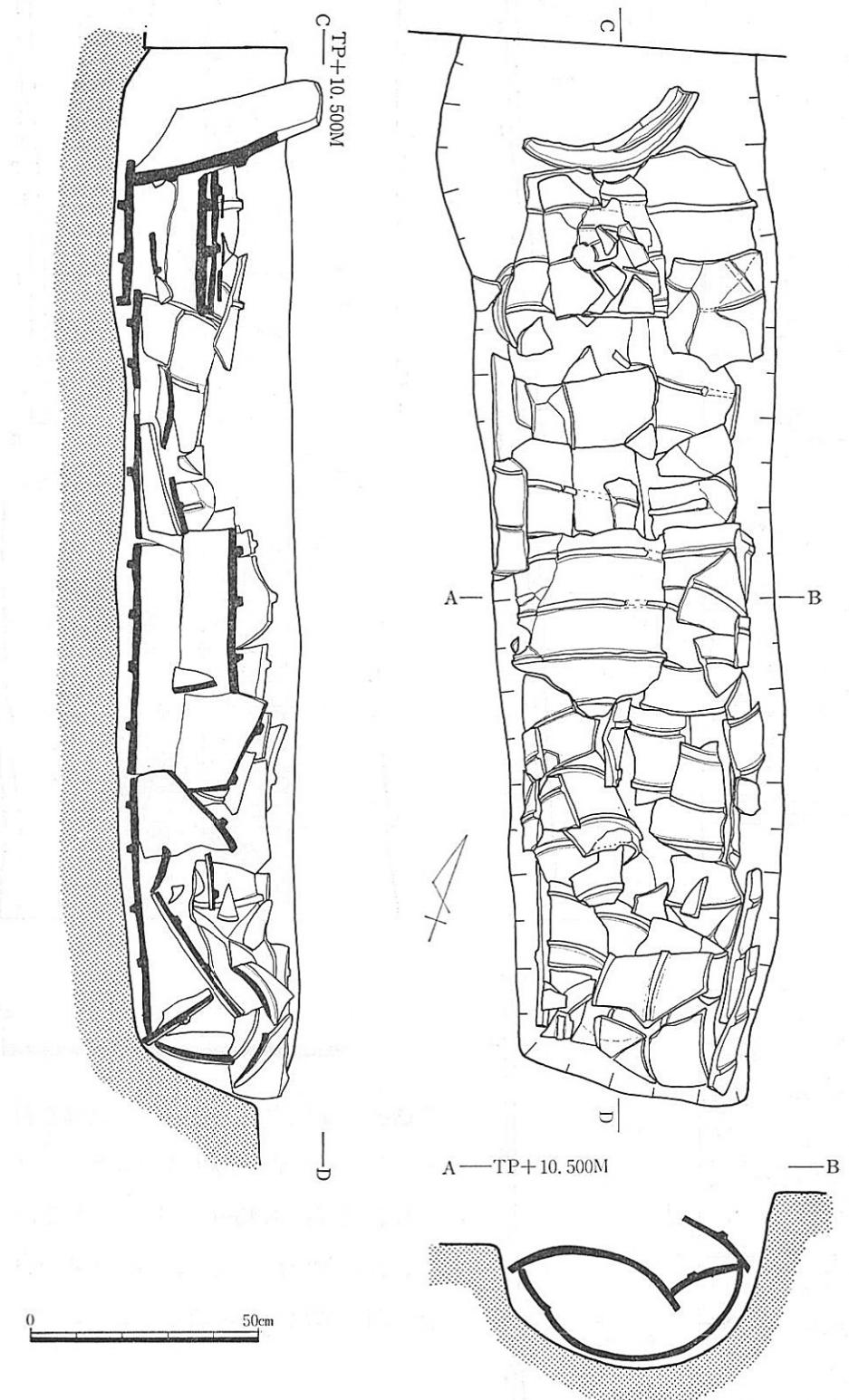
3号棺は、51トレンチで調査した周濠外堤部にあり、塚ノ本古墳のほぼ主軸線上に位置する。棺全体の遺存状態は良好で、埋葬した当初の状態が非常に良く観察される。まず棺を埋葬している掘形は、上幅0.7m、下幅0.35m、上端部1.4m、下端部1.1m、深さ0.3mといった規模をもつ。棺自体の全長は0.7mを計り、3個の円筒埴輪によって構成されている。完形の円筒埴輪1本を、やや外彎した口縁部を東にして、透孔を棺の両側面にくる様に横たえ、そこに上部を打ち欠いたもう1個の円筒埴輪を底部からソケット状に挿入している。両小口は埴輪を打ち欠いて用いるが、棺に用いた埴輪と同一個体かどうかは、腐蝕が著しい為判明しない。透孔は両側2個、計4個あり、それぞれに埴輪片で閉塞している。これについても同一個体か別個体か識別不可能である。また棺



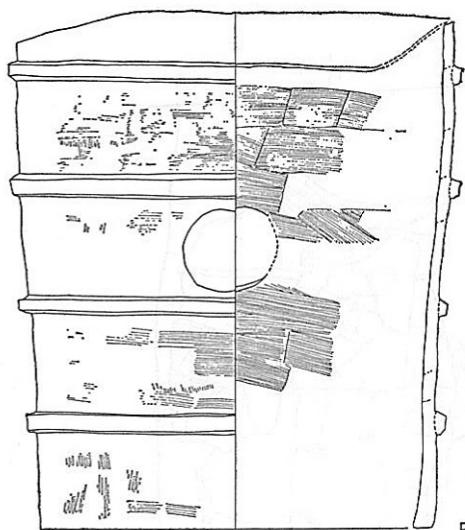
第97図 3号棺埴輪実測図

内に人骨、副葬品は遺存しなかった。

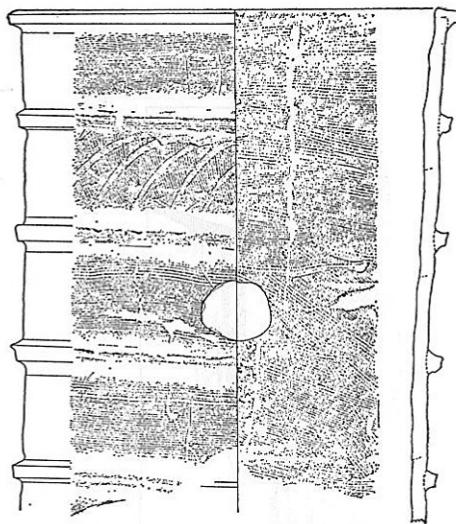
棺に使用された埴輪は、完形のものと上部を打ち欠いたものの2個体を確認出来る。完形の円筒埴輪は高さ0.74mで、3段のタガを持ち、底部と第1段の間、第2段と第3段の間にはほぼ長方形にな



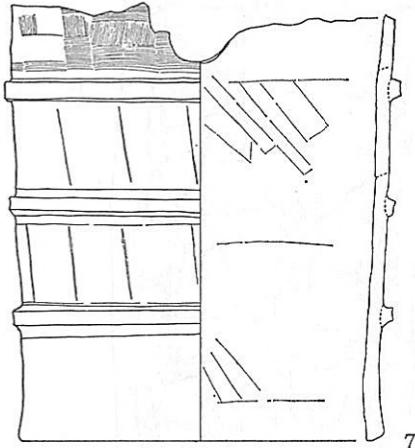
第98図 4号埴輪円筒棺実測図 (46.52トレンチ)



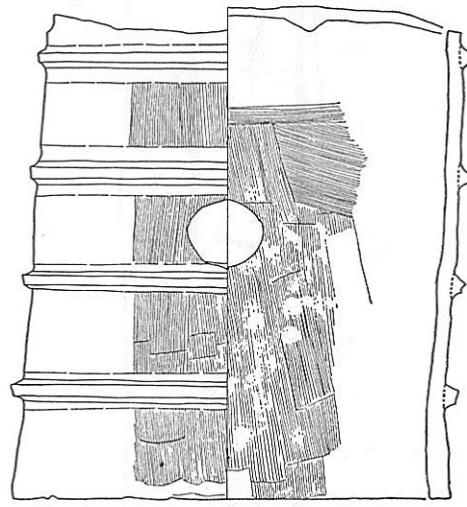
5



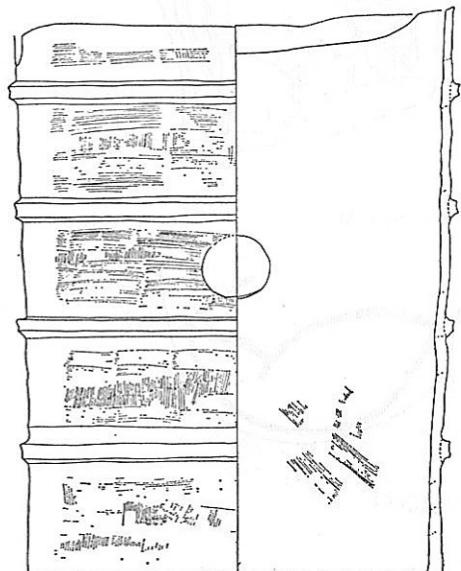
6



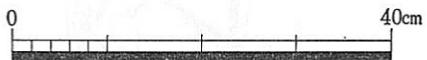
7



8



9



る透孔が4個穿たれている。上部を打ち欠いている円筒埴輪は2段のタガをめぐらし、現存高0.45mを計る。透孔はなく、打ち欠いた上部を、小口あるいは透孔の閉塞に用いた可能性もある。

第99図 4号棺埴輪実測図

4号棺 (SL 004)

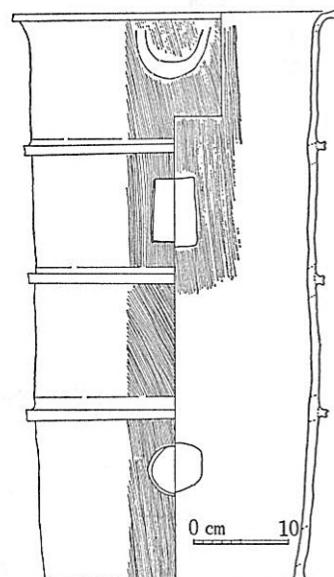
4号棺は、52トレンチで検出された塚ノ本古墳周濠外堤に位置し、主軸はN—20°—Wを示す。周濠外堤からほぼ2m離れ、周濠のラインと並列する。4号棺の土壙は、棺との間に殆ど余裕がなく、棺となる円筒埴輪の大きさに合わせて掘られたようである。土壙は、幅0.6m、長さ2.3m、深さ0.4mを計り、棺自体の全長は1.9mと今回検出された埴輪円筒棺の中で最も大規模なものである。土壙の底も、円筒埴輪に合わせ半円形に掘られている。

棺に使用された埴輪は計6個体分で、一方を打ち欠いたものばかりであった。その内2個は、それぞれ両小口に用いられ、残り4個で棺を構成している。土圧の為に上部は半壊して、4個の插入関係は観察不可能であった。下部の位置関係から、3個所ある接合部の内、一方を挿入しているのは南の部分だけで、中央部と北の部分については端部を密着させているにすぎない。また出土状態がわるく、透孔の閉塞状況は明らかでない。但し、棺の底部に位置する透孔に閉塞された形跡はなかった。棺の内部に人骨、副葬品は遺存しなかった。

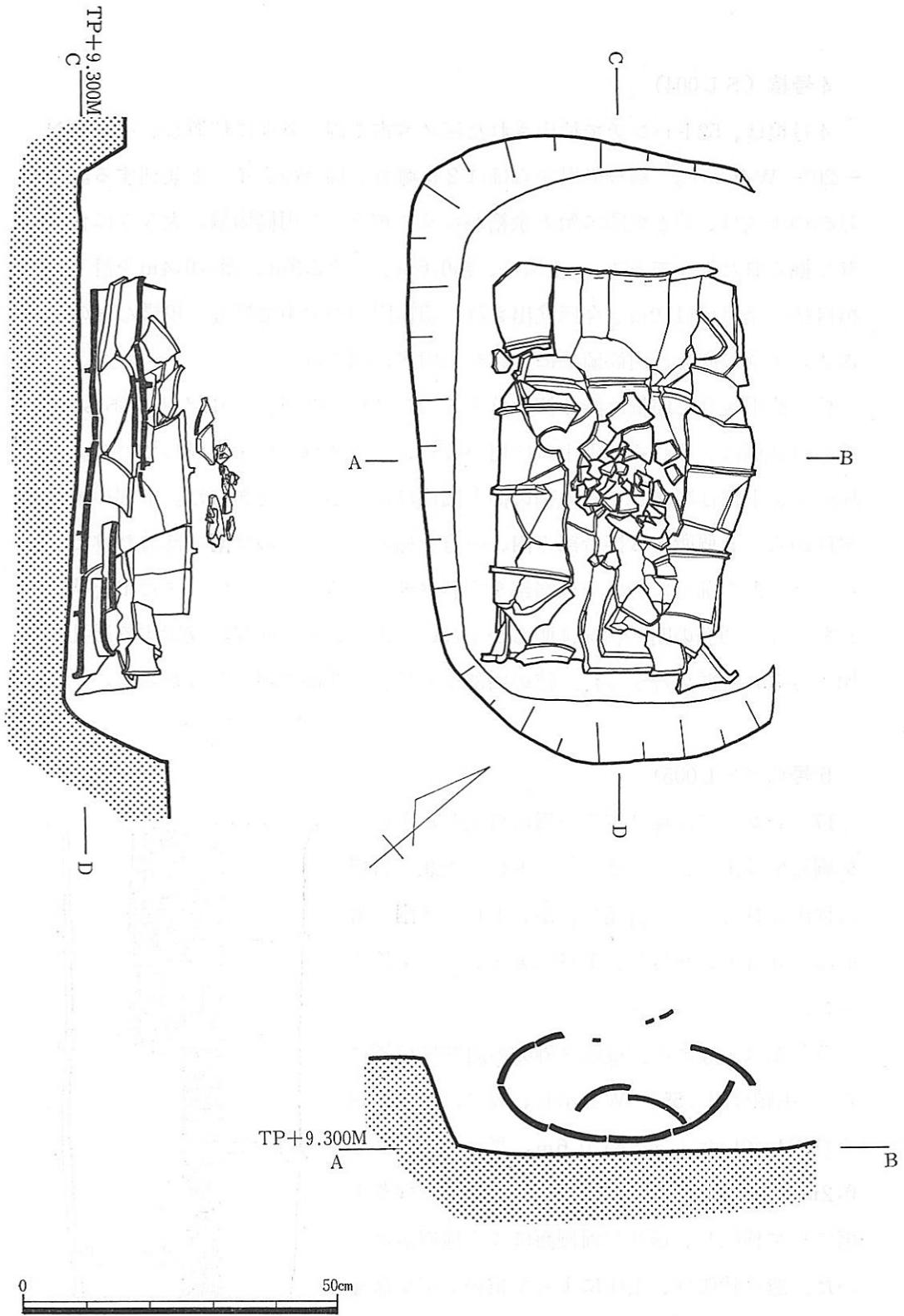
5号棺 (SL 005)

17トレンチでは塚ノ本古墳周濠外堤が、トレンチ両端で検出された。2号棺がトレンチ北の外堤に検出されたことは前述したが、トレンチ南の外堤には5号棺、6号棺、7号棺とまとまって検出された。

5号棺は、塚ノ本古墳周濠外堤の肩部に位置する。主軸はN—55°—Wを示し、周濠に並ぶ。棺を埋置していた土壙は幅0.6m、長さ1m、深さ0.2m（但し現存）を計る。棺は埴輪の口縁部を東にして横転し、透孔が両側面にくる様置かれていた。遺存状態は、土圧によって棺の上部が深く内部へ落ち込み、圧碎された断面楕円形を呈して



第100図 5号棺埴輪実測図

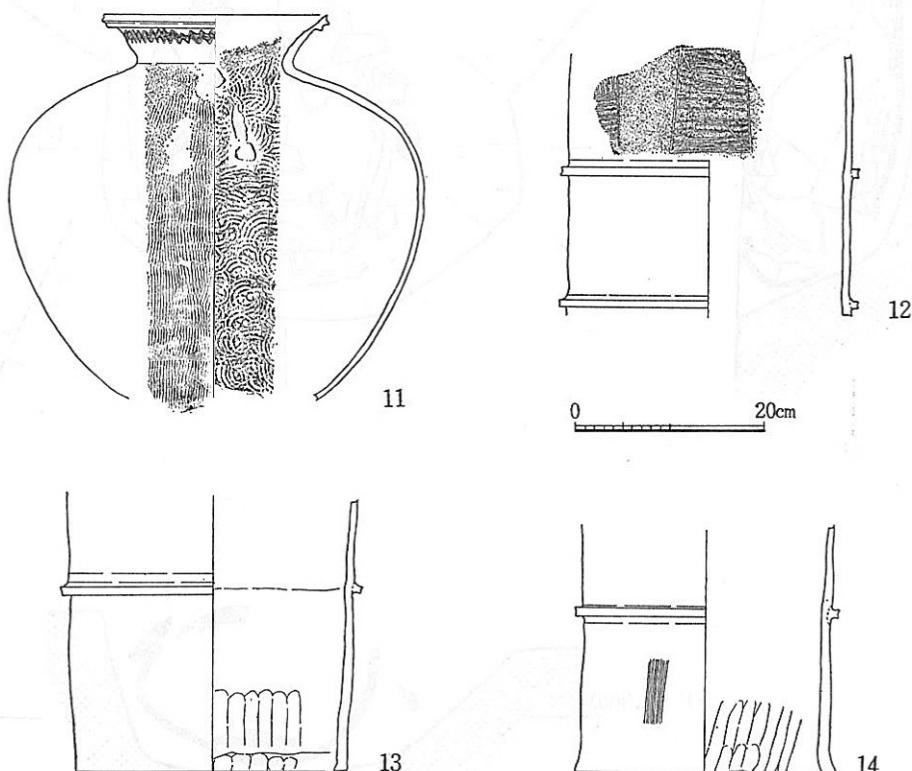


第101図 5号埴輪円筒棺実測図 (M17トレンチ)

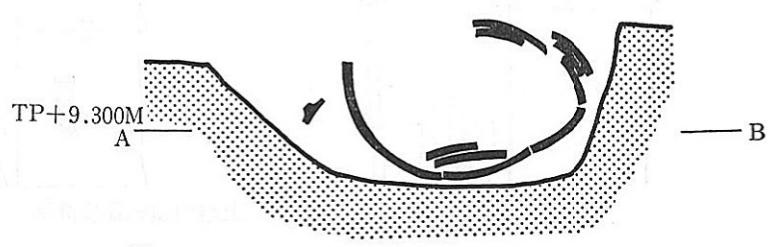
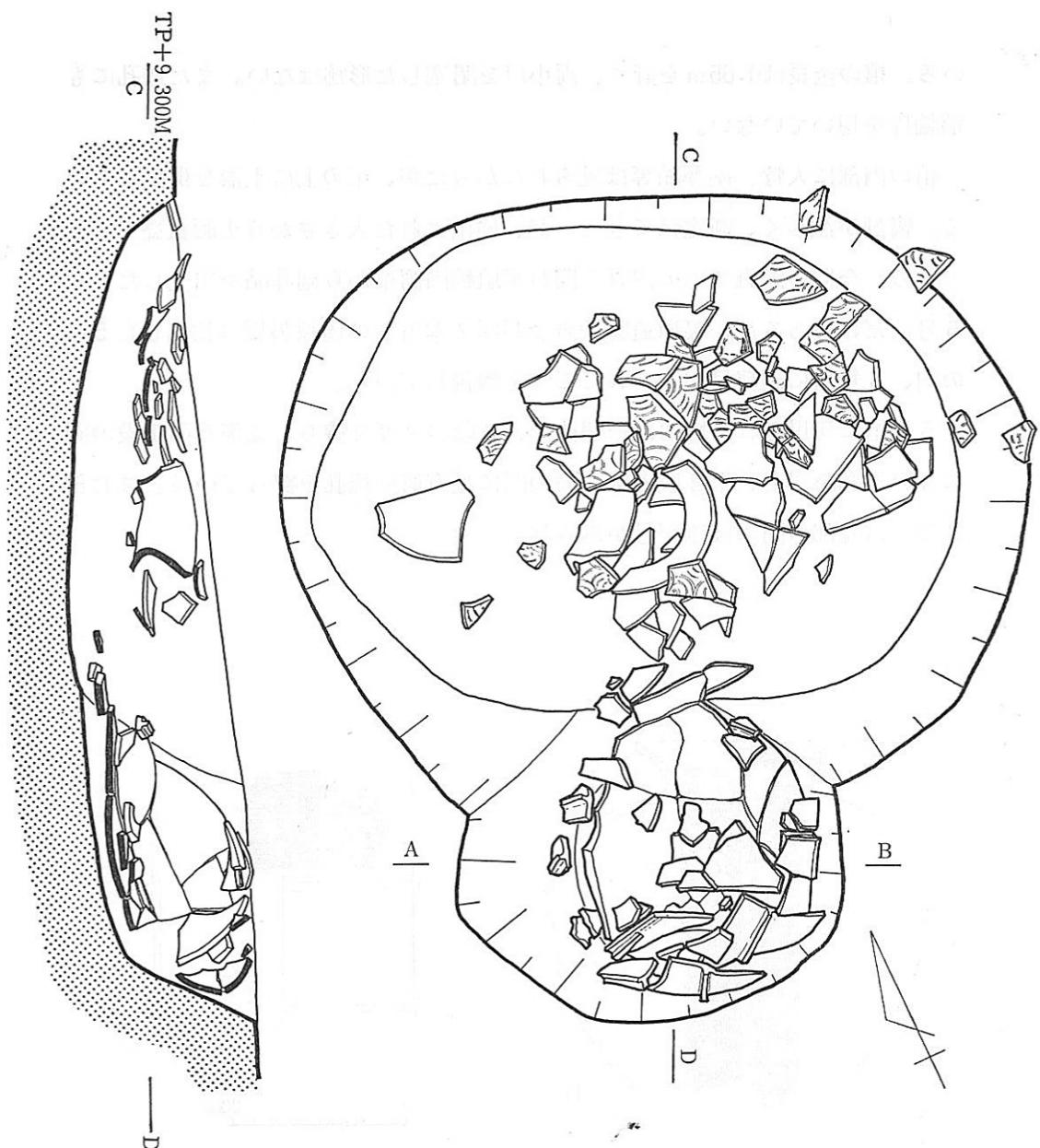
いる。棺の全長は0.65mを計り、両小口を閉塞した形跡はない。また透孔にも埴輪片を用いていない。

棺の内部に人骨、副葬品等は見られなかったが、棺の上に土器を供献している。腐蝕が激しく、断定はできないが、検出された大きさから土師質甕と判断できる。今回の調査で棺の内外を問わず埴輪円筒棺から副葬品を出土したのは5号棺だけであるが、長原遺跡調査会が塚ノ本古墳の周濠外堤に検出した5基の内、3号棺に副葬品がみられたことを報告している。

5号棺に使用された埴輪は一個体で、3段のタガを持ち、底部と第1段の間に丸い透孔を穿ち、第2段と第3段の間に長方形の透孔を穿っている。また第3段と口縁部の間には笠記号がみられる。



第102図 6号棺埴輪、土壤内須恵器実測図

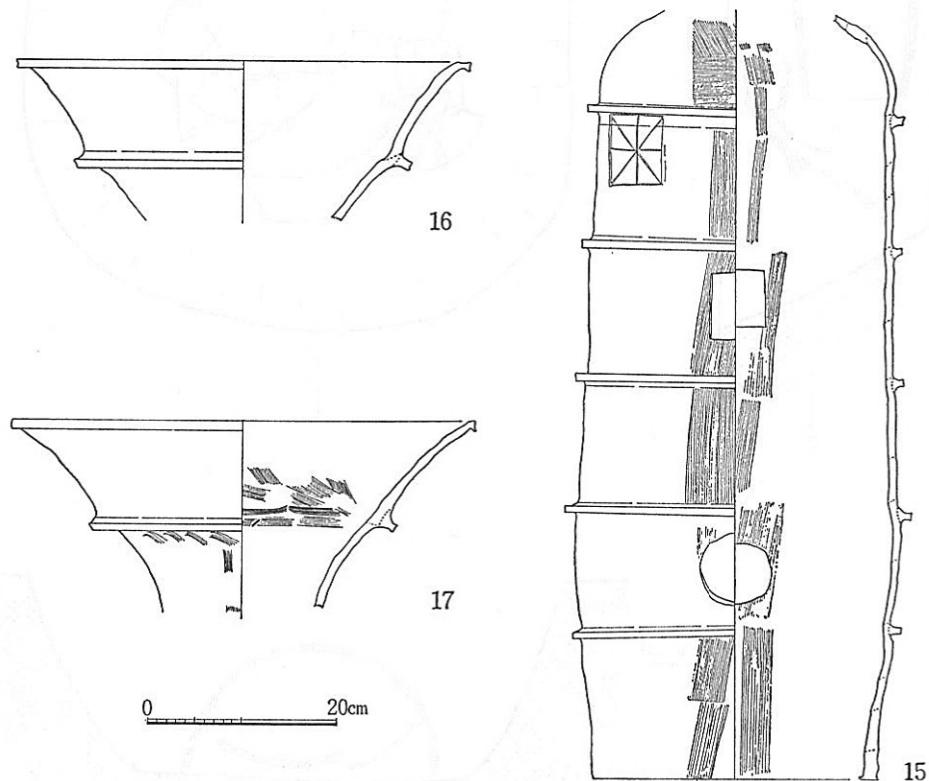


第103図 6号埴輪円筒棺実測図 (M17トレンチ)

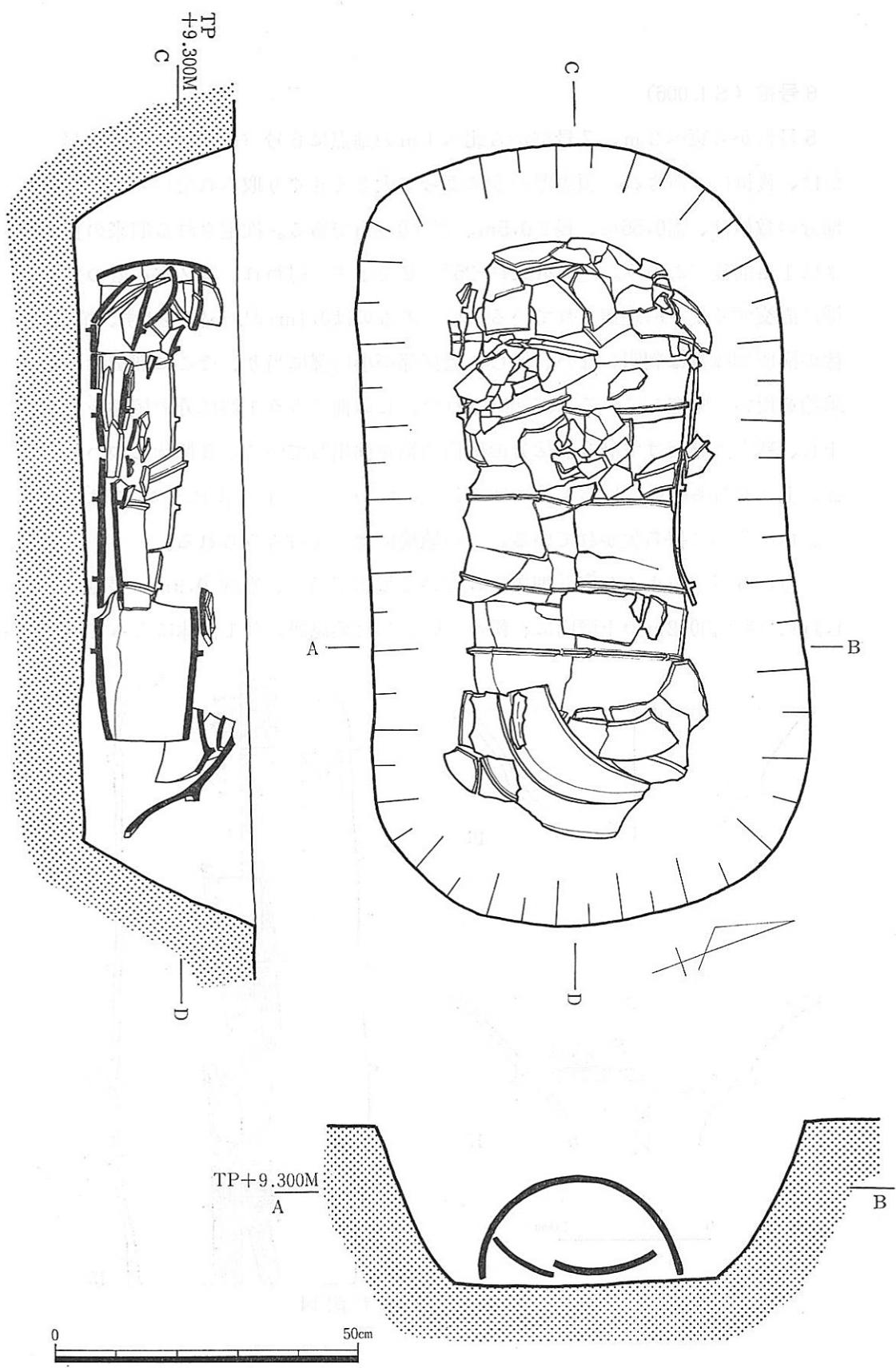
6号棺 (S L 006)

5号棺から東へ2m、7号棺から北へ1mの地点に6号棺は位置する。6号棺は、後世に埋置された須恵器の甕によって大きくえぐり取られている。残存部分の数値は、幅0.55m、長さ0.5m、深さ0.2mである。推定される旧来の長さは1m前後であろう。主軸はN—25°—Eを示すと思われ、塚ノ本古墳の外堤に直交するように埋置されている。棺そのものは0.4m程しか残存せず、棺全体の構成個体数は判明しない。但し、遺存部が小口部に当り、そこに別個体の埴輪を用いて閉塞しているのが観察された。この他にもう1個体分の埴輪を出土し、残存部分だけで計3個体分の円筒埴輪を検出している。2個体については、上部を打ち欠いているだけで底部は残っていたが、1個体については底部、口縁部共に打ち欠かれている。この埴輪には範記号もみられる。

一方、6号棺をえぐり取り埋置されている須恵器甕は、幅約0.9m、長さ約1.1m、深さ約0.2mの土壙内に、粉々に碎かれた須恵器の甕1個体によって構



第104図 7号棺 墓輪 実測図



第105図 7号埴輪円筒棺実測図 (M17トレンチ)

成されている。この土壙内から、6号棺の破片は見当らなかった。また6号棺、土壙に、副葬品など遺物は出土しなかった。

7号棺 (SL 007)

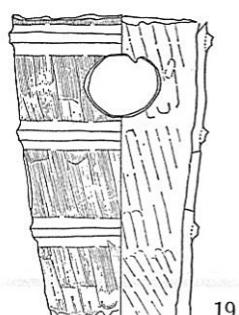
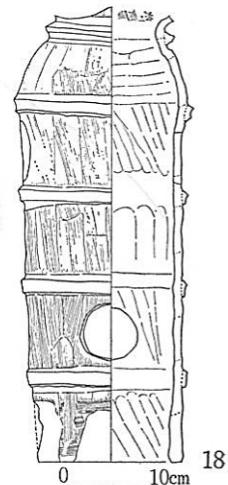
7号棺は、17トレンチ塚ノ本古墳周濠外堤上に位置する。周濠と平行して約2.5m離れた地点に埋置され、主軸はN—70°—Wを示す。棺を埋置している土壙は、幅0.7m、長さ1.25m、深さ0.35mを計る。棺は口縁部を東に向けて横たえ、透孔は上下にくる様埋置されていた。棺の上部は土圧によって棺内部へ落ち込んでいる。上部の透孔については、別個体の埴輪片を用いて閉塞しているが、下部の透孔には見られなかった。また東側の小口は、壺の胴部によって閉塞している。一方西側の小口には、2個体分の朝顔形円筒埴輪のラッパ状の部分を用いている。(朝顔形埴輪を円筒棺に用いた例として、奈良県一マエ塚2号棺、倉塚2号棺、大阪府一茶臼山1号棺、長原2号棺、4号棺などがある。) 棺の全長は約0.9m、棺の内外に副葬品、人骨等は見られなかった。

棺に使用されている埴輪は朝顔形埴輪で、ラッパ状部を打ち欠いている。現存長0.8mを計り、5段のタガを有する。第1段と第2段の間に円型の透孔、第3段と第4段の間に長方形の透孔が設けられている。第4段と第5段の間には範記号もみられる。また棺に使用された朝顔形埴輪と、小口の埴輪は別個体である。

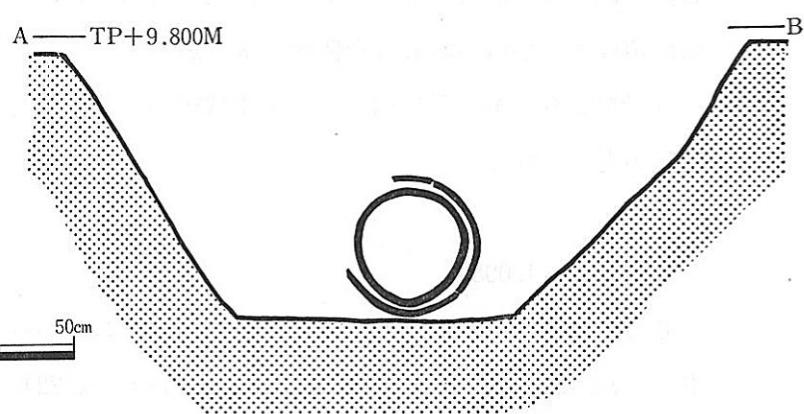
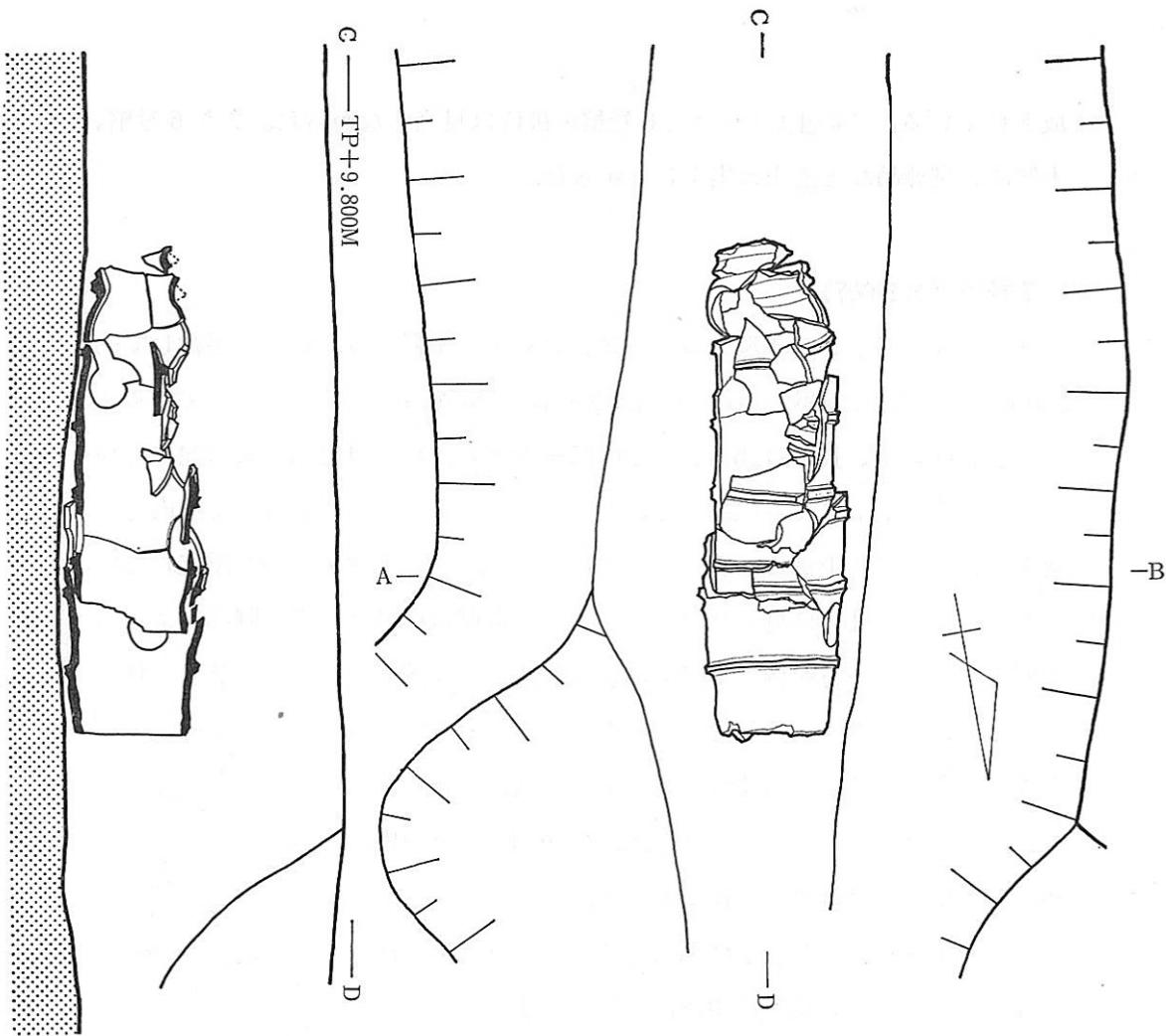
5号棺、6号棺と7号棺には、出土状況から若干の時期差が考えられる。

8号棺 (SL 008)

8号棺は、塚ノ本古墳より100m南の20トレンチから出土した。20トレンチの中央部には22号墳があり、22号墳の西には後述する2号土壙墓も検出した。8号棺は22



第106図 8号棺埴輪
実測図 19



第107図 8号埴輪円筒棺実測図 (M.20トレンチ)

号墳の東に、幅1m、深さ0.4mの規模でほぼ南北に走る溝内（SD015）より検出された。主軸はN-10°-Eで溝の流れに合致する。溝内に、棺を埋置する土壙が設けられた形跡はない。棺の全長は0.65mと極めて小さい。棺には2個の埴輪を使用している。底部から0.3m残して打ち欠いた円筒埴輪を、底部を北にして横たえ、その部分に、南からラッパ状部分を取り去った小型の朝顔形埴輪の底部を挿入している。このように底部は挿入し易くしている。両小口と透孔を閉塞した形跡はなく、棺内に副葬品、人骨等も見当らなかった。

棺に使用された朝顔形埴輪は極めて小型で、現存で0.45m、ラッパ状部を含んだ推定される復元高は約0.6mであろう。タガは4段めぐらされていて、第1段と第2段の間に前後の透孔、第3段と第4段の間に左右の透孔を穿っている。

まとめ

以上今回の調査で埴輪円筒棺として確認出来るものについて記述したが、これら以外にも、1トレンチ、21トレンチに埴輪円筒棺と思われる様な出土状態で、円筒埴輪を検出している。断定出来ないため、ここに記述しなかった。

1号棺から8号棺まで検出した円筒棺の内、2号棺から7号棺までの6基は、塚ノ本古墳周濠外堤に位置する。すでに長原遺跡調査会の調査は、塚ノ本古墳周濠外堤に5基の埴輪円筒棺を確認している。塚ノ本古墳は、その全容を知られるに致っていないが、検出された範囲では、周濠をめぐる様に円筒棺が埋置されている。円筒棺には若干の時期差を認められるが、いずれにしろ古墳の周濠外堤を意識し埋置されたことは間違いない。他の資料をも加えて、古墳と埴輪円筒棺の関係についての研究に好資料が追加されたことと思う。

一方、1号棺と8号棺は溝内に埋置された埴輪円筒棺として注目される。前述した様に、堺市土師遺跡にも同じ例が検出されている。この他にも溝内から円筒棺を検出した遺跡があると聞く。報告書の刊行を待ち、これらの資料に加えて、研究に供されんことを願う。（杉本）

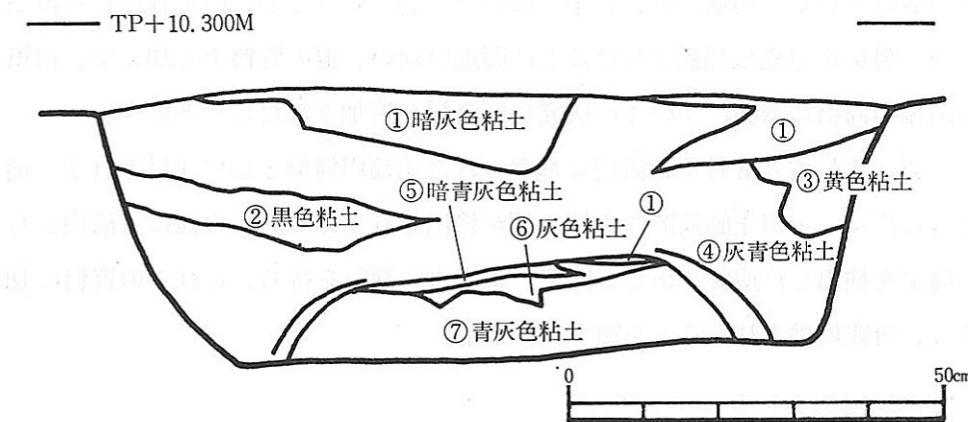
(三) 土 壤 墓

1号土塙墓 (S X 001)

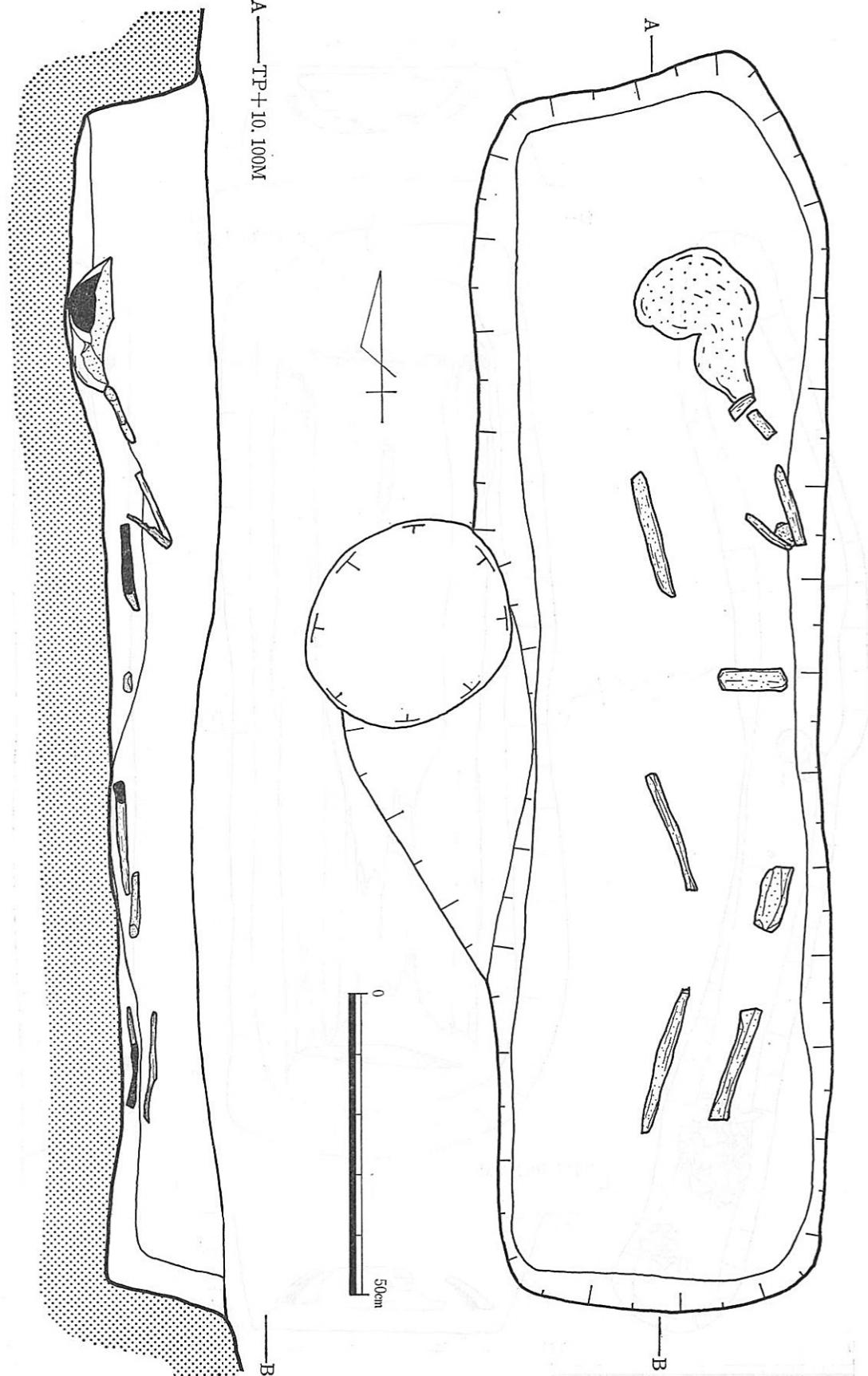
1号土塙墓は52トレンチ中央部、塚ノ本古墳周濠外堤より約8m西に位置する。土塙は、長さ約2m、幅約0.6m、深さ約0.2mの規模を持ち、主軸はN—0°である。土塙には、頭部を北にして埋葬された人骨を検出した。人骨は腐蝕が著しく、年令、性別など判明しない。頭骨、上腕骨、尺骨、大腿骨、脛骨などが残存するが、骨質は極めて脆弱である。これらの骨の残存状況から、恐らく仰臥伸展位で埋葬された様だ。また頭骨から脛骨まで1.5mあり、残存する骨が移動したとも考えられず、埋葬時に於ける被葬者の身長は約1.55m程度であったと思われる。埋葬施設は見当らず、直葬であり副葬品もなかった。

2号土塙墓 (S X 002)

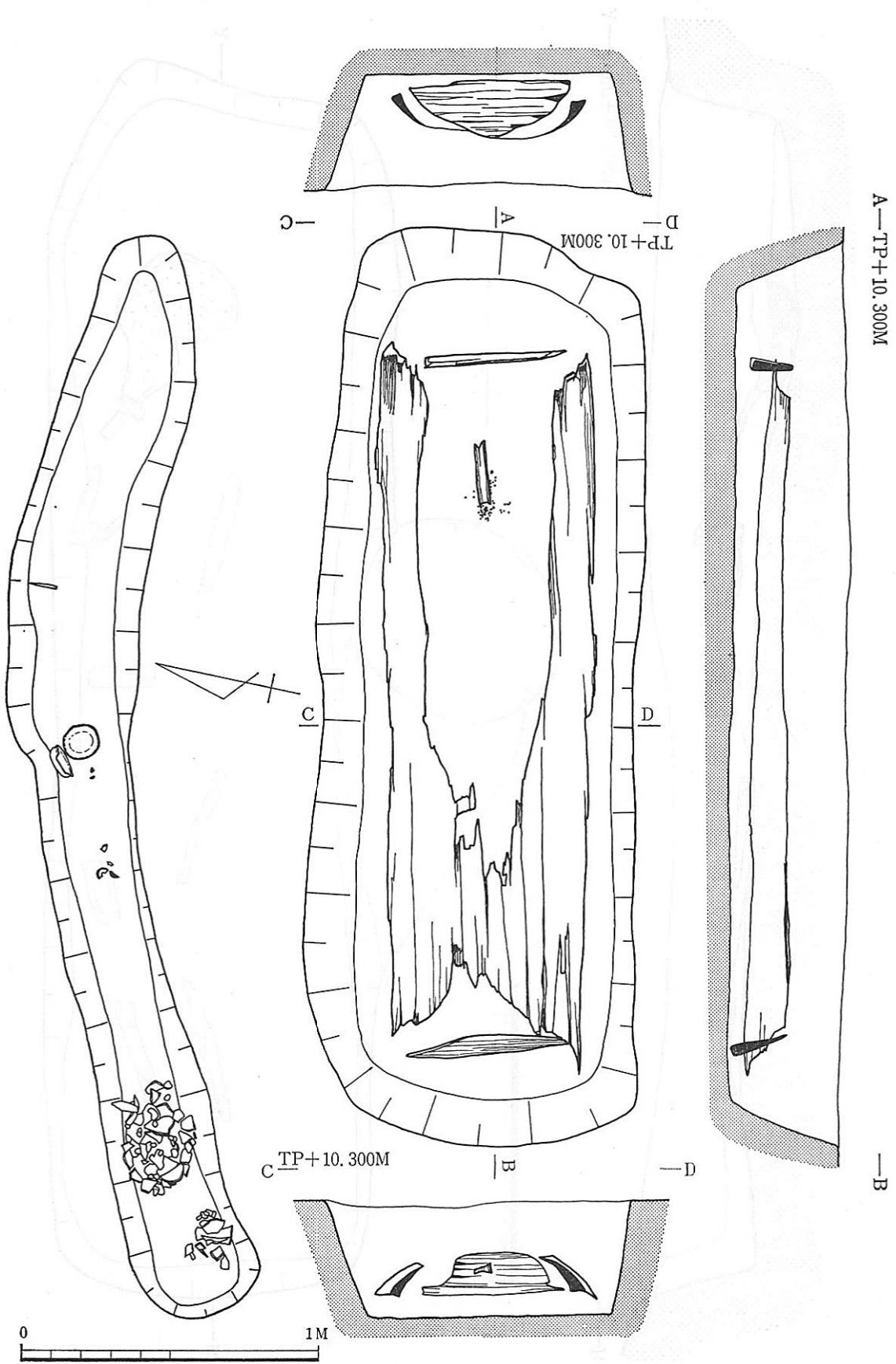
2号土塙墓は、20トレンチの中央部に位置し、木蓋土塙墓として注目される。22号墳の西に接する様に埋置され、主軸はほぼ東西を示す。土塙は、幅1.1m、長さ3.1m、深さ0.35mを計る。土塙内の土層は、①暗灰色粘土、②黒色粘土、③黄色粘土、④灰青色粘土、⑤暗青灰色粘土、⑥灰色粘土、⑦青灰色粘土である。第⑥層と第⑦層の間に腐蝕した木蓋の上部が残っている。土塙内に



第108図 2号土塙墓断面実測図



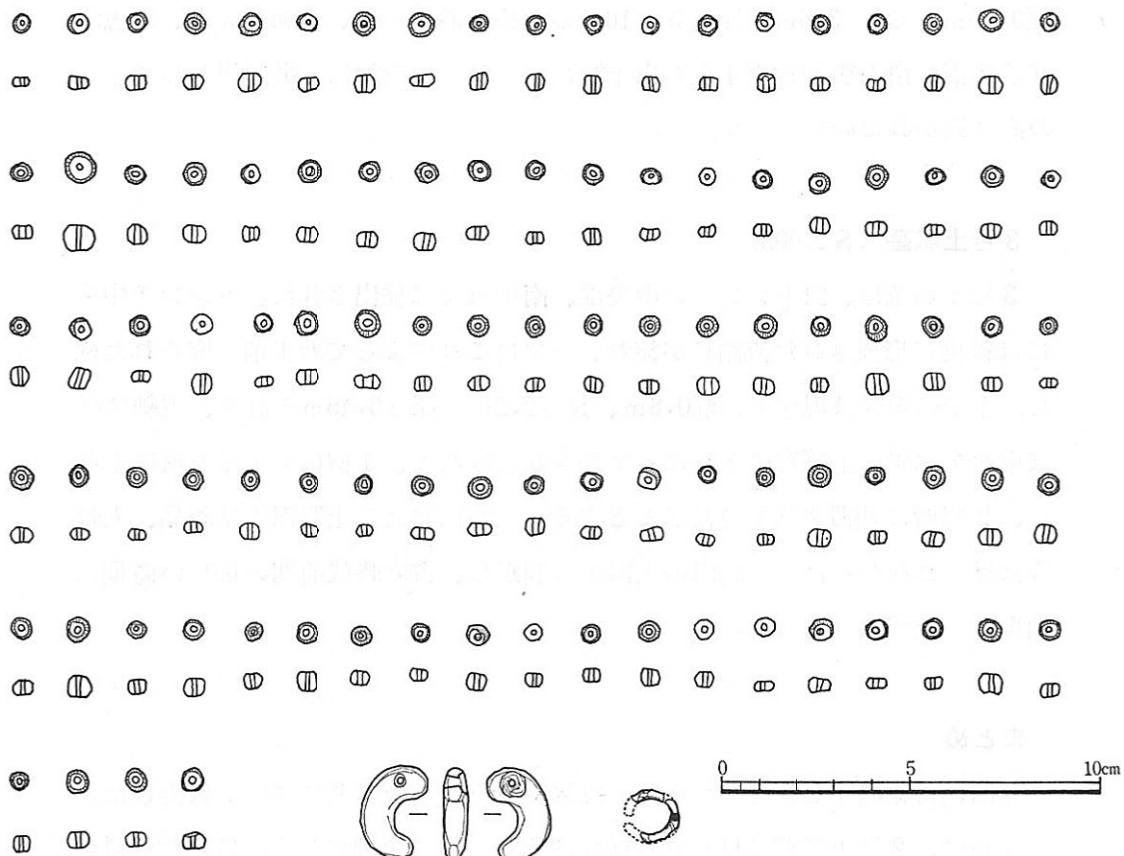
第109図 1号土壙墓実測図 (M52トレンチ)



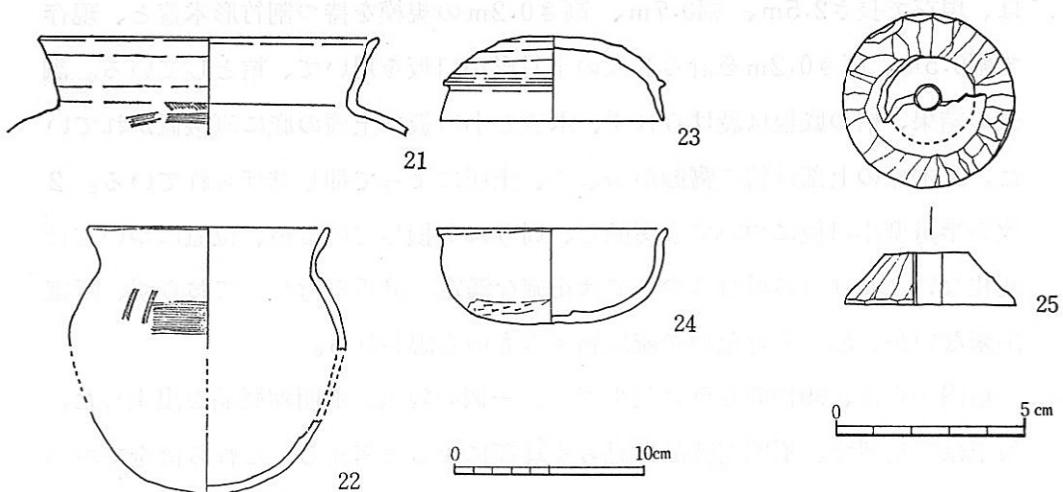
第110図 2号土壤墓実測図 (M20トレンチ)

は、現存で長さ2.5m、幅0.7m、高さ0.2mの規模を持つ割竹形木蓋と、現存で幅0.5m、高さ0.2mを計る2枚の半月形小口板を用いて、棺としている。調査の結果、棺の底板は設けられず、木蓋と小口板は土壙の底に直接置かれていた。又木蓋の上部は特に腐蝕が著しく、土圧によって押し拡げられている。2枚の半月型小口板についても腐蝕し、周りは欠損しているが、位置については変化ない。これらの材質については正確な鑑定、分析を行なっておらず、断定出来ないが、恐らく針葉樹系統に属するものと思われる。

棺内からは、99個のガラス製小玉と、一個の勾玉、不明銅製品を出土した。勾玉は瑪瑙製で、不明銅製品は恐らく耳環になると考える。これらは全て棺の東側より出土し、出土位置から判断すれば、被葬者は頭部を東にし埋葬されたと考えられる。



第111図 2号土壙墓内出土遺物実測図



第112図 2号土塙墓に伴う溝内出土遺物実測図

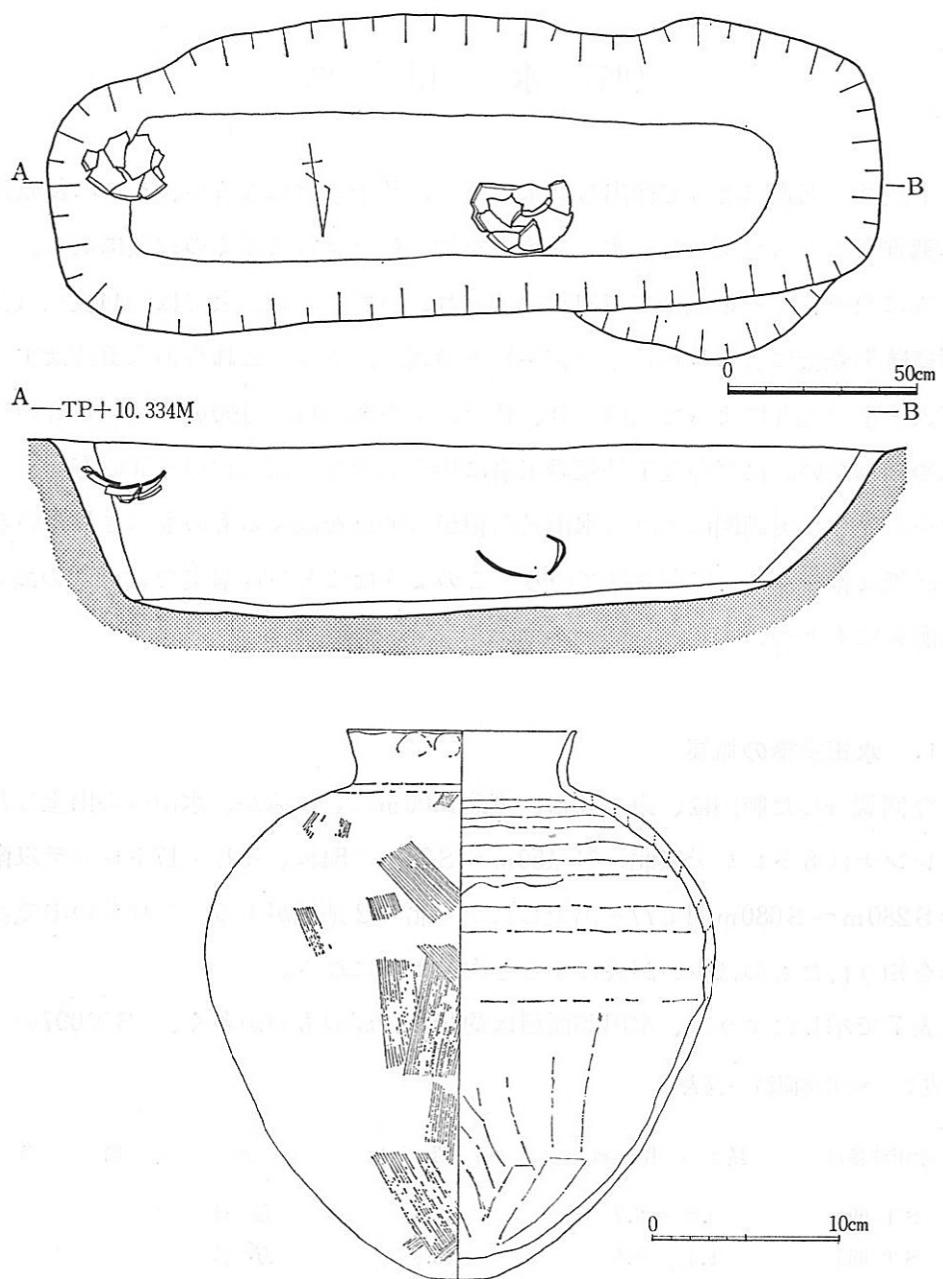
2号土塙墓の北隣りには、寄り添う様な形で東西に弓状の溝が検出された。幅0.35m、長さ3.6m、深さ5~10cmの規模の溝からは、土師器3点、須恵器壺蓋1点、滑石製紡錘車1点を出土した。これらの遺物は、供献用として、この溝に置かれたのであろう。

3号土塙墓 (S X 003)

3号土塙墓は、21トレンチの中央部、南壁近くに検出された。トレンチ中央には後世に形成された流路Cが流れ、土塙はこれによって若干削り取られた様だ。土塙の規模は現存で、幅0.8m、長さ2.2m、深さ0.45mを計り、主軸はほぼ東西を示す。土塙内にきわだった埋葬施設はなく、1個体の土器を縦に半截し、2個所に埋置されていたにとどまる。土塙内および土器内に副葬品、人骨等は見られなかった。土塙内の土器から判断し、古墳時代前期の新しい時期に相当する土塙墓と考える。

まとめ

今回の長原遺跡を調査した中で、内部施設を持つ土塙墓について報告した。とりわけ、2号土塙墓に見られる様な埋葬は、他に類例がなく、貴重な資料が得られた。今回の調査では、以上の3基の土塙墓以外にも、土塙墓と考えられ



第113図 3号土塙墓実測図及び出土遺物実測図 (M.21トレンチ)

るような遺構が若干検出されているが、断定出来ないため、特に号数を付けて説明する事をしなかった。これらの概略については、51トレンチ、52トレンチの説明を参照されたい。(杉本)

(四) 水田跡

本遺跡の調査によって検出した水田跡は百數十余枚になるが、これに長原遺跡調査会によって判明した水田跡枚数を加えればさらに多くの枚数になる。ちなみに当センターの調査で 131枚確認され、長原遺跡調査会では約44枚位（長原遺跡調査会による整理途中の結果）との報告がある。これらの水田跡はすべて大・小の畦畔によって区画され、個々の水田跡面積が $100m^2$ を超えるものは認められない。ただし地下鉄建設工事に伴う駅舎部の調査時の畦畔の方向、本数を復元した実測図によれば水田跡面積が $100m^2$ を超えるものも示されているが詳細な報告は後日に期されている。このようなことから本文では今回の調査の所見にもとづいて記述しておきたい。

1. 水田遺構の概要

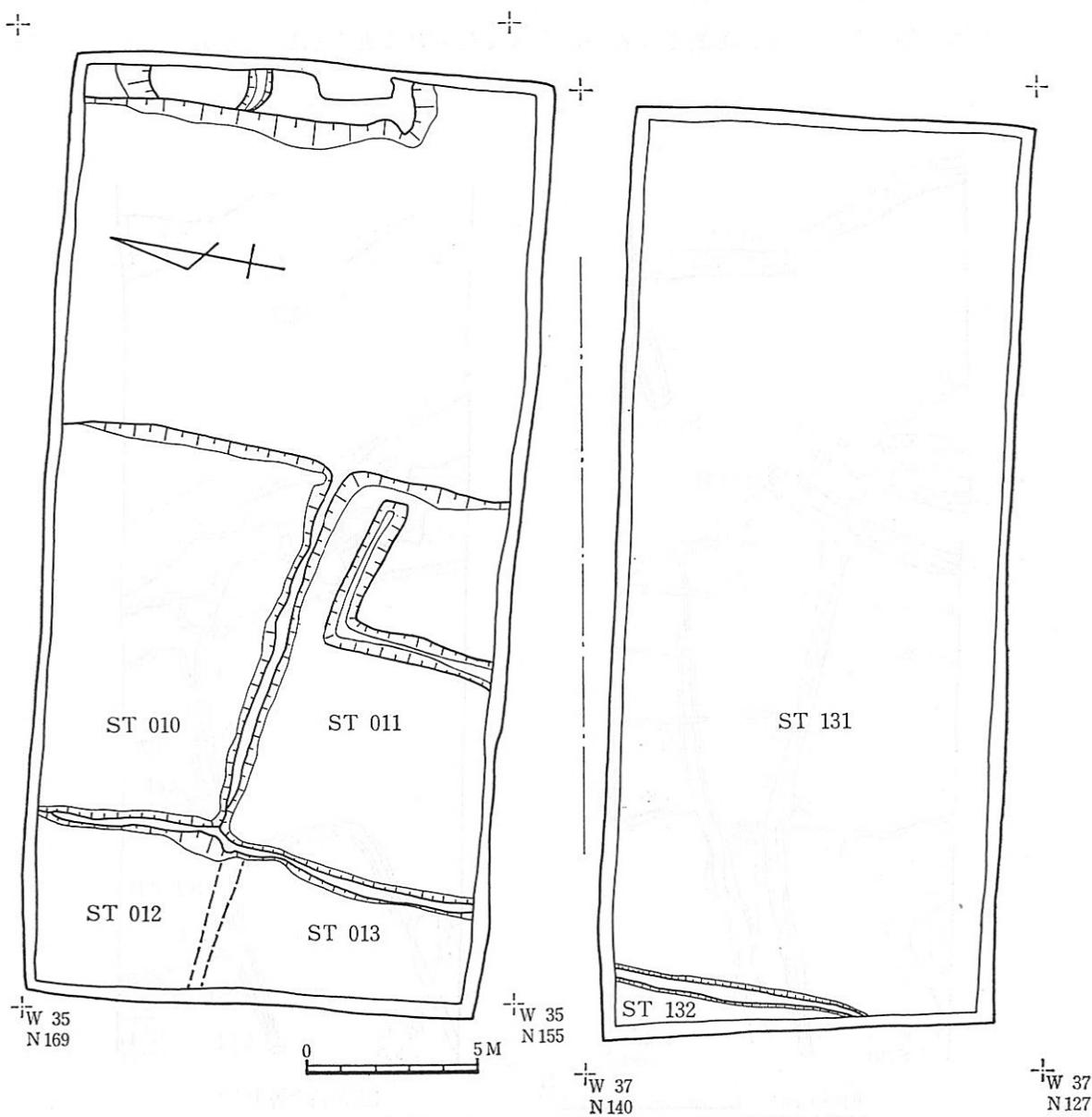
今回調査した範囲は、東西40m、南北1000mにおよぶが、水田跡の出土したトレンチは 8 トレンチ以北の N 150m～S 80m に54枚、そして 17 トレンチ以南の S 280m～S 680m 間で 77 枚出土した南・北の 2 地域がある。これらの中で全形を知り得たものは少いが表にすると次のようになる。

表 7 で示したように、水田跡面積は約40～70 m^2 のものが多く、ST 097 のよ

表 7 水田跡面積一覧表

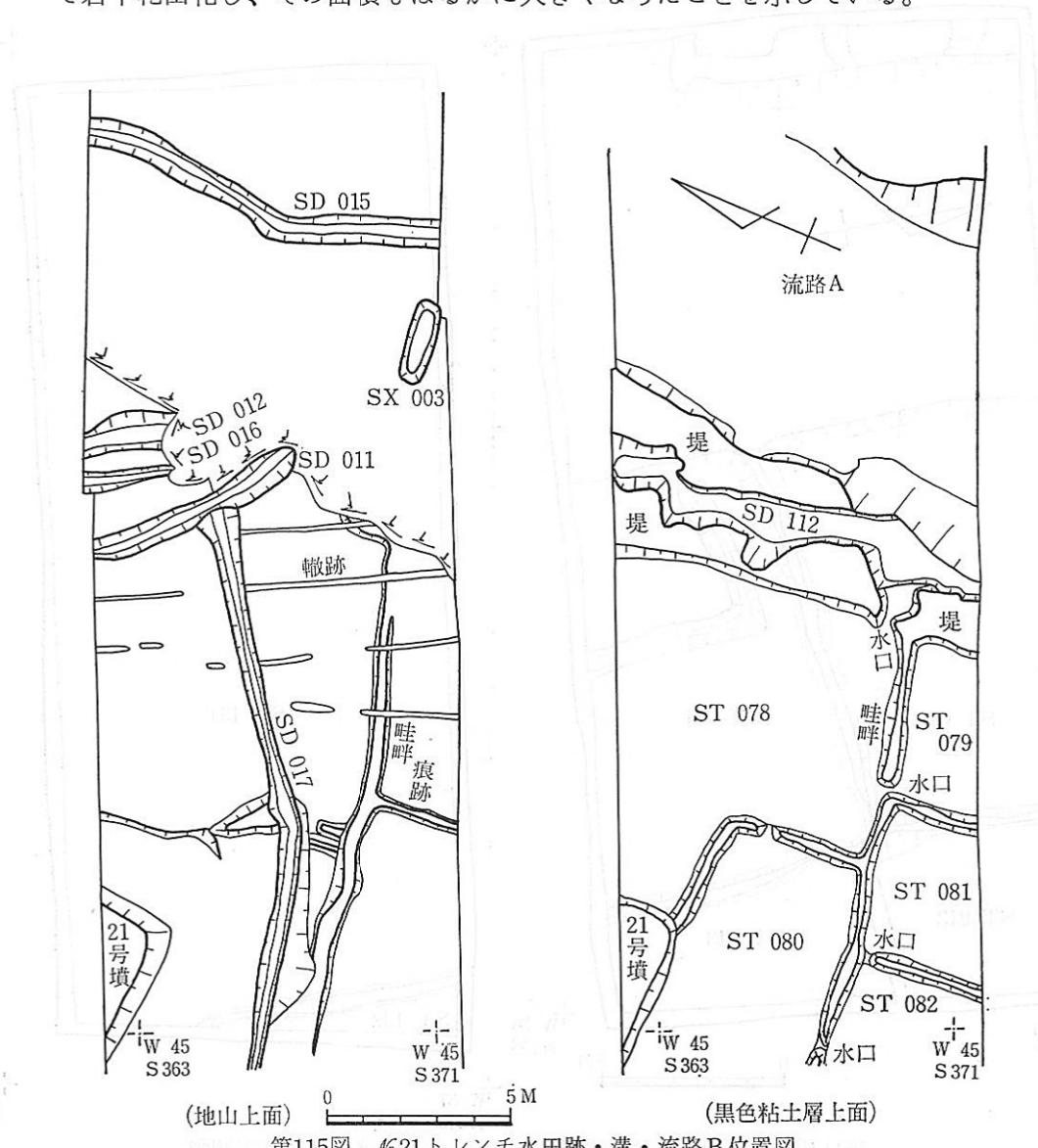
水田跡番号	長さ × 幅 (m)	面 積 (m^2)	形	備 考
ST 004	5.2 × 8.2	42.6	方 形	
ST 006	6.4 × 7.5	48.0	方 形	推 定
ST 007	5.9 × 9.1	53.7	方 形	
ST 039	8.1 × 8.6	69.7	台 形	
ST 066	7.2 × 5.5	39.6	五角形	推 定
ST 081	7.0 × 9.6	67.2	方 形	推 定
ST 096	6.5 × 10.8	70.2	方 形	推 定
ST 097	2.3 × 5.5	12.7	方 形	推 定

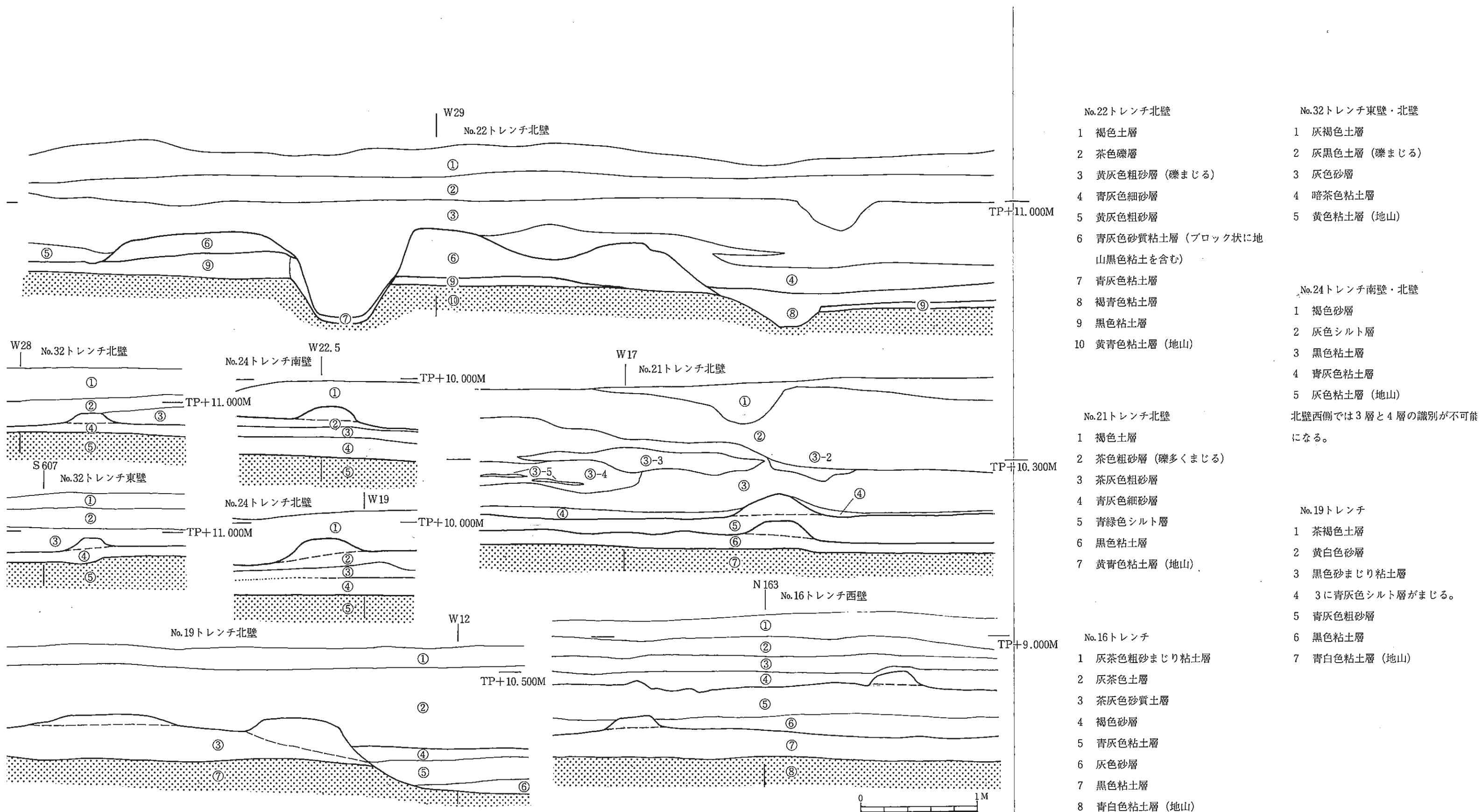
うに $12.7m^2$ のものもある。この表にした水田跡から、長原遺跡のすべての水田跡について判断するのは早計であるが、大略については知ることができ、古墳、水路の位置、傾斜の激しい土地の水田跡は、不整形で狭小な面積しかなく、やや低平な土地の水田跡（例 ST 001～049等）はほぼ方形のかなり整った形をし、面積も一定しているようである。このようなことは一時的なことでは



第114図 M16上層(左)・M15上層(右)トレンチ 水田跡遺構実測図

なく、第114図の左図のように水田が土砂で埋没した後、ただちに水田を作り直した場合も、方形のプランで、同面積程度になるように配慮したことを示している。しかし水田跡の土壤と額積は、16トレンチの場合、上層の水田跡は下層の水田跡より枚数が減り、しかもその一枚の水田中に小さな排水路が設けられて、以前より排水不良になった湿田とみられるのに対し、15トレンチの水田跡は下層が湿田だったのにたいし、土砂の堆積後、上層は排水がややよくなつて若干乾田化し、その面積もはるかに大きくなつたことを示している。





第116図 畦畔・溝・堤遺構土層断面実測図

2. 遺構の検討

水稻は成育期間中、多量の用水を確保することが秋の収穫時期の収量の多少を決定する重要な要素の一つであるといわれている。そのような用水を導入する施設として流路A、B—1・2があげられ、さまざまな溝がそのために掘削されたことが知られる。

第115図に示した図は、21トレンチの流路Aがつくられた前後を示す2時期の遺構である。これによると、古墳時代Ⅰの時にはSD011、012と畦畔痕跡があり小規模な灌漑排水路と水田跡が考えられる。そして、この時期の水田跡に最も強い影響を与えたものとして流路Bが考えられる。その後古墳時代Ⅱの時期ではこのトレンチにおいては、さらに前後の2時期が認められ、SD112が流路Aによって分断され、かつ、ST078、079の水田跡と畦畔が堤の下に埋め込まれた時期をもって区分することが可能である。以上のことから、水田跡のある遺構面を時期別に構成すると3期に区分することができる。

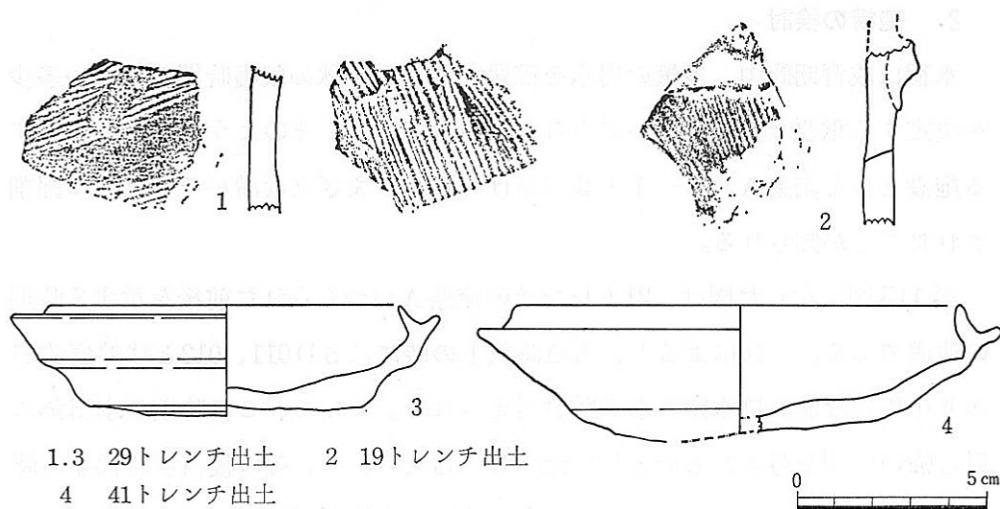
古墳時代Ⅰ

古墳群の築造と埋葬が終焉した後、流路Bの運搬してきた土砂と地山上部の黒色粘土層を利用して付近一帯を水田跡化しはじめた時期と考えられる。土壤は湿田特有の青灰色粘土層や黒色粘土層であり、これらの土層の堆積は浅く約10cm～15cmである。この後、土砂の堆積ごとに水田、畦畔が移動したと考えられ、特に、流路Bに沿った一帯は、地形的にみて谷間にあたるため青灰色粘土層、シルト層の堆積が数層観察できる。(第116図)

古墳時代Ⅱ（前半）

先の水田跡、溝が土砂で埋没し、これに流路B—1の氾濫も加わった時点で、新たな水田跡、溝の開削を実施したと考えられる。流路B—1はこの時点で幅約3m、深さ約1.5mと小さくなり、周囲には青灰色粘土層がさらに厚く堆積し周囲には湿田が展開している。溝ではSD012、015が廃棄され、SD112、105が新しく設けられ、ST078～082がこれにともなって作られたことが十分考えられる。

古墳時代Ⅱ（後半）



第117図 水田跡出土遺物実測図

流路Aは東・西岸に堤を設け、前のSD112、ST078、079等は流路Aによって切断され、堤に埋め込まれた。新しく掘直されたSD112は西側に堤を持ち、水田へ水があふれないよう工夫している。一方、ST078は流路Aに直接つながる水口をつくり、付近一帯の取水、排水の便を計っているのが注意される。そして、これらの水田はきわめて簡素な施設から成りたっており、堤、畦畔にしても、盛土作業だけであり、木矢板、木杭等の使用はなされていない。これらからして後半の時期は水田跡が拡大されたこともあるが、流路Bの細流化にともない新規に流路Aを掘削することによって用水の取水、排水を計るため設定したと推測される。

3. 水田の年代

出土遺物はTK209型式の須恵器が水田跡耕土中から2点、他に埴輪片が数点(第117図)出土した。一方、流路A、B、塚ノ本古墳周濠内に堆積した砂層と水田を覆っている砂層等からの出土遺物は飛鳥・奈良時代の遺物が多く、水田跡が荒廃、放棄されたのはこの頃と考えてよいだろう。年代についてはさらに検討を加えねばならないが、ここでは古墳時代後半を中心とした年代を考えるのが妥当であろう。(今村)

(五) 輻 状 遺 構

輻状遺構は、北から46、47、48、59、53、60、19、20、21、25、55トレンチで検出された。

48、55トレンチを除いてすべて地山面から検出された。

輻状遺溝はほとんど平行し、深さもほぼ一定している。間隔は1.5と1.6mが主である。方向も南北を軸に東西に少しふる程度で、古墳が検出される近辺に多くみられる。

輻状遺構とは、当然、車の存在を想定したことであり、平安時代には牛車を使用するが、それ以前の例はない。

これら長原遺跡で検出された遺構は1.5、1.6mの間隔をもって平行しているものほかに45トレンチで動物の足跡らしきものが、46トレンチでは、輻（間隔1.5m）の間に同様のものが、2カ所で検出されている。

以上のようなことから、輻状遺構は、一応輻であると考えている。

時期については、水田遺構面、削られた古墳の墳丘から検出されていることから、6～7世紀であると思われる。

他でみられる輻は、平城宮（1.5、1.6mの間隔）、長岡京（1.5mの間隔）、平安京がある。（寺川）

参考例

文献にみられる車

日本書紀 履中天皇の条に、車持君、車持部

雄略天皇の条に、輜車

考徳天皇の条に、轎車の記載がみられる。

鏡にみられる車

佐味田字貝吹宝塚古墳——尚方画像鏡

近江国野州郡野州町大字小篠原——陳氏作銘二神二獸車馬鏡

甲斐国東八代郡下曾根村字山本跳子塚——二神車馬鏡

がある。

(六) 流路・溝

流路（第118図）は便宜的に北からA、B、Cとする。流路Aは、20～23トレンチ、流路Bは、21トレンチ以南、29トレンチまで（26トレンチは掘立柱建物保存のため掘り下げなかったが、55、27トレンチの検出状況から明らかに存在すると思われる。）流路Cは、38～40トレンチで検出された。

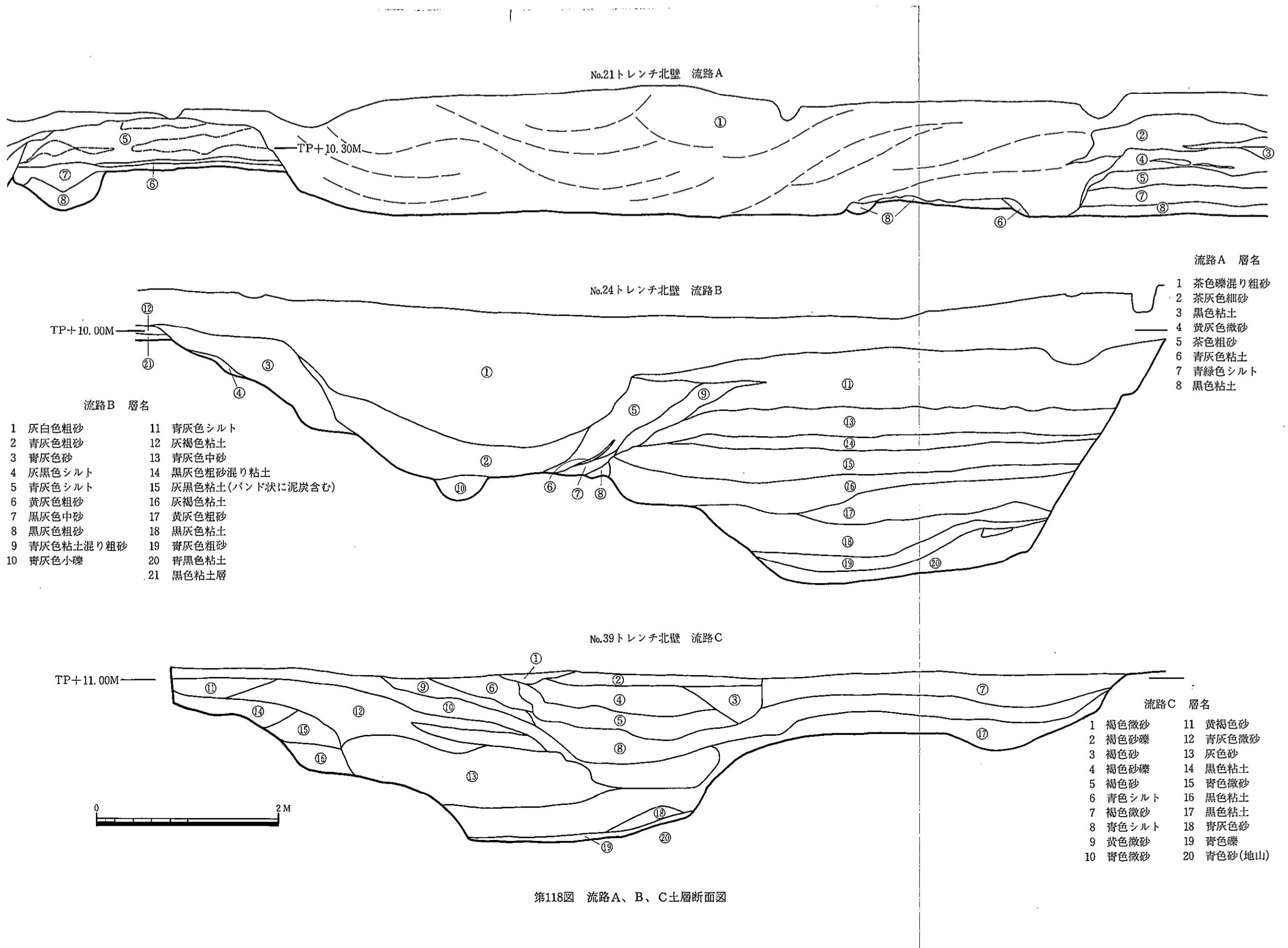
流路A

中世遺構面を掘り下げ、水田跡遺構となる青灰色シルトの上面で検出された。幅10m、深さ1mで、南西から北東へほぼ直線的に走る。流路の埋土は砂礫で、流路内だけではなく、トレンチの全面を覆う。

20トレンチ西側、21トレンチ西側、22トレンチ西側に、堤状の高まりが検出された。堤状の高まりを挟んで溝と水田跡があるが、この堤は、水田跡が造られてから盛ってあることは、堤の下から畦畔が検出されることからうかがえる。堤と水田跡と流路の関係については、堤を盛ることによって、流路から水田跡へ水が流れ込むのを防ぐということと、堤に一部水田と同レベルの所がみられ、水田から流路への排水、あるいは流路からの取水ということも考えられる。

つぎに流路が検出されるのは、黒色粘土を除去した地山面で、20トレンチでは23号墳、22トレンチでは18号墳を削り、23号墳にいたっては周溝の底を残すのみである。

21トレンチの流路内で地山を掘り込んだ土壙墓が検出された。この土壙墓から出土した土師器の壺は古墳時代の前期でも比較的新しいものである。流路内にそのような土壙墓を造るということは考えがたい、このことから流路は、古墳時代の前期には流れておらず、さらに、古墳2基を流路が削っていることなどから、古墳が造られたのちに、流れるようになったと思われる。



第118図 流路A、B、C土層断面図

流路B

流路Aとほぼ同様である。水田跡面で堤が存在するのは、22トレンチ西側、24トレンチ東側、25トレンチ東側、55トレンチ東側で、22・25トレンチの土手には流路Aと同様の一部低い所がある。

24-Bトレンチで水田跡が存在するときの流路は西側（B-1）を流れていて幅約5m、深さ約1.6mで、地山面（B-2）では幅約10m、深さ2.5mである。27トレンチでは流路の肩にあたる部分に、木が立ち枯れの状態で残っていた。方向は流路Aと平行しているが、25~29トレンチの間で蛇行している。

遺物等からみて、弥生末から古墳時代初頭にはすでに流れていたと思われ、奈良時代には流路に砂が流れ込み埋まったと考えられる。

流路C

流路は南西から北東へ走り流路A、Bとほぼ平行している。ここでは水田跡遺構は存在せず、堤状の高まりもみられない。地山面から検出されたこの流路は、幅10.2m、深さ約1.8mで段がつき、高い所では約0.6mの高さである。流路内の埋土の状態から見て何回かに分かれて流れていたことは窺えるが、流路Bのように幅を変えて流れていたとは思われない。

流路がどこから流れているかということであるが、これは東除川ではないかと考えている。東除川は大和川付替以前は北流しており、これに向って流路A、B、Cは走っている。地形的には、東除川は、高い所を流れ、流路は低い所に位置する。

遺物から古墳時代には流れていたと思われる。

溝（古墳時代I）

溝はSDで表し、明らかにつながると思われるものには同一の番号をつけた。便宜的に北から記述する。

SD001は、9から45トレンチに北東から南西へ走り、SD002、003、004がそれと交差して東西に走る。SD001から埴輪円筒棺（SL001）が検出され

た。SD004は、45トレンチにも一部かかっている。

SD005は、46トレンチの西端に一部かかり、47、6、48、5、49、4トレンチと続き、49から4トレンチにかけてはほぼ中央部を走る。7トレンチでは検出されていないが、46、47トレンチの状況からして、つづくものと推定される。

SD006、007と008は、共にSD005から北東へのびる溝として確認された。(SD006は推定)、SD007と008は間隔15mでほぼ平行する。SD008は、6トレンチで5号墳の周溝内、48トレンチで26号墳の周溝内を走る、これは古墳に規制を受けたか、あるいは、溝を掘る労力を省くためではないかと考えられる。

SD023は、17北トレンチを南から東へ、埴輪円筒棺(SL002)を切った状態で検出された。

SD009は、51、18トレンチを東西に走り、51トレンチでは中世大溝(SD210)に切られ、トレンチ中央で北へ曲がる。

SD010は、2、52、1トレンチを南北に走り、2トレンチではSD210に切られ、1トレンチでSD012と一緒になる。

SD011は、2、52、1、53、19、60、54、20、21トレンチで検出され、19、60トレンチの24号墳では周溝内を走り、21トレンチでは、これと分かれてSD017が東西に走る。21トレンチでは流路Aに切られている。

SD012は、1、53、19、54、20、21、22、23、24、25トレンチに検出され、1トレンチの10号墳、19トレンチの19号墳、23トレンチの15号墳、24トレンチの16号墳の周溝内を走る。21トレンチでは流路Aに切られ、SD011と、一緒になり、1から52トレンチの間で塚ノ本古墳の周濠に流れ込むと考えられる。

SD013は、1、53、19、54、20トレンチおよび、1トレンチでは塚ノ本古墳の周濠に流れ込むかのようである。19トレンチの19号墳、20トレンチの22号墳の周溝内を走り、20と21トレンチの間で、SD015に合流するとみられる。

SD014は、19、54、20トレンチで検出され、19トレンチで途切れ、20トレンチでSD015と一緒になる。

SD015は、54、20、21、22、23トレンチで検出され、20トレンチでは、埴輪円筒棺（SL008）が検出され、23トレンチでは15号墳の周溝内を走る。

SD016は、21トレンチで検出され、流路Aに切られている。20トレンチとの間でSD012と一緒になると考えられる。

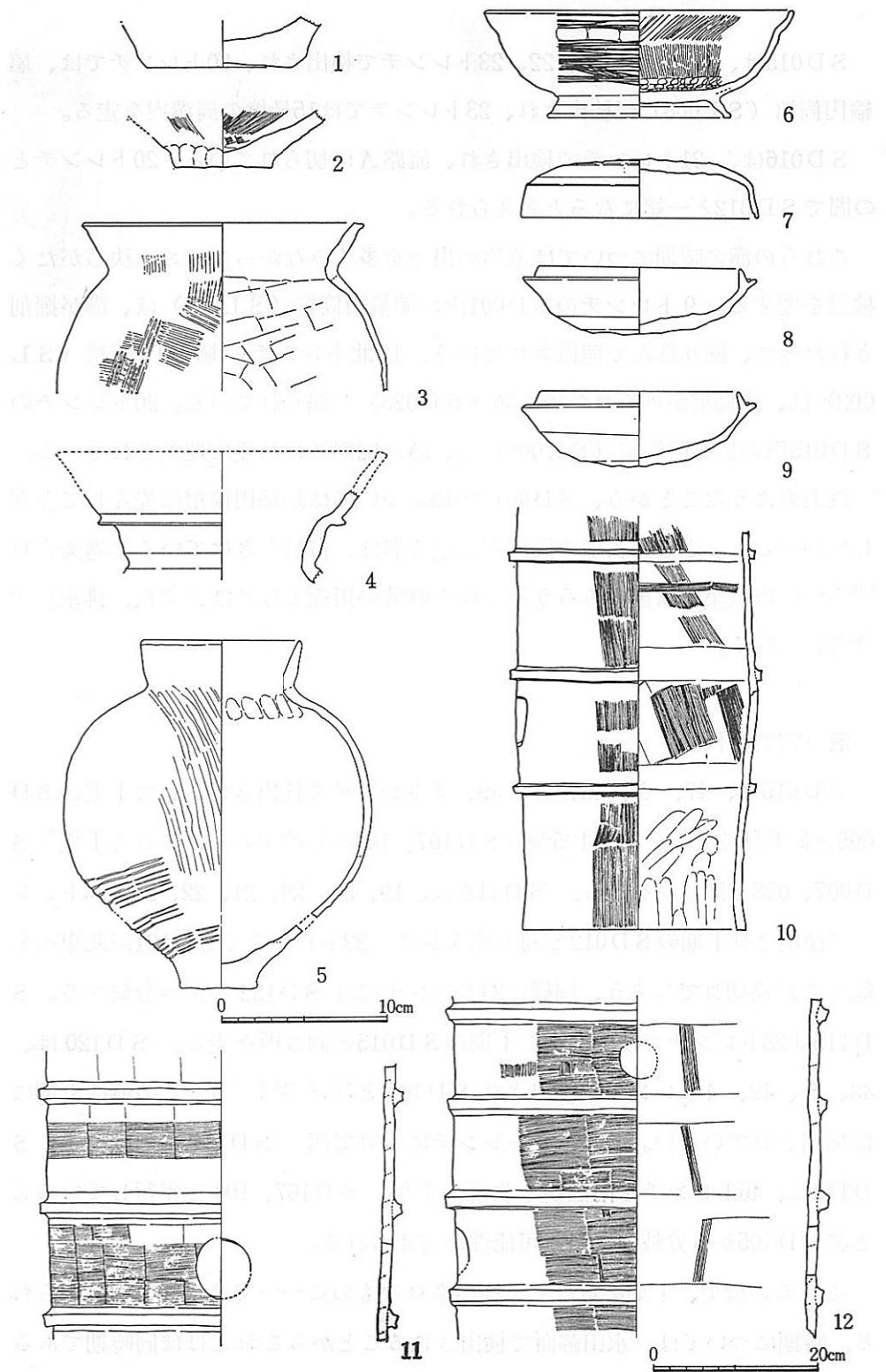
これらの溝の時期については遺物の出土を多くみなかったため、決しがたく検討を要する。9トレンチのSD001内の埴輪円筒棺（SL001）は、溝が掘削された後に、掘り込んで埋置されている。17北トレンチの埴輪円筒棺（SL002）は、円筒棺が埋られた後に溝（SD023）が掘られている。20トレンチのSD015内の埴輪円筒棺（SL008）は、溝が掘削された後に埋納されている。

以上のようなことから、SD001と015については埴輪円筒棺に先んじて存在していたこと、さらに古墳の周溝内を走る溝は、古墳をさけていると考えられ明らかに古墳築造以後であろう。これらの溝の用途としては、灌漑、排水が十分考えられる。

溝（古墳時代Ⅱ）

SD015は、47、6、48、5、49、4トレンチで検出されこれはⅠ期のSD005と同じ所を走る。SD105からSD107、108へ分岐するが、これもⅠ期のSD007、008と同じ所を走る。SD112は、19、54、20、21、22、23、24トレンチで検出されⅠ期のSD012と同じ所を走る。22トレンチでSD121が北東へ分岐するが途切れてしまう、同様に24トレンチではSD122が南へ分岐する。SD115は23トレンチで検出され、Ⅰ期のSD015と同じ所を走る。SD120は、48、5、49、4トレンチで検出されSD105とほぼ平行する。この溝はⅠ期には検出されていない。5から48トレンチにかけて西へSD119が分岐する。SD118は、46トレンチを南西から北東へ走り、SD107、108と平行していることでSD105から分岐している可能性が考えられる。

これらの溝で、Ⅰ期に重なって検出されるものについては再利用が考えられる。時期については、水田跡面で検出されることからこれとほぼ同時期であると思われ、用途としては、灌漑・排水が考えられる。（寺川）



第119図 流路、溝内出土遺物実測図 1～9は1：4縮尺 10～12は1：8縮尺

2. 円筒埴輪について

1. はじめに

長原遺跡では、古墳やその周辺から多くの埴輪類が出土している。現在では27基の古墳のうち19基から埴輪が検出されているし、8基の円筒棺にも10数個の円筒埴輪が使用されている。

ここでは、それらの埴輪類の中から各古墳に共通する円筒埴輪を抽出し、その類型化を試みることによって、長原遺跡の円筒埴輪の編年的考察を行ない、古墳群の関連性を考えるひとつの手がかりにしたい。

表8 円筒埴輪分類表

類	特 徴			該当する遺構
A 土師質 有黒斑	径30cm内外・シャープなタガ・外面タテハケを基調とする透し に円形、半円形、長方形がある。			塚ノ本古墳 S L 002、003、 005、006、 007
B 須恵質 無黒斑	B I 大形 (径45cm級)	台形のしっかりしたタガ、外面はタテハケ→ 断続的ヨコハケ調整。		8号墳 S L 001、004
		透しは円形。		7号墳 9号墳
	B II 小形 (径25cm級)	a 外表面調整タテハケ→一部断続的ヨコ ハケ		10号墳、15号墳 17号墳、25号墳
		b 外表面調整はタテハケのみ		2~5号墳 18号墳、24号墳 S L 008
		c 最下段のタガ調整が異なる		27号墳

表8に示したように、長原遺跡の円筒埴輪は全体的に5類に大別される。

分類表について説明すると、まず、大きな分類基準として、土師質で黒斑のあるものと、須恵質のものとに2分した。これは川西宏幸氏が以前に指摘している埴輪焼成法の違い、すなわち、窯窓採用以前と以後の違いを前提にしている。⁽¹⁾ B類は須恵質なので黒斑がないのが当然であるが、窓内での位置と焼成温度の違いで土師質の焼き上がりになっているものが多いため、そういう埴輪に関しては無黒斑であることが目やすとなる。

2. 円筒埴輪 A類

A類には現在のところ、塚ノ本古墳とその周囲の5基の円筒棺以外に該当するものがなく、細分化するにいたっていない。塚ノ本古墳の円筒埴輪は底径と口径に差が少ない筒形をしており、全体にシャープな作りである。タガの突出度が高く、器壁も1cm未満の薄さで、良質の胎土を使用している。胎土には金雲母が含まれているのが特徴的である。ハケ目も密なタテハケを丁寧に施している。口縁部が外反してタガ状を呈しているのもひとつの特徴である。このA類の時期に関しては、川西氏の考案された編年を参考にすると、外面調整がタテハケを基調としたI類（4世紀中葉）⁽²⁾に近いものとされるが、透しの形はII類（4世紀後半）以降のものであるなど、全体的にI類よりは新しい時期に製作されたと思われる。

3. 円筒埴輪 B類

B類は窯窓で焼成された円筒埴輪である。B IとB IIの違いは法量にある。B IはB IIと比較して2倍近くもある大形であり、B II aになると急に小形化し、退化が進む。

B類Iは径が45cm内外あり、高さは途中で切断したものばかりなので不明であるが、他の類例を参考にすると、おそらく1m近くあったものと思われる。タガのつくりは丁寧で、しっかりとした台形を呈し、ハケ目は1次調整のタテハケのあと、2次調整として断続するヨコハケを施している。タガ間隔が狭

く、口縁部にもタガがめぐらされている。

BⅡはBⅠと比較すると、小形化したばかりでなく、調整においても退化の傾向にある。全体的にタガが扁平になり、ハケ目も粗くなる。

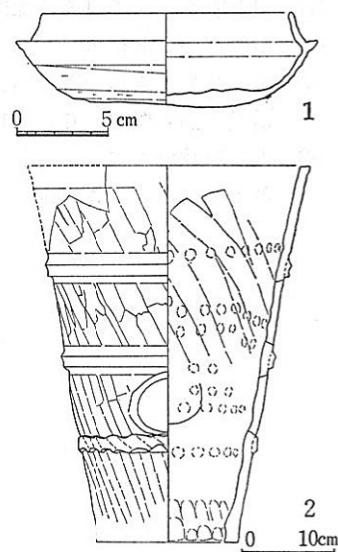
BⅡaはそんな中でもBⅠのなごりがあり、ハケ目の2次調整に断続的ヨコハケを用いているが、最下段まで及んでいない。7号墳と9号墳にはこのBⅠとBⅡaの両者があり、7号墳（第85図）では38と39がBⅠで36と37がBⅡaである。9号墳でも43がBⅠであり、残りのものがBⅡaに含まれる。このようにBⅠとBⅡaの間には時間的な差があまりみられず、共存していたと思われるが、工人集団の問題として、同一集団内での技法の変化によるものか、別の集団とのかかわりあいによるものかは、明確でない。

BⅡbはハケ目の2次調整がなくなり、1次調整のタテハケのみが施されている。A類と違って、単位のよくわかる粗いハケ目が下から上にむかってやや斜め方向に施されている。この類には底部を指でおさえて尖らせたもの、いわゆる底部調整された埴輪が多い。

BⅡcはbとほとんど同じ調整であるが、最下段のタガの調整が他のものと著しく異なっていることが特徴的である。これは川西氏によると、断続ナデ技法といって、粘土紐を指で器壁にはりつけただけで、指ナデをしない技法が最下段のタガのみに用いられている。この類例は岡山地方にみられる。⁽³⁾

大阪では蕃上山古墳などに使用されており、長原遺跡では27号墳の他に9トレンチの溝から出土した埴輪（第120図-2）と同じ手法が用いられている。⁽⁴⁾

B類には須恵器を伴出している例が多い。BⅠでは、8号墳から陶邑TK216型式の壺が検出されている。BⅡaにはTK208・23型式に属する須恵器が多く、BⅡbはTK47型式に属するものが多い。BⅡcには9トレンチの埴輪と伴出した



第120図 №9トレンチ溝出土
遺物実測図

須恵器坏（第120図一1）がある。これらの須恵器とあわせて考えると、B類は5世紀中葉から6世紀前半にかけて変遷が行なわれてきたといえよう。

4.まとめ

以上、おおまかにではあるが、長原遺跡出土の円筒埴輪について類型化を試みてきた。長原遺跡では最古と思われるA類の円筒埴輪は、4世紀末から5世紀中頃までの幅広い時期設定を行なわざるを得ない状態であるが、今後、A類の有黒斑の埴輪について資料を集め、さらに類型化を進めていくことが課題となろう。B類では、5世紀中葉のBⅠから6世紀に下るBⅡcまで大きく4段階の区分を行った。本古墳群の中での各古墳の相対的な前後関係について調べるためにには、この分類をさらに細分化していく必要を感じるが、今回はおおまかに区分にとどまった。また、各古墳の円筒埴輪の個体差や窯の問題などについて深く追求できなかったが、埴輪類が比較的まとまって出土した3号墳や、27号墳については、今後あらためて観察を行いたい。（猪熊）

参考文献

- (1) 川西宏幸「埴輪研究の課題」『史林』56—4 1973年
- (2) 川西宏幸（前掲書）
- (3) 岡山県教育委員会『岩田古墳群』岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報（6） 1976年3月
- (4) 大阪府教育委員会『外環状線内遺跡発掘調査概要・I—藤井寺市野中1丁目所在・蕃上山古墳・はさみ山遺跡—』大阪府文化財調査概要1972—10 1973年3月

3. 奈良時代・平安時代・鎌倉時代の遺構

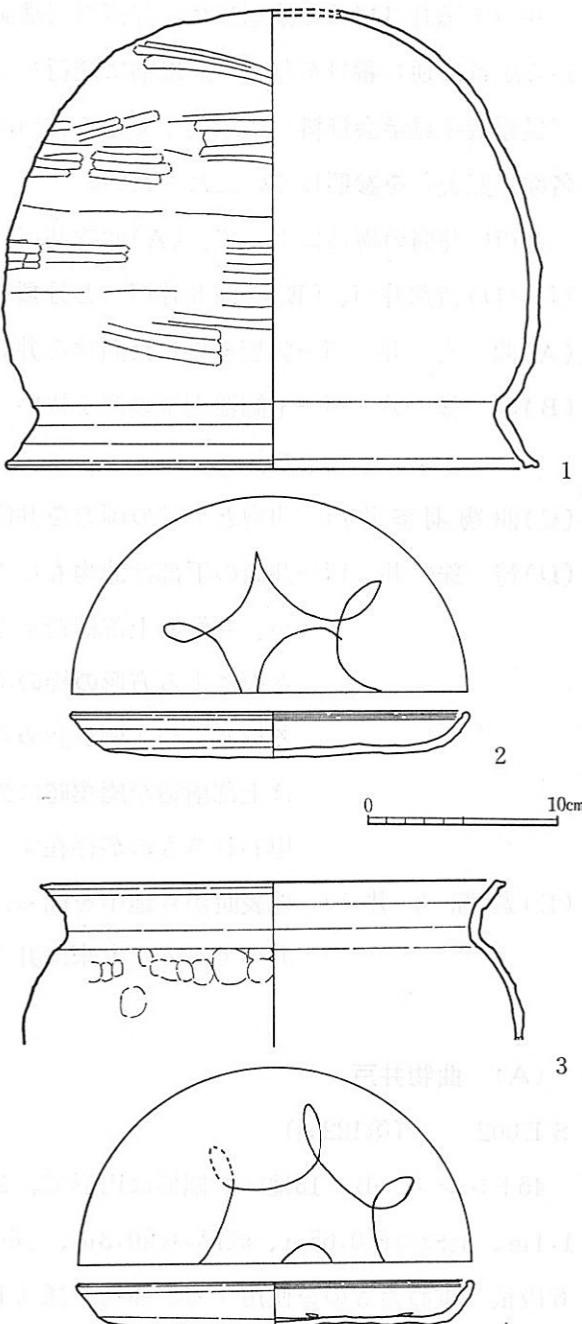
(一) 古 墓

今回の調査では、22トレンチから蔵骨器をもつ2基の古墓が検出された。調査時点の観察では、蔵骨器を埋めるために径30cmの穴を掘り、その中に皿と甕を組み合わせて埋葬していた。

その状況は皿を下に置き、その上へ、皿よりやや大きめの甕を上から覆いかぶせるようにしたものであることを知ることができた。

蔵骨器（第121図）に使用した土師器皿（2・4）甕（1・3）とも、奈良時代後半の遺物の特徴をしめし、皿は口縁端部を内に折り、底部外面には指おさえの痕跡をとどめ内面にはナデ調整の後、粗雑な螺旋暗文を施している。甕は砂粒を含む荒い器壁で、球形に近い体部にやや内巻ぎみの頸部と端部の肥厚する口縁部をもっている。

（今村）



第121図 蔵骨器実測図

(二) 井戸

井戸は総計 114基を確認した。井戸の遺構記号としては「S E」を付し、北から順番に通し番号を与えた。以前に発行している『長原遺跡調査速報』、『長原遺跡見学会資料』に記述している井戸に関しては、『井戸登録番号一旧名称対照表』を参照していただきたい。

井戸は井筒の構造によって、(A)曲物井戸、(B)羽釜井戸、(C)曲物羽釜井戸、(D)特殊井戸、(E)素掘り井戸と分類を行なった。

(A)曲 物 井 戸—底板を外した曲物を井筒として使用しているもの。

(B)羽 釜 井 戸—土師器羽釜の底を抜いたものを井筒として使用している。

(C)曲 物 羽釜 井 戸—曲物と羽釜の両方を井筒として使用しているもの。

(D)特 殊 井 戸—井筒の下部は曲物もしくは羽釜を使用したものであるが、井筒の上部構造をもつものである。方形の板枠、竹と板による方形の枠のある 2 例がある。その他に竹による柵をもつ 1 例が認められる。(A)、(B)、(C)の中には上部構造が廃棄時に外されたり、腐朽してしまったと思われるものが存在する。

(E)素 掘 り 井 戸—地表面から地中を掘ったのみで、井筒を使用していない井戸である。本来は井筒が存在したものも若干含む。

(A) 曲物井戸

S E 002 (第122図)

46トレンチ・B-13地区。掘形は円形で、2段掘されていた。掘形上縁の径 1.1m、上段の径 0.65m、底部の径 0.3m、深さは 1.1m である。井筒は曲物を 6 段積み重ねたものを使用する。曲物の径は上から、38、31、34、31、29、26 cm である。曲物の底板を割った長さ 0.25m 位の板を、2、3、4 段目の曲物の

外側に立てて「そえ板」としている。また同様の板を2段目と3段目の曲物の間に2カ所でかましている。それは2段目の曲物が3段目の曲物の径より小さいため、落ち込むのを防ぐためのものである。遺物は土師器、黒色土器、瓦質甕の破片及び種子が出土している。

S E 003 (第122・126図)

51トレンチ・B-8地区で検出。掘形は一部が膨らむ不整円形（一部は未掘）で2段掘を行っている。掘形上縁の径1.2m、底部は橢円形で長径0.6m、短径0.45mで、深さは0.4mである。本来の深さは0.5m以上と思われる。井筒は曲物が2段残存していた。曲物の径は上から38、33cmである。遺物は瓦器甕（1）、土師器羽釜、須恵質の鉢等が出土している。

S E 004 (第122・126図)

51トレンチ・B-8地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.7m、底部の径0.45m、深さは0.35mである。井筒は1段であるが、上部は腐朽しており、下部10cm程度のみ残存している。曲物の径は40cmである。遺物は瓦器小皿（1）、瓦器甕（2～4）、土師器小皿が出土している。

S E 010 (第122図)

51トレンチ・B-9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1m、底部の径0.5m、深さは0.6mである。井筒は曲物が1段残存している。曲物の径は43cmである。曲物の中に入っている板は、曲物の底板である。遺物は土師器羽釜の破片が出土している。

S E 011 (第122・126図)

51トレンチ・B-9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.2m、底部の径0.5m、深さ0.7mである。井筒は曲物が2段残存する。曲物の径は上から42、38cmである。1段目の曲物は桜の皮綴じ部分の外側に、5枚の板を立てている。これらの板が曲物の周囲を一周することではなく、したがってその機能については桜の皮綴じ部分の「はね止」と推定している。板は一番長いもので23cmである。遺物は土師器小皿（1）、土師器羽釜、瓦器甕のほか、曲物の底板の破片が出土している。

S E014 日鉢（第122・126図）
2トレンチ・B—9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1m、底部の径0.5m、深さ0.55mである。井筒は曲物が2段である。曲物の径は上から41、38cmである。遺物は土師器小皿（1）、土師器羽釜が出土している。

S E015 （第122・126図）

2トレンチ・B—9地区で検出。S E014を切っている。掘形は橢円形状で、上縁の長径1.15m、短径1m、底部は円形で0.4m、深さは0.8mである。井筒は曲物3段である。1段目は半分しか残存していないため径は不明、2段目の曲物の径40cm、3段目38cmである。遺物は瓦器碗（1・2）が出土している。

S E016 （第122・126図）

2トレンチ・B—9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.1m、底部の径0.5m、深さ0.9mである。井筒は曲物3段が残存する。曲物の径は上から38cm、31cm、26cmである。遺物は瓦器小皿（1・2）、瓦器碗（3・4）、土師器小皿・皿・羽釜が出土している。底部に遺物が多く認められた。

S E017 （第122図）

2トレンチ・B—9地区で検出。掘形は円形と思われるが、落ち込みによって半分切られており、正確な形状は不明。現存部の上縁最大径は1.2m、底部0.7m、深さは0.5mである。井筒は曲物が1段残存し、径は45cmである。遺物は出土していない。

S E042 （第123・127図）

17トレンチ・B—10地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.3m、底部の径0.6m、深さ0.5mである。井筒は曲物が3段残存する。曲物の径は上から42cm、3段目は逆台形状に変形しており最大径は29cmである。遺物は瓦質碗（1）、土師器小皿・皿のほか、1段目の曲物内に見られる瓦器小皿、河原石等が出土している。

S E044 （第123図）

52トレンチ・B—9地区で検出。掘形は円形で2段掘を行い、掘形下部は曲物がやっと入る程度の大きさに掘る。掘形上縁の径1.2m、中段の径0.47m、

底部の径0.35m、深さ0.65mである。井筒は曲物が2段残存する。曲物の径は上から38cm、34cmである。遺物は瓦器碗が出土している。

S E 060 (第123・127図)

19トレンチ・C-1地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.8m、底部の径0.55m、深さ0.2mである。井筒は曲物が1段残存し、径は29cmであり、上に曲物の破片が認められたが、同一個体のものであろう。遺物は土師器小皿(1)1点のみ出土している。

S E 062

19トレンチ・C-11地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.9m、底部の径0.65m、深さ0.6mである。井筒は曲物1段であり、径は37cmであった。遺物は出土していない。

S E 064 (第127図)

20トレンチ・C-2地区で検出。側溝中で確認したため掘形不詳。井筒は曲物が2段残存するが、曲物の腐蝕がはげしく取り上げることは不可能であった。遺物は龍泉窯系青磁碗(1)、土師器小皿、瓦質甕が出土している。

S E 067 (第123・127図)

21トレンチ・C-3地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.5m、底部まで掘り切っていないため、底部の径、深さは不明である。井筒は曲物1段が残存していたが、下部にはまだ存在したかもしれない。曲物は径48cmである。遺物は土師器小皿(1~3)、瓦器碗(4・5)が出土している。

S E 069 (第123図)

21トレンチ・C-13地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.2m、底部まで掘り切っていないため、底部の径、深さは不明である。井筒は曲物1段が残存している。曲物の径34cmである。遺物は全く出土していない。

S E 071 (第123・127図)

21トレンチ・C-3地区で検出。掘形は円形で、井筒は掘形の中央ではなく一方に寄り、その反対側は2段掘状に掘削している。掘形の上縁の径1.3m、底部の径0.4m、深さ1m弱である。井筒は曲物が5段であった。曲物の径は

上から40cm、38cm、33cm、29cm、26cmである。1段目の曲物は高さ6cm程度しか残存していない。遺物は瓦器小皿(1)、瓦器碗(2)、土師器小皿・羽釜、繩目平瓦等が出土している。

S E074 (第125・129図)

22トレンチ・C—3地区。掘形は楕円形と思われ、上縁の長径不明、短径1.3mで、底部は径0.35mの円形である。深さは0.7mであった。井筒は曲物が3段残存する。1段目の曲物は残存が悪く、高さ6cmしかない。曲物の径は上から43・41・33cmであった。遺物は瓦器小皿(1)・瓦器碗(2)、土師器小皿・皿、須恵質甕・鉢等が出土している。

S E075 (第123図)

22トレンチ・C—4地区で検出。掘形は大きな楕円形状で2段掘である。掘形上縁は長径1.8m、短径1.25m、底部は径0.9mの円形、深さ0.5mである。井筒は曲物が1段のみ残存しており、径は40cmであった。遺物は出土していない。

S E076 (第127図)

26トレンチ・C—14地区で検出。掘形は楕円形で、上縁の長径1.8m、短径1.5m、底部の長径1.3m、短径0.9m、深さ1.3mである。井筒は曲物が2段残存する。曲物の径は上から39cm、35cmである。遺物は土師器小皿(1)、瓦器碗(2)が出土している。

S E077 (第127図)

22トレンチ・C—14地区で検出。掘形は円形と思われる(半分は未発掘のため)、上縁の径1m、底部の径0.6m、深さ1mである。井筒は曲物が2段残存するが、曲物の径は不明である。遺物は土師器小皿(1)、瓦器小皿(2)、瓦器碗(3)が出土している。

S E079 (第124・128図)

23トレンチ・C—4地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.75m、底部の径0.5m、深さ0.5mである。井筒は曲物が1段残存し、径は39cmである。曲物内には、2枚の曲物片が落ち込んでおり、これは上段の曲物井筒のものかもしれ

ない。遺物は土師器小皿（1）、土師器皿（2）、木製櫛（3）、口縁部の折り返しのある土師器小皿等が出土している。土師器皿には内面に墨を落した様な痕跡が認められ、筆皿などの用途が考えられるものである。

S E 081 (第124・130図)

23トレント・C-5地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 1.2m、底部の径 0.6m、深さ0.6mである。井筒は曲物が2段残存する。曲物の径は上から38cm、37cmで、2段目の曲物は横半分に割れ少しづれている。曲物の底板を割ったものを「そえ板」として3カ所に使用している。一番長い47cmの板は、底部の地山に浅く打ち込まれている。他の2カ所の「そえ板」は1段目の曲物の下までしか入っていない。遺物は瓦器碗（1・2）、土師器小皿・皿等が出土している。

S E 086 (第124・128図)

24トレント・C-6地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 1.6m、底部は不明、深さは最下段の曲物の底まで 0.8m である。井筒は曲物4段である。曲物の径は上から41cm、38cm、36cm、4段目はくずれかかっているが径は30cm程度であろう。遺物は土師器小皿（1）、瓦器碗（2、3）、土師器羽釜、縄目平瓦等が出土している。

S E 087 (第124・128図)

24トレント・C-6地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 0.8m、底部の径 0.55m、深さは0.55mである。底部は平坦な面ではない。井筒は曲物2段が残存する。曲物の径は上から47cm、44cmである。遺物は土師器小皿（1）、瓦器碗（2）、緑釉土器、白磁、布目丸瓦、土師器羽釜等が出土している。

S E 090 (第124・128図)

24トレント・C-5地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 0.7m、底部の径 0.50m、深さ 0.4m である。井筒は曲物が3段であった。曲物の1段目は3～4重に巻いた状況で、これは数個体の曲物を合せて使用したと思われる。最大径は49cmを計る。2段目の径は41cm、3段目の径は32cmである。3段目の曲物は下から1/3位の所で、横方向に分割してしまっている。遺物は瓦器小皿（1）、

瓦器碗（2）、土師器小皿、灰釉陶器、瓦片が出土している。

S E092 (第124・129図)

24トレンチ・C—16地区で検出。掘形は不整円形で、井筒は掘形の中央ではなく一方に寄り、反対側は2段掘状の掘削をする。掘形の上縁の径 0.9m、底部は不明、深さは 0.6m以上と思われる。井筒は曲物が2段残存している。曲物は土圧などのために橢円形に変形しており、曲物の径は30~35cm程度のものである。遺物は瓦器小皿（1）、瓦器碗（2）、木製櫛（3）、土師器小皿・皿・羽釜、布目瓦等が出土している。

S E093

25トレンチ・C—6地区で検出。水田面で確認されたために、掘形は不詳である。井筒は曲物が1段（削られてしまっているため、高さ 1cm位しか残存せず）存在したことが判明した。遺物は土師器、須恵器甕の破片が少量出土している。

S E096 (第124・129図)

25トレンチ・C—16地区で検出。掘形は不整円形で、上縁の径 1m前後、底部の径 0.5m、深さは0.45mである。井筒は曲物が2段残存する。1段目の曲物は、2段目内に落ち込んでいるため径は不明。2段目の曲物は径 36cm を計る。遺物は土師器小皿（1）、土師器の墨書き皿（2）、木球（3）のほか、瓦器碗、土師器羽釜、白磁、須恵質の鉢等が出土している。墨書き皿は内面に墨で波状の文様を描き、外底面には墨書きされているがまだ判読していない。

S E097 (第124・128図)

55トレンチ・C—6地区で検出。3段掘により掘削している。掘形上段は径 1.9m の円形で、中段は 1辺 1.2m の隅丸方形状、下段は 1辺 0.75m の隅丸方形状の掘形である。深さは 1.2m であった。井筒は曲物 9段が残存する。曲物の径は上から 44cm、43cm、40cm、39cm、37cm、34cm、33cm、32cm、31cm を計る。そのうち 5、6段目の曲物は高さ 5cm位の短いものである。「そえ板」が 1枚、7、8段目の外側に立っていた。その板の長さは 26cm、幅 4.5cm で、これは曲物の底板を割ったものを使用している。遺物は土師器小皿（1）、瓦器碗（2・

3)、白磁碗(4)、土師器羽釜、瓦質羽釜、瓦器小皿、平瓦等が出土している。

S E101 (第125・129図)

26トレンチ・C-17地区で検出。S E104に切られている。2段掘により掘削している。掘形の形状は不明。底部の形状は円形で、径0.4m、深さは0.8mである。井筒は曲物が2段残存する。曲物の径は上から47cm(最大径)、39cmを計る。1段目の曲物は3重に巻いている。遺物は土師器小皿(1・3)、土師器皿(4)、土師器碗(5・6)、黒色土器(A)(8・9)、黒色土器(B)(7)と土師器羽釜、黒色土器小皿等が出土している。

S E102 (第125図)

26トレンチ・C-17地区で検出。掘形は不整橢円形で、上縁の長径2m、短径1.6m、底部は0.3mの円形である。深さは1mを計る。井筒は曲物が5段残存している。1段目の曲物は一部しか残っていないため径は不明。2段目からの曲物の径は38cm、37cm、35cm、27cmを計る。この井戸で特徴的なことは、15cm位の割合大きな石が曲物の外側および井筒内に多数入っていることである。1段目と3段目の曲物の外側の石は、曲物を設置するための台としている。4段目の曲物をとり囲む様に石を置いた状況も認められる。井筒内に石が入っているのは、井戸を廃絶する際、埋めるために落し込んだものと考えられる。この井筒内の石は、本来は地表面で井戸の周囲に敷いてあった「踏石」であるかもしれない。遺物は黒色土器(B)、土師器小皿・皿・羽釜、瓦質甕、須恵質の鉢、白磁等が出土している。

S E104 (第129図)

試掘トレンチ・C-17地区で検出。S E101を切っている。掘形は円形で、上縁の径1.3m、底部の径1.1m、深さは1.2mである。井筒は曲物が1段残存する。曲物の径は32cmである。遺物は瓦器碗(1)、土師器小皿・皿・羽釜、白磁等が出土している。

S E107 (第125・129図)

27トレンチ・C-17地区で検出。掘形は大きな円形で、上縁の径2.2m、底

部の径1.1m、深さ1.2mである。井筒は曲物が3段残存する。曲物の径は上から42cm、39cm、38cmである。遺物は土師器小皿（1～5）、土師器皿（6）、瓦器碗（7）、土師器甕、瓦質甕、縄目平瓦等が出土している。

S E112 (第125・130図)

試掘トレンチ・D—12地区で検出。2段掘により掘削している。掘形は大きな円形で、掘形の上縁の径2.6m、底部は橢円形で長径1.4m、短径1.0m、深さは1.4mである。井筒は曲物が1段残存しているが、本来は数段組んでいたと思われる。遺物は土師器小皿、瓦器小皿・碗、黒色土器、白磁、丸瓦等が出土している。

S E113 (第125・130図)

34トレンチ・D—12地区で検出。3段掘により掘削している。掘形は方形で上縁の1辺1.6m、底部は曲物よりやや大きい程度の径0.4mの円形、深さは1.5mである。井筒は曲物が6段残存している。曲物の径は上から43cm、41cm、38cm、34cm、33cm、31cmを計る。この井戸で特徴的なことは竹管を4本立ててあることであった。竹管は径5cm程度で、2段目の曲物の深さまで入っている。竹管と曲物は10cm程度間を置き、方形に配置している。これは「そえ板」などの用途とは思われず、井筒の上部構造もしくは、地表面の屋根などが考えられるが、推定の域を出ない。また3段目の曲物の下部には木の棒を2本渡してある、これは曲物が変形するのを防ぐためと思われる。その他に、5・6段目の曲物の接合部分には、3ヵ所に木片をかましている。遺物は土師器小皿（1・2）、瓦器小皿（3）、土師器皿（4）、瓦器碗（5～8）等が出土している。

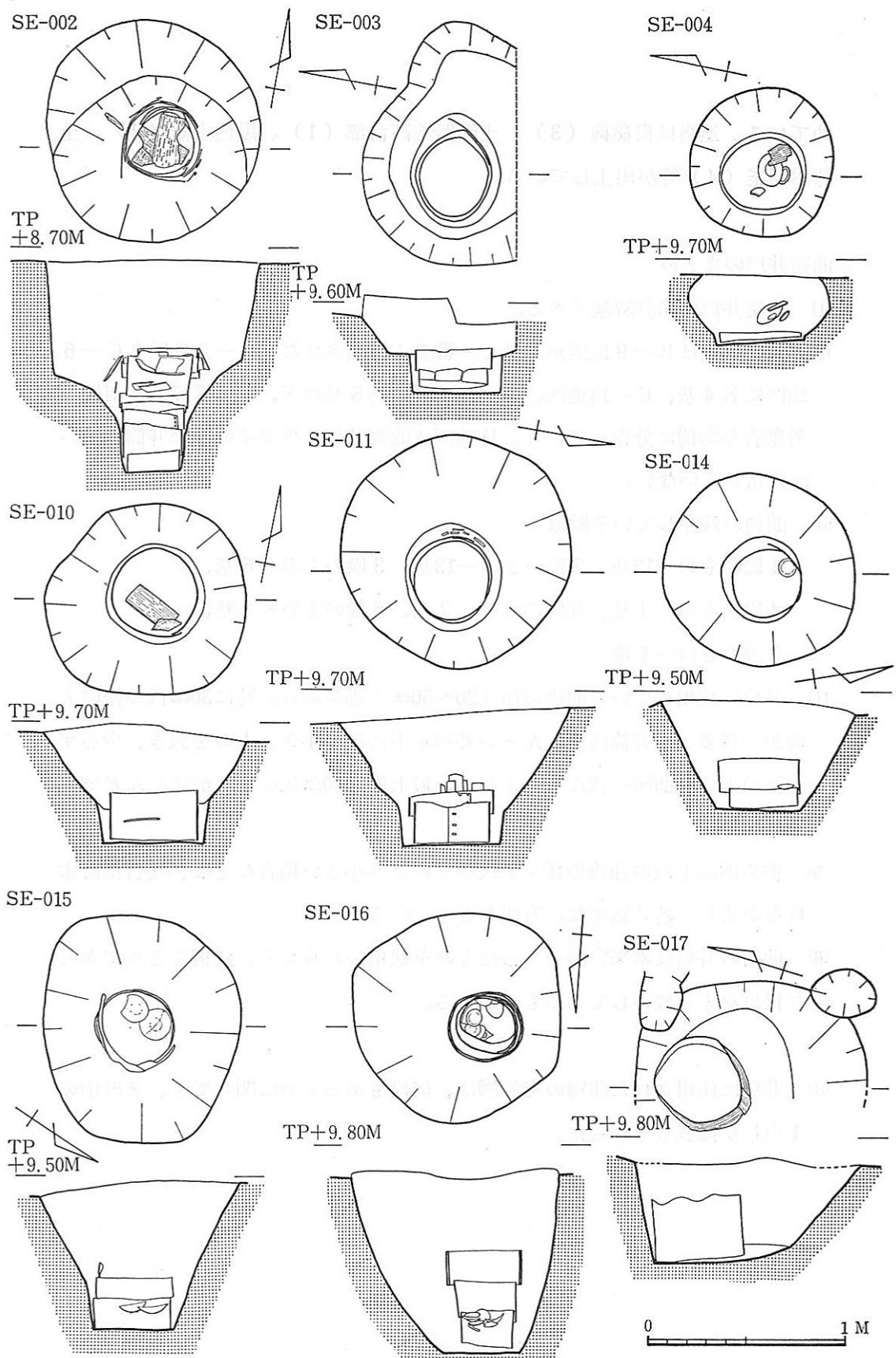
S E114 (第125・130図)

35トレンチ・D—2地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.55m、底部の径0.5m、深さ0.5mである。井筒は曲物が2段残存している。曲物の径は上から41cm、37cmを計る。上部壁面には小石が張り付いていた。それは意図的に壁に小石を張り付けて井筒としたものか、本来最上段にもう1段曲物があって曲物をすえた後に周囲に小石を詰め込んだか判断出来ない。底部には小石を敷きつ

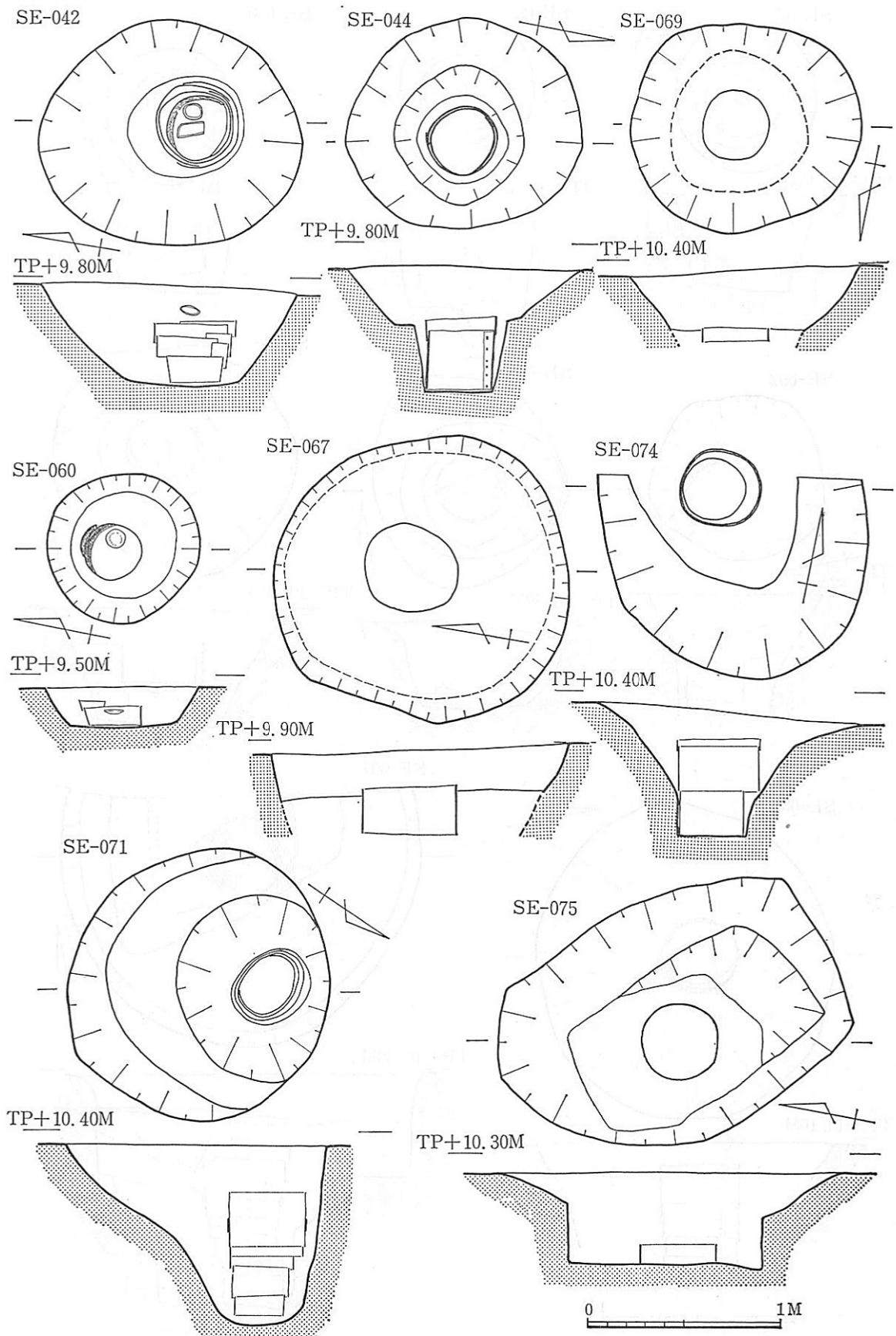
めている。遺物は白磁碗（3）、土師器碗高台部（1）、黒色土器（2）、土師器羽釜（4）等が出土している。

曲物井戸のまとめ

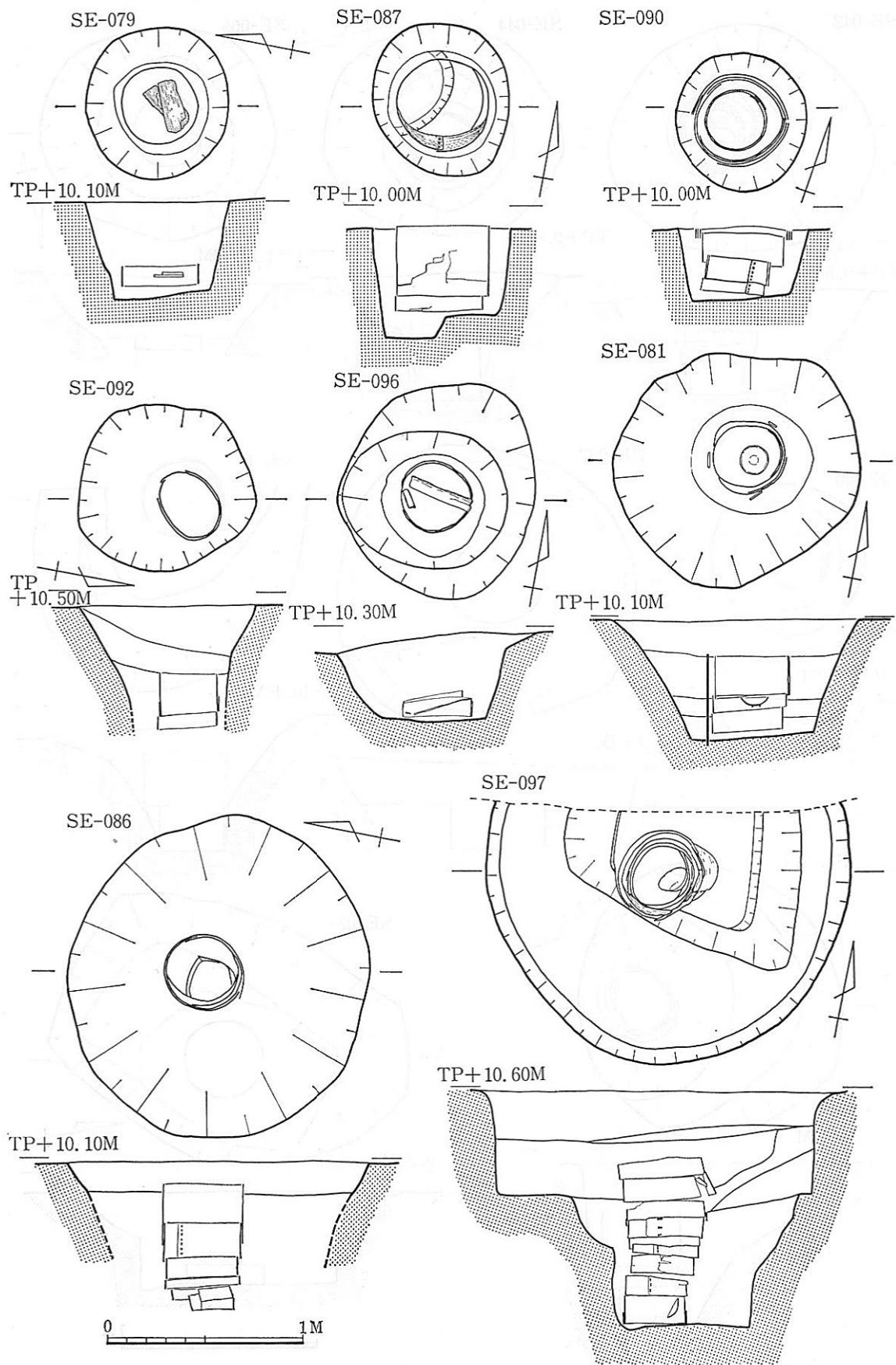
- (1) 曲物井戸は総計37基である。
 - (2) 曲物井戸はB—9地区が7基で一番多く検出された。C—3地区とC—6地区に各4基、C—14地区、C—17地区に各3基など、C地区では、南端以外割合平均的に分布している。D地区は曲物井戸だけでその他の井筒の井戸は分布していない。
 - (3) 曲物が残存している段数
1段のもの—12基、2段のもの—13基、3段のもの—6基、
4段のもの—1基、5段のもの—2基、6段のもの—2基、
9段のもの—1基
 - (4) 井筒に使用している曲物の径は20~50cmと幅がある。特に30cm代の径のものが一番多い。井筒はほとんどの井戸が下に径が小さいものを置き、少しづつ径の大きい曲物を積んでいくため、最上段は40cm代のものがほとんどである。
 - (5) 例外的に上段の曲物の径が下段のものより小さい場合などは、接合部に木片をかまして落ち込まない方法をとっている。
 - (6) 曲物の井筒は本来容器であったものを転用したらしく、底板をとめてあつた目釘などの残存しているものがある。
- （注）井筒に使用された曲物の実測図は、何段もあるものに関しても、その中の1点しか掲載しなかった。



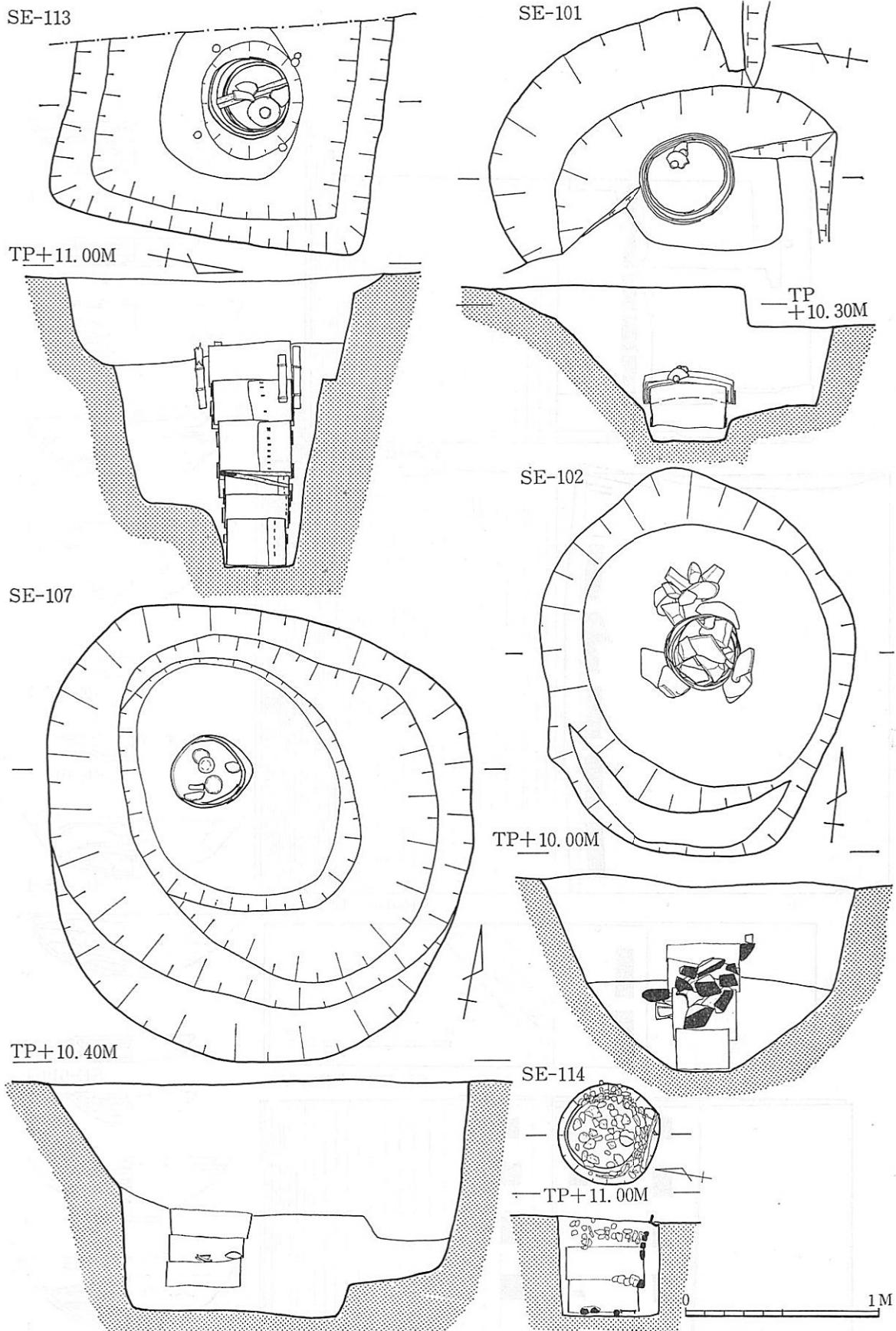
第122図 曲 物 井 戸 実 测 図



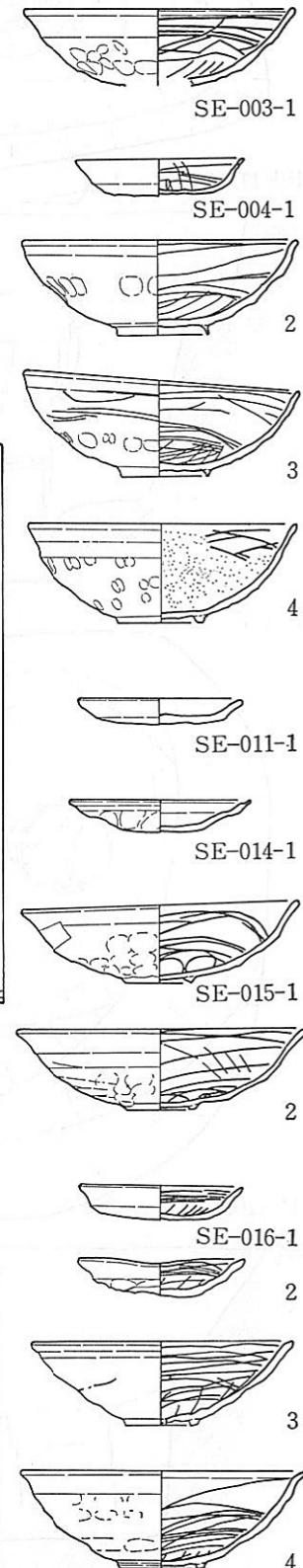
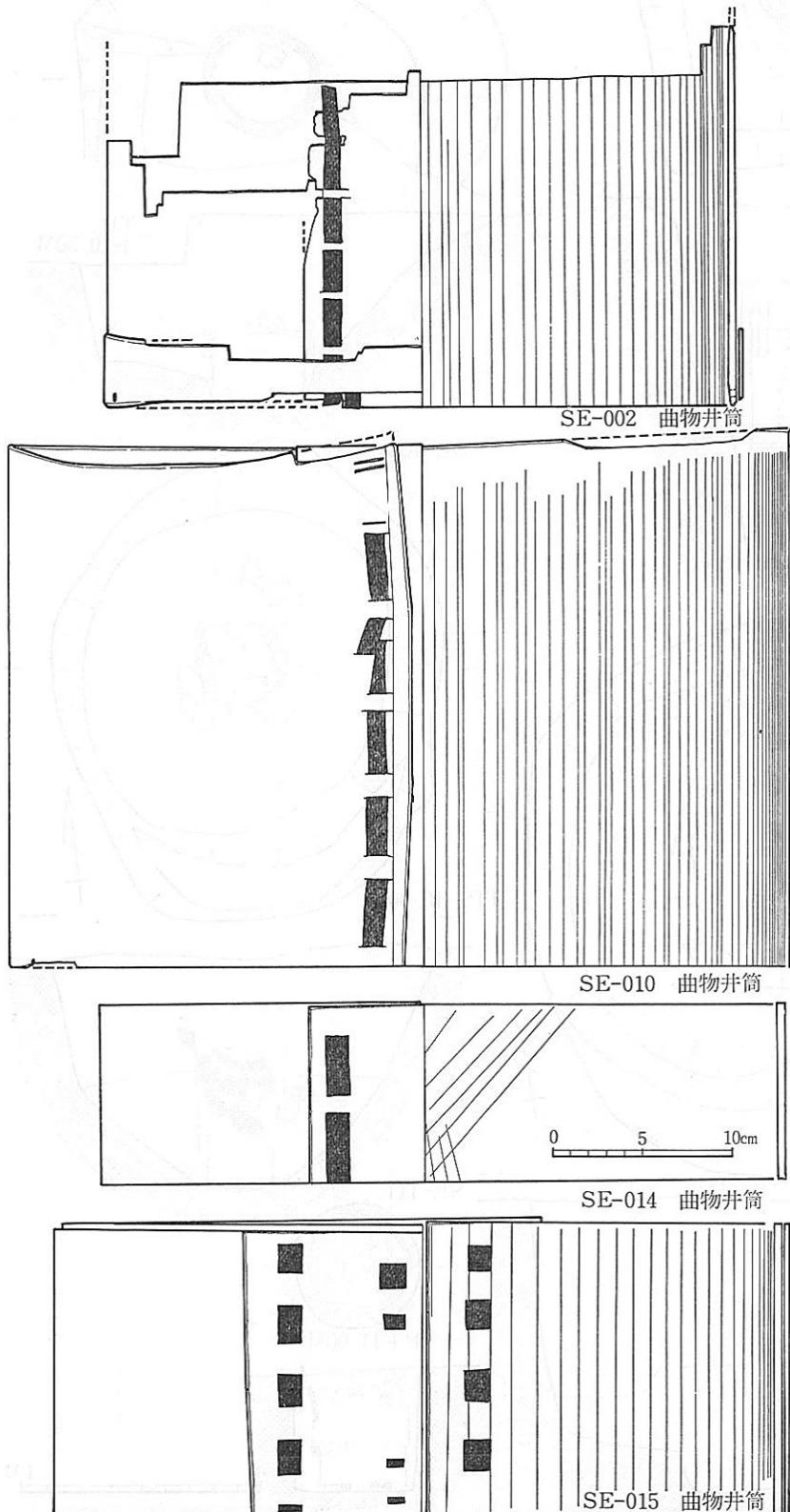
第123図 曲物井戸実測図



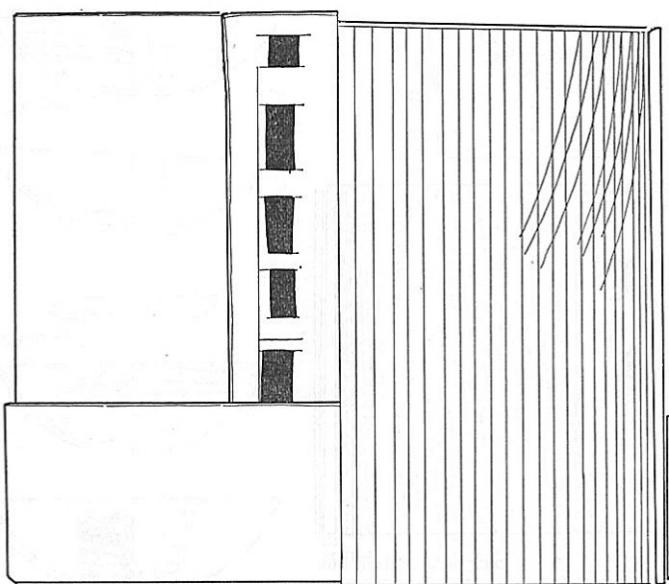
第124図 曲 物 井 戸 実 測 図



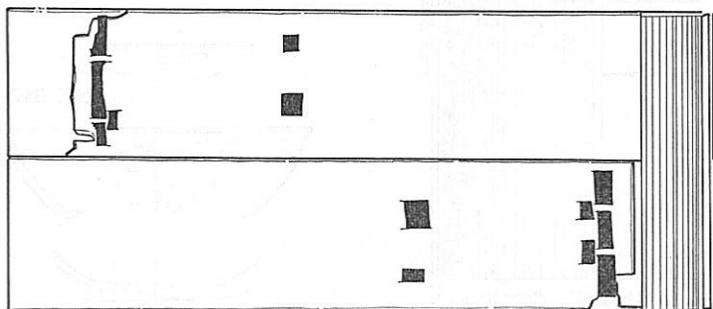
第125図 曲 物 井 戸 實 測 図



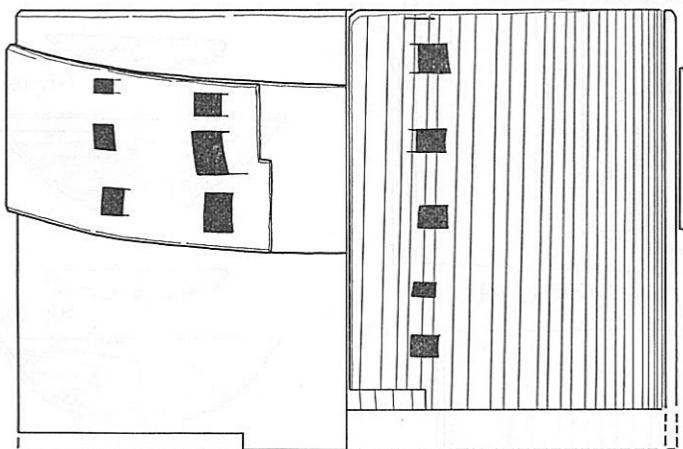
第126図 曲物井戸出土遺物実測図



SE-044 曲物井筒



SE-062 曲物井筒



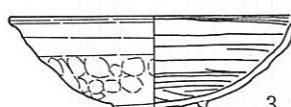
SE-076 曲物井筒



SE-077-1



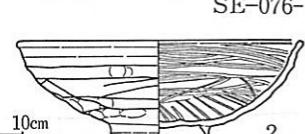
2



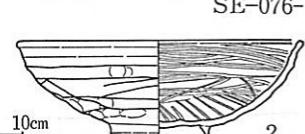
3

10cm

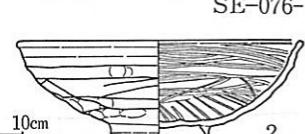
5



2



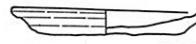
SE-076-1



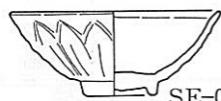
2



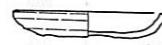
SE-042-1



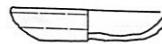
SE-060-1



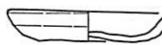
SE-064-1



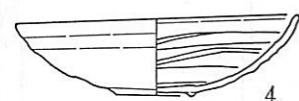
SE-067-1



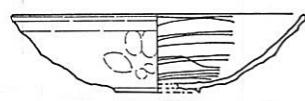
2



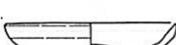
3



4



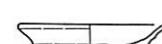
5



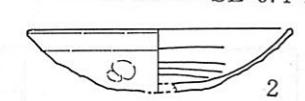
SE-071-1



2



SE-074-1

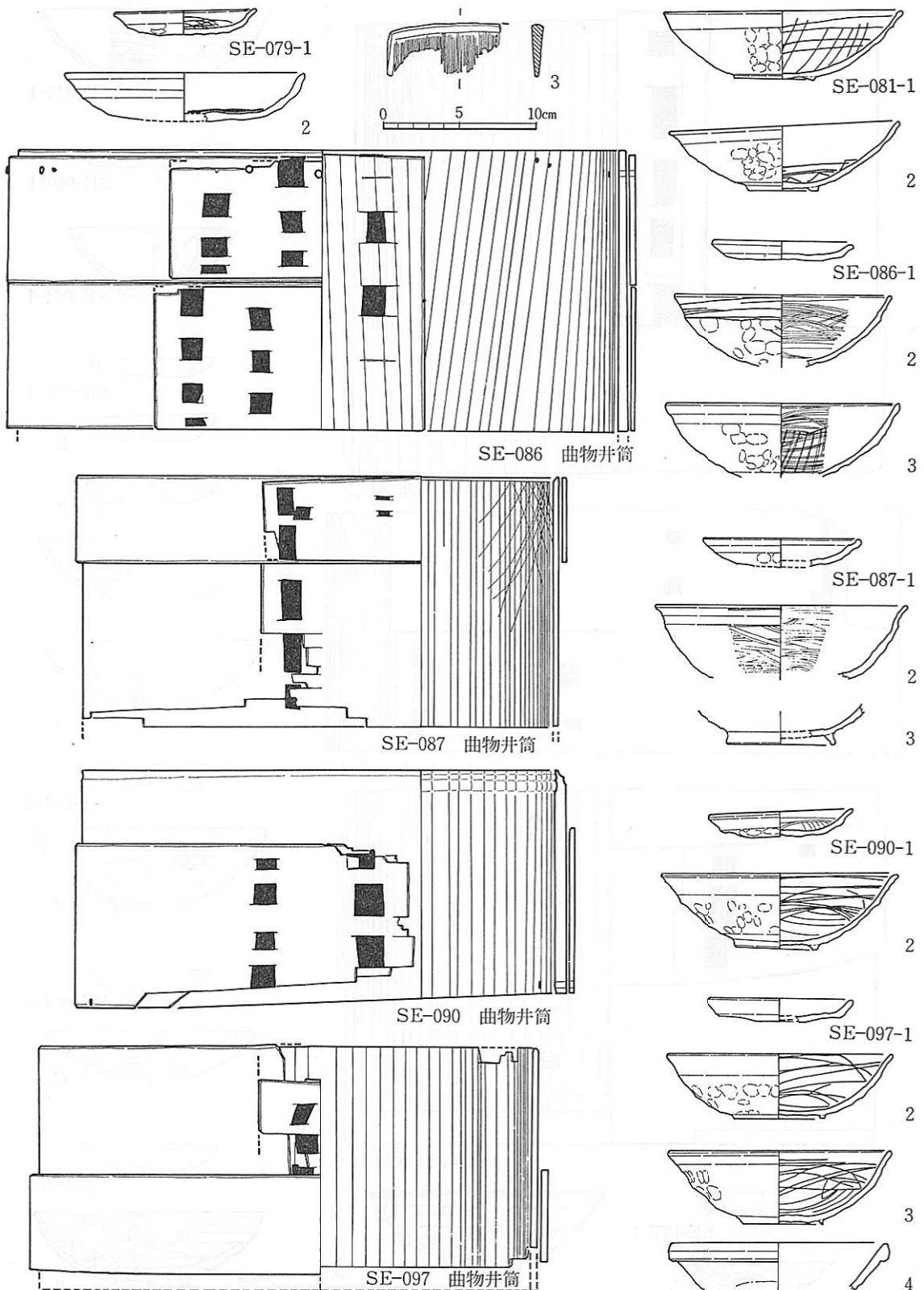


2

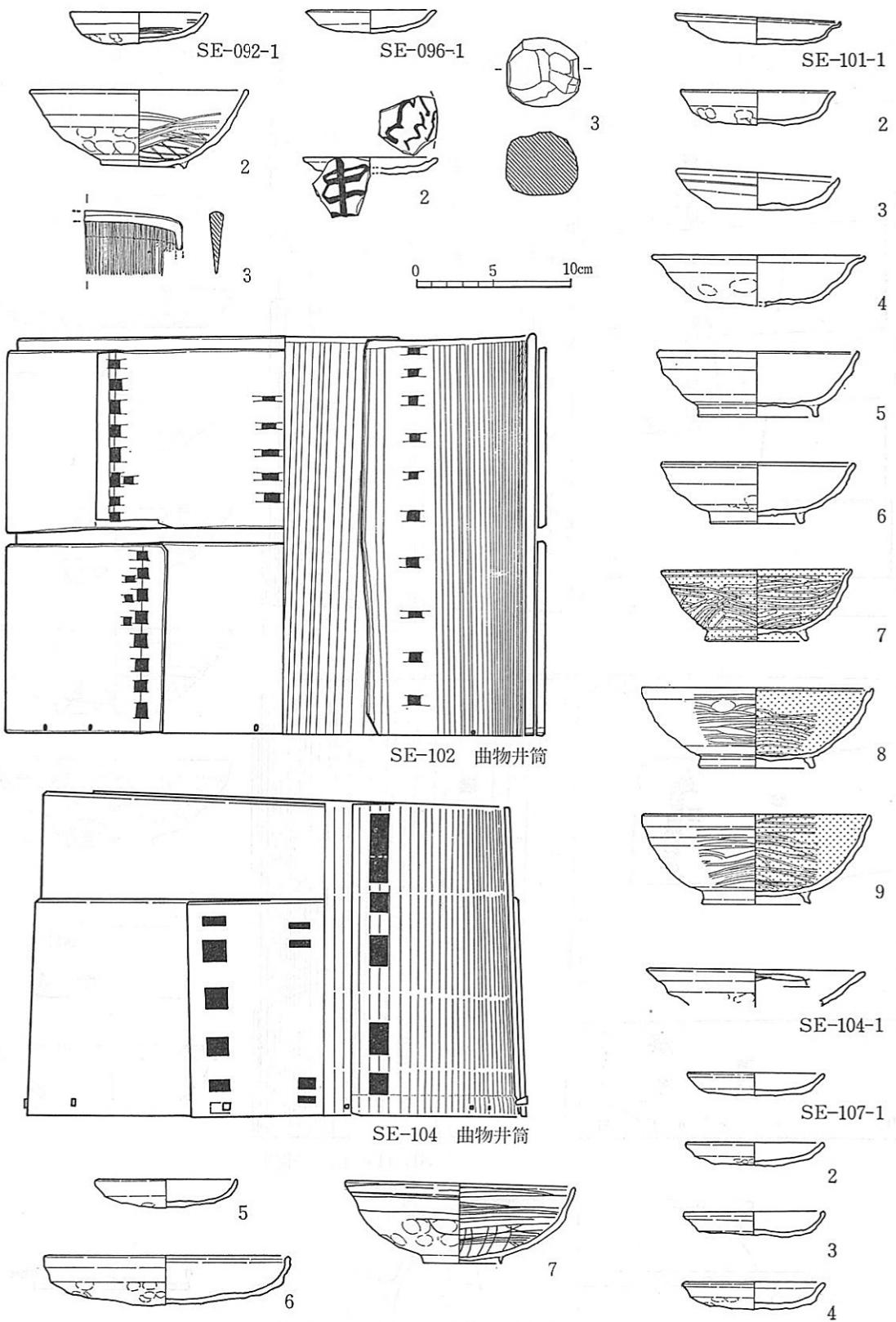


SE-076-1

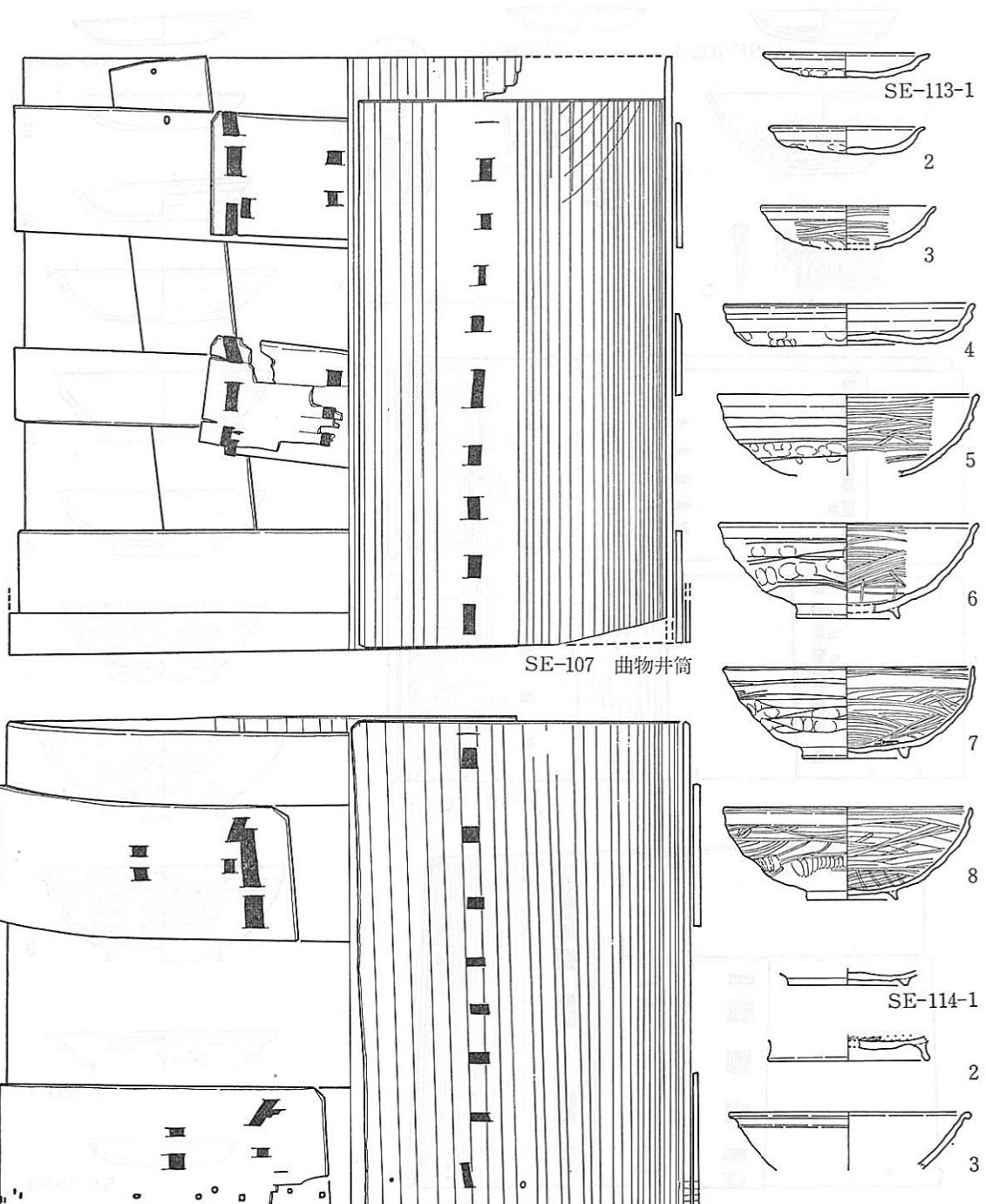
第127図 曲物井戸出土遺物実測図



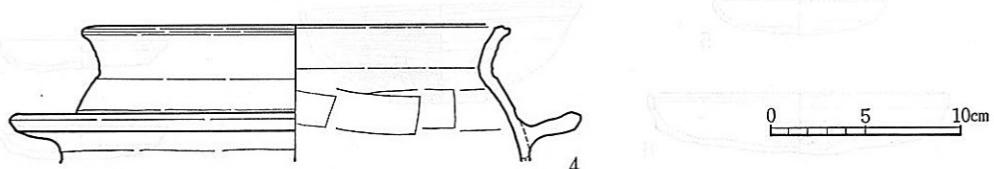
第128図 曲物井戸出土遺物実測図



第129図 曲物井戸出土遺物実測図



第130図 曲物井戸出土遺物実測図



(B) 羽釜井戸

中川・131番) (SE005)

S E 005 (第131・134図)

51トレンチ・B-5地区で検出。掘形は楕円形で、長径1m、短径0.6m、底部は長径0.57m、短径0.35m、深さ0.45mである。井筒は土師器羽釜を2段積んでいる。遺物は瓦器碗(1・2)、須恵質鉢(3)が出土している。

S E 013 (第131・134図)

2トレンチ・B-9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1m、底部の径0.3m、深さ0.4mである。井筒は土師器羽釜が3段で、遺物は出土していない。

S E 018 (第131・134図)

2トレンチ・B-9地区で検出。掘形は楕円形で、上縁の長径0.65m、短径0.5m以上である。底部は円形で径0.2mを計り、深さは0.25m以上である。井筒は土師質羽釜を2段積んでいる。1段目の羽釜は上半部が削られて欠失している。遺物は出土していない。

S E 022 (第131・134図)

17トレンチ・B-9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1m、底部の径0.5m、深さ0.4mである。井筒は土師器羽釜を2段積んでいる。遺物は出土していない。

S E 029 (第131図)

17トレンチ・B-10地区で検出。素掘り井戸S E 030に切られている。掘形は楕円形で、上縁の長径1.4m、短径0.2m、底部は径0.45mの円形、深さ0.4mである。井筒は土師器羽釜が1段残存し、上段にもう1段あったと思われる。遺物は瓦器碗、須恵質の鉢、土師器小皿等が出土している。

S E 032 (第131・134図)

17トレンチ・B-10地区で検出。羽釜井戸S E 033に切られている。掘形は隅丸方形状を呈し、上縁の1辺1.4m、底部は0.8mの円形で、深さは0.45mである。井筒は土師器羽釜が1段残存し、上段にもう1段あったと思われる。遺物は瓦器碗(1)、土師器小皿、ヘラ状木製品が出土している。

（3）アーチ出水層中層付近

S E 033 (第131・134図)

羽釜井戸 (B)

17トレンチ・B-10地区で検出。羽釜井戸S E 032を切っている。掘形は不整橢円形で、上縁の長径約1m、短径約0.8m、底部は径0.55mの円形、深さ0.4mである。井筒は土師器羽釜を3段積むが、1段目の羽釜の上半部分は欠失している。遺物は瓦器小皿(1・2)、瓦器碗(3~5)、土師器小皿、須恵質の鉢・甕等が出土している。

S E 035 (第131・134図)

17トレンチ・B-10地区で検出。素掘り井戸S E 037に切られている。掘形は円形で、上縁の径0.7m、底部の径0.4m、深さ0.2mである。井筒は土師器羽釜が1段である。遺物は瓦器碗、瓦質の鉢・甕等が出土している。

S E 036 (第131図)

17トレンチ・B-10地区で検出。素掘り井戸S E 037と羽釜井戸S E 038に切られている。掘形は円形と思われ、底部の径0.4m、深さ0.45mである。井筒は土師器羽釜が1段で、羽釜の半分はS E 038に切られて欠失している。遺物は瓦器碗、土師器刷毛目甕が出土している。

S E 038 (第131・135図)

17トレンチ・B-10地区で検出。羽釜井戸S E 036と素掘り井戸S E 037を切っており、曲物・羽釜井戸S E 040に切られている。掘形は不整円形で上縁の径約1m、底部の径0.42m、深さ0.55mである。井筒は土師器羽釜を3段積み、1段目は口縁部を下に向けて置く。遺物は瓦質甕(1)、瓦器碗が出土している。

S E 039 (第131・135図)

17トレンチ・B-10地区で検出。S E 040に切られる。掘形は円形で、上縁の径0.8m、底部の径0.45m、深さ0.5mである。井筒は土師器羽釜を2段積んでいる。遺物は瓦器碗(1)、土師器皿、白磁碗等が出土している。

S E 043 (第132・135図)

17トレンチ・B-10地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.8m、底部の径0.4m、深さ0.25mである。井筒は土師器羽釜1段であった。遺物は瓦器碗(1)、土師器小皿が出土している。

S E 045 (第132・135図)

52トレンチ・B-9地区で検出。2段掘状の掘削がされている。掘形は橢円形で、上縁の長径1.1m、短径0.95m、底部は径0.35mの円形で、深さは0.5mを計る。井筒は土師器羽釜を3段積んでいる。1段目の羽釜は口縁部とつばの部分を欠失している。また1段目の羽釜の外側には、1ヵ所のみであるが板を立てている。これは「そえ板」と思われる。遺物は土師器小皿(1)、瓦器碗(2)が出土している。

S E 048 (第135図)

52トレンチ・B-10地区で検出。掘形の形状は不明瞭だが、深さは0.3mである。井筒は土師器羽釜が1段。遺物は出土していない。

S E 051 (第134図)

52トレンチ・B-10地区で検出。素掘り井戸S E 050を切っている。掘形は円形で、上縁の径0.7m、底部の径0.7m、深さ0.45mを計る。井筒は土師器羽釜を4段積んでいる。遺物は白磁碗の高台部片が出土している。

S E 052 (第132・135図)

1トレンチ・B-10地区で検出。掘形は円形、上縁の径1.9m、底部の径0.85m、深さ0.2mである。井筒は土師器羽釜1段。遺物は出土していない。

S E 054 (第132図)

54トレンチ・B-10地区で検出。掘形は橢円形になると思われる(一部は溝に切られているため)。掘形上縁は長径0.7m、短径0.5mで、底部は0.3m前後の円形、深さ0.2mと浅いものである。井筒は土師器羽釜1段。遺物は須恵質の鉢が出土している。

S E 065 (第132・136図)

試掘トレンチ・C-12地区で検出。掘形は不整円形で、2段掘を行なっている。掘形上縁の径0.8m、底部の径0.35m、深さ0.3mである。井筒は土師器羽釜を2段積んでいる。遺物は瓦器碗、土師器が出土している。

S E 066 (第132・136図)

試掘トレンチ・C-12地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.5m、底部の

径0.4m、深さ0.2mを計る。井筒は土師器羽釜1段。遺物は出土していない。

S E 068 (第132・136図)

21トレンチ・C—3地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.8m、底部の径0.45m、深さ0.7mである。井筒は土師器羽釜を4段積んでいる。遺物は出土していない。

S E 072 (1) (第132・136図)

21トレンチ・C—13地区で検出。井筒の土師器羽釜が1段残存するのみで、掘形は不詳である。遺物は土師器小皿、土師器皿、瓦器碗、瓦質の鉢・三脚土器、平瓦等が出土している。

S E 073 (第136図1~5)

21トレンチ・C—13地区で検出。井筒は土師器羽釜が1段。遺物は土師器小皿(1・2)・皿(3)、瓦器(4・5)、瓦質鉢・三脚、平瓦等が出土している。

S E 080 (第132・136図)

23トレンチ・C—5地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.8m、底部の径0.5m、深さ0.6mである。井筒は土師器羽釜を2段積んでいる。遺物は瓦器碗(1)、瓦質片口鉢(2・3)、土師器小皿等が出土している。

S E 094 (第132図)

25トレンチ・C—16地区で検出。掘形の上部は不明、底部は径0.4mの円形、深さは0.4mである。井筒は土師器羽釜を2段積んでいる。1段目の羽釜は口縁部を下に向けて設置している。遺物は瓦器、土師器が出土している。

S E 095 (第132・136図)

25トレンチ・C—16地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.65m、底部の径0.3m、深さ0.3mである。井筒は土師器羽釜を2段積むが、1段目上半部は欠失している。遺物は黒色土器、土師器羽釜、碗、布目丸瓦等が出土している。

S E 098 (第132・133図)

55トレンチ・C—16地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.8mであるが、底部、深さとも不詳。井筒は当初土師器羽釜を1段検出したが、後に地山面を調査した際、下段の羽釜の底部が残存しており、2段積んでいたと思われる。遺

物は須恵質土器が出土している。

S E 103 (第132・133図)

26トレンチ・C-17地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.55m、底部の径0.3m、深さ0.6mである。井筒は土師器羽釜3段。遺物は出土していない。

S E 110 (第132・133図)

試掘トレンチ・C-18地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.6m、底部の径0.45m、深さ0.4mである。井筒は土師器羽釜2段が残存しているが、井筒内に羽釜片が落ち込んでおり本来もう1段上にあったかもしれない。遺物は瓦質三脚土器の脚部(1)、瓦器碗(2~4)、瓦(5)、瓦質羽釜(6)、瓦質壺(7)、瓦質ねり鉢(8)のほか須恵質ねり鉢、土師器小皿・皿等多数出土している。

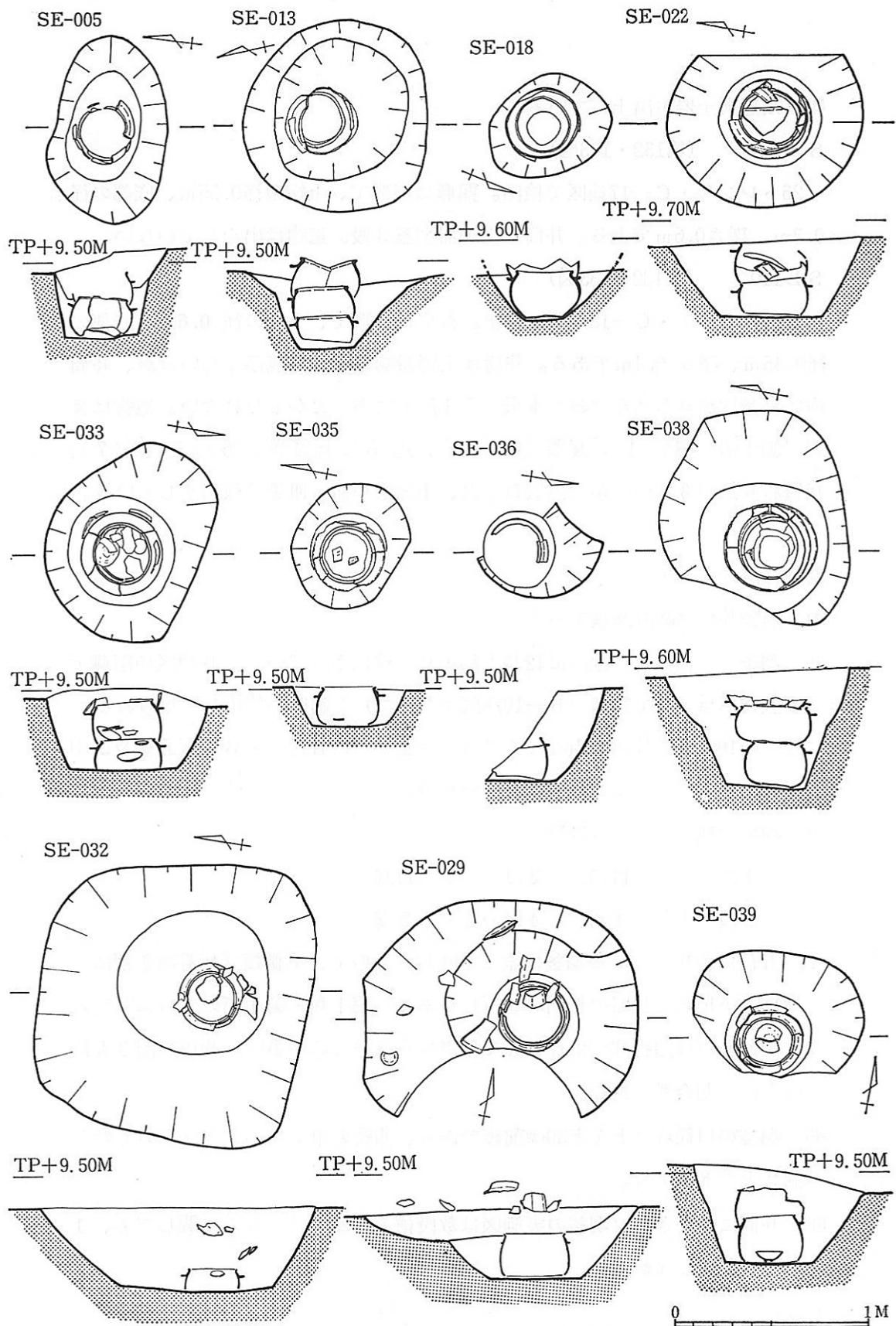
羽釜井戸のまとめ

- (1) 羽釜井戸は総計28基である。
- (2) 羽釜井戸はB-10地区に12基と集中して検出されている。B地区の南側で羽釜井戸は全部で18基(B-10地区を含めて)と約6割が集中して見られる。残りの10基はC地区に点在している。羽釜井戸はA地区・B地区北側及び中央部・P地区では全く検出されていない。
- (3) 羽釜の残存している段数

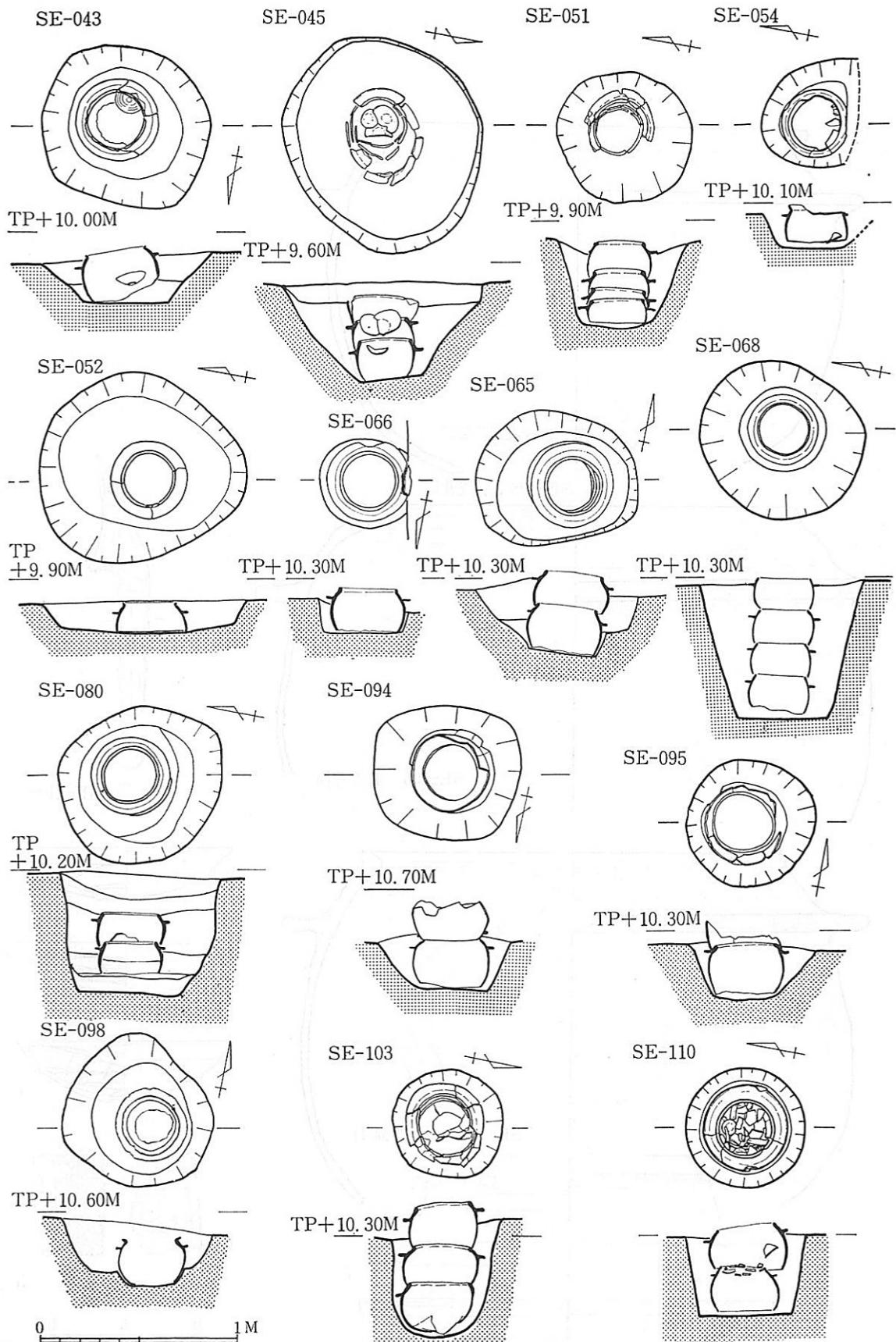
1段のものー11基、2段のものー11基

3段のものー4基、4段のものー2基

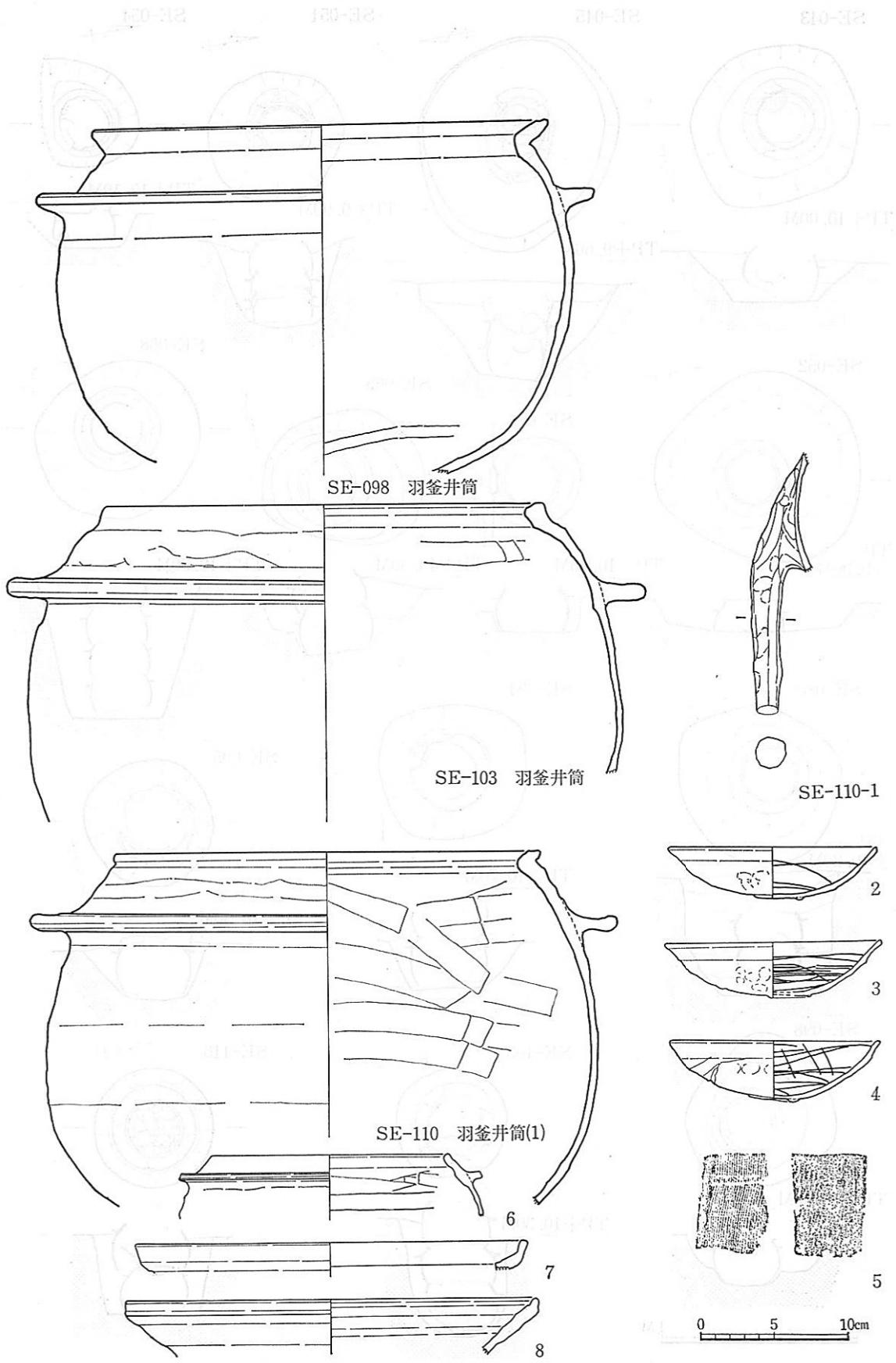
- (4) 井筒に使用している羽釜は全て土師質のもので、第Ⅲ類(瓦器第Ⅱ期に並行)、第Ⅳ類(瓦器第Ⅲ期に並行)があり、第Ⅰ類・第Ⅱ類のものはない。
 - (5) 羽釜井戸は曲物井戸に比較して掘形は小さいものが多い。井戸の深さも浅いものが割合多くある。
 - (6) 羽釜の口径はほとんど30cm前後であり、曲物の中でも小さいほうのものと同じ大きさである。
- (注) 井筒に使用された羽釜の実測図は数段積み重ねているものに関しても、1段しか掲載しなかった。



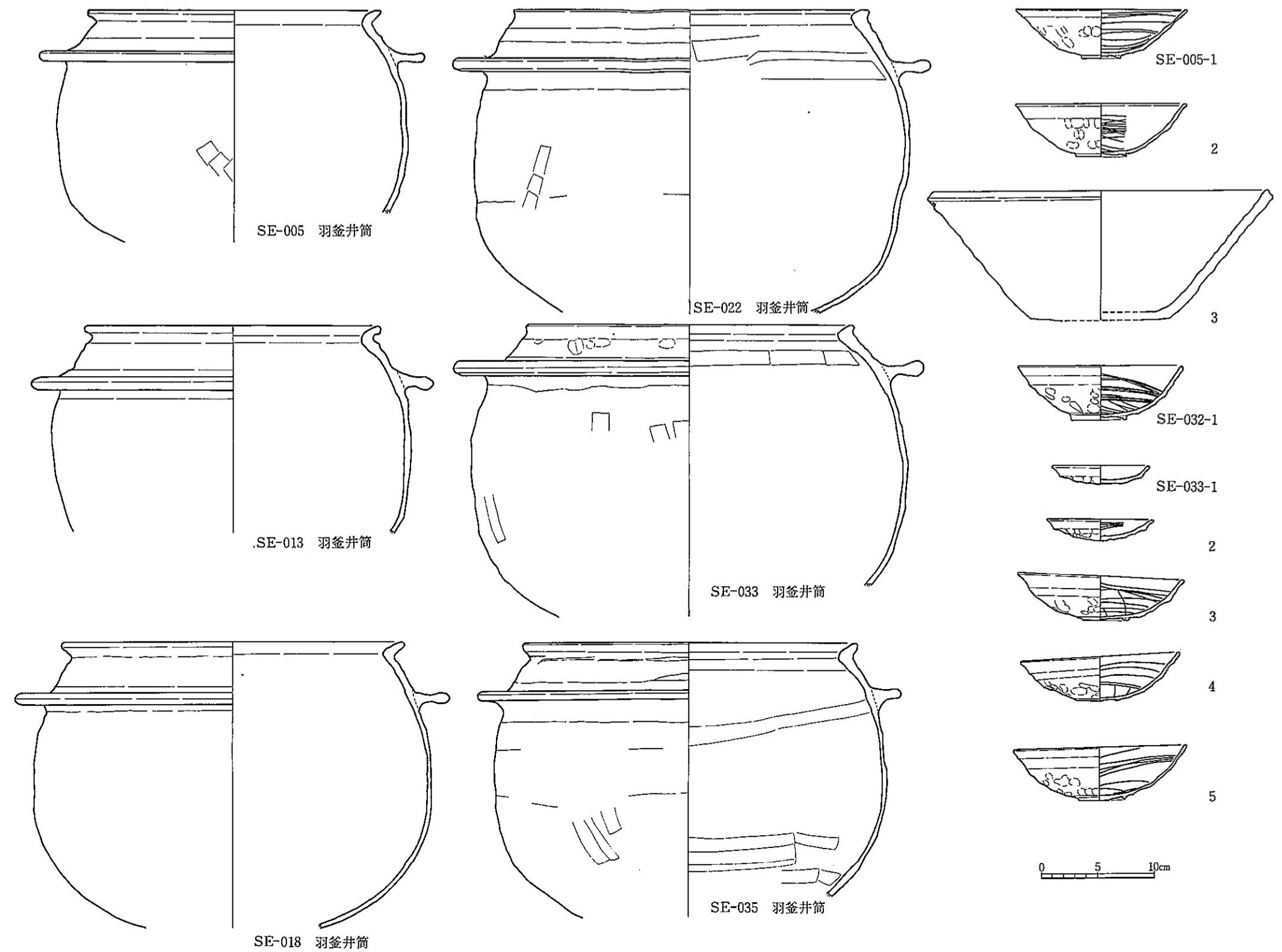
第131図 羽釜井戸実測図



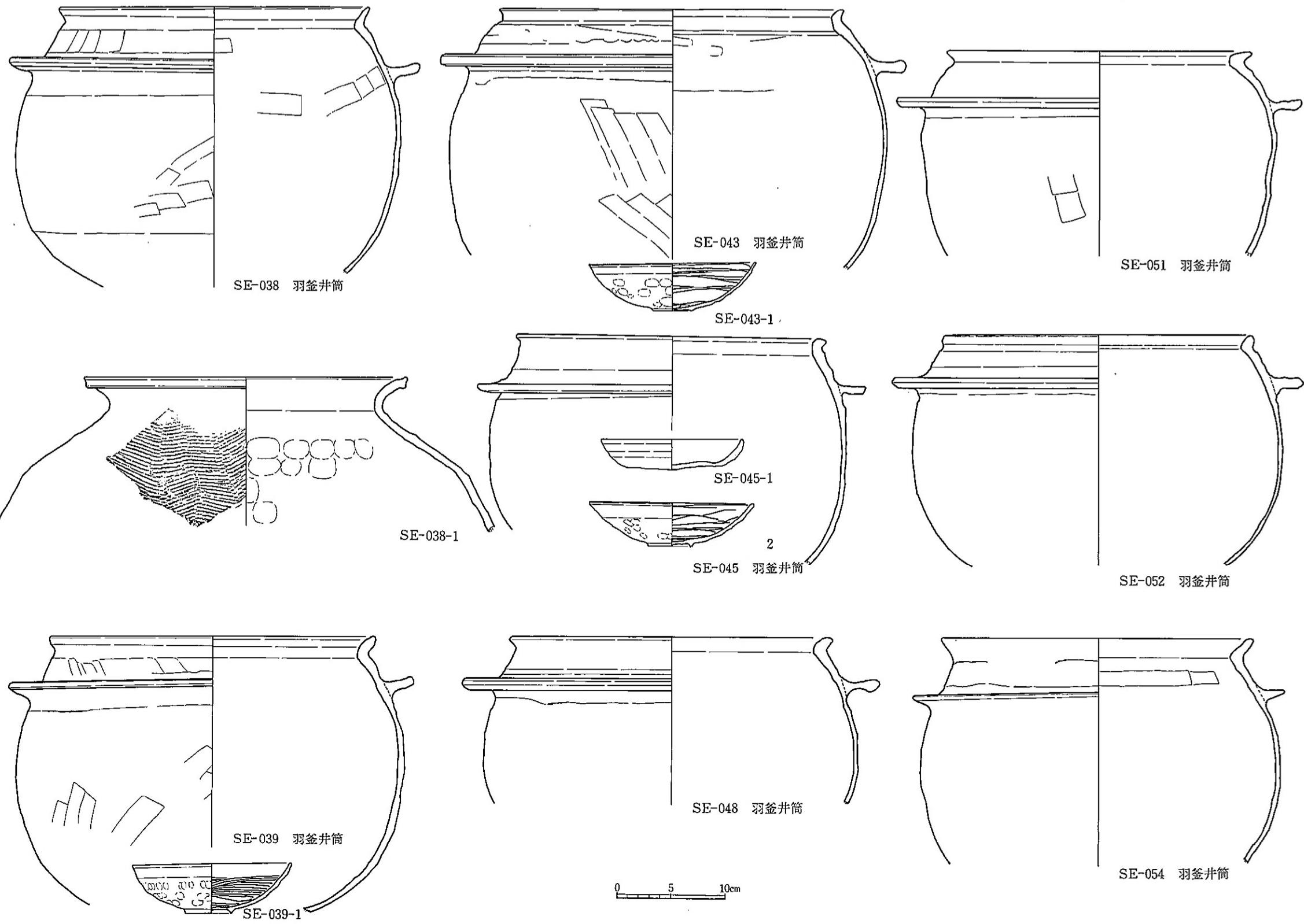
第132図 羽釜戸実測図



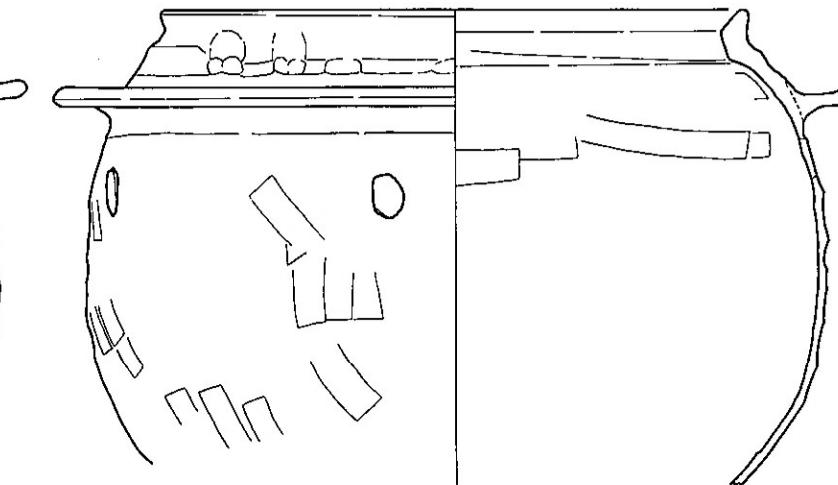
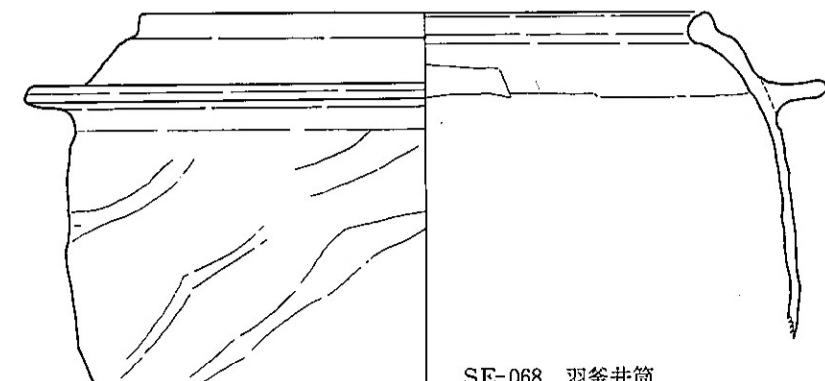
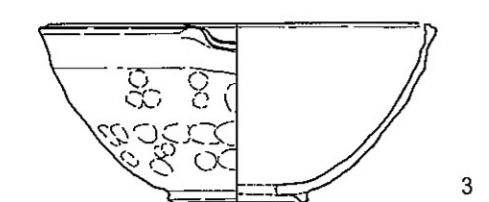
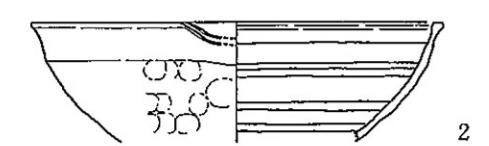
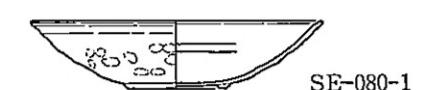
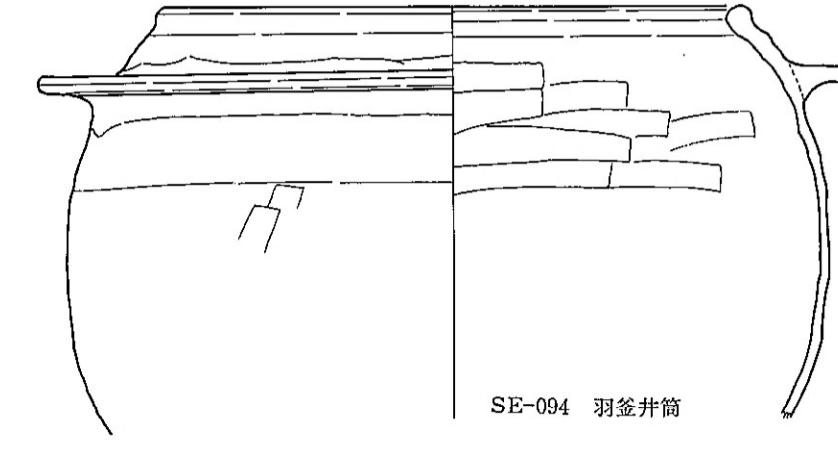
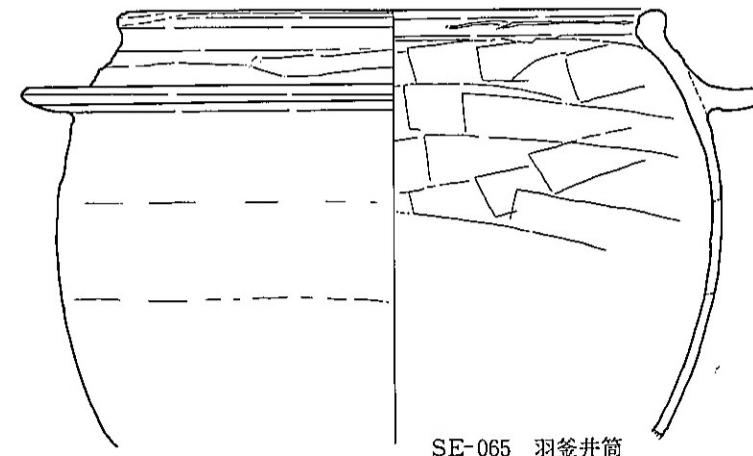
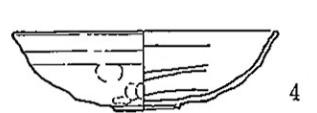
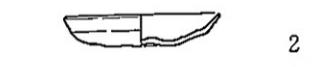
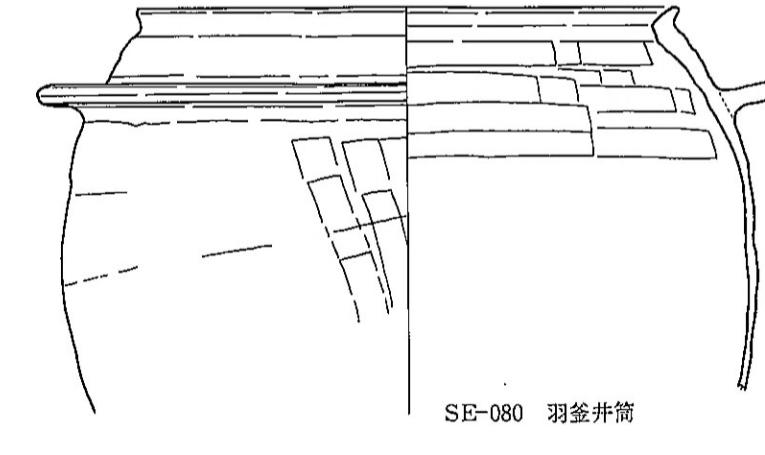
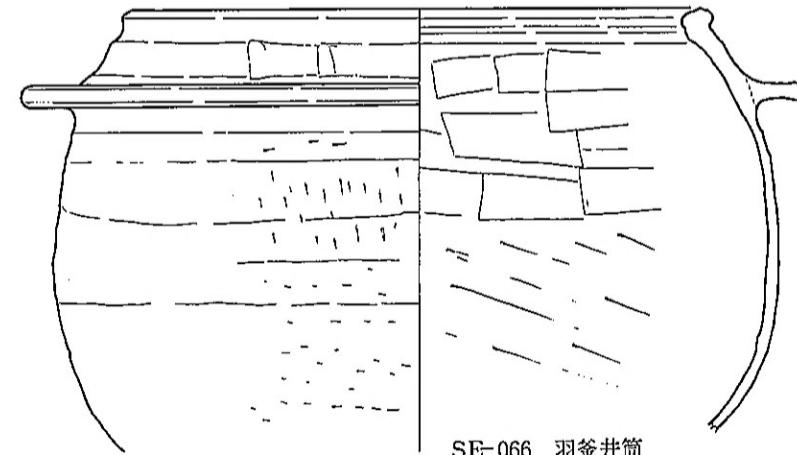
第133図 羽釜井戸出土遺物実測図



第134図 羽釜井戸出土遺物実測図



第135図 羽釜井戸出土遺物実測図



0 5 10cm

第136図 羽釜井戸出土遺物実測図

(C) 曲物羽釜井戸

S E 026 (第137・138図)

17トレンチ・B-9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 1.4m、底部の径 0.45m、深さ 0.5m である。井筒は土師器羽釜 4段と曲物 1段である。曲物は最下段の羽釜の中に設置している。曲物は最大径 23cm である。このような構造のものは本例のみである。遺物は土師器小皿 (2)、瓦器小皿 (1)、瓦器碗 (3) のほか、瓦器、土師器小皿等が出土している。

S E 034 (第137・138図)

17トレンチ・B-10地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 1.2m、底部の径 0.5m、深さ 0.8m である。井筒は土師器羽釜 4段と曲物 2段である。井筒の累積方法は、曲物を 2段設置した上に、羽釜を 4段積み重ねて設置している。曲物の径は上から 32cm、31cm である。羽釜の最上段のものは一部しか残存していない。遺物は瓦器碗 (1)、土師器小皿、瓦質の甕・鉢・三脚土器、叩き目のある甕等が出土している。

S E 040 (第138図)

17トレンチ・B-10地区で検出。曲物井戸 S E 038 と S E 039 を切り、S E 041 を切っている。掘形は不整円形、上縁の径 1.3m 程度、底部の径 0.5m、深さ 0.7m である。井筒は曲物 1段と羽釜 1段である。羽釜を下に置き、その上に曲物を設置している。曲物の径 0.3m を計る。遺物は土師器皿・羽釜、瓦器小皿・碗等が出土している。

S E 041 (第137・138図)

17トレンチ・B-10地区で検出。S E 040 を切っている。掘形は隅丸方形状で、上縁の 1辺は 1.3m 程度、底部は 0.7m の円形、深さ 0.6m である。井筒は羽釜 1段を底に置き、その上に曲物 1段を設置している。曲物の径 42cm を計る。遺物は土師器皿、羽釜、瓦器碗、繩目平瓦等が出土している。

S E 049 (第137・139図)

52トレンチ・B-10地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 1.3m、底部の径 1m、深さ 0.8m である。井筒は曲物 2段と羽釜 2段が残存している。井筒の

累積方法は、まず羽釜を底に置き、その上に口縁部を下に向けてもう1段羽釜を積む。その羽釜のつばの部分を台にして、曲物を載せている。最上段の曲物は下の3段のものより、軸が大幅にずれて検出された。これは何らかの条件により移動したものか、後に曲物1段の井戸が掘り直されたものか、どちらとも不明である。曲物の径は上段のもの32cm、下段のもの41cmである。遺物は土師器小皿（1・2）、瓦器碗（3・4）、土師器羽釜（5）と瓦質甕が出土している。

S E070 (第139図)

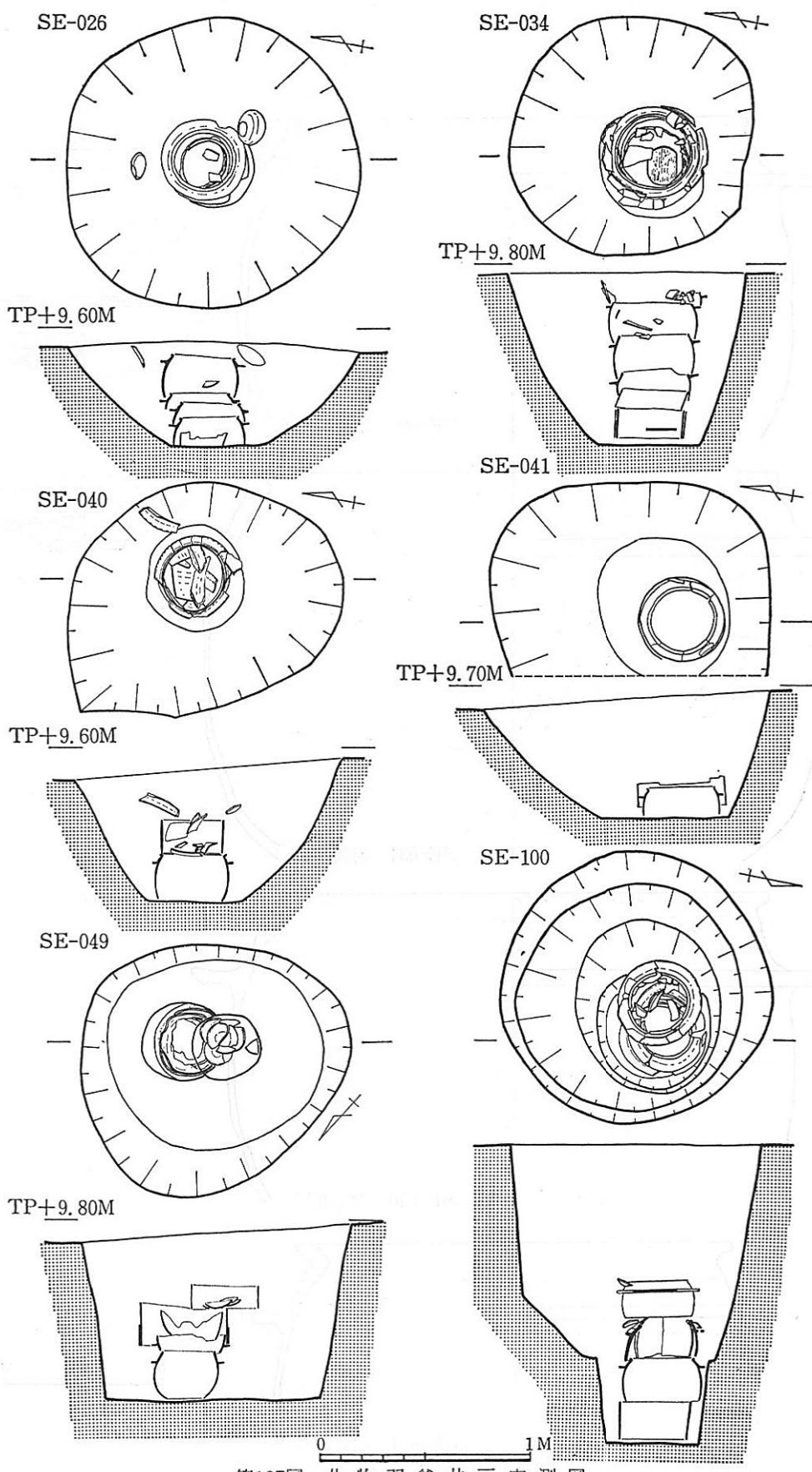
テストトレーナー・C-3地区で検出。掘形は不詳で、井筒のみ確認された。井筒は曲物が数段と土師器壙1段が残存している。土師壙の底を抜いたものを底に設置し、その上に曲物を載せるものである。土師壙を井筒に使用しているものは本例のみであった。遺物は不詳。

S E100 (第137・140図)

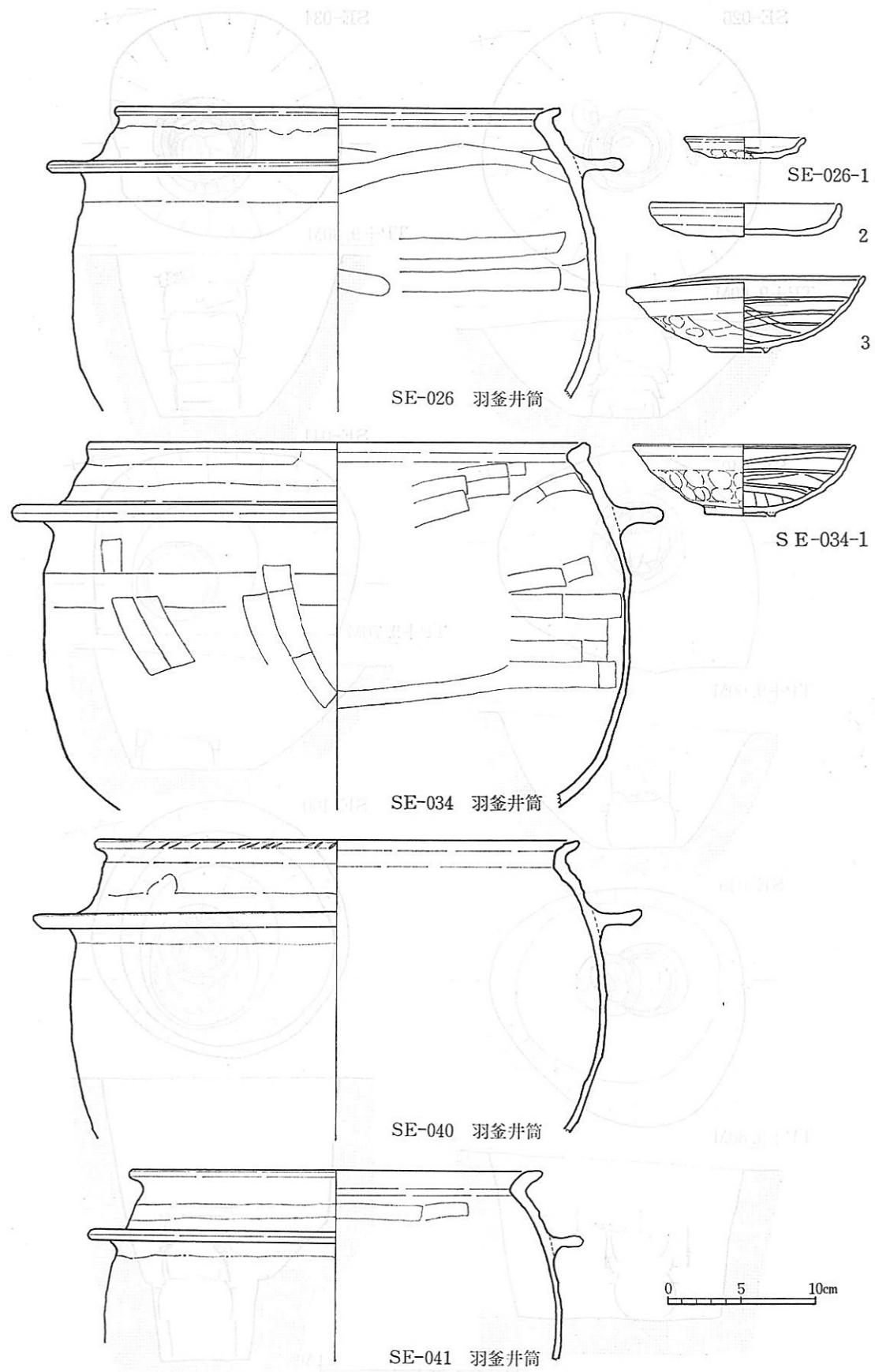
試掘トレーナー・C-16地区で検出。掘形は円形で、2段掘により掘削している。掘形上縁の径1.3m、底部の径0.44m、深さ1.4mである。井筒は羽釜4段と曲物1段が残存している。井筒の累積方法は、まず曲物を底に置き、その上に羽釜を積み重ねていく。曲物の径は43cmを計る。1・2段目は3～5段目のものに比較して中心軸が約10cmずれている。1段目の羽釜は一部しか残存していない。掘形の底部には礫を薄く敷きつめている。遺物は土師器小皿（1）、瓦器小皿（2）、灰釉壺の頸部（3）が出土している。

S E111 (第140図)

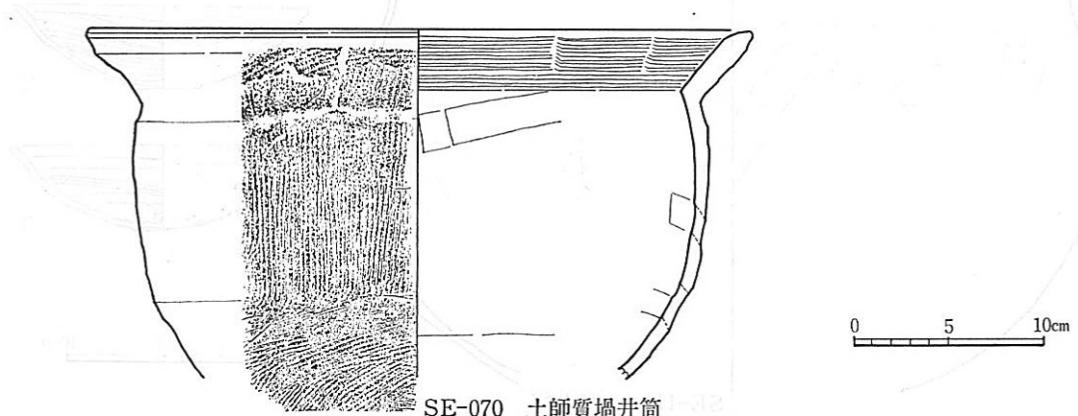
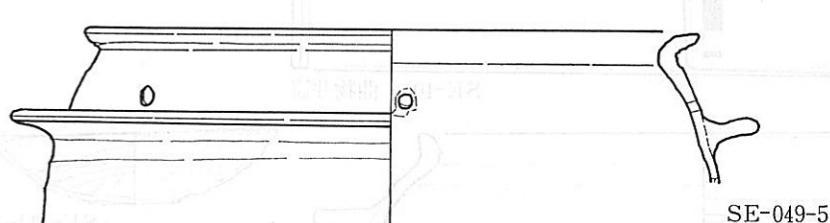
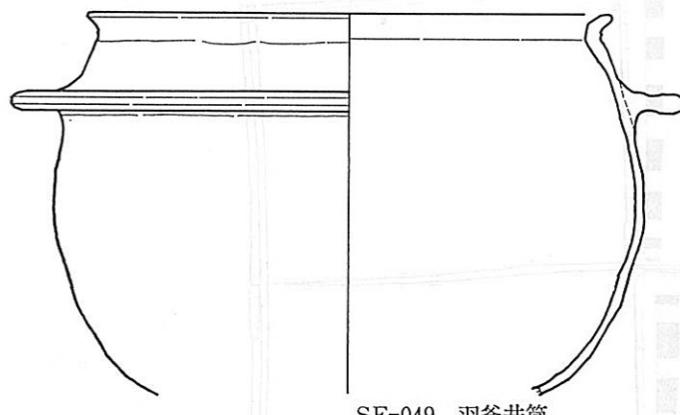
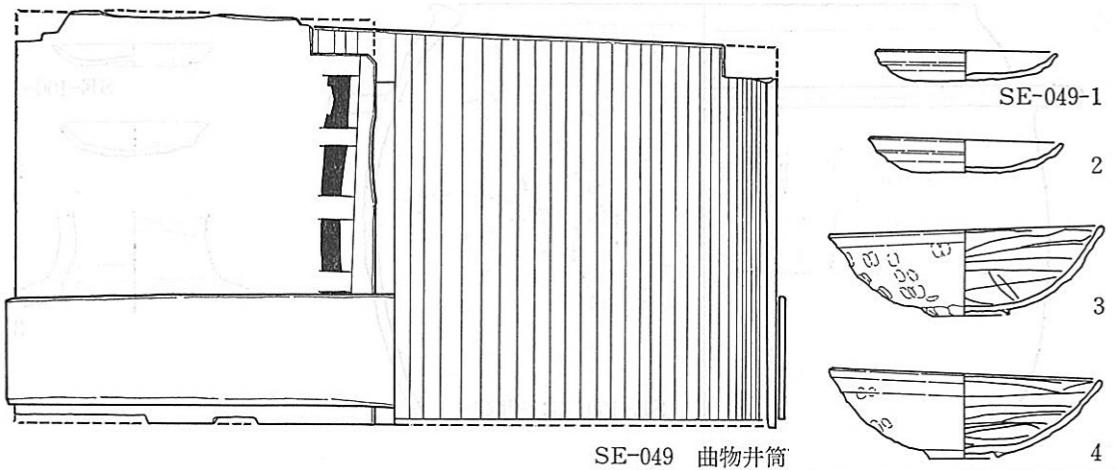
30トレーナー・C-19地区で検出。試掘時に羽釜1段を検出しているが、後の調査で曲物と羽釜を確認した。掘形は楕円形状で、上縁の長径1.3m、短径0.9mで、深さ0.4m以上である。井筒の累積方法は、まず底部に羽釜を置き、その上に曲物を載せ、最上段に羽釜を設置している。曲物は腐朽が激しく一部しか残存していないため径は不明。遺物は瓦器碗（1～3）、土師器小皿・甕等が出土している。



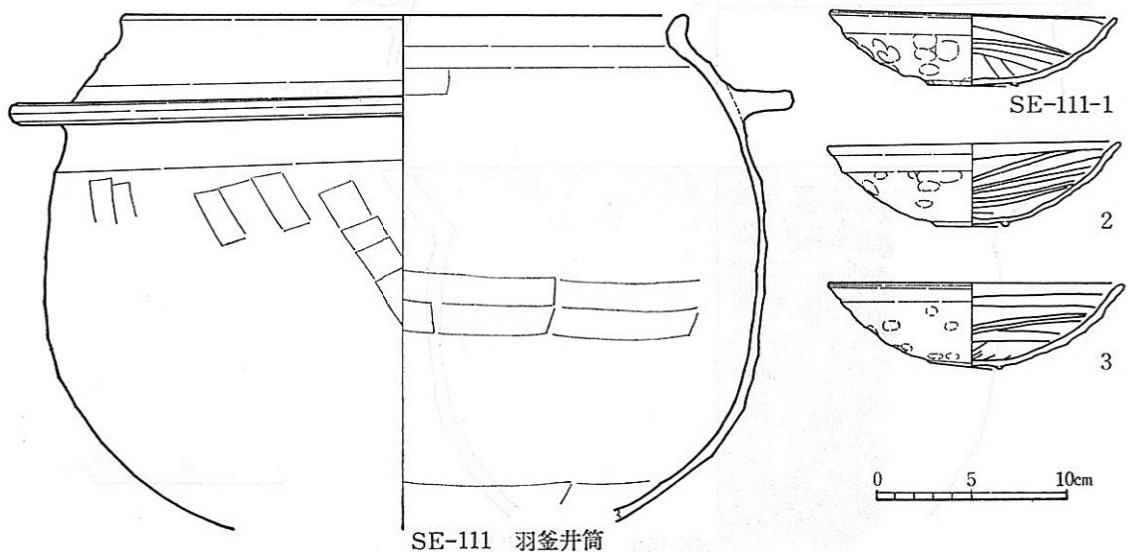
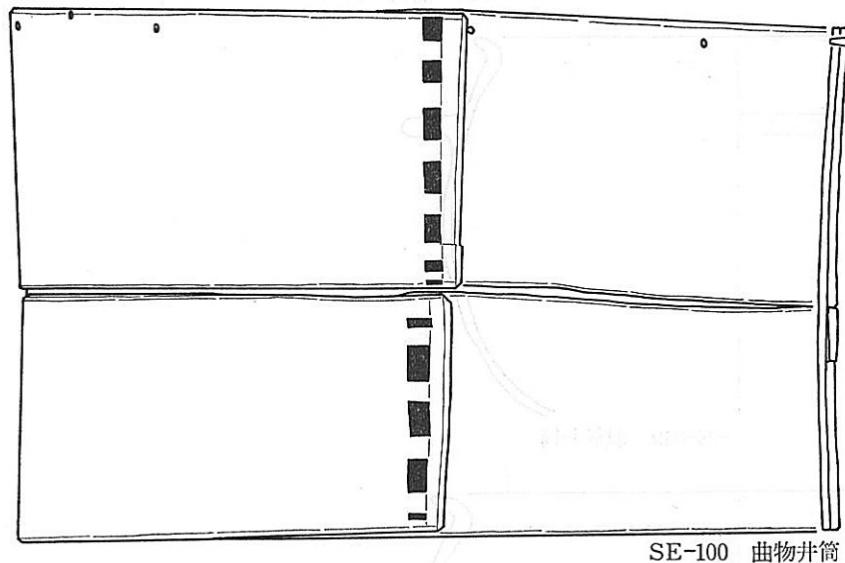
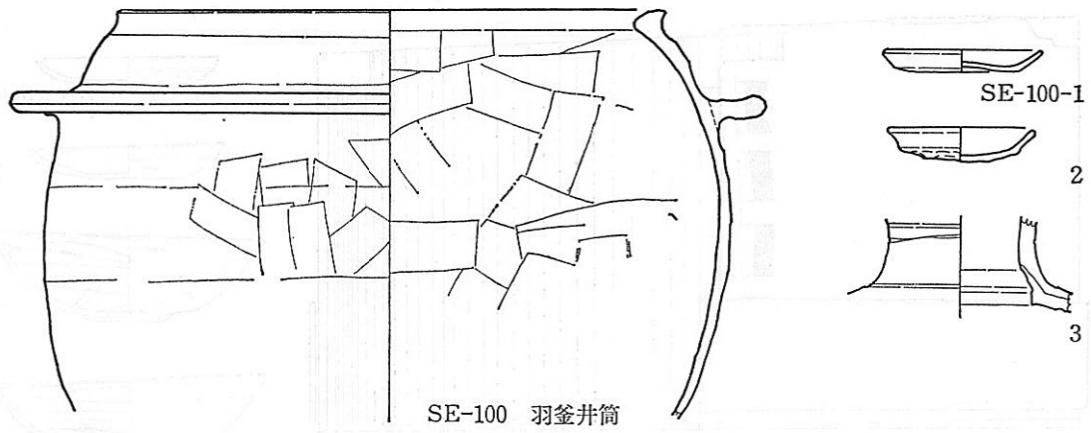
第137図 曲物羽釜井戸実測図



第138図 曲物羽釜井戸出土遺物実測図



第139図 曲物羽釜井戸出土遺物実測図



第140図 曲物羽釜井戸出土遺物実測図

(D) 特殊井戸

S E 053 (第141図)

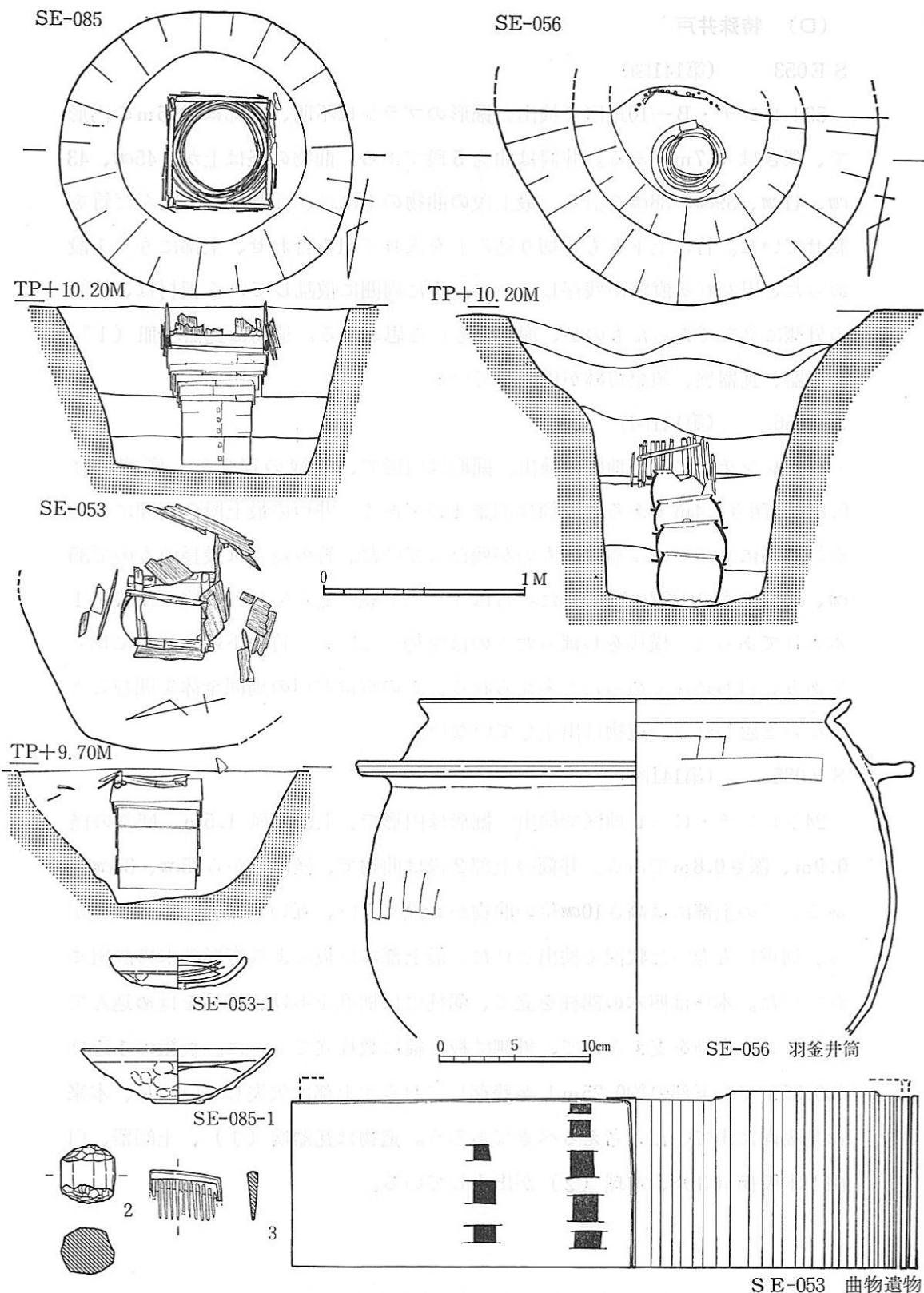
53トレンチ・B-10地区で検出。掘形のプランは不明、底部は0.5mの円形で、深さは0.7mである。井筒は曲物5段である。曲物の径は上から45cm、43cm、41cm、39cm、38cmを計る。最上段の曲物の上には、「井」形に組んだ竹を載せていた。竹は上下とも「切り込み」を入れて組み合わせ、上部にもう1段あったと思われる痕跡が残存していた。また周囲に散乱している板材は、竹組の外側に立ててあったものが、崩れたものと思われる。遺物は瓦器小皿(1)、土師器、瓦器碗、須恵質鉢が出土している。

S E 056 (第141図)

53トレンチ・C-1地区で検出。掘形は円形で、上縁の径2m、底部の径0.8m、深さ1.4mである。井筒は羽釜4段である。井戸の最上段の周囲には竹を等間隔に立てている柵状のものが残存していた。竹の長さは最長のもので35cm、最短のもので22cmであった。竹は「／＼」状に並んでおり、竹の横桟が1本入れてあった。横桟をしばったものは腐朽していた。竹の下端は斜めに切ってあり、打ち込んで造ったと考えられる。この柵は井戸の周囲全体を囲むことはないと思われる。遺物は出土していない。

S E 085 (第141図)

24トレンチ・C-6地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.5m、底部の径0.9m、深さ0.8mである。井筒の上部2段は曲物で、径は上から35cm、34cmである。その上部には高さ10cm位の曲物が5段ぐらい、互いに重なり合いながら、何重にも巻いた状況で検出された。最上部には板による方形の木枠が組まれていた。木枠は四本の隅柱を立て、隅柱には枘孔をあけ、横桟をはめ込んでいる。この木枠を支えとして、外側に板を縦に数枚立てていた。板組の1辺は約0.55mで、下部の約0.25mしか残存しておらず上部は欠失していたが、本来は地表面に出ていたと考えるべきであろう。遺物は瓦器碗(1)、土師器、白磁と木製櫛(3)、木球(2)が出土している。



第141図 特殊井戸実測図及び出土遺物実測図

(E) 素掘り井戸

S E001

13トレンチ・A-18地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 1.5m を計るが、底部は不明である。深さは 2 m 以上になると思われる。遺物は須恵器、瓦が出土している。

S E006 (第143図)

51トレンチ・B-8 地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 0.6m、底部の径 0.3m、深さは 0.1m 以上になる。遺物は土師器小皿（1）、瓦器碗（2）が出土している。

S E007

51トレンチ・B-8 地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 0.6m、底部の径 0.5m、深さは 0.2m と浅いものである。遺物は出土していない。

S E008

51トレンチ・B-8 地区で検出。素掘り井戸 S E009に切られている。掘形は円形で、上縁の径 0.9m、底部の径 0.65m、深さは 0.2m と浅いものである。遺物は出土していない。

S E009 (第143図)

51トレンチ・B-8 地区で検出。S E008を切っている。掘形は橢円形で、上縁の長径 1.9m、短径 1.5m、底部は約 1 m の円形で、深さは 0.4m である。遺物は瓦器小皿（1）、瓦器碗（2）のほか瓦器が多く認められ、ほかに土師器小皿・羽釜等が出土している。

S E012 (第143図)

51トレンチ・B-19地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 0.9m、底部の径 0.4m、深さは 1.65m と深いものである。遺物は瓦器碗（1）、土師器小皿・羽釜等が出土している。

S E019 (第142・143図)

17トレンチ・B-9 地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 1.2m、底部の径 0.5m、深さ 0.45m である。堆積状況を見ると井筒が存在した可能性がある。

遺物は瓦器碗（1）、土師器小皿・羽釜が出土している。瓦井戸跡（3）

S E020 (第142・143図)

17トレンチ・B—9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.1m、底部の径0.6m前後の不整円形、深さは0.4mである。遺物は瓦器碗（1）、土師器小皿のほか、節を抜いた竹が出土している。竹の長さは約20cm、径9cmである。

S E021 (第143図)

17トレンチ・B—9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1m、底部の径0.5m、深さは0.3mである。遺物は瓦器小皿（1）、瓦器碗、土師器小皿・皿・羽釜が出土している。

S E023

17トレンチ・B—9地区で検出。掘形の円形で、上縁の径1.2m、底部の径0.8m、深さ0.3mである。遺物は土師器小皿・羽釜が極少量出土している。

S E024 (第143図)

17トレンチ・B—9地区で検出。S E025に切られている。掘形は楕円形で、上縁の長径3m、短径2.2mと非常に大きく、底部は長径2.2m、短径1.5m、深さ0.35mと浅い。雨水、湧水を貯えておくような施設ではないだろうか。遺物は瓦器碗（1・2）、土師器甕が出土している。

S E025

17トレンチ・B—9地区で検出。S E024を切っている。掘形は円形で、上縁の径1.4m、底部の径0.9m、深さ0.34mである。遺物は瓦器碗が出土。

S E027 (第143図)

17トレンチ・B—10地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.3m、底部の径1m、深さ0.4mである。遺物は土師器小皿（1）、緑釉の長頸壺（2）のほか、土師器羽釜、瓦器碗、須恵質鉢等が出土している。

S E028

17トレンチ・B—10地区で検出。掘形は不明（半分は未掘）、上縁の径1.2m、底部の径1.2m、深さは0.3mである。遺物は出土していない。

S E030 (第143図) 堀形は円形で、上縁の径1.3m、底部の径0.5m、深さ0.3mである。

17トレンチ・B-10地区で検出。曲物井戸S E029を切り、S E031に切られている。掘形は円形で、上縁の径1m、底部の径0.5m、深さ0.3mである。遺物は瓦器小皿・碗、須恵質の甕が出土している。

S E031 (第143図)

17トレンチ・B-10地区で検出。S E030を切っている。掘形上縁の長径1.3m、短径1m、底部の長径1m、短径0.7m、深さは0.3mである。遺物は土師器小皿・羽釜、瓦器小皿・碗(1)、須恵質片口鉢等が出土している。

S E037 (第143図)

17トレンチ・B-10地区で検出。曲物井戸S E035を切り、曲物井戸S E038に切られる。掘形は円形で、上縁の径1m、底部の径0.6m、深さは0.2mと浅い。遺物は瓦器碗、土師器羽釜片が出土している。

S E046 (第143図)

52トレンチ・B-9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.8m、底部の径0.5m、深さ0.35mである。遺物は出土していない。

S E047 (第143図)

52トレンチ・B-9地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.8m、底部の径0.6m、深さ0.3mである。遺物は出土していない。

S E050 (第143図)

52トレンチ・B-10地区で検出。曲物井戸S E051に切られている。掘形は円形で、上縁の径2m、底部の径1.2m、深さ0.4mである。遺物は土師器羽釜片が出土している。

S E055 (第143図)

53トレンチ・B-10地区で検出。掘形は隅丸方形状で、上縁の長辺1.9m、短辺1.4m、底部の長辺1.1m、短辺0.7mで、深さは1.1mである。非常に大きな井戸で雨水、湧水を貯える施設であろう。遺物は瓦器碗が出土している。

S E057 (第143図)

53トレンチ・C-11地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.3m、底部の径

1 m、深さ 2 m である。遺物は土師器小皿（1・2）、土師器皿（3）¹⁸⁰、瓦器
碗（4・5）が出土している。¹⁸¹（第142図）
S E058

19トレンチ・C—1 地区で検出。S E059に切られている。掘形は円形で、上
縁の径 1.3m、底部の径 0.8m、深さ 0.56m である。遺物は出土していない。

S E059

19トレンチ・C—1 地区で検出。S E058を切っている。掘形は円形で、上
縁の径 1.2m、底部の径 0.8m、深さ 0.6m である。遺物は軒平瓦、瓦器小皿
(1)、瓦器碗、瓦質甕、須恵質鉢、白磁、青磁等が出土している。

S E061

19トレンチ・C—1 地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 0.7m、底部の径
0.5m、深さ 0.5m である。遺物は出土していない。

S E063 (第143図)

19トレンチ・C—11地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 1.1m、底部の径
1 m、深さ 0.5m である。遺物は土師器小皿(1)、瓦器碗(2)が出土している。

S E078

23トレンチ・C—4 地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 0.8m、底部の径
0.3m、深さ 0.3m である。遺物は出土していない。

S E082 (第143図)

24トレンチ・C—6 地区で検出。掘形は不整円形と思われ、上縁の径 1 m、
底部は長径 0.7m、短径 0.5m の橢円形、深さは 0.3m である。遺物は瓦器碗
(1)、須恵器甕、平瓦が出土している。

S E083

24トレンチ・C—6 地区で検出。掘形は橢円形で、上縁の長径 1.2m、短径
は不明、底部の長径 0.5m、短径 0.2m で、深さは 0.35m である。井筒としては
曲物があったかもしれない。遺物は出土していない。

S E084

24トレンチ・C—6 地区で検出。掘形は円形で、上縁の径 0.6m、底部の径

0.45m、深さ0.25mである。遺物は瓦器碗、土師器羽釜、須恵質鉢の破片等が出土している。

S E 088 (第143図)

24トレンチ・C-6地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.2m、底部の径0.8m、深さは0.3mである。遺物は瓦器碗(1)、土師器小皿・皿・羽釜、綠釉、布目丸瓦等が出土している。

S E 089

24トレンチ・C-6地区で検出。掘形は円形で、上縁の径1.1m、底部の径0.8m、深さは0.3mである。遺物は須恵器甕、土師器甕、サヌカイト片が出土している。

S E 091

24トレンチ・C-6地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.7m、底部の径0.4m、深さ0.3mである。遺物は出土していない。

S E 099 (第143図)

55トレンチ・C-16地区で検出。2段掘により掘削する。掘形は橢円形で、上縁の長径2.6m、短径2.1m、中段部は径1.4mの円形、底部は径0.8mの円形である。掘形の構造から見て井筒が存在した可能性があろう。遺物は白磁碗(1)が出土している。

S E 105 (第143図)

27トレンチ・C-8地区で検出。掘形は円形で、上縁の径0.8m、底部の径0.6m、深さ0.7mである。遺物は土師器小皿(1)、土師器羽釜(3)、砥石(2)、瓦器碗、土師器皿・甕等が出土している。

S E 106 (第142・143図)

27トレンチ・C-7地区で検出。掘形は不整円形で、上縁の径約2.6m、底部の径1m、深さ1.4mである。遺物は土師器小皿(1・2)、瓦器碗(3~5)が出土している。

S E 108 (第142図)

28トレンチ・C-18地区で検出。掘形は不整円形で、上縁の長径は不明、短

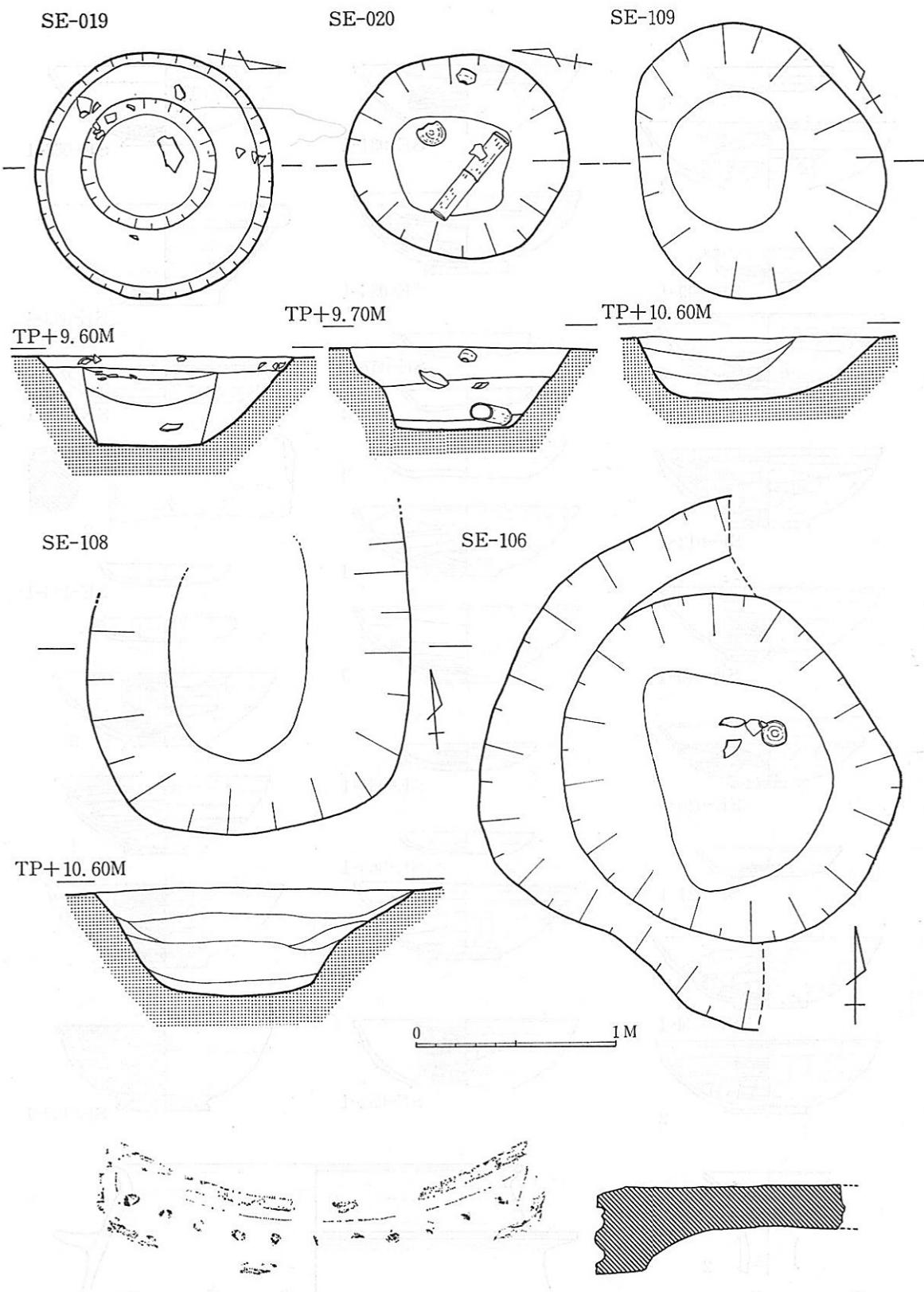
径1.6m、底部の長径は不明、短径0.7mである。深さは0.55mを計る。遺物は土師器小皿・瓦器塊が出土している。

S E109 (第142・143図)

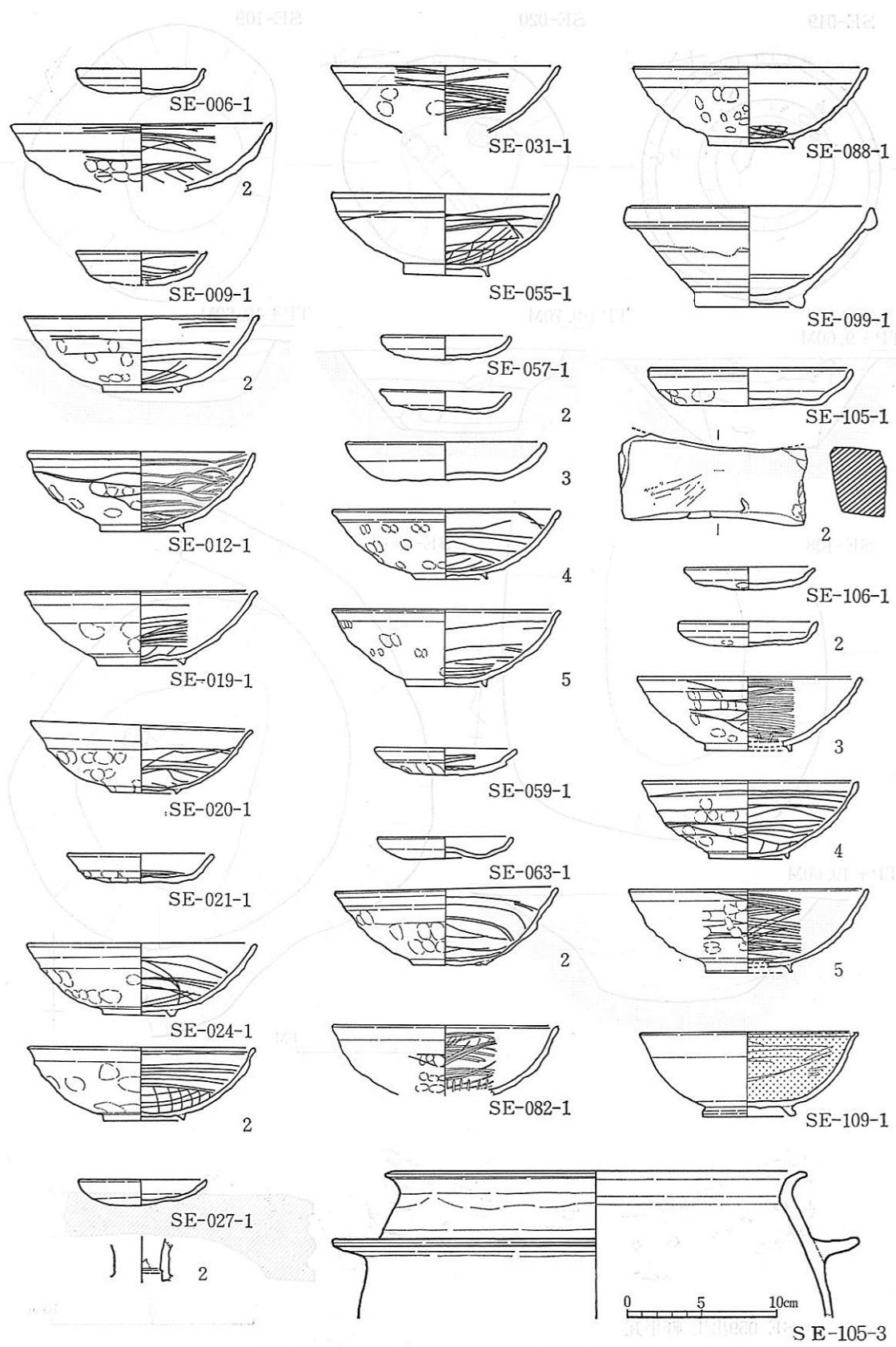
28トレンチ・C-18地区で検出。掘形は不整円形、上縁の径約1.3m、底部の径0.7m、深さ0.3mである。遺物は黒色土器(1)、土師器小皿・皿・羽釜、瓦器、須恵器甕等の破片が出土している。

曲物羽釜井戸、特殊井戸、素掘り井戸のまとめ

- (1) 曲物羽釜井戸は総計8基である。
- (2) 曲物羽釜井戸はB-10地区に4基あり、B-9・C-3・16・19に各1基検出されている。羽釜井戸がB-10地区に集中するのと同様の傾向が認められる。
- (3) 曲物と羽釜の累積方法は、(1)曲物が上で羽釜が下にくるもの3例、(2)羽釜が上で曲物が下にくるもの2例、(3)羽釜の間に曲物が入っているもの1例、(4)底部の羽釜内に曲物が入っているもの1例、その他に堀の上に曲物が載るもの1例とあまり規格性はない。曲物・羽釜・堀とも径はそれほど大きな違いがないことから、井筒を造るための材料として同じ様に扱っていたと思われる。(S E070は土師器の堀を使用しているが、曲物羽釜井戸の一変形として扱った。この堀の口径は約32cmで羽釜と同じ程度である。)
- (4) 特殊井戸は総計3基である。
- (5) 特殊井戸S E053の上部構造は井桁的な様相をていしており、S E086の上部構造の方形板組は井桁というべきであろう。S E056に関しては、上記のものと性格を異にしており、竹の柵を設けている。このような例は珍らしく、類例があれば御教示願いたい。
- (6) 素掘り井戸は総計38基である。
- (7) 素掘り井戸はB地区8~10に19基、C地区南半部に11基と分布が集中する。
- (8) 素掘り井戸は井筒が腐朽して残存していないもの、湧水・雨水を貯えておくもの、井筒を造らず一時的に使用したもの等が考えられる。



第142図 素掘り井戸実測図及び出土遺物実測図



第143図 素掘り井戸出土遺物実測図

まとめ

井戸の時期は検出された遺構面、出土遺物、井筒に使用されている羽釜から決定した。時期を決定する資料が少いものに関しては今回除外している。

- (I) 平安時代後期以前—002・114
- (II) 平安時代後期—084・101・102・105・113
- (III)(I)か(II)不明—087・088
- (IV) 平安時代末～鎌倉時代初め—003・004・009・011・012・016・019・020・021・024・029・030・031・032・035・037・038・039・040・041・042・044・053・054・055・056・057・063・071・076・077・079・082・085・086・090・092・096・097・098・106・107
- (V) 鎌倉時代前期—005・015・022・033・034・043・045・059・064・065・066・068・073・074・080・081・094・100・103・110・111
- (VI)(IV)か(V)不明—026・027・049・051・067・108

(I)には曲物井戸が2基。(II)は曲物井戸が3基、素掘り井戸が2基。(III)は曲物井戸、素掘井戸が各1基。(IV)の時期は井戸が一番多く、曲物井戸16基、羽釜井戸7基、曲物羽釜井戸が2基、特殊井戸3基、素掘り井戸14基である。(V)の時期は曲物井戸4基、羽釜井戸13基、曲物羽釜井戸と素掘り井戸各2基である。(VI)は曲物井戸と羽釜井戸各1基と、曲物羽釜井戸と素掘り井戸が各2基である。曲物井戸は平安後期以前から鎌倉時代前期までの各時期にあるが、平安時代末～鎌倉時代初めの時期に盛行している。平安時代後期及びそれ以前には羽釜を井筒に使用せず、平安時代末～鎌倉時代初めの時期から使い初めており、羽釜井戸は鎌倉時代前期に盛行している。

井戸の分布は、遺跡の北側の地区(A 5・15～B・7・17)には2基しかなく、中央の地区に集中している。特にB—8・18からB—10・20の地区に集中しており、これらの地区的井戸の総計は53基と約半数近くに達する。C地区は総計56基と多くの井戸があるが、C—6・16地区に17基検出した以外は、各地区に割合平均的に分布している。しかしC—10・20地区には井戸はなく、これより以南D—6・16地区までには、D—2・12地区に3基あるのみである。以

上の様に遺跡の北と南は中央部分に比べると極端に少なくなる。 （西・東）

次に井戸の時期別による分布であるが、平安時代後期以前の井戸は、遺跡の北と南に各1基検出されるのみで、この時期の集落はまだ分散的であったと推定される。平安時代後期の井戸はC-6・16から南の地区に分布しており、井戸の数も少なく集落の規模もまた小さいものであった。平安時代末～鎌倉時代初めの時期になると、B-8・18～C-9・19地区まで分布が拡がり、集落の規模が拡大したことが井戸の分布から推定できる。鎌倉時代前期は同様の分布を示しているが、井戸の数が減少している。

井戸の底部の標高を各地区ごとに測定したものは、B地区北側7.6m、B地区南側9m前後、C地区北側及び中央部分9.50m前後、C地区南側10m以上であった。一部の井戸についてはそれより深いものが認められるが、全体的な傾向としては、南側に行くほど底部の標高は高い。そのことから南側ほど湧水点が高かったことが判る。

井戸の周辺には掘立柱建物が存在しており、建物と井戸との関係については各トレンチの説明及び掘立柱建物の説明の中で一部触れられていると思うが、長原遺跡の平安時代から鎌倉時代の集落および集落内の居住域についての、井戸と他の遺構の有機的な関係等についての考察は以後の課題にしたい。(村上)

表9 井戸新登録番号一旧名称対照表

井戸番号	旧名称	トレンチ	地区	備考	井戸番号	旧名称	トレンチ	地区	備考
S E 001	井戸1	18	A-18	E	S E 013	井戸4	2	B-9	B
S E 002	井戸	46	B-13	A	S E 014	井戸3	2	B-9	A
S E 003	井戸5	51	B-8	A	S E 015	井戸2	2	B-9	A
S E 004	井戸1	51	B-8	A	S E 016	井戸1	2	B-9	A
S E 005	井戸8	51	B-8	B	S E 017	井戸5	2	B-9	A
S E 006	井戸6	51	B-8	E	S E 018	井戸6	2	B-9	B
S E 007	井戸2	51	B-8	E	S E 019	井戸12	17	B-9	E
S E 008	井戸10	51	B-8	E	S E 020	井戸7	17	B-9	E
S E 009	井戸7	51	B-8	E	S E 021	井戸9	17	B-9	E
S E 010	井戸3	51	B-9	A	S E 022	井戸24	17	B-9	B
S E 011	井戸4	51	B-9	A	S E 023	井戸6	17	B-9	E
S E 012	井戸9	51	B-19	E	S E 024	井戸11	17	B-9	E

井戸番号	旧名称	トレンチ	地区	備考	井戸番号	旧名称	トレンチ	地区	備考
SE 025	井戸4	17	B-9	E	SE 070	井戸	テスト・トレンチ	C-3	C
SE 026	井戸5	17	B-9	C	SE 071	No.6井戸	21	C-3	A
SE 027	井戸3	17	B-9	E	SE 072	No.2井戸	21	C-13	B
SE 028	井戸10	17	B-9	E	SE 073	No.1井戸	21	C-13	B
SE 029	井戸21	17	B-9	B	SE 074	No.1井戸	22	C-13	A
SE 030	井戸22	17	B-10	E	SE 075	No.2井戸	22	C-14	A
SE 031	井戸23	17	B-10	E	SE 076	No.4井戸	22	C-14	A
SE 032	井戸19	17	B-10	B	SE 077	No.3井戸	22	C-14	A
SE 033	井戸18	17	B-10	B	SE 078	No.4井戸	23	C-4	E
SE 034	井戸2	17	B-10	C	SE 079	No.3井戸	23	C-4	A
SE 035	井戸13	17	B-10	B	SE 080	No.2井戸	23	C-5	B
SE 036	井戸25	17	B-10	B	SE 081	No.1井戸	23	C-5	A
SE 037	井戸14	17	B-10	E	SE 082	No.11井戸	24	C-6	E
SE 038	井戸15	17	B-10	B	SE 083	No.10井戸	24	C-6	E
SE 039	井戸20	17	B-10	B	SE 084	No.4井戸	24	C-6	E
SE 040	井戸16	17	B-10	C	SE 085	No.3井戸	24	C-6	D
SE 041	井戸17	17	B-10	C	SE 086	No.2井戸	24	C-6	A
SE 042	井戸8	17	B-10	A	SE 087	No.7井戸	24	C-6	A
SE 043	井戸1	17	B-10	B	SE 088	No.6井戸	24	C-6	E
SE 044	井戸6	52	B-9	A	SE 089	No.5井戸	24	C-6	E
SE 045	井戸7	52	B-9	B	SE 090	No.9井戸	24	C-5	A
SE 046	井戸8	52	B-9	E	SE 091	No.8井戸	24	C-6	E
SE 047	井戸5	52	B-9	E	SE 092	No.1井戸	24	C-15	A
SE 048	井戸1	52	B-10	B	SE 093	SE 2-4	25	C-6	A
SE 049	井戸2	52	B-10	C	SE 094	SE 2-3	25	C-16	B
SE 050	井戸4	52	B-10	E	SE 095	SE 2-2	25	C-16	B
SE 051	井戸3	52	B-10	B	SE 096	SE 2-1	25	C-16	A
SE 052	井戸1と井戸3	1	B-10	B	SE 097	曲物井戸	55	C-6	A
SE 053	竹井戸	53	B-10	D	SE 098	羽釜井戸	55	C-16	B
SE 054	羽釜井戸	53	B-10	B	SE 099	素掘り井戸	55	C-16	E
SE 055	大井戸	53	B-10	E	SE 100	井戸4	試掘	C-16	C
SE 056	羽釜4段井戸	53	C-1	D	SE 101	SE 2-3	26	C-17	A
SE 057	西側の深い井戸	53	C-11	E	SE 102	SE 2-2	26	C-17	A
SE 058	井戸3	53	C-1	E	SE 103	SE 2-1	26	C-17	A
SE 059	井戸1	53	C-1	E	SE 104	SE 5	試掘	C-17	A
SE 060	井戸2	19	C-1	A	SE 105	井戸2-2	27	C-7	E
SE 061	井戸4	19	C-1	E	SE 106	SE 2-3	27	C-7	E
SE 062	井戸5	19	C-1	A	SE 107	SE 2-1	27	C-7-17	A
SE 063	井戸6	19	C-1	E	SE 108	SE-2	28	C-8-18	E
SE 064	No.1井戸	20	C-2	A	SE 109	SE-1	28	C-18	E
SE 065	No.2井戸	試掘	C-12	B	SE 110	井戸1	試掘	C-18	B
SE 066	No.1井戸	試掘	C-12	B	SE 111	井戸2、 SE 2-1	試掘	C-19	C
SE 067	No.5と 北東曲物井戸	1	C-3	A	SE 112	曲物1段井戸	試掘	D-12	A
SE 068	No.4井戸	21	C-3	B	SE 113	井戸	34	D-12	A
SE 069	No.3井戸	21	C-3	A	SE 114	井戸	35	D-2	A

(三) 掘立柱建物跡

今回、長原遺跡で出土した掘立柱建物跡は、25棟が考えられている。このうち、古墳時代のものは30トレンチの1棟のみで、他の24棟はすべて平安時代～鎌倉時代のものである。建物跡およびその関連遺構の時期別分布をみると全調査地域のうち特に南側と北側の地域に平安時代の建物跡の多いことが判明した。

一方、出土遺物の多くをしめる瓦器碗、皿、壺類は、包含層および建物以外のピット、土壙、溝等からも出土しているが、それら個々の遺構の詳細については、割合することとする。

ここでは本遺跡において大きな画期を示すとみられる平安時代後半～末期の掘立柱建物跡を南群のA～C群（S B 014～020、S D 211・212等）、中央北群（S B 005～009、S D 210）、北群（S B 001～004、S D 220・221）の3群に分けて簡単に述べておきたい。

第144図に示した遺物のうち(1)～(7)は柱穴内から出土したものである。土師器碗（2～5）、皿（6）は26トレンチで出土した土器溜の遺物に類似している。これらの遺物はS B 002の掘立柱建物の時期を考えるさいに年代観を与えてくれる。さらに、7トレンチの2条の溝から出土した(33)～(36)は、先の建物から出土した遺物とも類似していることからほぼ同時期に併存した遺構と考えてよいだろう。この建物はさらに南にある東西棟の建物と1群を構成している。そして、1群の建物に伴なう土壙（S K 001～003）から出土した遺物は(8)～(32)である。S K 001（24～32）、S K 002（14～23）、S K 003（8～13）の各出土遺物は黒色土器A類碗（22・26）、壺（25）、鉢（30）、大碗（23）、B類碗（20・21）、壺（25）、灰釉碗（31）、土師器小皿（8・9・14～17・24）、皿（12）、碗（11・13・19・27～29）、壺（10・18）をあげることができる。しかし、瓦器は出土していない。これらの遺物に類似しているものを今回の調査の中からとりあげると、先の建物と同じく、土器溜出土遺物にS K 023の出土遺物を加えることができる。S K 023の出土遺物は整理・研究

表10 掘立柱建物跡出土地区一覧表

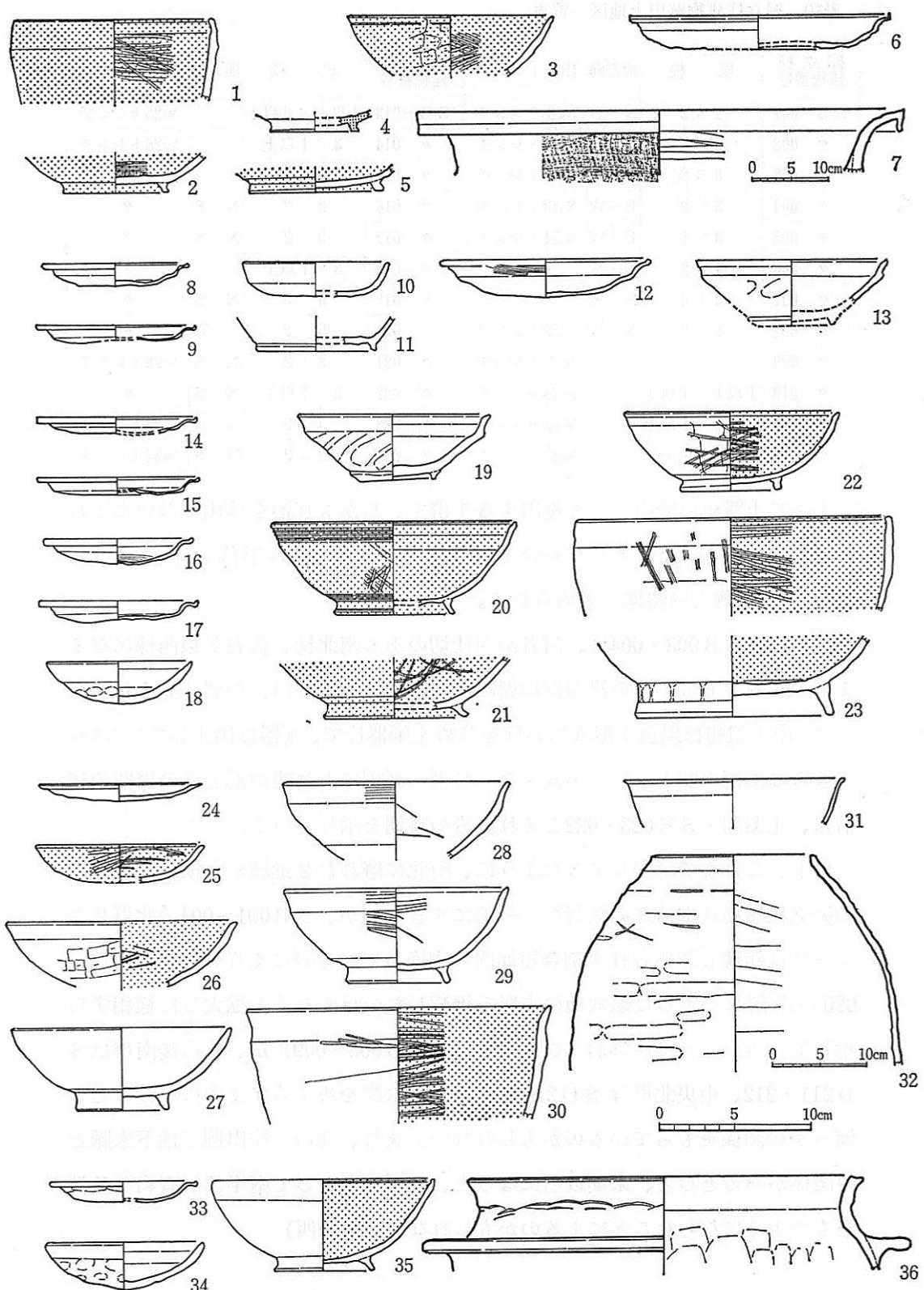
掘立柱 建物番号	規 模	棟方向	出土トレンチ	掘立柱 建物番号	規 模	棟方向	出土トレンチ
S B-001	2×2	N-S	No.8 トレンチ	S B-013	1以上×2以上		No.25 トレンチ
" 002	5×1	E-W	No.46 トレンチ	" 014	3×1以上		No.26 トレンチ
" 003	3×2	N-S	No.6 トレンチ	" 015	3×1以上		"
" 004	3×2	E-W	No.48 トレンチ	" 016	2×2	N-S	"
" 005	3×1	E-W	No.51 トレンチ	" 017	3×2	N-S	"
" 006	4×2	N-S	"	" 018	3×1以上		"
" 007	3×2	N-S	"	" 019	5×3	N-S	"
" 008	2×2	N-S	No.52 トレンチ	" 020	5×2	E-W	"
" 009			No.1 トレンチ	" 021	2×2	N-S	No.28 トレンチ
" 010	1以上×1以上		No.22 トレンチ	" 022	2×1以上	N-S	"
" 011	1以上×1以上		No.62 トレンチ	" 023	3×2	E-W	No.20 トレンチ
" 012	3×1以上		No.25 トレンチ	" 024	2×2	N-S	No.34 トレンチ

によって土器溜の遺物よりも後出する1群で、しかも瓦器を伴出しないことが確認されている。よってこれらの1群の建物や土壙と溝の年代の下限はSK023の出土遺物と同時期に求められる。

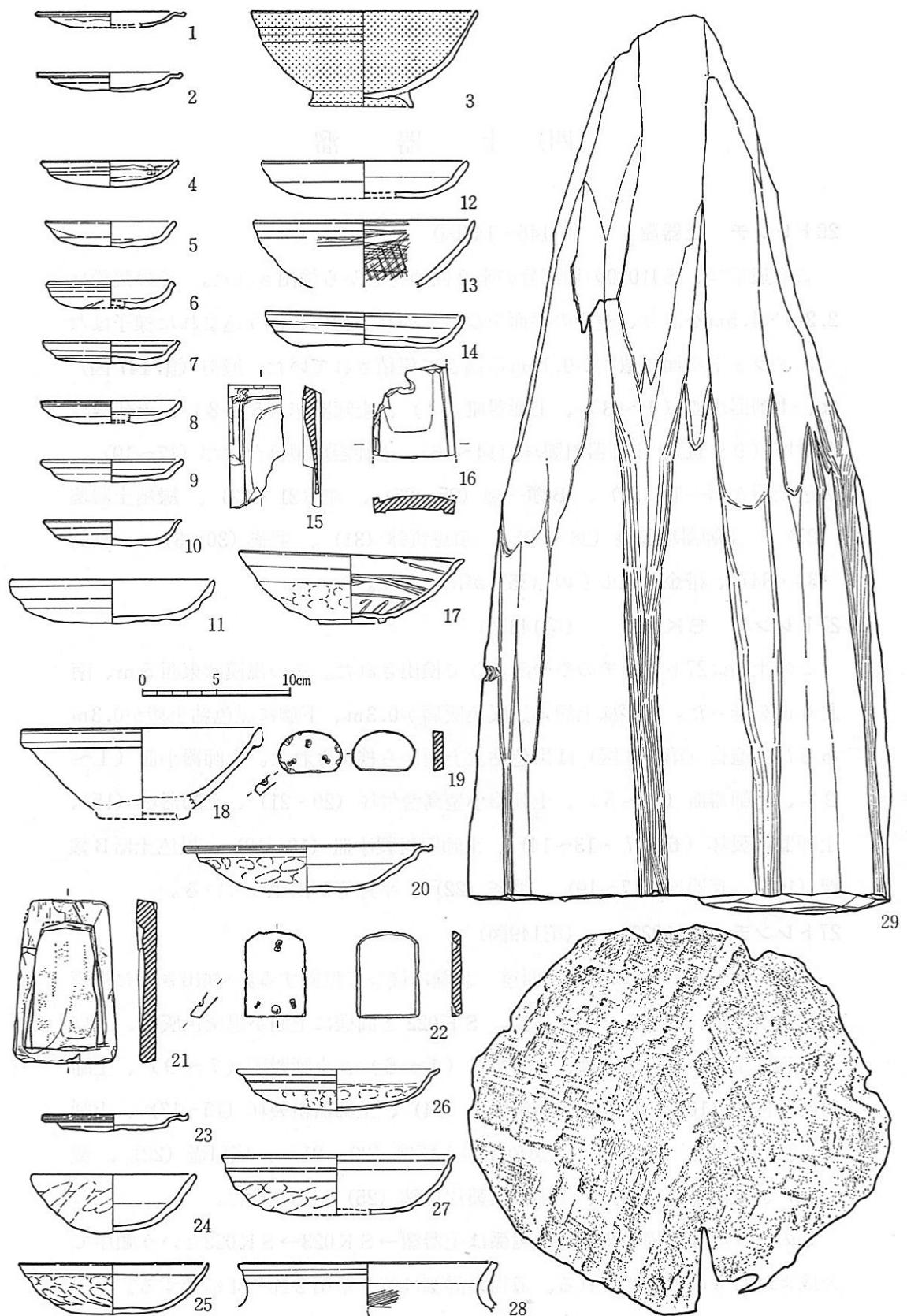
つぎに、SB003・004は、前者が間仕切のある南北棟、後者が東西棟になる1群の建物である。この建物群の周囲には、溝や土壙、井戸、柵列は見られなかった。出土遺物は黒色土器A類の碗を含め土師器片で、瓦器は出土していない。

さらに南群の26トレンチのA・B・C群に区別できた建物群とその周囲の遺構は、土器溜・SK023・022とそれ以後の時期を示している。

以上、これまで説明してきたように、南北に離れた2地域から検出した5群の掘立柱建物は本遺跡の集落跡の一部にすぎないが、SB001～004の北群2グループは建替も認められず割合短期間に廃絶しているのにくらべ、SB014～020の南群は一定した家敷地の占拠を継続したのはもちろん拡大した様相を示している。これは南群および中央北群(SB005～009)が、その後南群はSD211・212、中央北群はSD210という大きな溝をめぐらすことと何らかの関係をもっているのかもしれない。また、井戸の検出例が地下水脈との関係があるとして、末期以后になると、住居空間として南半部が有利な条件をもつようになったことによるのかもしれない。(中西)



第144図 S B 001及び関連遺構出土遺物実測図



第145図 建物関連構出土遺物実測図

(1~17) B地区 (18~28) C地区 (29) 22トレンチ

(四) 土 器 溜

26 トレンチ 土器溜 (第146・147図)

この遺構は、S B 019の廂部分の南2間め付近から検出された。その規模は2.2m×1.5mを計り、菱形の平面をなしていた。特に、掘り込まれた様子はなく、フラットな面に遺物が0.15mの高さに集積されていた。遺物(第147図)は、土師器小皿(1~3)、土師器皿(4)、土師器壺(5~8)、土師器高台付壺(9~11)、土師器粗製壺(14~16)、土師器粗製高台付壺(17~19)、黒色土器A類一皿(20)、B類一碗(25・26)、皿(21・22)、緑釉土器碗(27)、土師器粗製甕(28・29)、須恵質鉢(31)、羽釜(30~31)、鉄釘(33・34)、帶金具状のもの(35)が出土した。

27 トレンチ SK022 (第148図)

この土壙は27トレンチのやや西よりで検出された。その規模は東西5m、南北6mを計った。層序は上層に黒灰色灰層が0.3m、下層に黒色粘土層が0.3mあった。遺物(第148図)は黒色粘土上面から検出された。土師器小皿(1~2)、土師器皿(3~5)、土師器小型高台付壺(20・21)、土師器碗(15)、土師器粗製壺(6・7・13~14)、土師器粗製小皿(10~12)、黒色土器B類碗(16)、瓦器碗(17~19)、羽釜(22)、平瓦等が出土している。

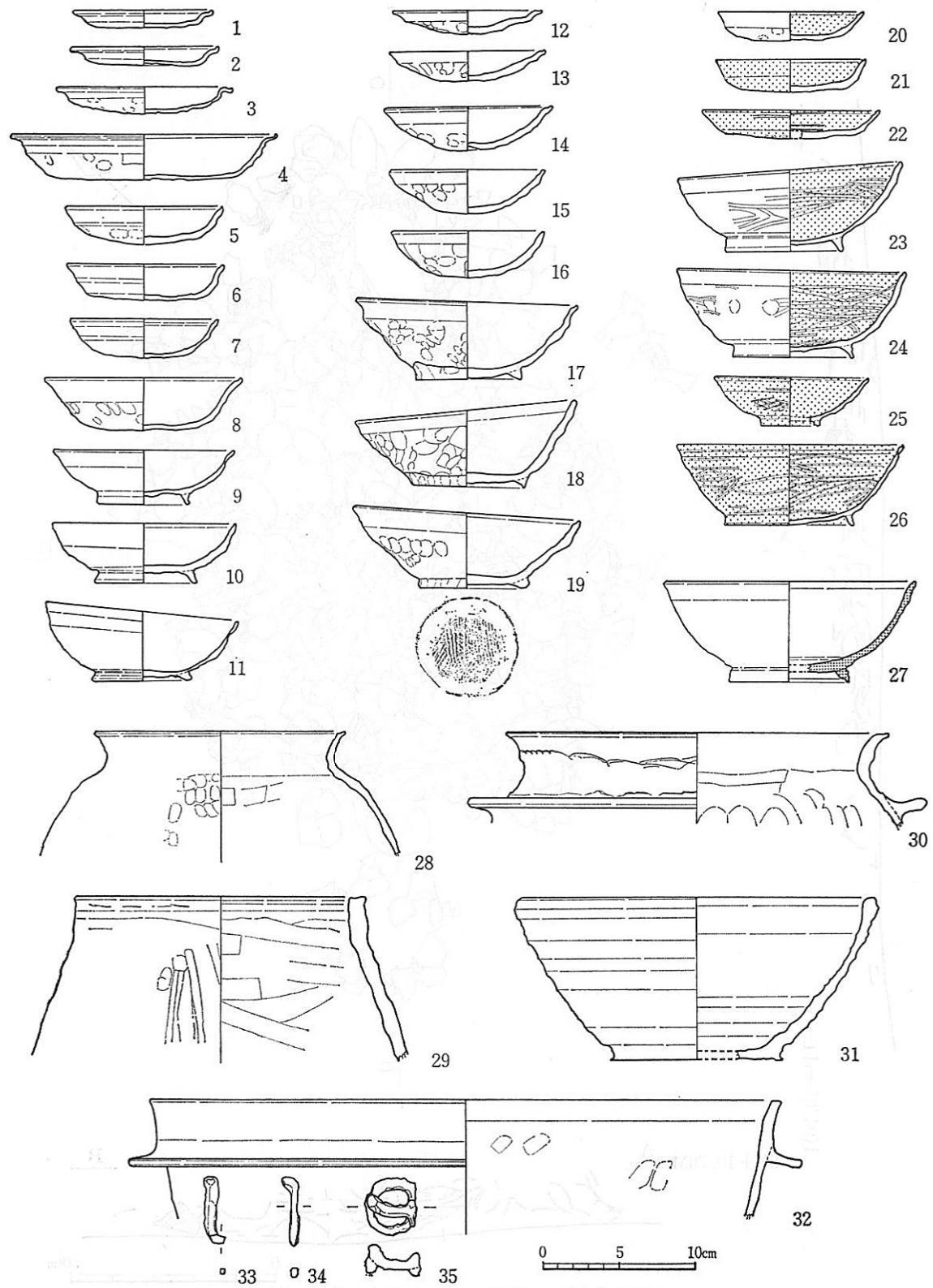
27 トレンチ SK023 (第149図)

SK022から西へ4m離れ、西壁と北壁に接して位置する。検出された規模は、東西3m、南北5mであった。SK022と同様に上層が黒灰色灰層、下層に黒色粘土があり、遺物は、土師器皿(1~6)、土師器壺(7~9)、土師器高台付壺(10~13)、土師器粗製皿(14)、土師器粗製壺(15~17)、土師器粗製高台付壺(18・19)、黒色土器A類碗(20・21)、広口壺(22)、甕(23)、土師器甕(24)、土師器粗製片口鉢(25)が出土した。

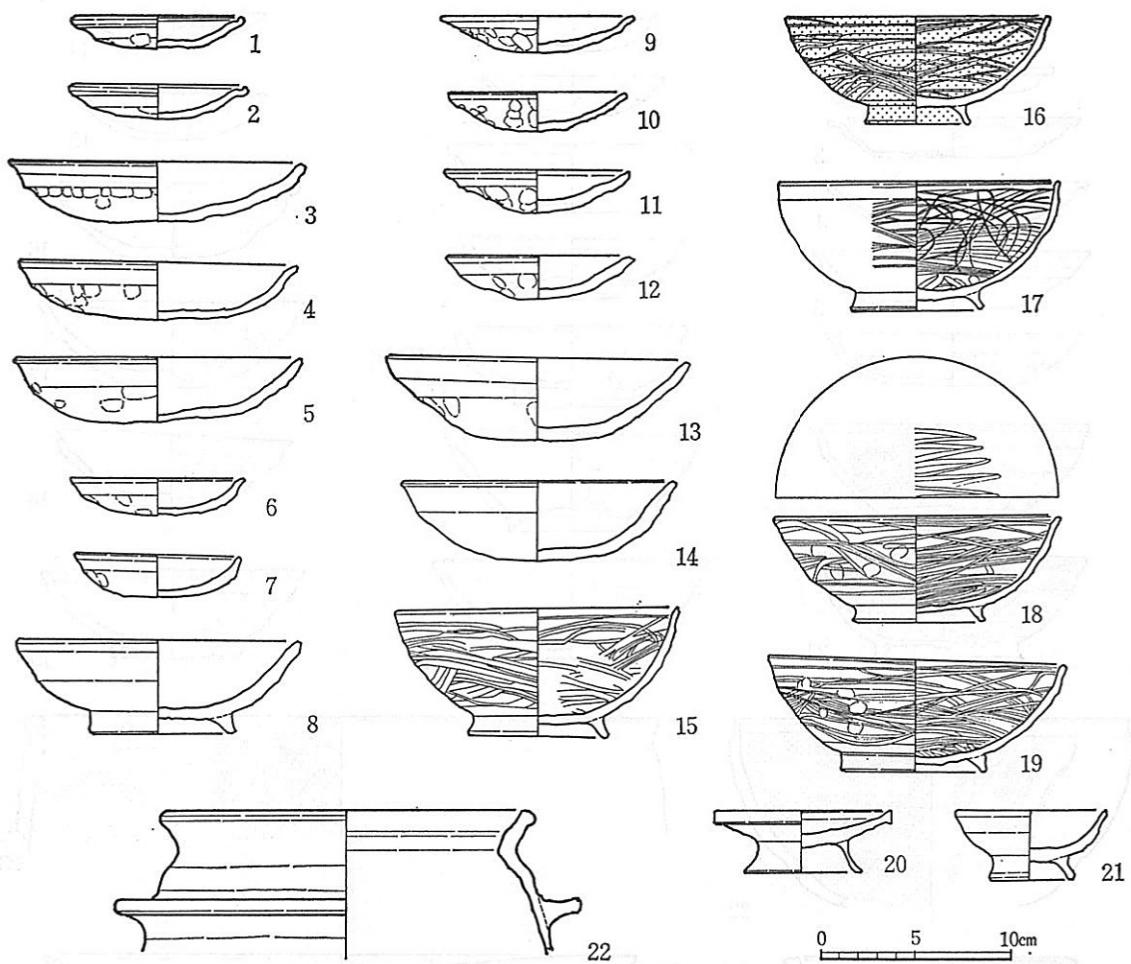
このような3遺構の時期的な関係は土器溜→SK023→SK022という順序で形成されたものと考えられる。遺物の詳細は第V章第2節ー4にゆづる。



第146図 M.26トレンチ土器溜実測図



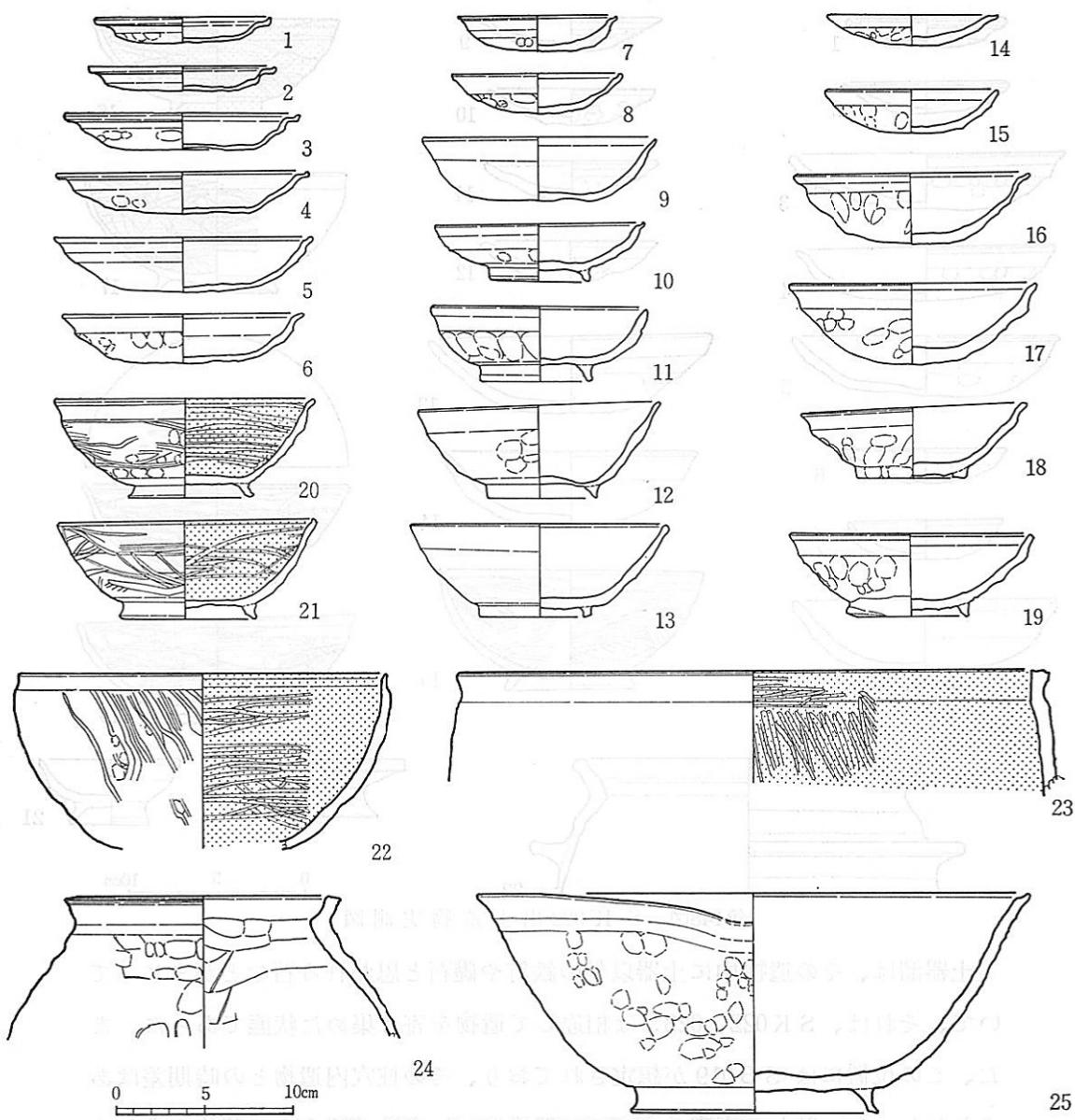
第147図 1962トレンチ土器溜出土遺物実測図



第148図 SK 022 出土遺物実測図

土器溜は、その遺物中に土器以外の鉄釘や礎石と思われる石などがまじっていて、それは、SK 022、023とは相違して遺物を寄せ集めた状態であった。また、この位置にはSB 019が想定されており、その柱穴内遺物との時期差はあまりなかった。以上の事実から、この遺構についてはSB 019の建物を含むA群の建物を建る時点で、それまでにあった遺構の遺物を集めたか、他のB、C群の建物を建る時点でA群に伴なう遺物を集めた個所、いわゆる廃棄物の集積とも考えられる。

土器溜とは異なり、SK 022、023は土器以外に瓦が数片前者の両肩から出土しているのみである。この両土壙の平面形態は長楕円をていすると考えられる。また、土壙の特徴の1つに灰層の存在があり、その中に遺物が含まれてい



第149図 SK 023 出土遺物実測図

た。灰は細かく、草、ワラの灰と考えられる。この灰層の存在から周辺ないし土壌内で火が使用されていたと思われる。また SK 023 からは火を受けたスサ入りの土塊が出土している。

この 2 つの土壌は、26 トレンチの建物群のうち、B・C 群と平行する時期の遺構と考えられることから、2 つの土壌は建物群とともに家敷地を構成する要素として考えられよう。(尾谷)

(五) 平安期末～鎌倉期初めの溝

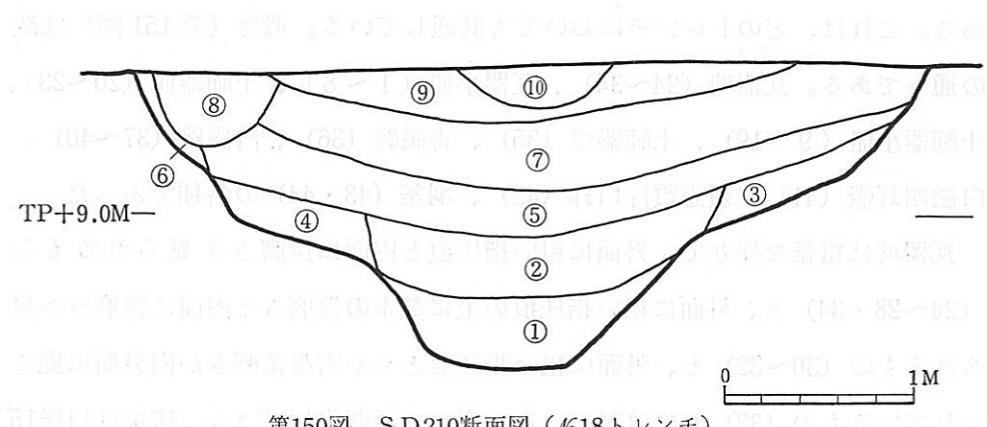
今回、当遺跡の調査で検出された溝は、幅 0.1m位のものから幅 4 mを計る大溝まで多種多様な溝が検出された。これらの溝のうち、この章で取り上げる 3 条の溝は長原遺跡の中で、規模、形態、及び他の遺構との関連から、集落内の地割や近辺の条里制を復元する上で好資料であろうと考えられる。

1. 各溝の検出状況

SD210

当遺構は調査地域の中央部にあり、今回検出された溝の中では最大規模をもっていた。検出されたトレンチは、50トレンチ以南、60トレンチまでの間の各トレンチであった。この50トレンチと60トレンチではそれぞれ東へ屈曲しているのが確認された。

溝内埋土の層序は第 150 図の通り、①灰黒色粘土、地山粘土混り、②灰黒色粘土、砂混り、③④黒色粘土、⑤黒灰色粘土、⑥灰色粘土、⑦青灰色粘土、⑧灰褐色粘土、⑨黄灰色粘土、⑩黑色土が堆積していた。この断面図から③、④層が堆積した時点で再掘削されているのが判明した。しかし、調査中には明確に確認できなかった。最初の溝を A 溝、再掘削された溝を B 溝とする。記述は全容が判明する B 溝について行なう。



第150図 SD210断面図 (M618トレンチ)

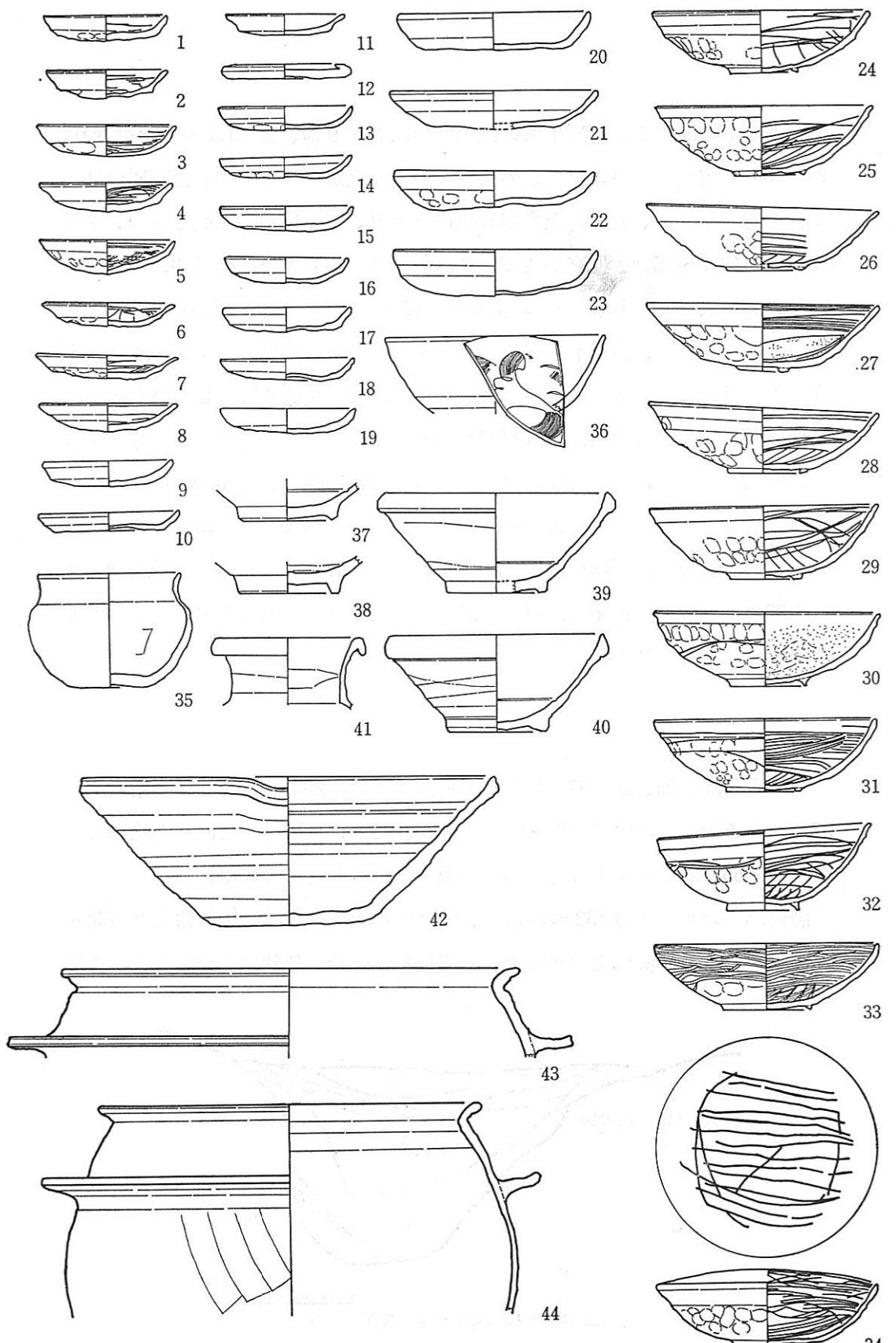
検出された溝の長さは南北 109m、東西30m余であった。溝の規模は上端幅で約3.6～4 m、溝底幅約0.7～1 m、深さは約1.3mを計った。また51トレンチから19トレンチまでは2段掘りされ、その部分に幅0.45mのテラスをつくっていた。

このB溝の底部には、堰を思わせる地山を掘り残した小土手が検出された。この遺構は、50トレンチでは、東へ4.3mの所で上端幅0.2m、下端幅0.6m、高さ0.4m、3トレンチでは上端幅0.5m、下端幅1m、高さ4m、51トレンチで上端幅0.25m、下端幅0.6m、高さ0.4m、2トレンチでは上端幅0.4m、下端幅0.6m、高さ0.1m、19トレンチでは上端幅0.3m、下端幅0.8m、高さ0.2mを各々計った。各土手の距離は50トレンチの屈曲部から南へ4.5m、26m、35m、95mを計った。また2、18トレンチでは、テラス上に同様な小土手が掘り残されていた。前者は上端幅0.3m、下端幅0.6m、高さ0.3m、後者は上端幅0.3m、下端幅0.7m、高さ0.15mを計った。50トレンチからの距離は37m、61mを計った。また、19トレンチの小土手上には木杭状のものが立てられており、このような土手が簡単な橋状の構造物か堰として利用されていたものと考えられる。

溝の流走方向は、溝底部の標高が50トレンチの東端で8.12m、屈曲部で8.42m、南の屈曲部分の60トレンチで 8.612mを計ることから、南→北→北→東の方向と考えられる。

遺物は多量に出土しているが、ほとんどがB溝の②、⑤、⑧層からの出土である。これは、どのトレンチにおいても共通している。遺物（第151図）は次の通りである。瓦器碗（24～34）、瓦器小皿（1～8）、土師器皿（20～23）、土師器小皿（9～19）、土師器壺（35）、青磁碗（36）、白磁碗（37～40）、白磁四耳壺（41）、須恵質片口鉢（42）、羽釜（43・44）の各種であった。

瓦器碗は粗雑な作りで、外面に粗い指圧痕と内面に笠磨きが見られるもの（24～28・34）と、外面に粗い指圧痕の上に数本の笠磨きと内面に笠磨きが見られるもの（30～32）と、外面に粗い指圧痕とやや密な笠磨きが内外面に施されているもの（33）とに分類できる。高台は形骸化している。法量は口径15



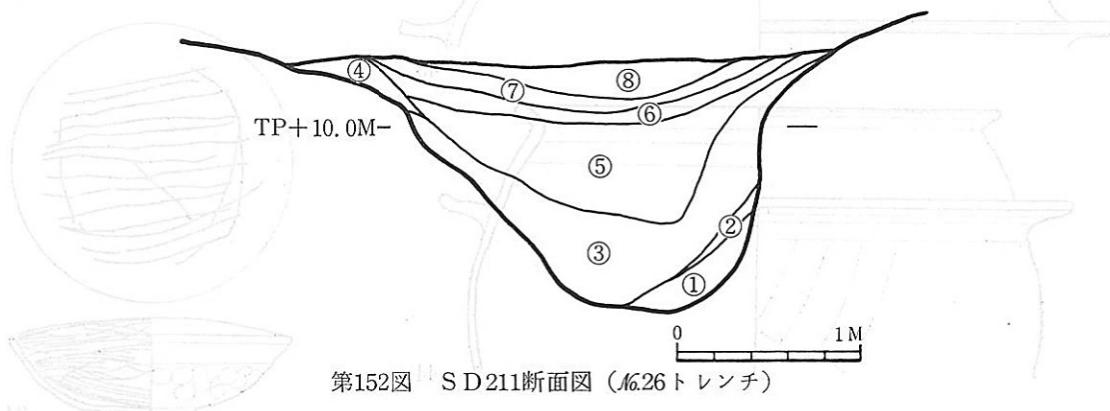
第151図 S D 210 出土遺物実測図

cm、器高 5 cm を計る。瓦器小皿の法量は口径 8 ~ 9 cm、器高 1.5 ~ 2 cm を計り、雑な作りで内面は粗い箒磨き、外面は粗い指圧痕がついている。土師器皿はいずれも内面がナデ、外面の上半部分が横ナデ痕、下半部が指圧痕を持つ。法量は口径が 13.5 ~ 15 cm、器高が 2.5 ~ 3 cm を計る。土師器壺は口径 9.4 cm、器高 7.7 cm を計り、底部器壁は厚い。土師器小皿はいずれも内外面上半部横ナデ痕、外面下半部指圧痕、内面下半部ナデ痕が残っていた。法量は口径 8 ~ 9 cm、器高は 1 ~ 1.8 cm を計った。ただ (12) の小皿がやや形態を異にしているが、技法は同じである。青磁碗は口縁端部が丸くおさまり内面に箒描きの曲線文を持つ。白磁碗は玉縁、削り出し高台を持ち口径 14 ~ 15 cm、器高 6.5 cm を計る。白磁四耳壺は口縁部のみで口径が 10 cm を計った。片口鉢は口径 27.5 cm、器高 10 cm を計った。羽釜は、(43) が口径 30.5 cm、つば径 37 cm、(44) が口径 25 cm、つば径 33 cm を計った。瓦器は長原遺跡出土瓦器編年（長原遺跡整理資料Ⅲ）のⅡ期の時期と考えられる。

SD211

この溝は 25、55、26、27 トレンチで検出された。25 トレンチでは西南隅を、55 トレンチではほぼ中央を東西に走る。26、27 トレンチでは東側を南北に走っていた。55 と 26 トレンチの間で西に屈曲していると考えられる。

溝内埋土の層序は第 152 図の通り、①地山粘土と砂質土、黒色粘土との混入土、②砂質土と黒灰色土の混入土、③黒色粘土と暗灰色粘土との混入土、④暗



第152図 SD211断面図 (M.26トレンチ)

茶灰色土、⑤黒色粘土、⑥灰色粘土、⑦茶灰色粘土、⑧茶灰色砂質粘土が堆積している。この溝も第4層まで埋没してから再掘削されている。

検出された規模は、南北長約34m、東西長25mを計った。幅は約2m、溝底幅約0.8m、深さ約0.65mを計った。そして、このような規模をもちながら平面形態は一定していない。

溝底部の標高は、55トレンチの西端で9.93m、屈曲部に近い東端で9.646m、26トレンチの北端で9.93m、南端で8.613m、27トレンチの南端で9.472mを計り、水の流れは西→東・北→南の方向である。また、再掘削された溝は調査中では明確に確認できなかったが、その溝底部の標高は断面から26トレンチの北端で9.96m、27トレンチ南端で9.472mを計り、流水方向も最初の溝と変わりはなかったと考えられる。

また、26トレンチの南よりでは、短径2.1×長径2.8m、上端からの深さ1.6mを計る1段掘り窪めた

個所が認められた。ま

たこれから南側の底部

は、北側や27トレンチ

の底部よりは0.8m低

くなり、底部幅が極端

に狭くなっていた。砂

や泥を止める溜まりの

機能を持っていたので

はなかろうか。

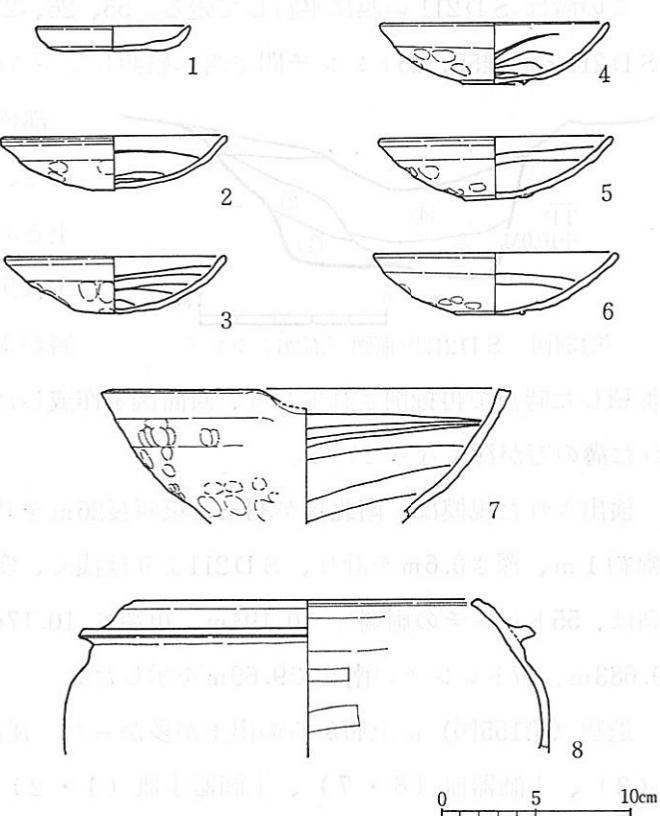
遺物は第153図の通り、土師器小皿(1)、

瓦器碗(2~6)、瓦

器ねり鉢(7)、瓦器

羽釜(8)の各種が出

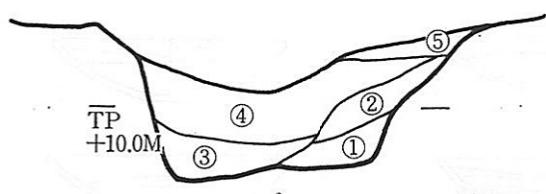
土した。土師器小皿は第153図SD211出土遺物実測図



内外上半部に横ナデ痕が、外下半部は指圧痕が残っていた。法量は口径 8 cm、器高 1.3 cm を計った。瓦器碗は大別して高台が消失したもの（2・3）と、かろうじて高台が残存しているもの（4～6）とに分けられる。しかし、両種とも作りは雑で外面上半部に横ナデ痕、下半部に指圧痕を残し、内面に粗い箆磨きが横方向に施してある。瓦器ねり鉢は外面は指圧痕を残し、口縁部外面から内面にかけて横ナデを用い、内面は更に箆磨きが数条施されている。法量は口径 20.2 m、現器高 7 cm を計った。瓦器羽釜は口縁部は内彎ぎみに内傾し端部は平面をもつ。体部外面は凹凸が激しく、煤が付着している。口縁部内面は横ナデ、内面は箆磨きが施されている。法量は口径 18 cm、つば径 24 cm を計った。この他に瓦器碗など多量に出土した。

SD212

この溝は SD211 の西に平行して走る。55、26、27 トレンチで検出された。SD211 と同様 55、26 トレンチ間で西へ屈曲しているのであろう。



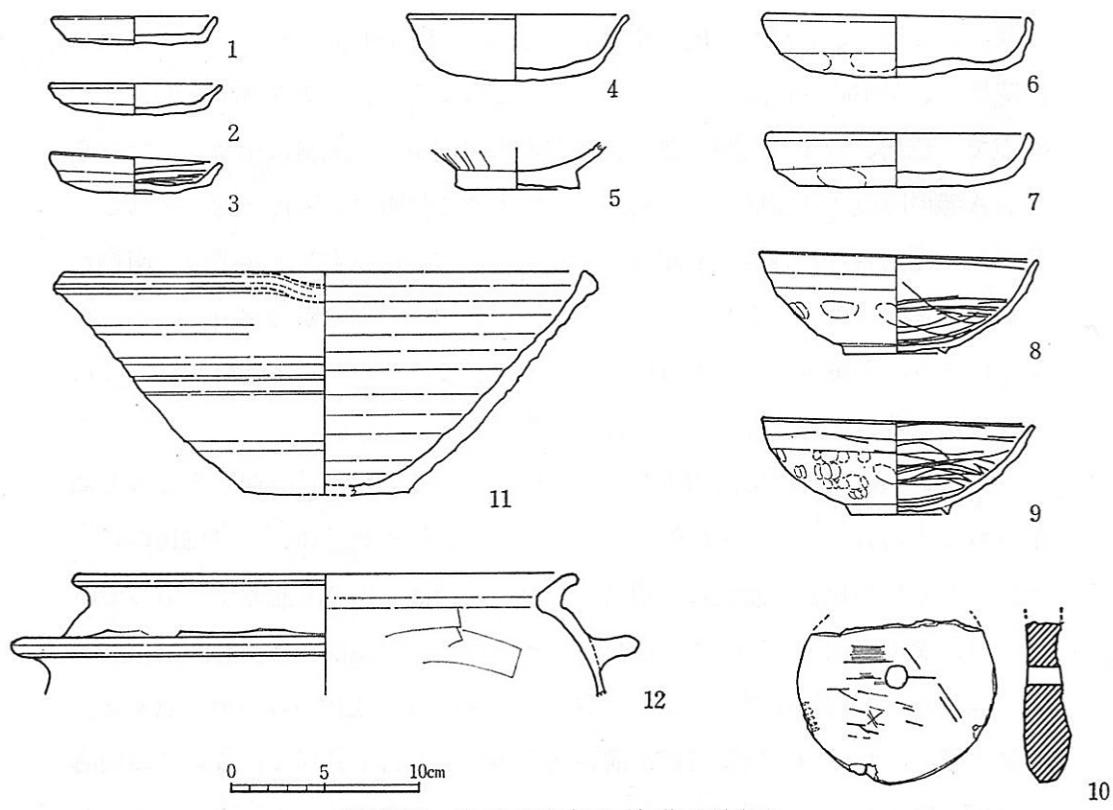
第154図 SD212断面図 (M26トレンチ)

溝内埋土の層序は第154図の通り、①黒色粘土と青灰色砂質土との互層、②黒色粘土、③、④は黒色粘土で③と④の間に砂層がある。この溝も①、②層が堆積した時点で再掘削されており、断面図を作成した26トレンチでは再掘削された溝の方が深くなっている。

検出された規模は、南北長が 33 m、東西長 26 m を計った。幅は約 2 m、溝底幅約 1 m、深さ 0.6 m を計り、SD211 よりは浅く、変化なく走る。溝底部の標高は、55 トレンチの両端で 10.194 m、東端で 10.174 m、26 トレンチの南端で 9.683 m、27 トレンチの南端で 9.69 m を示した。

遺物（第155図）は上層からの出土が多かった。瓦器碗（8・9）、瓦器小皿（3）、土師器皿（6・7）、土師器小皿（1・2）、須恵器（4）、白磁碗（5）、ねり鉢（11）、羽釜（12）、石製品（10）の各種が出土した。

瓦器塊は外面上半部は横ナデ、外面下半部指圧痕を残し、内面は横ナデの後横方向の箆磨きを施し底部に斜格子の箆磨きが施してあるもの（8）と外面上半部にさらに粗い箆磨きを施したもの（9）とであった。法量は口径14.5cm、器高5cmを計る。小皿は体部外面に横ナデ、底部は指圧痕を残し、内面箆磨きが施されている。法量は口径9cm、器高2cmを計った。土師器皿は外内上半部に指圧痕を残し、内底部はナデが施されている。法量は口径13.5cm、器高3cmは横ナデ、外面下半を計った。小皿も技法は同様で法量が口径8.5～9cm、器高1.5～1.6cmと小型化している。ねり鉢は内外面横ナデが施されており、法量は口径27.4cm、器高11.8cmを計った。羽釜は口縁端部に煤が付着しており、口径26cm、つば径33cmを計った。また、須恵器はTK217型式の坏身で他の器種より時期が遡る。白磁は高台部分だけであった。石製品は一部を欠失しているが、径10cm、厚さ2.5cmを計る円形のもので、中心部に径0.8cmの穴が穿ってあ



第155図 S D 212出土遺物 実測図

った。器種としては紡錘車か薬研と考えられる。材質は滑石製。

上記の溝（8）のより下の溝はもっぱら東側の堤防に沿うものである。

2.3 各溝と関連遺構

上記の溝が周辺の他の遺構とどのような関連を持つのか、ということも問題となるところであろう。

S D 210の内側においては、東肩部から5m離れた所からS D 215までの、幅約18mの間の南北に長い部分に遺構が集中している。また溝の外では、南側の54、20、21、22トレントなどでも井戸遺構等が認められるが、やや希薄になる。溝の内側の遺構配置をみると掘立柱建物5棟（S B 005～S B 009）があり、他にもピットが集中している。そして、これらの遺構の東側には井戸が集中し、南側には土壙群が所在する。

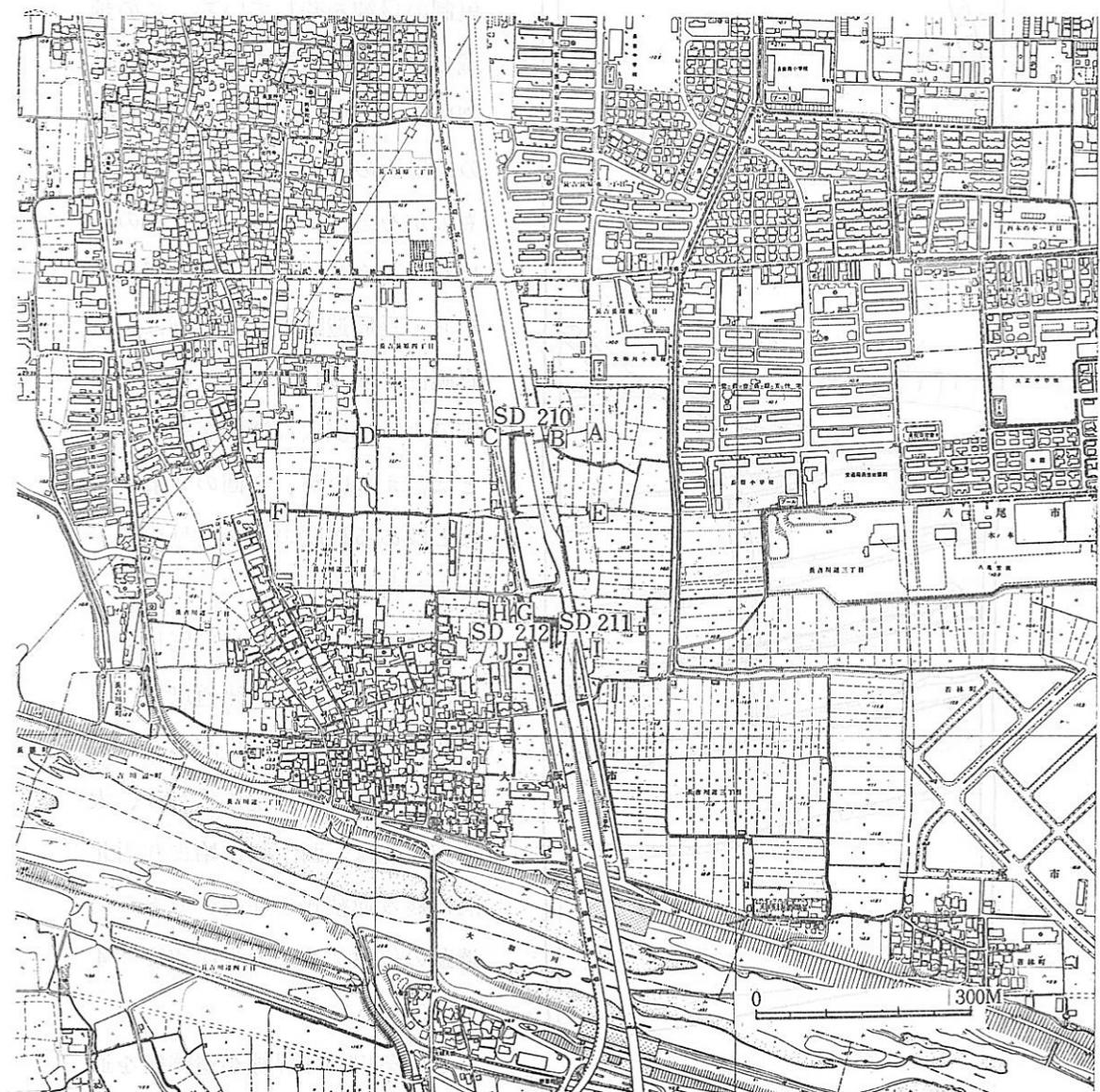
なお溝 S D 210 の西側と北側については、調査範囲の中では遺構は確認されていない。

建物、ピット、井戸から出土する遺物は S D 210 のB溝から出土する遺物と同時期か、やや時期が降ると考えられる。このように、まずA溝が掘削された時点での遺構、つまり上記の遺構より確実に時期が遅る遺構は確認されておらず、A溝の時点では遺構はたとえ存在してもごく少数であったと考えられる。B溝が再掘削された時点で上記の掘立柱建物、井戸が存在し、溝の東、南側が生活の場になったと考えられる。それは、溝の縁辺の何mかの部分であり、堤が築かれるなど耕地化しにくい場所であって、こうした所が家敷地となったり、または荒地として残っている場合が多いと考えられる。

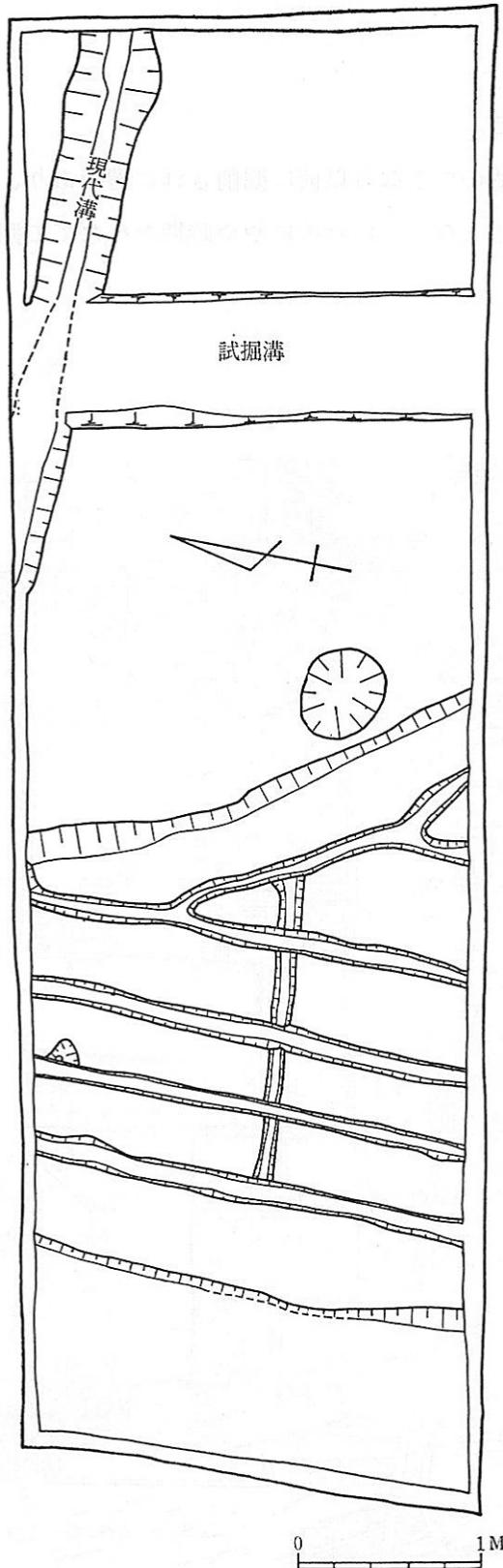
S D 211とS D 212は位置関係からすれば同じ用途のために時期差をもって掘削されたと考えられる。この両溝と他の遺構との位置関係は、S D 210の状態とは異なり溝の東側と北側には遺構が少なく、両溝の内側と北側に集中している。また溝の内側には建物や井戸が確認されたが、時期的には両溝内出土遺物よりは遅り、直接的な関連は指摘しがたい。S D 211、212からの出土遺物と同時期と考えられるのは両溝内側や溝の北側のピット群や井戸である。この両溝は、27・28トレントの間で東か西に屈曲していると考えられる。この28トレ

チから南側は遺構が希薄になっている。

このように SD 210 は、周辺が生活の場となる以前に掘削された溝であり、SD 211 と SD 212 は以前から生活の場となっていた所にやや時期をへだてて掘りこまれた溝と考えられよう。



第156図 SD 210、SD 211、SD 212と周辺現地形図



第157図 M.26トレンチ現、近世の溝

3. 各溝と地割

上記のような調査域内の状況であるが、広域な位置関係を考えると条里制地割を無視できない。

長原遺跡の周辺は大阪市域でも、溝、畦畔、道路などがよく条里制の景観を残している。この地域の中での発掘調査は、現代の地割による条里制の復元が施行当時の条里制の復元作業として妥当なものかを裏付ける資料となるのではないか。このような問題点からの長原遺跡の発掘調査は、調査範囲が限られていたために条里制のような広大な遺構を調査したとは言えないが、今回の3条の溝などはある程度の示唆を与えてくれると考えられる。

長原遺跡は旧丹比郡に属しており、丹比郡条里は大津道以北（旧丹北郡）と以南（旧丹南郡、八下郡）の2系統の地割に分かれ、大津道以北は、西南隅に始まり西北隅に終る連続式の坪並びである。遺跡の位置は8条で大津道より4里内になる。

この条里の坪界線が遺跡内を通っており、SD210がその界線に

一致する。その南北は溝中心間で 109mを計った。つまり、この溝は現状では 8 条 4 里内 26 坪の西、南、北の界線上を走っている。ただ、南端で西、南へのびる可能性は残されている。溝は出土した瓦器塊からみて、おそらく平安時代末には掘削されており、それ以前の条里制地割を踏襲していると考えられる。では、この溝の位置を現代の地形にあてはめると、地形図（第 156 図）上の C—D 間の延長上の真下に北側の東西部分、E—F 間に南側の部分が一致する。また、地形図にはないが、南北部分が畦畔に一致している。ただ、C—D を延長した A—B 間は塚ノ本古墳により地割が乱れているが、往時の溝は塚ノ本古墳に真すぐにのびているのが確認されている。さらに、溝の上層には近世の小溝が走っていた。

このような結果から、SD 210 は現代まで、溝、道路、畦畔等に引きつがれないと考えられよう。

SD 211、212 は、同様に 14 坪内に入り、界線には一致していないが、地割方向とは一致している。そして西へさらにのびた場合、西側の界線に接する。また、現地形と合わせれば、SD 211 は北側の東西部分は G—H の小径の延長部に、南側はおそらく I—J 間の小径のラインに一致すると考えられる。また、この両溝が検出された 26 トレンチの第 1 遺構面（第 157 図）には、近世、現代の小溝が検出されその方向も一致していた。これらのことからも、SD 211、SD 212 も SD 210 と同様に現地形の方向、地割に引きつがれていると考えられる。

また、この 3 条の溝以外に SD 213～219 や他の小溝も同一方向を走っていた。このように、平安期末～鎌倉期初期の溝や SB 005～009 の方向がそれらの溝と同一方向であり、それらが条里制地割に規制されている以上、それをひきついでいる現代の地形から長原周辺の条里制復元は可能であると考えられる。

4. まとめ

これら 3 条の溝から、遺跡の所在する長原一帯の古代末から中世初めにかけての人々の生活の一部を復元できないであろうか。

文献資料には、奈良～平安時代にかけて河内平野が幾度となく洪水の被害を受けたことが記載されているが、長原地域も例外ではなく、平安期の遺構が、奈良時代の遺物を含む厚い砂、礫層を切り込んだ状態で検出されている。洪水の結果、荒地となっていた長原の一帯は平安時代末から鎌倉時代初めにかけて再開発がなされたのではないだろうか。その結果として、SD210の様な大規模な溝を掘削したのではなかろうか。SD210の内側から検出された建物や井戸、土壙などは、再開発によって生じた人口増に対応した遺構ともみることができよう。

SD211、212の内側からは、黒色土器を伴う廂付掘立柱建物、倉庫と思われる掘立柱建物、土壙、井戸があり、さらに綠釉や中国陶磁器、石帯、硯までも出土している。このような遺構、遺物の性質から明らかなように、一般農民層より上の階層の人々、いいかえれば、SD210に代表される大規模な工事をするのに必要な労働力、財力を結集できる階層に位置する人々の家敷地と推測される。

また、SD211、212のような形態、規模の溝が最近各地の中世集落跡の調査で検出されているが、それらは家敷地を囲む溝であり、また用水路としても利用されていたと考えられている。SD211、212も、家敷地を囲む溝と考えれば、黒色土器を伴う遺構と重なるのもたんなる偶然ではないと考えられる。つまり再開発の結果、SD210にそって生活の場が生じた時期に、家敷地を画さなければならぬ必要が生じたのではなかろうか。遺構の状況から考えられるのは、家敷地の増加、塊村状態への変化であり、他の家敷地と区別しなければならなかつたのであろう。そして、調査区域内では溝によって他と区画することができる階層の家敷地は、26トレンチ周辺の一ヶ所で、先に考えたような地区であったのであろう。

以上、若干これら3条の溝について記したが、溝の最終的な流路、溝の堰口等まだまだ問題を残している。それらはいずれ、これから調査で解明されていくであろうし、最終的には、古代末～中世初めの河内平野の一村落が現われてくるであろう。（尾谷）

参考文献

- (1) 「産業史」豊田武編、第4章中世の農業、鎌倉期に於ける梗坂郷4条1里内復元図等から、この様な有り方が論じられている。[TEP・地誌小平文庫465]
- (2) 「更埴市の条里制研究」がある。
- (3) 「条理制の歴史地理学的研究」水野時二、「条里制」落合重信、があり、また、「上代浪華の歴史地理的研究」天坊幸彦著、「河内条里の研究」(ヒストリア)由井喜太郎、「河内国条里制関係資料集」大越勝秋、「古代の直線国境について」(歴史地理学紀要17)服部昌之、その他河内の条里制に関して論文等多数ある。
- (4) 木原克司氏が大阪市の長原遺跡調査結果から77年春、人文地理学会大会で「河内平野南西部に於ける古代～中世の開発について」で発表されている。
西琳寺流記 文永八年「長原郷田畠卅六町池一町云々」とある。
- (5) このような事例は各地で調査されているが、最近大阪府下では和泉市和氣遺跡で検出されている一灰掛軒、尾野幸雄氏教示。

4. 黒色土器から瓦器への移行過程について

考古学論文

—26トレンチ土器溜・27トレンチSK023・SK022出土遺物の検討—

1. はじめに

最近、開発等により遺跡を発掘する機会が多くなり、それに従い古代から中世の遺構が多く検出され、その所属年代を決めなければならない必要性から、平安時代から鎌倉時代にかけての土器研究の必要性が高まってきている。それとともに平安京、長岡京や、各地域の古代・中世村落の研究が進むにつれて、古代から中世への移行過程が問題となってきた。

従来の土器研究では、各器種ごとの分類、時期設定がなされてきたが、調査が進むにつれ、各地域における古代から中世の土器の組合せがわかりかけてき⁽¹⁾た。⁽²⁾

長原遺跡においても今回の発掘調査の結果、奈良時代から鎌倉時代の各種遺構一建物、溝、土壙等一が検出され、それについては前節で詳しく報告されている。

この項では古代から中世への移行過程について、長原遺跡の実情を土器に視点を当てて検討してみたい。検討の対象とするのは26トレンチ土器溜、27トレンチSK023、SK022の3つの遺構出土の遺物である。3遺構からは目的にそぐう土器が多数出土しており、比較的完形の遺物が多かった。出土遺物はおおむね平安時代中頃～後半にかけてのものとみなした。

3つの遺構の概略は次のとおりである。

26トレンチ 土器溜 2.2×1.5mの範囲で、土壙ではなく厚さ15cmで土器が集積している。

27トレンチ SK023 全容は判明していないが、現存検出された範囲では東西3m、南北5mの長楕円形と考えられる土壙である。層序は黒灰色灰層、黒色粘土層で成り立ち、粘土層までの深さは0.3mである。土器は粘土上面から多数出土し、粘土層内からも若干出土している。

27トレンチ SK022 全容は判明していないが、現存検出された範囲では東

西5m、南北6mの長楕円形と考えられる土壙である。層序は黒灰色灰層、黒色粘土層から成り、粘土層までの深さは0.3mである。土器は粘土上面から出土している。

2. 26トレンチ土器溜、27トレンチSK023、SK022出土の遺物

全体の土器の種類として、土師器、黒色土器、瓦器、須恵質土器、縁釉土器がある。さらに、土師器には精製と粗製があり、黒色土器にはA類（内黒）とB類（両黒）がある。本来はあると思われる須恵器、灰釉陶器、中国製陶磁器は出土していない。3遺構出土土器群を主な器種毎に以下の表で説明したい。

以上、3つの遺構毎に出土遺物の器種構成を表にしてみたが、次に3つの遺構出土遺物の時期的前後関係を明らかにしたい。

3 遺構出土遺物の時期 3遺構は近接して確認され、出土遺物の器種構成も3遺構間で相似しており、かなり接近した時期のものであることがわかる。

知見では、⁽⁵⁾ 平安時代は前（I）、中（II）、後（III）期の3時期に分けられ、各時期の特徴は次のようである。

I期は、まだ奈良時代の伝統が残り一例えば、黒色土器は内面に簡略な装飾暗文が施されている一、土師器壺、高壺、黒色土器壺、皿、須恵器壺、皿、土師器甕、須恵器甕、鉢等が組合せとしてある。土器の法量は奈良時代の規格性を失いつつあり、土器の成形手法も簡略され、ヘラケズリ手法はナデの手法に

表11 M.26トレンチ 土器溜出土土器一覧表 （第147図参照）

器種	器形	特徴	備考
土 師 器	Ⅲ	① 口径9cm強、器高1cm強で口縁部に折り返しがある（1、2）。	
		② 口径11cm強、器高1.5cm強で口縁部に折り返しがある（3）。	
		③ 口径17cm前後、器高3cm前後で口縁部に折り返しがある（4）。	

土 師 器	壺	①	口径10cm前後、器高2.5cm前後で皿より深く、体部・口縁部はやや丸く外上方へのび、無高台である。口縁端部内面に浅い沈線を施すもの(5~7)と施さないものがある。	
		②	口径12.5cm前後、器高3.5cm前後で体部から口縁部はゆるやかに外反してのび、無高台である。口縁端部に浅い沈線を施す(8)。	
		③	口径12.5cm前後、器高4cm前後で高台を有す。口縁端部に浅い沈線を施すもの(9、10)と施さないもの(11)がある。	
	皿	①	口径10cm前後、器高2cm前後で口縁部が横ナデにより外反する。口縁部に浅い沈線を施す(12、13)。体部外面は明瞭な指押え調整。	粗製
		①	口径10cm前後、器高3cm前後で皿より深い。体部・口縁部はやや丸く外上方へのびる。口縁端部に浅い沈線を施すもの(14)と施さないもの(15、16)とがある。無高台である。	粗製
		②	口径12.5cm前後、器高4.5cm前後で高台を有す。体部外面は明瞭な指押え調整。	粗製
	甕	③	口径14.5cm前後、器高5cm前後で高台をもつ。口縁端部に浅い沈線を施すもの(17、19)と施さないもの(18)がある。体部外面は明瞭な指押え調整。	粗製
		①	口縁部が外反し、口縁端部は平坦で浅い沈線を施す(28)。体部外面は指押えで内面はヘラナデ調整。	粗製
	無頸壺	①	口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は平坦気味で浅い線沈を施す。体部外面はヘラナデ調整(29)。	粗製
		①	口縁部が“く”の字に外反し、奈良時代の形態を残す。金雲母を含む(30)。	
	羽釜	②	体部・口縁部は外上方へのびる(32)。大型。	
黒 色 土 器	壺	①	口径10cm前後、器高2cm前後で口縁端部に浅い沈線を施す(20)。	A類
		①	口径12.5cm前後、器高4.5cm前後で高台を有す。内面は密であるが不ぞろいなヘラミガキ、外面は雑なヘラミガキ調整。	A類
		②	口径14.5cm前後、器高5.5cm前後で高台を有す。口縁端部に沈線を施す(25、24)。	A類
	皿	①	口径9.5~11.5cmとバラつきがあり、器高2cm前後で口縁端部に沈線を施す(21、22)。	B類
		①	口径10cm前後、器高3cm前後で高台を有す。口縁端部に浅い沈線を施す(25)。	B類
		②	口径12.5cm前後、器高4cm前後で口縁端部に浅い沈線を施す。内外面は不ぞろいであるが密なヘラミガキ調整。	B類
	塊	③	口径14.5cm前後、器高5.5cm前後で口縁端部に浅い沈線を施す(26)。内外面不ぞろいであるが密なヘラミガキ、底部外面も密なヘラミガキ調整。	B類
		①	平底の底部から内巻気味に立ち上がり、口縁端部は玉縁状である。糸切り底である(31)。	
		①	体部・口縁部は丸く外上方へ立ち上がる。内底面に沈線を施し、高台内側に段をもつ(27)。土師質で明緑色の釉を施し貫入あり。	

表12 M.27トレンチ S K023出土土器一覧表 (第149図参照)

器種	器形	特徴	備考
土師器	皿	① 口径10cm前後、器高1.5cm前後で口縁部に折り返しがある(1、2)。	
		② 口径13~14cmの間、器高2cm前後で口縁部に折り返しがある(3、4)。	
		③ 口径13~14.5cmの間、器高3cm前後で口縁部を折り返さず、一、二段の横ナデで直線的にのびる。口縁端部に浅い沈線を施すもの(5)と施さないもの(6)がある。	
	壺	① 口径9.5cm前後、器高2.5前cm後で皿よりも深い。体部・口縁部はやや丸く立ち上がり無高台である。口縁端部に浅い沈線を施すもの(5)と施さないもの(6)がある。	
		② 口径12.5cm前後、器高3.5cm前後で無高台である(9)。	
		③ 口径12cm前後、器高4cm前後で高台を有す。口縁端部に沈線を施すもの(10)と施さないもの(11)がある。	
	師	④ 口径14cm前後、器高6cm前後で体部・口縁部は直線的に立ち上がり、高台を有す。(12、13)。	
		皿 ① 口径9.5cm前後、器高2cm前後で口縁部はナデにより外反する。口縁端部は凹み気味の平坦なもの(14)と丸く終わるものがある。体部外面は明瞭な指押え調整。	粗製
	壺	① 口径9.5cm前後、器高2.5cm前後で皿よりも深い。体部・口縁部はやや丸く立ち上がり、無高台である(15)。	粗製
		② 口径13.5cm前後、器高4.5cm前後で体部・口縁部は丸く立ち上がり無高台である。ナデにより口縁部がやや外反し、端部はやや凹むもの(16)と丸く終わるもの(17)がある。体部外面は明瞭な指押え調整。	粗製
		③ 口径13cm前後、器高4.5cm前後で口縁部はナデによりやや外反し、高台を有す。口縁端部はやや平坦なもの(18)と丸く終わるもの(19)がある。体部外面は明瞭な指押え調整。	粗製
	片口鉢	① 体部・口縁部はやや丸く立ち上がり高台を有す。口縁端部はやや凹む(25)。	粗製
	甕	① 口縁部が短かく外方へ屈折し、端部は平坦である(24)。	粗製
黒色土器	塊	① 口径14.5cm前後、器高5.5cm前後で高台を有す。口縁端部に沈線を施すもの(21)と施さないもの(20)がある。内外面やや雑なヘラミガキ調整。	A類
	広口壺	① 体部が内彎して立ち上がり口縁部はナデによりやや外反する。高台がつくものと思われる。内外面雑なヘラミガキ調整(22)。	A類
	甕	① 体部はやや内傾して立ち上がり口縁部はナデによりやや外反する。口縁端部は平坦である。内面は雑なヘラミガキ調整(21)。	A類

表13 16.27トレンチ SK022出土土器一覧表 (第148図参照)

器種	器形	特徴		備考
土師器	皿	①	口径9cm前後、器高1.5cm前後で、口縁部の折り返しが失くなりつあり、器種がやや厚くなっている(1、2)。	
		②	口径15cm前後、器高3.5cm前後で口縁部は折り返さず、一・二段のナデ調整で直線的にのびる(3、4、5)。	
	壺	①	口径9.5cm前後、器高2cm前後で皿よりやや深い。無高台である(6、7)。	
		②	口径15cm前後、器高5cm前後で体部・口縁部は外上方へのびる。高台を有す(8)。	
		③	口径8~9cm台で器高に比して高い高台がつく(20、21)。	
	塊	①	口径15cm前後、器高4.5cm前後で体部・口縁部は内彎気味に立ち上がり、高台を有す(15)。内外面は密であるが不ぞろいなヘラミガキ調整。黒色土器B類・瓦器塊に類似。	
器	皿	①	口径9.5cm前後、器高2cm前後で口縁部がナデによりやや外反する。口縁端部がやや凹むもの(11)と丸く終わるもの(9、10、12)がある。体部外面は明瞭な指押え調整。	粗製
	壺	①	口径15cm前後、器高4.5cm前後で無高台である(13、14)。	粗製
	羽釜	①	口縁部が外方へ屈折し、のちの中世の羽釜へ続く形態である(22)。	
黒色土器	塊	①	口径14cm前後、器高6cm前後で体部・口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。外面は雑なヘラミガキ調整(16)。	B類
瓦器	塊	①	口径15cm前後、器高6cm前後で体部・口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。外面はやや雑なヘラミガキ調整(17、18、19)。	

次第にかわる。

Ⅱ期は、Ⅰ期とⅢ期の過渡期で土師器の器形減少、釜形の出現、須恵器の器形減少、糸切り底の出現、灰釉、綠釉陶器の増加、黒色土器の器形の多様化など器種構成の変化がある。成形手法は土師器の場合ヘラケズリ手法が消滅する。

Ⅲ期は、従来の器種に新たに瓦器が加わり、かつての土師器壺、塊、黒色土器塊が急速に姿を消し瓦器塊がとて代わる。また輸入陶磁器も増加し始める。成形手法はⅡ期以来のナデ手法であるが、皿の口縁部の折り返しが失くな

り、2段のヨコナデになる。土器の法量も新たな規格性を持つようになる。

3遺構出土遺物をそれらに比定すると、26トレンチ土器溜、27トレンチSK023出土遺物は平安Ⅱ期に、27トレンチSK022出土遺物は平安Ⅲ期になる。さらに土器溜とSK023の前後関係は、SK023の土師器大皿に口縁部の折り返しが消失したものがあることや黒色土器碗の形態がSK023より土器溜出土の方が底径が大きいこと等、古い様相をもっていることから土器溜がSK023に先行すると考える。つまり、それぞれを1時期の土器群とみなし、土器溜→SK023→SK022と変化したとみる。

3. 3遺構出土遺物の比較

3遺構出土遺物の変化をより詳しくみるために、器種構成の変化、成形手法の変化、法量の変化に分けてみていきたい。

器種構成の変化 3遺構の器種構成の表を見ればわかるが、土器溜では土師器、黒色土器とともに多くの器形が存在したがSK023では若干器形が減少している。例えば、土器溜では小皿が2種存在したのがSK023では1種に、粗製・無高台壺が土器溜では2種存在したのがSK023では1種に、また土器溜では黒色土器A類の碗が2種存在したのがSK023では1種に減っている。さらにSK023とSK022の器種構成の変化は顕著である。例えば、SK023では土師器大皿2種、壺(無高台)2種がSK022ではそれぞれ1種に減少し、粗製土師器も壺(無高台)2種、壺(有高台)1種が、SK022では壺(無高台)1種だけになり、粗製土師器が失くなりつつあることを示している。さらに黒色土器A類はSK022ではなくくなってしまっている。黒色土器B類もSK023では多器形存在したのがSK022では碗1種に減少している。また土師器羽釜も土器溜では奈良時代の伝統を残すものであったのがSK022では中世の羽釜の形態をとっている。そして、もっとも著しい変化は、SK022に瓦器が出現したことである。

このように、土器溜、SK023では多種多様であったものが、SK022では中世雜器の基本的セットである土師器小皿、大皿、羽釜、瓦器小皿、碗、白磁碗

に整いつつある様子が見られる。

成形手法の変化 ナデ手法であることは変わらないが、ナデ方が変化している。つまり土師器小皿の口縁部の折り返しは土器溜、SK022まで続くが、SK022では折り返しがなくなりつつあり、器壁が厚くなっている。大皿の折り返しはSK023まで続くが、SK023では折り返しがなくなりつつあり、口縁部を2段にナデるだけの手法が出てくる。SK022では折り返しが消滅し、口縁部を1・2段にナデた皿になる。

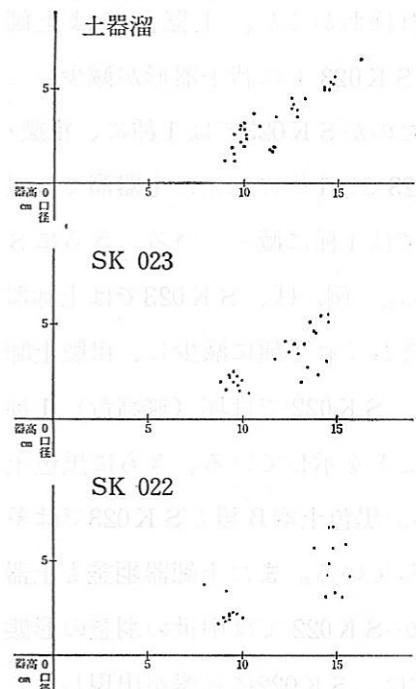
つまり、口縁部の折り返しがなくなり、中世の皿に見られる口縁部をナデるだけの手法になるのが、大皿ではSK022であり、小皿より早く変化している。

法量の変化 土器溜、SK023、SK022の出土遺物の法量を点でグラフ(表14)に表わしてみると、土器溜では、口径10cm前後のものと12.5cm前後のもの14.5

cm前後のもの3つに分かれ。SK

023では、口径9.5cm前後のものと12.5～14.5cmの間というバラつきをもつものとの2つに分かれ。SK022では口径9.5cm前後のものと15cm前後のものとの2つに分かれ。土器溜では平安時代の3寸、4寸、5寸の規格に近く、SK023ではそれが崩れ、SK022では中世の規格である3寸、5寸に近くなっていることがわかる。

表14 土器の法量



まとめると、土師器、黒色土器が多種多様であったものが、土器溜、SK023、SK022と器形が減少する中でSK022に瓦器が出現し、成形手法も皿に関して口縁部の折り返しが弱くなり、ついにはSK022においてただナデるだけの手法に変化すること、また法量も平安時代の規格が崩れ SK022では中世の規格になることがわかった。つまり、土器溜→SK023→SK022の変化は土器における

る古代から中世の移行過程であり、SK022はまさに中世のものといえる。

4. 黒色土器から瓦器への移行過程

SK022は前述したように平安Ⅲ期に比定され、そこから中河内で從来出土しているものの中では最も先行する瓦器が出土している。平安京のSE-8において⁽⁶⁾寛治5年(1091)の墨書のある須恵質鉢とともに出土した瓦器は、白石太一郎氏のいう第Ⅰ段階第3型式～第Ⅱ段階第4型式のもので、他には口縁部に折り返しの名残りがあり、厚みのある土師器小皿、口縁部の折り返しが消滅して2段の横ナデになっている土師皿、玉縁の白磁碗等が出土している。この土器群を長原遺跡にあてはめると平安Ⅲ期と分類した土器群にほぼ相当し、SK022におおよそあてはまる。

ところで瓦器の初現について、白石太一郎氏は、11世紀前半とされている。⁽⁷⁾先述したように寛治5年には平安京では第3型式～第4型式であるのに中河内のSK022では、從来出土しているものの中では最も先行すると思われる瓦器を含み、黒色土器B類も残存している。ここに他地域での瓦器の初現と約50年の開きがある。

中河内の瓦器と白石氏の示されている瓦器を比べてみると少し違っていることがわかる。白石氏の示されている瓦器の第Ⅰ段階第1型式は、器高が高く、高い高台をもち、口縁端部に沈線がある。体部内面は正確に平行するような密なヘラミガキで外面は密な波状のヘラミガキ、内底面はジグザグの平行線文ないしこれを重ねた斜格子状文である。中河内の古い瓦器は、同じく器高が高く、高い高台をもつが、口縁端部に沈線を施さない。体部内面は密だが不ぞろいなヘラミガキ、外面は雑なヘラミガキ、内底面は密なヘラミガキ調整である。

この瓦器の形態、製作技法の違いと中河内では瓦器が他地域より遅く出現するということから、中河内の瓦器は白石氏の示されている瓦器の技術的系譜と違う系譜で出現すると考えられる。

中河内での瓦器出現の系譜をSK022出土の古い瓦器碗が一諸に出土した黒色土器B類碗に類似していることから考えてみたい。黒色土器B類碗は、体

部・口縁部が内彎気味に立ち上がり、器高高く、高い高台であり、口縁端部に沈線を施さない。体部内外面は不ぞろいなヘラミガキ、内底面は密なヘラミガキ調整であり、まさに形態・製作技法が瓦器碗と類似している。また、SK022では確認されなかったが古い瓦器小皿⁽⁸⁾は、折り返しの土師器小皿の形態に類似している。

このことから憶測するに、中河内在来の土師器・黒色土器を製作していた集団が、既に瓦器製作を始めていた他地域からその技法を教えられ、伝統的形態、技法を残しながら瓦器作りへと代わっていったのではないだろうか。

さて先述した土器の法量について若干つけ加えたい。平安Ⅲ期とされている平安京SK-2出土の土器を使って法量がグラフに表わしてあるが、それでは口径10cm前後と12.5cm前後と15cm前後の3つに分かれている。SK-2では口縁部の折り返しのなくなってきた土師器小皿、2段ヨコナデの土師器皿、玉縁の白磁碗が出土している。このSK-2の土器群は長原遺跡のSK022におおよそ相当すると考えられるが、SK022のグラフと比べてみるとSK022では口径12.5cm前後のものが多く前述したように中世の規格の3寸と5寸になっている。口径12.5cm前後のものというは主に坏であり、SK022では坏がなくなっていることがわかる。これが地域差なのか若干の時期差なのか中央の官衙と地方の村との差なのかは問題となるところであるが、私見では、中央の官衙においては坏というものが必要であり、地方の村にとっては必要なものではなかったと考える。

最後に、今まで検討してきた結果をまとめておこう。

土器溜、SK023は平安Ⅱ期に、SK022は平安Ⅲ期に比定され、それぞれの土器群は1時期の組合せであり、器種構成、製作技術、法量に関して土器溜→SK023→SK022の変化は古代から中世への移行過程を示し、それに大きく関連する中河内における瓦器の出現は、他地域よりも遅れ、白石氏の示される瓦器の系譜とは違い、瓦器を先に製作し始めた他地域から影響を受け、在来の土師器・黒色土器製作の系譜から出現していくと思われる。(畠)

参考文献

1. 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」（『古代学研究』第54号 1969年）
亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析—太宰府出土品を中心として—」（『考古学雑誌』第58巻第4号 1973年）
西山要一「紀淡海峡海底採集の中国陶磁器」（『古代研究』第5号 1974年）等
2. 橋本次久「中世日常雜器類の分析—高槻市における編年試案—」（『大阪文化誌』第2巻第3号 1977年）等がある。
3. 田中琢「古代中世における手工業の発達（窯業）一畿内一」（『日本の考古学』VI所収 1967年）の分類を踏襲した。
4. 奈良時代から続く黒色土器は壺と呼ばれているが、この黒色土器は中世の瓦器壺への移行過程を考えているので壺と呼びたい。
5. 平安京調査会『平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊—』 1975年
大阪府教育委員会
財団法人大阪文化財センター 『長原遺跡現地説明会資料Ⅲ』
6. (註5)に同じ。
7. (註1)の白石氏著
8. 長原遺跡出土遺物年表の平安後期の瓦器小皿参照。
9. (註5、6)に同じ。

5. 瓦類

この度の調査で出土した瓦は15点を数える。大別すると奈良時代後期～末の軒丸瓦が6種7点、軒平瓦が2種7点で、鎌倉時代の軒平瓦が1点となる。奈良時代では軒丸瓦が多いのに対して、軒平瓦の種類が少ないと注目される。

軒丸瓦1 (1点) (第158図一1) 1+6の蓮子の中房を持つ7弁複弁蓮華文の周囲に24個の連珠と界線が配され、外区内側には線鋸歯文が施される。

軒平瓦1と組み合うものと考えられる。

軒丸瓦2 (1点) (第158図一3) 1+8の蓮子の中房を持つ8弁複弁蓮華文の周囲に24個の連珠と界線が配され、外区内側には線鋸歯文が施される。文様構成として軒丸瓦1と近似するが、径19.2cmと大型である。

軒丸瓦3 (2点) (第158図一4) 1+4の蓮子の中房を持つ8弁複弁蓮華文の周囲に2本の界線が配される。瓦当が4.5cmと厚いのも特徴。同范と見られる2個体片の出土がある。

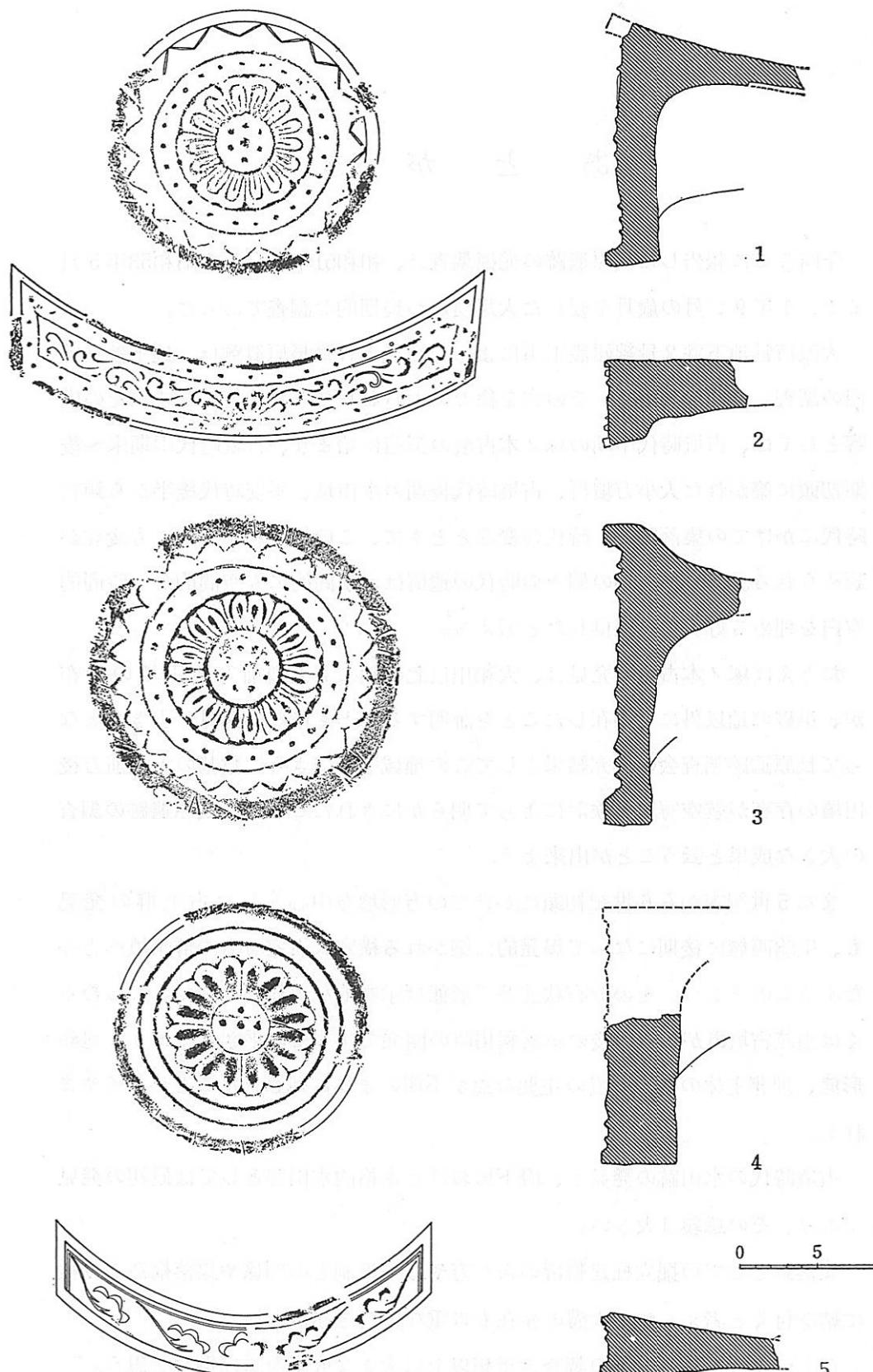
軒丸瓦4 (1点) 1+4の蓮子の中房を持つ7弁複弁蓮華文が施されるが細片のため全体は不明。蓮華文の径8.5cmとやや小型。

軒丸瓦5 (1点) 素弁蓮華文で外区内側に細い線鋸文が施されるが細片のため全体は不明。范の割れ目の痕跡がある。

軒平瓦1 (6点) (第158図一2) 中心飾と5転する均整唐草文の周囲に界線と36個の連珠が施される。いずれも細片だが6点が出土しており、同范・同一タイプの瓦としては最も多い。

軒平瓦2 (1点) (第158図一5) 中心飾を流雲文、そして上方の界線が施されるが全体は不明。

軒平瓦3 (1点) (第142図) 11の連珠と下方を除いて界線が施される。唯一の鎌倉時代の瓦である。(酒井)



1. M.25トレンチピット2-25出土、2. M.24トレンチ第3層出土、3. M.トレンチ中央南隅ピット内出土、4. M.21トレンチピット73出土、5. M.26トレンチ第4層出土

第158図 瓦 実 測 図

あとがき

今回ここに報告した長原遺跡の発掘調査は、和和51年8月から昭和53年5月まで、1年9ヶ月の歳月を要した大規模かつ長期的な調査であった。

大阪市営地下鉄2号線建設工事によって発見された長原遺跡は、地下鉄路線内の調査、今回の調査で、その姿を徐々にあらわしてきたことになる。その内容としては、古墳時代中期の塚ノ本古墳の築造に始まり、古墳時代中期末～後期初頭に築かれた大小方墳群、古墳時代後期の水田址、平安時代後半から鎌倉時代にかけての集落跡等、時代の変遷とともに、この地の利用方法にも変化が認められる。さらに上述の個々の時代の遺構は、学問的にも空間的かつ時間的空白を埋める好史料を提供したと云える。

たとえば塚ノ本古墳の発見は、大和川以北の地にも大型前方後円墳の分布が、瓜破の地以外にも存在したことを証明するとともにこの発見が引き金となって長原遺跡調査会の研究結果としてこの地域一帯にさらに数基の大型前方後円墳の存在が航空写真の検討によって明らかにされたことも、長原遺跡の調査の大きな成果と云うことが出来よう。

また5世紀末から6世紀初頭にかけての方形墳を中心とした古墳群の発見も、生駒西麓に後期になって爆発的に築かれる横穴式石室をもつ群集墳へつながるものとして、その分布状態及び形態は示唆的な史料となった。おしむらくは当該古墳群が、その後の集落利用時の開発すべて削平されており、埋葬形態、埋葬主体の数等古墳の主要な点が不明のままに残されたことが、くやまれる。

古墳時代の水田跡の発見も、府下における本格的水田跡としては最初の発見であり、その意義は大きい。

集落跡としての掘立柱建物群のあり方や、条里制との関係や集落構造と密接に結び付くと考えられる大溝の存在も貴重な史料を提供した。

以上のように長原遺跡の調査は予想以上に大きな成果を挙げ得たと思う。

(中西)